

開催地名：神奈川県三浦市	
開催日時	平成 28 年 8 月 2 日（火） 19：15～20：15
開催場所	三浦市総合体育館「潮風アリーナ」
語り部	大和田 哲男（宮城県仙台市）
参加者	地域防災委員らの地域住民、市職員 計 64 名
開催経緯	東日本大震災から 5 年が経過し、月日の経過とともに防災意識の低下が感じられる。自主防災組織の活動について、経験者の減少や高齢化から全体的に活動の停滞がみられる。次世代への災害伝承が問題となっている。女性視点の災害対策も遅れている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>仙台市・中野地区にある 4 町内会（西原、港町、蒲生、和田）の約 1,000 世帯は今年 3 月、防災集団移転促進事業によりほぼ移転を終え、町内会も解散するはこびになった。また、今年 9 月からは本格的な土地区画整理事業も始まっている。</p> <p>連合町内会は、震災前に自主防災組織を立ち上げ、避難所運営や救急、通報訓練などを実施してきた。経緯と災害対応、震災後の実際をお伝えしたい。</p> <p>2. 自主防災組織の立ち上げ</p> <p>各町内会が単独で防災活動をしても限界があるという判断から、平成 20 年、連合会として自主防災組織を立ち上げた。地区全体を意識した有効な防災活動を実施する狙いだ。行政主導型の訓練も実施したが、住民主体型に切り替えた。避難所運営など、住民の経験・実践こそが現実的だと思ったからだ。また「家族構成調査」の実施では、個人情報の扱いに慎重を期したが、要援護者対策を要する世帯などを発災前に把握できたなどメリットは大きかったと思う。ただし借家世帯における把握率は低かった。</p> <p>3. 大震災において</p> <p>大震災で多くの人を失った現実はあるが、避難誘導の判断は比較的早くできたのではないと思う。避難した体育館は陸の孤島になってしまった。火の海になった仙台湾の上空から、地元の自衛隊基地からヘリコプターが飛来した。パイロットは地形や構造物の位置を熟知していた。私たちは暗い上空に向かって懐中電灯を振った。翌朝には札幌市消防局のヘリコプターも飛来した。</p> <p>避難所では婦人防火クラブが中心になって、訓練どおりに効率よく食事をつくった。ビニール袋を利用した簡易服をつくるなど、女性たちは置かれた状況下で知恵を絞った。床が冷え込むので畳を敷いたのは好評だった。毛布は自衛隊が 300 枚提供してくれた。</p> <p>訓練していたことは大事だったと思う。火災現場であっても若い人が避難</p>

誘導路をつくったし、簡易トイレの設置もスピーディに運んだ。

自主防災組織として最低限整えておきたい体制は、避難者数を確認する総務班、避難所施設の整備などにあたる活動班、炊き出し班だと思う。

4. 震災後の活動

震災後、町内会の三役らと話し合い、中野小学校区災害対策委員会を立ち上げ、自衛隊や警察、仙台市とともに、がれき撤去や犠牲者捜索などを実施した。復旧のめどがついた7月には復興委員会と改名して、慰霊祭も実施してきたが、平成29年3月の7回忌を機に解散しようと考えている。

防災集団移転促進事業への認可申請したのは、住民アンケートを踏まえての決断だった。震災前の住所に住むかを聞いたところ、「移転する」が多数で、うち「集団の移転」を希望する声が多かったのである。

町内会では、地域情報や会の活動を発信するコミュニティ紙を発行している。編集・制作を担っているのは、会の女性たちや婦人クラブの方々だ。仙台市からの助成も受け、移転された人々などに郵送している。

町内会の集会場では毎週木曜日、社会福祉協議会による「いきいきサロン」を開催している。高齢者向けの茶話会なのだが、カラオケを始めると止まらなくなる人が多いようだ。

毎年、芋煮会も催してきた。ばらばらに移転された方々との交流が狙いだ。

5. 震災で感じたこと

家族のきずな、地域のきずなが大切だと感じる。震災後の5年間、みんなが助け合ってきたと思う。

行政とのコミュニケーションは大事だ。今年4月に市の復興局はなくなったが、集団移転など復興活動に関してずいぶん尽力してもらった。

訓練をしていたおかげで、備蓄品の内容や保管場所を確認できていたことは最高によかった。また、あの惨事においても、誰もパニックを起こすことなく、冷静に行動できたと思う。



開催地より

備蓄品の内容や訓練の重要性を感じたことから、それぞれの地区において自主防災組織がまだ取り組んでいないことについて協議し、各地区の防災力の強化に努めていけるよう取り組んでいきたい。

開催地名：香川県宇多津町	
開催日時	平成 28 年 8 月 7 日（日） 10：00～11：30
開催場所	宇多津町保健センター
語り部	瀬戸 元（岩手県釜石市）
参加者	防災会長、防災リーダー、住民 約80名
開催経緯	南海トラフ地震に対し、各町民が正しい知識をもって、正しく判断しなければならない。特に各家庭においては、家族が協力し合い災害から命を守り、自主防災活動等を行い復旧活動に寄与しなければならないが、まだまだ個人の防災力は脆弱である。各家庭の防災力アップが町全体の防災力向上につながるようになるため、町民の意識改革が課題である。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>岩手県釜石市内の北側に両石町がある。私は両石町内会の会長と自主防災会の会長を務めていた。町内に住む 230 軒中、215 軒が流された。両石という地は、安政地震、明治の大津波、昭和の大津波、今回の大津波と、近年だけでも 4 回の大津波で町が壊滅している。先人は「命てんでんこ」という知恵を後世に残そうとした。自主防災組織のみなさんの命を守る活動のために、東日本大震災の教訓を伝えたい。</p> <p>2. 先人の教訓は命を守る知恵袋</p> <p>先人の教訓は命を守る知恵袋であると思う。しかし 3.11 では、知恵袋をひもとく知恵がなかった。群馬大学大学院の片田敏孝教授の検証を参考にすれば、教訓を生かせず犠牲になった人が約 6 割、誤った避難をしたために犠牲になった人が約 3 割、残りの 1 割は要援護者の介助や、避難誘導、交通整理をしていた人々である。生存者の多くが「まさか」という言葉を発した。亡くなった 8 割は 50 歳以上の大人であった。「安全」と「安心」を混同しないことが大事だ。</p> <p>私どもの町内会の防災活動は、「命てんでんこ」を理解し、実践することを重視してきた。率先避難は無論のこと、置き去りや、見捨てるという非情な心、鬼の心を持たなければならないことを周知徹底させる必要があった。津波は速い。自宅を出たら絶対に戻るなというのが先人の残した鉄則である。「命てんでんこ」には 3 つの意図が込められている。1 つ目は率先避難、2 つ目は救助行為に伴う共倒れ防止、3 つ目が必ず生き延びろという教えである。明治の大津波では約 850 人亡くなったが、昭和 8 年の大津波のときには 3 人だけだった。昭和初期には教訓が生かされていた。</p> <p>3. 防災力とはイメージカ</p> <p>防災力とはイメージカだと私は思う。イメージ力を高めるには、地域の災害環境や先人の教訓など、地元の歴史、災害をよく知ることが大切である。</p>

	<p>伊予地方で大地震の記録が残っているのは慶長伊予地震である。九州から房総に伸びる中央構造線がある。いわゆる連鎖地震と見られるような記録もある。</p> <p>そろそろ大きな地震と津波が来るだろうという予感があった。実際、3.11の前年から異常気象が続いていた。私は記録映像を残そうと、ビデオ撮影の準備や備蓄品の確保を急いだ。私たちの地区は3日間孤立したが、食糧の確保など備えはできていた。ただイメージできていなかった部分もある。自主防災会の組織力が発揮できなかったのだ。結果的には、住民のサバイバル力が組織力をカバーした。大災害下では、まずは自分の命を守ることが第一である。自主防災会のメンバーにも家族はいる。災害時、自主防災会の力は発揮できないと考えたほうがよい。</p> <p>津波は複数回到来する。防潮堤も防波堤も根本から破壊された。現在は工法が見直されているが、その見直しにもまた、イメージ力が求められる。</p> <p>4. 減災の意味について</p> <p>減災とは、災害から命を守ることを第一の勸めとしている。防災とはいかにまちを守るかではなく、いかに命を守るかである。昔からの言い伝えや歴史を今一度、学ぶべきだと思う。3.11で先人の教訓を生かし、命を守る行動を実践したのが「釜石の奇跡」を生んだ釜石市内の生徒だった。生徒たちは「100回逃げて、100回津波が来なくても、101回目も逃げよう」という新たな教訓を残した。今、釜石市は子供たちの行動を規範として、避難文化の醸成、逃げる文化の醸成を掲げて減災に取り組んでいる。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>講演会の参加者には、講師の体験談が深く心に残ったと思われる。内容を各地区の自主防災会に持ち帰ってもらいたい。また、行政が参加していない組織に対し、講演会の講演会で得た内容を防災研修等の機会を利用して伝えていきたい。</p>

開催地名：三重県名張市	
開催日時	平成 28 年 8 月 21 日（日） 11：00～12：15
開催場所	名張市防災センター
語り部	菅井 茂（宮城県仙台市）
参加者	地域役員、学校職員、市職員ほか 約 150 名
開催経緯	当市は内陸部で過去に大きな地震に見舞われたことがなく、防災に対する啓発に苦慮している。平成 25 年度からは、“見せる訓練”を改め、実践的、効果的な総合防災訓練を実施し、地域主体で活動する防災体制が構築されつつあるが、学校との連携など初動期の対応に課題がある。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>連合町内会の総合防災訓練は平成 19 年度から始まった。大震災時の避難所運営、震災後に策定した行動計画、今日の総合防災訓練の順で話を進める。</p> <p>2. 避難所の運営</p> <p>南材地区連合町内会は大震災時、南材小学校と八軒中学校、コミュニティ・センターに避難所を開設・運営した。小学校に入った避難者は 1,200 名。中学校では地元住民 300 人に加え、海側にある荒浜小学校と中野小学校で孤立状態にあった被災者 160 名を収容した。指定避難所ではないコミュニティ・センターは乳幼児を抱える親子 80 名を受け入れた。備蓄食糧はすぐ底をついた。地元の豆腐店が豆腐を提供してくれたほか、自宅が無事だった避難者はコメや食器類を持ち寄った。ライフラインが完全にストップし、最も難儀していたのは非会員のマンション住民だったと思う。</p> <p>震災前、入浴は想定していなかったが、秋保温泉の旅館に相談し、津波被災者たちに入浴してもらった。以後、自衛隊による風呂設営につながった。</p> <p>3. 新たな行動計画を策定</p> <p>震災 5 カ月後、運営の反省を踏まえ、新しい自主防災の行動計画をつくった。震度 6 以上の地震が発生したら各町内会の会長は必ず会員の安否を確認して災害本部に報告する、防犯対策とし各宅では留守番役を残す、各世帯の避難先を事前に定める、コミュニティ・センターを弱者のための福祉的避難所にする、避難所開設に伴って運営委員会を発足させる、などである。</p> <p>避難者には「避難所はあなたの家」というスタンスで行動してもらおう。支援を要する在宅弱者については、ライフラインが普及するまで、地域で何とか面倒を見ようと決めた。</p> <p>4. 震災後の総合防災訓練</p> <p>一連の経験を経て、今日の総合防災訓練がある。24 年度の訓練から、広瀬川を横断する長町－利府断層の直下型地震を想定し、地区の堤防決壊と上流の大倉ダムの決壊を想定した 2 段階避難を始めた。小学生の訓練は土曜日</p>

開催である。25年度には土曜日の部活で登校する中学生が加わった。

小中校2箇所それぞれ訓練が実施されたが、26年度から避難所2箇所への入場を終えたら、1箇所に集まって効率的に訓練をすることにした。

八軒中学校区は3つの小学校区から構成されている。27年度には、南材小だけでなく、若林小、古城小も同時に訓練することになった。新たな地区間連携により、小中4校と3地区の代表、関係機関からなる連絡協議会が結成され、10月31日の共同区としての訓練に臨んだ。総合防災訓練の基本は、3地区が主体となって各学校と協力して実施する、4校の生徒と教職員全員が参加する、各地区の実情に応じた訓練をする、というものだ。地区間の総合防災訓練の開始時期は早晚の差がある。南材地区は19年から取り組んでおり、古城地区より8年ぐらい早い。地区会場それぞれで訓練内容は違う。

南材地区の訓練参加者は約900名で、給食訓練ではアルファ米と豚汁のセット1,300食をつくった。費用は約9万円だ。校庭での訓練では、NTTによる伝言ダイヤルの特別訓練、水道局による給水訓練などもあった。小学生は大人が訓練をしているとき、教室で防災教育の授業を受けているが、「地震発生」のアナウンスで校庭に集合、堤防決壊を想定した避難訓練に移る。

地域防災は、自分のことは自分でやろうとする自助に始まり、共助へと移る。お互い顔がわかる関係性を醸成できれば、住み続けたいまちになると思う。訓練は午前8時に始まり12時半ぐらいに終わる。最後に給食訓練でつくった食事を食べ、時間のある人が午後の片づけを手伝う。中学生が参加してから、訓練時間内に防災センターから資機材の搬入やテント張りができるようになった。画像記録を残す写真班は中学生が担っている。今年は楽しめるクイズ大会も企画している。楽しく継続性のある訓練を考え、多くの人にも伝えていきたい。



開催地より

・震災後の総合防災訓練の詳細をわかりやすく教えていただいた。紹介していただいた事例を基に、今後実施する名張市総合防災訓練の中で、各地域を取り巻く問題点の解決などを図っていきたいと考えている。

災害伝承 10 年プロジェクト

開催地名：岡山県久米南町	
開催日時	平成 28 年 9 月 4 日（日） 9：00～12：00
開催場所	久米南町文化センター
語り部	高橋 文雄（宮城県仙台市）
参加者	消防団員、消防職員 約 60 名
開催経緯	岡山県内では、近年大きな災害が起きていないこともあり、当町職員、消防団員の災害意識が低く、訓練参加率も低い。地域の防災意識を高めたい。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>震災の概要、仙台市消防局と消防団の災害対応などを紹介したい。団員のみなさんには「災害への備えとは何か」を考えていただきたい。</p> <p>2. 震災の概要</p> <p>震源は東日本沖の海底断層だった。断層のズレは広域で、津波は東日本の沿岸一帯に及んだ。負傷者数より死者数が上回るのが津波被害である。</p> <p>仙台市消防局の天井は地震の揺れで落ちた。屋上に設置されていた無線アンテナも壊れた。長く続く大揺れは歩道橋の柱も崩壊させる。軟弱な地盤に土を盛った造成地では、家屋が基礎ごと流された。</p> <p>2. 消防局の災害対応</p> <p>私は 20 日間以上、家に戻ることができなかった。発災当日は緊急消防部隊の派遣を要請し、派遣地の調整にあたった。消防には多数の要請が寄せられる。沿岸部にある複数の学校から避難者救助を求められたが、道路は瓦れきで阻まれ通行できない。自衛隊、海保、消防緊急隊のヘリが救助に向かった。道路啓開後は輸送バスを送り込んだ。川の堤防は切れていた。泥、瓦れき、海水が障害になり、行方不明者の捜索は困難を極めた。瓦れき撤去と並行して捜索にあたった。自治体衛星通信機構や NHK、民放テレビ局の映像は情報把握に大いに役立った。職員が被災して市は対応力低下に陥ったが、関東方面に出張中だった職員のなかには、機転を利かせて、東京消防庁・緊急消防援助隊の車両に同乗させてもらい、仙台にもどってきた人もいる。</p> <p>消防局の司令室は 20 台の通話器で対応したが、受付専用 10 台、災害対応系 5 台、救急支援系 5 台に振り分けた。管区の消防署、消防団、さらに派遣された応援隊などとも連絡が付きやすいというメリットがある。</p> <p>津波が来れば火災が発生する。湾は火の海、延焼した。内陸部でも通電火災が発生したが、出動できる消防隊は限られる。消防隊が現場に到着できない現場もある。通行できる道はあるのか、消火栓は使えるのか、時局に応じた判断が要求される。消防車両の燃料は、石油元売り会社から直接供給を受け、夜間、ガソリンスタンドで給油した。</p>

3. 消防団の災害対応

消防団は避難誘導、不明者捜索、道路啓開などにあたった。団員は地震の30年周期を認識した心がまえというものを備えている。市の消防予算1500億円弱から5億円強が充てられており、訓練では表彰制度を設けるなど、競争効果を意図した防災力の向上が試みられてきた経緯もある。

4. 「備え」

地震メカニズム、活断層の存在などを知っておくことは大事だが、私が伝えたい「備え」のポイントは、①生き延びる、②けがをしない、③火災を起こさない、という3点の意識向上である。実働としては、家具の転倒防止、ガラスの飛散防止、備蓄品の整備が挙げられる。家族で「わが家の備え」を話し合ってもらいたい。地震によるけが・死亡の最大原因は建屋の壁崩壊だ。昭和56年以降の建物なら今の耐震基準を満たすが、震度7レベルになると耐震性がどうこうの話ではなくなる。建造が昭和50年以前か以後かが、現実的なリスク管理上の目安だと思う。救援物資が被災地に入るのは概ね2～3日後だが、物資が集積所にとどまる事態も想定していただきたい。

津波から命を守るという観点からは、①いち早く情報を得る、②正確な情報に基づく高台避難が優先事項だ。住民への心がけを促したい。

行政機能の継続という点では、①災害対策本部や消防司令室など中枢機能の確保、②通信設備の耐震化、③情報機器やロッカーの転倒防止であろう。

被災地では職員も団員も参集の困難性を抱えている。緊急消防援助隊の派遣などを行ううえでも、自治体間の連携体制を構築しておく必要がある。

若林区霞目には浪分神社がある。私が消防担当になったときに「1611年の慶長三陸津波の碑なのだ」と先輩から聞いた。だが、地区の住民でもあまり知られていないようだ。先人が伝えようとしたことを胸にとどめたい。



開催地より

・災害現場の声を聞き、日ごろの心がまえと準備が大事だと感じた。多くの消防団員からは「現場で何をするかを考えさせられた」という声があった。講演を機に、地域の防災活動や消防活動を高めたい。

災害伝承 10 年プロジェクト

開催地名：福井県勝山市	
開催日時	平成 28 年 9 月 4 日（日） 9：20～11：00
開催場所	勝山市教育会館
語り部	京谷 国雄（宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織関係者 約 85 名
開催経緯	勝山市では、近年、死者が発生した災害は雪害に限られ、雪害以外で死者が発生した災害を確認すると約 30 年前にさかのぼる。当然のことながら、防災体制を万全にしておくことが行政、住民の責務であると考え、災害が比較的少ないことで自主防災組織の設立までには至らない、または自主防災組織を結成しても組織の活動が停滞している組織があることが課題となっている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>今年 1 月 17 日、阪神・淡路の復興工事が完了した。震災から 21 年目である。仙台市太白区鉤取ニュータウン町内会は、30 数年前にできた新興団地である。私は、21 年前から町内会の会長に就き、阪神・淡路大震災の教訓を生かそうと、「地震に強い街づくり（自分達の街は自分達で守ろう）」に取り組んできた。当時は手探りの状態だった。防災・減災のまちづくりという観点から、活動経過を報告したい。</p> <p>2. 認識してもらうことからスタート</p> <p>私はまず、昭和 53 年の宮城県沖地震のような災害が再び来るという意識づけに取り組んだ。炊き出しや生活支援に動く婦人部隊に働きかけた。当時は何をどうするか明確な方策すらなかったが、一定の知識があれば、パニックは減る。「出さない君」というキャラクターもつくって、キャラクターに防災・減災活動を語らせるような工夫もした。けが人や死傷者を出さない、崩壊建物を出さない、火災を出さないという 3 つの原則を強調した。要介護者の把握にも取り組んだ。顔の見えるまちづくりの一環である。やがて地域に連絡網が形成されるようになった。居住マップや安否確認を知らせる「黄色い旗運動」も行なったが、大事なものは、災害に対する意識を少しずつでもいいので共有していくことだと思う。町内会には、独自の防犯ベストがあり、パトロール時などに着用している。</p> <p>心肺蘇生、けがの応急処置は消防が実務を教えてくれる。夜間防災、消火、炊き出しなど、一人ひとりに役割分担を持たせることで、自覚も高まっていくようになった。その一方で、カラオケの同好会を設けるなど、楽しさも演出した。食糧や防災備品、燃料の備蓄は町内会の特別事業として進めた。</p> <p>3. 大震災を迎えて</p> <p>震災でライフラインが停止した。町内会の集会所には備蓄はあったが、水</p>

は不足した。自家発電機、照明は確保できた。不足分については、地域内で融通した。

指定避難所では、避難者が寒さで震えていた。備えができていなかったと思う。指定避難所の管理は学校の先生が担っていたが、カギの管理者がいないと、体育館も開かないなど不具合を感じた。地域との連携が必要だ。

町内会の集会所は、会長がいなくても災害対策本部が立ち上がり、避難所を開設できるよう申し合わせておいた。座布団があり、暖がある空間である。備蓄していたドラム缶をトイレ代わりに使うなど備えの工夫があったと感じる。また訓練の成果もあり、安否確認もスムーズに運び、食事ができない世帯には食事を配給した。地元スーパーとは優先対応してもらった協定を結んでいたため、パニックに陥らなかったと思う。

インフラの復旧には一定の時間がかかる。産業化を推し進め、便利な生活環境になったが、今日では自然エネルギーの活用など文明の見直しが必要だと思う。

震災から5年超になる。今回の震災で住宅全半壊は13万8,118棟、一部損壊は22万4,161棟。復興予算の総額は約10兆円である。津波被害のあった沿岸域では復興はまだ途上である。

私どもの町内会費は月300円に加え、災害対応の特別月会費300円を加え、一世帯月600円の支出になる。その会費や寄付を募って、集会所を設け、備品などを揃えてきた。自助・共助には地道に、そして工夫しながら取り組んでいきたい。



開催地より

今回、実際に大規模な災害を体験した方の貴重な話を聞くことにより、より鮮明に災害を想像することができた。既存の計画で実際の災害時に非常に有効だった取組等を紹介して頂き、地区の自主防災組織にとっても非常に参考になったと感じた。また地区単位での自助・共助の大切さを行政からではなく、同じ地区の防災組織の目線から説いていただくことにより、防災意識の更なる向上に繋がったと感じた。

開催地名：滋賀県大津市	
開催日時	平成 28 年 9 月 4 日（日） 10：30～12：00
開催場所	大津市北部地域文化センター
語り部	今野 均（宮城県仙台市）
参加者	防災士、自主防災会、消防団、その他 約280名
開催経緯	<p>大津市では、自主防災活動の活性化を図るため、概ね自治会単位で構成する地域の自主防災組織に各々 1 名の防災士を配置することを目的として、平成 24 年度より大津市防災士養成事業を実施している。また、資格を取得した防災士に対してはフォローアップの研修を実施し、継続的な知識、技術の習得に努めているところである。しかしながら、地域によって防災意識に格差が見られ、効果的な活動ができていない防災士も見受けられるため、防災意識の向上を図りたい。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>町内会活動を始めて 15 年になる。仙台市青葉区片平地区の概要、まちづくり活動、震災対応、震災後の活動について述べたい。</p> <p>2. 都市部に位置する片平地区</p> <p>片平地区は沿岸から直線距離で 8 キロである。約 5,400 世帯、人口は約 1 万人、6 つの地区・8 町内会で構成され、仙台駅から最も近い所で約 1 キロ、遠い所でも 2 キロ未満である。マンションが多く、高齢者や一人暮らしの人、また東北大学の片平キャンパスがあり、学生・外国人留学生も多く住んでいる。</p> <p>町内会の活動は、基本活動、問題解決活動、提案型活動を軸に展開している。問題解決活動は地区の困り事、もめ事を抽出し、解決していくもので、例えば自動車学校に通う生徒の問題行動を改善するよう要望する、といった活動である。つまり、自分たちのまちを自分たちで守るといった活動である。片平地区では平成 19 年頃から、安心・安全の確保、コミュニティの活性化、歴史や環境の保全・活用を軸としたまちづくりに取り組み始め、平成 22 年に計画策定委員会が設立された。地域としてまとまった連携体制が検討され、ほぼ内容が固まったものの、東日本震災が起き、「片平地区災害に強いまちづくり委員会」の発足は平成 24 年度にずれ込んだ。</p> <p>3. 震災対応</p> <p>震災対応をめぐるっては、各町内会に自主防災マニュアルはあったが、役員 の参集が悪いなどうまく運用できなかった。震災翌日には片平地区災害対策 委員会を立ち上げ、対応の整理と記録化を進めることにした。指定避難所には 定員を超える避難者が集まり、観光客、病人、妊婦、マンション住民など 避難者対応に苦慮した。ただ、炊き出しなどでは地域の協力を得ることがで</p>

きた。学生たちも活動に加わってくれた。ボランティアや災害時相互協力協定を結んでいた自治体の存在は大きかった。

4. 災害に強いまちづくりへの挑戦

震災翌年からの地域防災対策の強化活動は、現在も継続中だ。具体的には、一時避難場所の設定の見直し、留学生に参加を促す合同防災訓練のあり方の検討などで、企画段階から地域の代表者に参画してもらっている。マンション問題も検討を重ねている。避難者にはマンション住民が多く、また復興公営住宅の建設などに伴う住民対応が課題になった背景がある。住民が孤立しないよう、「ウエルカム片平」のもと対応している。先に述べた、まちづくり委員会は、28 団体で構成されている。加えて協調体制構築プロジェクトとして、有効な情報の共有化と活用が検討されている。要援護者および見守りサポーターの登録も促進中である。委員会では総合防災訓練の実施、防災行動マップの改訂、シンポジウムの開催なども実施してきたが、最近では外国文化の違いにどう対処するかが課題になっている。食事、外国語表記の案内、宗教上の違いなど配慮すべき点は多い。最も困っているのはごみ出し問題で、何か国もの言語でルールを周知しなければならない。

震災時、低年齢の子供たちが 10 代の生徒になり、避難所経験を生かした活動をする世代になった。

今後も住民を巻き込んだ防災・防犯のまちづくり活動を推進していく予定だ。防災活動というのは防災活動だけ一生懸命やってもうまくいかないと思う。みんなでまちづくりするのだという姿勢で進んでいきたい。



開催地より

地域で防災活動をされてきた語り部の講演は、同様に活動している参加者の多くが共感し、心に響いたようだった。外部講師を招いて講演会を開くことで、地域にとって新たな視点を得ることができ、良い機会だった。継続して、地域の人への気づきを提供していきたい。

開催地名：愛知県美浜町	
開催日時	平成 28 年 9 月 7 日（水） 16：00～17：30
開催場所	美浜町役場保健センター
語り部	宮本 英一（千葉県旭市）
参加者	町職員、区長、消防署員 約 110 名
開催経緯	地域防災計画の改訂、ハザードマップの修正などを実施中である。業務継続計画についても昨年度策定し、各種課題が未着手であることを確認している。しかし、職員は災害対策の必要性は認識しているものの、現業が優先され、業務継続計画に挙げた課題の改善が進まないことが懸念される。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は市職員退職後、区長を務めていた。千葉県旭市飯岡町で津波に流された被災体験と、行政対応などについて感じたことをお伝えしたい。</p> <p>2. 津波に流れた被災体験</p> <p>自宅は旧飯岡町下永井地区の海辺にあった。津波の第 1 波が来るまで、私は堤防に上がって海を眺めていた。防災無線が避難を何度も促していた。過去の経験から、津波が堤防を越えることはないと思い、私は避難しなかった。</p> <p>1 波は堤防を越えなかったが、2 波は堤防を越えた。海水が玄関前の道路に勢いよく流れてきて巻き込まれた。幸い妻ともども浮き上がり、つかまるものを探した。屋根の残骸によじ上ったが、妻は上ることができずにいた。妻の首の回りは漂流物がぶつかり傷だらけになっていた。私はブロック塀に乗り移り、つきあいのある家に入って、衣類と敷布を勝手に借用した。妻は、水が減って足が着くようになってから、屋根に上ることができた。</p> <p>自宅にたどり着くと、家屋は壊れ、家の中は散乱していた。息子が船橋からやってきて、車で移動できるようになった。母も津波に流されていたが、近くの人に助けられた。けががひどく、救急車で病院に搬送してもらった。</p> <p>3. 震災を振り返って</p> <p>大丈夫と思い込んだ反省がある。幸いだったのは、堤防が壊れなかった、街路灯がついていた、携帯電話が防水だった、家族が生きただことである。</p> <p>自宅が被害を受けた世帯の負担は大きい。砂や泥の搬出から始めた。この先ここにとどまっていいいのか、引っ越しすべきか、判断がつかなかった。</p> <p>地区には、被災した人、被災しなかった人がいる。堤防の上から我が家の様子を見物し、カメラのシャッターを切る人が多くいた。津波に襲われなかった人たちにとっては、当たり前の日常生活が続いているのだと思った。</p> <p>津波から数日後、住民の苦情や相談はリアリティを増していた。壊された家をどうするか判断、家族間の意見対立、補助金の有無、解体業者の手配、ごみの搬出などである。私は作業の手を休めて対応した。移動は徒歩、市へ</p>

の連絡は携帯電話である。電話すると、まず総合受付が出て、担当課に回し、担当外の話になると違う課に回す。だが、課内に担当者がいないこともある。

当初、津波関係の復旧相談は、直接建設課に出向かなければならなかった。ボランティアの依頼も同様で、社会福祉協議会に行き手続きしなければならぬ。私は、出向くのは不可能だと説明し、区長からの電話で一括対応できるように頼んだ。

ボランティアの受入業務は時間を要していた。県のボランティア協会が担っていて、市職員などの手伝いは断られた。当初、ボランティアは徒歩移動だったので、現場に着くのが遅くなり、何時間も活動できなかった。活動は連絡を受けた家だけで、作業が終わると一旦帰るのが決まりだった。隣の家がお願いしても、制度上、断らざるを得なかった。私は視察に来た市長に実情を話して改善してもらった。移動バスが導入され、引き続き当地で活動できるようにもなった。時間がかかる受付の煩雑さを嫌い、サーファーなどは直接、被災世帯を訪れて手伝いをしてくれた。

やがて区民からは違う不満が出てきた。避難所に入った被災者と、自宅にいる被災者に対する行政対応への不公平感など、さまざまだった。私は区長の任期を終えても、苦情・相談を受けとめて、市に再三知らせた。

突然、みなさんが災害被害の当事者になる場合がある。被災者が行政の職務として業務にあたることになる。職員にせよ区長にせよ、どういう行動をとっていくのか、それぞれが自ら考えておく必要がある。



開催地より

・職員は事前の対策（家具の固定、食糧の備蓄、水などの確保）をしておかなければ、災害時に十分な活動ができないと再認識した。今後、防災安全課が実施する出前講座を通じて、町民などに地震、津波で被災したときの状況や避難の重要性などを伝えていく。

開催地名：福岡県吉富町	
開催日時	平成 28 年 9 月 13 日（火） 19：00～20：30
開催場所	吉富フォーユー会館
語り部	菅野 澄枝（宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織関係者、女性団体関係者 約 140 名
開催経緯	<p>吉富町では、平成 23 年度に町内全 20 自治会で自主防災組織が設立されている。以後、研修会や防災講演会、防災避難訓練などの機会をとらえ、自主防災組織の活動の必要性について啓発を行っているが、依然として地区により取組にバラつきがある。今一度、自主防災組織の活動の必要性を確認してもらい、大規模災害時に機能する自主防災組織の体制づくりを進めていく必要がある。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は仙台市地域防災リーダー（SBL）を務めている。大震災時、仙台市宮城野区岩切に住んでいた。震災の前年、区の要請を受け、総合防災訓練に向け、防災宣言を策定した。地域防災の活動を交え、話を進めたい。</p> <p>2. 女性たちの防災宣言と仙台市地域防災リーダー</p> <p>岩切は、700 世帯、2,000 人ほどの小さな地区だ。14 の町内会と町内会連合会が自主防災を担う。太平洋からは 10 キロほど内陸にあり、七北田川が流れる。去年の台風被害では、避難所が開設され、SBLとして私は避難解除情報が出るまで見守った。</p> <p>大震災では、津波は来なかったが、避難所は開設されている。震災の 9 カ月前、「女性たちの防災宣言」をつくることになった。この宣言は、2015 年にリニューアルされ、気持ちだけでは人を守れない旨の要旨を盛り込んでいる。震災の避難所運営にあたって、気持ちだけで動いていた反省が反映されている。</p> <p>私は震災後、NPO 法人が設定した女性防災リーダーの養成講座と市が設定した SBL の養成講座に参加することにした。現在、岩切地区には、40 代の女性が 4 人、60 代の男性が 1 人の SBL がいる。また、コミュニケーション力を高める防災講座も開催するなど、防災活動を広げる活動も始めた。地震対策、地域の土地の事情といった勉強も続けている。</p> <p>仙台市地域防災計画では、連合町内会からの推薦を受け、600 名の SBL を養成しようとしている。SBL は、自主防災組織と協力し、地域の自主防災活動を推進する、自主防災組織の裏方的役割を担っている。SBL が各地域に最高 5 人いるというのが理想だと思う。</p> <p>3. 顔の見える関係づくり</p> <p>災害に対する備えをするうえで、平常時顔の見える関係づくりが大切にな</p>

と思う。普通の母親たちや消防団員や消防職員、住民たちが集える場所が必要だろう。警察や消防は現場で活動するが、後方活動や避難所運営は、地元住民が担うことになる。SBLがフォローできる領域は広いと思う。ただし、主体はあくまで地区住民である。

4. 未来を築く子供たち

備蓄に関しては、市は1週間の備蓄を推奨している。とりあえず水分だけは用意しておくべきだろう。地区では防災知識と活動を理解してもらうため、防災かるたや、じゃんけん大会なども催している。子供たちが防災を学べば、避難所生活で疲れている高齢者への声かけが容易になると思う。社会的弱者と呼ばれている人々が、不安に思わないで生きていける社会、生きていけるまちというのを一緒につくっていきたくて願っている。大震災を乗り越えて、仙台市の子供たちは、自分たちのことを自分で守る。大切な人を守るための声かけをする。災害を学んだ結果だろうと思う。

私たちの活動は自主防災組織として実行している。自分たちのまちを守り、大好きな人を守りたくてやっていることであり、楽しくやっている。無理なく長く続けられるようにしたい。奉仕活動が「やってあげている」となったら、長くは続かない。

私自身も毎日、大切な人を増やそうという気持ちで活動するようになり、大切な人が増えた。もっとも自然災害に対する知識がなければ、自主防災は有効に機能しないだろう。



開催地より

講演会を受けて、この地域でよく起きる災害に対する防災避難訓練や、地域における防災活動の活性化、避難行動要支援者支援計画の作成及び当該計画書に沿った実動型訓練の充実の図りたいと思った。

開催地名：埼玉県さいたま市浦和区	
開催日時	平成 28 年 9 月 25 日（日） 10：00～12：00
開催場所	浦和コミュニティセンター
語り部	吉田 忠雄（岩手県大船渡市）
参加者	自主防災組織関係者、防災アドバイザー 約 100 名
開催経緯	東日本大震災の際、避難場所を開設したところ、避難者、帰宅困難者であふれ、対応に苦慮した。首都直下型地震の可能性が叫ばれている昨今、住民に「自助」・「共助」の考え方のさらなる普及を進める必要がある。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>大震災の体験談、自主防災組織の活動、避難所運営、日ごろの備え、教訓といった要点を伝えられるよう話を進める。</p> <p>2. 大船渡市赤崎町が経験した大震災</p> <p>大船渡市赤崎町の世帯数は約 1,400、うち被災世帯 581、犠牲者が 47 名だった。県内で最初に自主防災組織がつけられた赤崎町生形だけを見ると犠牲者は 9 名である。大船渡市全域では人口約 4 万名に対し犠牲者約 90 名、南に隣接する陸前高田市は人口約 3 万 5,000 名に対し 1,500 名超の犠牲者を出した。県内の被災自治体では人口に占める犠牲者数の割合は約 10 パーセントだが、生形では 1 パーセントだった。生形の地区公民館は、チリ地震津波があった翌年の昭和 36 年から防災訓練を催してきた。もっとも当初の住民参加率は高くなかったが、阪神・淡路大震災を契機に訓練内容を見直し、正確なデータも取るようになった。3.11 直前の参加率は 90 パーセント超だ。</p> <p>交通が遮断されたなか、頼りになったのは隣近所の助け合いだ。瓦れきに埋まった人を隣人が引っ張り出そうとする、神戸の映像を見てから、生形の訓練は真剣なものになった。訓練参加率が上がる工夫もした。参加者にヘルメットや黄色のリックサックを支給したのだ。隣人が持っているのに自分にはないと欲しくなるものである。</p> <p>平成 16 年、県は自主防災組織の結成を呼びかけた。補助金も用意されていた。生形自主防災組織が立ち上がった。</p> <p>避難訓練では援護を要する世帯をフォローできるよう、世帯間で助け合う仕組みにした。共助で助け合うのだ。小さな集落で個人情報の問題視されることはなかった。情報は暗号化されている。集落だけで通じる符丁のようなものである。子供たちも訓練に参加している。</p> <p>3. 避難所運営</p> <p>避難所は高台にある。ヘリコプターが飛来できるようスペースも整備した。3.11 では 300 名超の避難者が集まった。7 名のリーダーを決めて、そのリーダーを補佐する副リーダーを選んでもらい、各 35 人体制の班が形成さ</p>

れた。衛生や食糧、設備といった班をつくった。病人を出さないこと、餓死者を出さないことを重視した。避難所は4カ月間運営された。

秩序を保つためには、情報を1本化することが大事である。協力し合うよう、毎日朝礼を開いて呼びかけ、情報も伝える。時には冗談を交えた。リーダー会議も毎晩開いた。

備蓄食糧は減っていく。必要な物も出てくる。私はマスコミに声をかけ、全国に現状を伝えた。武田鉄矢さんが慰問に来てくれた。黄色い布地を張り付けたアーチを用意して迎えることにした。女性たちのアイデアである。映画「幸福の黄色いハンカチ」からのひらめきだという。

避難所は高台にあるが、危険がせまったら避難できるよう、避難所からの避難訓練もしてきた。

4. 教訓として伝えたいこと

「意知努一体」という言葉をお伝えしたい。意欲を持ってやらないと何事も成し遂げることは難しいという意味だ。意欲の意、知識の知、努力の努である。リーダーを育てておくことはとても大事だと思う。人間の財産というのは人脈だと思う。人との絆を大切にしたい。

みなさんは地域のリーダーに選ばれている。広い気持ちで、少しでも前より良くしようという気持ちを忘れないで頑張ってもらいたい。



開催地より

具体的な避難所の様子や、避難所で行った取組を教えていただくことで、被災した当時の切迫した様子が十分に伝わりました。大船渡市とさいたま市浦和区で実際に発災した場合の対応について、改めて、具体的に考えていく必要性を感じた。

浦和区では、新興住宅や高層マンションなどが多く、隣人同士の関わりが希薄になっている。結びつきをどのように強化していくかが課題である。区の避難所運営訓練に幅広い年代の方々に参加してもらい、住民同士の結びつきを強めたい。そのための方策を考え、実践し、地域住民全員で地域防災力の向上に取り組みたい。

開催地名：大分県佐伯市	
開催日時	平成 28 年 9 月 25 日（日） 14：00～16：00
開催場所	佐伯市保健福祉総合センター 和楽
語り部	吉田 亮一（宮城県仙台市）
参加者	自治会関係者、自主防災組織関係者、地域住民 計 108 名
開催経緯	<p>これまで津波避難路・避難地整備や津波避難地案内標識の設置、津波ハザードマップや津波避難計画の作成、地区防災懇談会の開催などハード・ソフト両面の対策を行ってきた。しかし東日本大震災から5年が経過し、地震・津波災害に対する防災意識や危機意識が徐々に薄れている傾向がある。今回の講演会を住民の防災意識向上に役立てたい。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>平成 17 年、仙台市太白区にある茂庭台 5 丁目町内会で班長になったのを機に、私は地域の防災活動に携わった。準備に 1 年、平成 18 年からは総括防災部長として 5 年間をかけ住民主導型の地域防災を築いた。そして大震災が起きた。自分たちの地域を自助と共助で守った要点を伝えたい。</p> <p>2. 危機感から始まった活動の実際</p> <p>防災の基本は、災害への危機感である。「想定」以上の備えをして、家庭を守る責任、地域を守る責任を自覚することが大事だ。私たちには考える力と行動力がある。その力を防災に向けていただきたい。まずは、地域でどのような災害があったかを知る必要がある。地域を知るといことは「想定以上の備え」に通ずる。</p> <p>町内会では、防災マップの作成、防災マニュアルの策定、自主防災組織の立ち上げ、防災勉強会の開催、防災訓練の実施、防災用品の備蓄、指定避難所対応、要援護者対策などの活動を実施した。防災マップは、カラー A 3 判でラミネート加工を施した。危険箇所とされている所は、地域の方々からの情報である。マニュアルは大きな文字を使用し、かつ分厚くない仕様にした。自主防組織の班長は町内会の班長と連動し、1 年間の持ち回りである。高齢化という現実はあるが、数年後にはおおむねの世帯が防災班長経験世帯となる。防災訓練は住民主導型で、昼と夜に行われる。開催案内は回覧版を使わず、ポスティングを用いた。</p> <p>避難所の備えでは、従来型の碁盤の目のような避難スペースではなく、半島型の避難スペースを用意した。マットや跳び箱の上段を活用するなどして、身体上の苦痛軽減や人をまたぐことなく移動できるスペースを確保するとともに、ストレッチャーの搬入路確保や地区ごとにスペースを設けるなど、身心や防犯上のリスクを考慮した。</p> <p>防災用品を備える上で優先したのは、無線機の購入である。災害時だけで</p>

なく、行方不明となった高齢者の捜索や子供の安全確保など、日々の防犯活動でも活用できる。町内会費の繰越金を優先的に回してもらった。備蓄で重要なのは、お金をかけるところにはかけて、工夫次第で用意できる物にはお金をかけないようにすることだと思う。発電機や投光器なども揃えたが、使い方にも留意したい。例えば投光器の光は「目に刺さる」ので、床の上に置くのは避けたい。在宅介護用トイレは便利だった。

要援護者対策では、「お隣さん、お向かいさん」は重要だが、隣近の付き合いが濃厚とは言えない地区もある。そのフォローを自主防組織が担い、介助者を先に募集するという手法を取った。

学校施設は教室の変動などがあるので留意しておきたい。指定避難所は地域が運営するものであり、学校とは事前に打ち合わせをしておくことが重要である。学校行事に防災担当者として出席をする、学校防災訓練に参加をする、あるいはPTAや子供会、親父の会、健全育成協議会などと連携を図りながら、生徒を巻き込んだ防災態勢を域内で構築していく工夫も必要だ。

3. 家族と地域が築く

町内会が公園の一時避難場所で炊き出しをしていると、中学生が学校の避難所開設準備が終了したことを告げに来た。在校生は避難者の受入準備を進めていた。学校のプールから水を汲んで生活用水として高齢者宅に届けたり、燃料の確保・ごみの分別などの情報告知、救援物資の仕分け・搬入など小中高生が活躍した。自分たちが食べることができなくても、炊き出しをした。防災教育には、命を守る教育と、命が守られた後の教育があると思う。命を守るため、スニーカー、携帯ラジオ、ヘッドライト、靴下、防犯ブザー、かっぱの防災用品6点セットを備えてもらいたい。その上で、生徒たちには「自分は地域の一員だ」という自覚を持ってもらいたいと願っている。「大きな地震が来たら、速やかに高台に避難をしなさい」は大事だが、「速やかに高台に避難できる」地域づくりが必要だ。



開催地より

実際に経験しないとわからない部分を気付かされた。想定以上のことが常に起こり得ることを念頭に置き、危機感を持って減災対策に努めたい。

今後、地域住民に対し基本となる自助、共助の重要性を語りかけ、地域防災力強化に繋がる取り組みを強化していきたい。

開催地名：北海道浦河町	
開催日時	平成 28 年 9 月 29 日（木） 18：00～20：00
開催場所	浦河町総合文化会館
語り部	京 英次郎（宮城県仙台市）
参加者	自治会、消防団、防災士、役場、道職員など 約 105 名
開催経緯	東日本大震災から 5 年が経過し、津波防災に対する意識の低下や高齢化により防災活動が減少傾向にあり、若い世代への意識啓発が重要となっている。災害に対する心構え（自助）の再確認と、地域住民間の連携（共助）の重要性の啓発が急務である。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>地震、そのときはあなたがリーダーである。3.11 当日、私は仙台市青葉区の消防署で勤務していた。今日、みなさんには「自分だったら」という立場で考えられるように話を進めていきたい。</p> <p>2. 意識の違いが初動を左右する</p> <p>自然災害に対する意識の違いは大きい。地震で揺れたら、みなさんはどんな初動体制を築き、どう動くだろうか。地震イコール津波である。海沿いだけの問題ではない。</p> <p>石巻市大川小学校は海から約 4 キロ離れていたが、津波は旧北上川を遡上した。地震発生時、先生は生徒を校庭に集めて点呼を取った。津波に襲われたのは、その 40 分から 50 分後である。多くの犠牲者を出す事態になった。</p> <p>地震発生と津波到来には時間差がある。その間に、「遠く」ではなく「高い」場所へ行くのだ。津波の知識と高い場所に逃れる意識がもっとあれば、被害は違っていただろう。</p> <p>地震が起きて優先すべきは自身の安全だ。命がなければ、家族のことを心配できないし、避難所生活に不安を抱くこともできない。「てんでんこ」に命を守る、けがをしないという意識を大事にしてほしい。</p> <p>防災訓練を通じて、地震への心構えをし、すべき行動を体で覚えていただきたい。大事なのは日々の生活における防災意識だろう。多くの人がハザードマップの内容を理解すれば、防災意識もかつてと違ってくるはずだ。</p> <p>もし家族や知り合いを失った人がいたら、必ずみんな守っていく意識も持っていただきたい。3.11 では 2 万人近くの人が命を落とした。生き残った、家族や友人は相当数にのぼる。その人たちを守ることはできただろうか。また同じ轍を踏んではだめだという思いが私にはある。</p> <p>3. リーダーがすべきこと</p> <p>大人であろうと子供だろうが「落ちつけ、身を守れ」と声を出せば、その場のリーダーである。守りの対策しかない。</p>

実際、火事を見つけたとき、優先すべきは消火、通報、避難、いずれだろうか。消防など公的機関の判断基準は、自分の身を守れるか、けがをしないか、やけどをしないか、命を落とさず行動できるか、である。生き残ることがリーダーの鉄則だ。

住民個々の身体機能にも目を配ってほしい。例えば子供や高齢者の視野は狭い。相手への思いやりのある対応も必要だ。

地震対策はほかの災害避難でも役立つはずだ。地震や火災は突発だが、大雨は降雨情報が発表されるから避難するまでの時間はある。大雨警報、避難準備または避難指示、避難勧告が出て避難となるまで、どの避難路が望ましいか考えることもできるし、ハザードマップを確認する時間もある。

4. 自助、共助、公助

公助というのは当てにならない。地震なら大体発生3日以後ぐらいに機能すると思っていてほしい。まずは自分で自分を守ることが大事だ。

5. 日常生活から災害時を意識しよう

3.11 を経て、私の日常生活に変化が起こった。1つは食事後に口をぬぐったティッシュペーパーで食器を軽く拭くようになった。2つは1日に要する水の使い方を意識したこと。3つは携帯トイレを用意したことである。トイレトペーパーもスマート使用を心がけている。みなさんも日常から災害時を考えていただきたい。

浦河の風景を見たとき、私は大川小学校のあった石巻市大川地区と似ているように感じた。もし地区のリーダーが決まっていない、訓練もしていないところがあつたら、訓練体制を整えていただきたい。一人ひとりが、日々、ハザードマップを読み返せば、家庭はもちろん、地区、そして浦河町の防災対策力は一步一步高まるはずだ。



開催地より

- ・経験に基づく話はリアリティーがあり説得力があつた。災害時の心構えを個人・地域レベルで向上できるよう、さらに啓発を強化・継続していきたい。
- ・今後、地区ごとに災害の種類やリスクが違うことを理解してもらい、自分たちの地域を自分たちで守ることのできる住民の育成を行うべく、訓練、啓発を行いたい。また、防災訓練などを通じて地域のコミュニケーション強化を図り、家庭内備蓄や適切な避難行動を促していけるように進めていく。

開催地名：北海道余市町	
開催日時	平成 28 年 9 月 30 日（金） 18：30～20：00
開催場所	余市町中央公民館
語り部	齊藤 賢治（岩手県大船渡市）
参加者	町民、区会役員、防災関係機関、学校・社会福祉施設など 計 83 名
開催経緯	近年大きな災害が発生していないため、災害時における自助・共助の重要性の認識が低い。要支援者対策を進めていくにあたり、自治会などの協力を得ていくことが必要である。防災無線が未整備のため、緊急速報メールや広報車などによる伝達手段により対応している。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>津波のことを知らず、避難行動をとらなかった人の多くが亡くなった。「逃げなさい」という言葉を子どもに発することができない大人たちである。みなさんは子孫に伝えるつもりで、私の体験を聞いていただきたい。</p> <p>2. 堤防の限界</p> <p>大船渡湾には、湾口防波堤、防潮堤が設けられていた。小さな湾の堤防も含め、堤防は根こそぎ破壊された。新たな堤防工事が進められている。従前と違うのは、コンクリートに鉄筋が入り、太い鉄パイプが地中深く差し込まれている点だ。だが、コンクリートの耐用年数は 50 年である。三陸沿岸に来る大津波は数十年に 1 回の頻度だ。つくっては壊されの繰り返しである。</p> <p>津波は川をさかのぼる。擁壁を越えたら冠水は必至だ。</p> <p>3. 津波来襲時の行動</p> <p>5、6 秒の差が生死を分けた。水をかき分けながら津波から逃れた車の後続車は、流されてきた自販機を前にブレーキを踏んだ。流れ込む水を前に停車した車もあった。その場で車を乗り捨てて、高台に走れば助かったかもしれない。私はその様子を高台から目にしていた。ビルの上階に上がっても津波がビルを越えたら終わりである。大船渡は湾の背後がすぐ山である。上へ上へと逃れる場はあったが、瞬時の判断が生死に直結した。</p> <p>海に向かって車を走らせるという異常行動があった。その理由は想像するしかないが、①津波の知識を持っていない、②車中にいて津波の様子がわからずにいた、③土地勘がなかった、④パニック状態になった、⑤海方向に家族がいる、あるいは職場がある、といった要因が考えられる。ふだん、避難することを考えていない人がいざ避難行動を開始すると、いつも通っている道路を利用しようとする。状況に応じた避難ができるかどうかは、防災意識の問題だ。津波の場合は高いところ上がるしかない。三陸に伝わる「津波てんでんこ」という言葉は、てんでばらばらに逃げようという意味だ。ふだん、津波について話し合っていないと、成立しえない言葉である。正しい知識、</p>

適切な判断のもと、自分の命は自分で守ることが、防災の第一歩だと思う。

4. 「まさか」を口にする心理

死亡者のうち、避難所・避難先で被災した人の割合は 9.5%である。陸前高田市では、指定避難所に 15 メートルの津波が押し寄せ、100 名超の避難者のうち 80 名が遺体となった。ハザードマップは目安でしかない。

かつて津波が来たことがない場所に立地した事業所でも、作業服を着たままの遺体が多く発見された。事業所の判断が問われる。

逃げていれば助かったかもしれない人たちは7割と推計されている。逃げなかった理由の一つに「ここまで津波は来たことがない」という認識があったと推測されている。生存者がよく口にする言葉は「まさか」である。私のおばは「ここまで津波は来ないから大丈夫」と語り、命を失った。

自宅に戻って被災するケースにしても、「津波なんて来たことがない」という意識に根ざした行動だと思う。自分は大丈夫だという「正常化の偏見」「恒常性バイアス」が働いた。根拠のない大丈夫ほど危ないものはない。

5. 命を長らえるツール

誰もが被災者になる可能性がある。わが家は家具の転倒防止を施していた。アウトドア用品は重宝する。震災後、インバーターの吸水ポンプを購入した。装置の知識、技能を持ち、工具をそろえておくことも必要だ。災下の生活で困るのは、水、食料、トイレである。私たちの地域は、お互い様の関係があり、物のやりとりもあった。コミュニケーションこそが災害の渦中においては命を長らえるツールなのだと思う。もっとも、家を流された方々は、ないないづくしの避難所で、窮屈な生活を強いられた。10 日間同じ服、下着を着けて過ごしていた。女性や赤ちゃんは大変難儀した。



大船渡は公助により、5メートルのかさ上げを終え、今、ホテルやスーパー、工場が建っている。



開催地より

・地震が発生したときに、津波を連想し、すぐに逃げる行動へ移すことの重要性を感じるとともに、それを町民の方が意識し、実行に移すことの難しさを感じた。今後、学校や町内会で開催される防災学習会などで、「津波てんでんこ」の精神を伝えていきたい。

開催地名：静岡県下田市	
開催日時	平成 28 年 10 月 6 日（木） 13：35～15：00
開催場所	下田市立朝日小学校体育館
語り部	菅野 祥一郎（岩手県陸前高田市）
参加者	児童、教員、保護者等 計 77 名
開催経緯	<p>市立朝日小学校は、海拔 4メートルに位置し、過去の津波災害による経験から、東日本大震災以前より地震・津波に対する避難訓練や防災学習を進めている。また、南海トラフ巨大地震の被害想定を受け、新たに地域や大学の協力を得て、校内からの避難のみでなく、地域の避難場所や避難ルート、避難所の必需品、防災用品などについても学習している。</p> <p>今回は、さらに記憶に新しい津波経験者の生の声を聴くことで、より地域を巻き込む学習、新たな視点で取り組む学習を創造していきたい。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>当時、私は小学校の学校長を務めていた。朝日小学校も津波の被害を受ける可能性があるため、自分事として聞いてほしい。岩手県陸前高田市は、リアス式の海岸だったため、被害が大きくなった。その被害と経験について話したい。</p> <p>2. 津波から逃げるには</p> <p>震災で亡くなった人の多くは津波の被害を受けた。学校長を務めていた気仙小学校は、①海や川が近くにある、②橋を渡らなければまちの中心部に渡ることができない、③避難所として指定されている、という 3 つの特徴があった。これらの理由から、児童や近隣住民は気仙小学校にとどまり、それ以上動くことはなかった。しかし津波はすぐそこまで来ていた。校長の私は学校ではなく高い場所へ逃げるよう指示した。次の日、校舎を見ると、3階まで津波で覆われていた。生きた人と亡くなった人の違いは、避難したタイミングの早さである。避難しなければ他の人を助けることはできない。助かるためには、気づき、考え、行動することが大切である。</p> <p>3. 当時の避難所の様子</p> <p>発災から数日後、避難所には無事を確認するために多くの人が訪れた。子供たちは避難所で生活しながら、母親や父親を待っていた。しかし、家族が津波の被害を受け、迎えない子供もいた。そのうちの 1 人が「校長先生、僕たち家なき子ですよね」と言った言葉が忘れられない。</p> <p>4. 大人に求められること</p> <p>学校を例にとると、校長や教頭のように上にたつ者の責任は重大である。周りの状況を勘案して判断することが求められ、非常時にも役割が求められる。また、災害時は直接的な被害以外にも、避難生活を通して、人間として</p>

	<p>のモラルが問われることも出てくる。教育の原点は家庭にあり、大人は子供を教育する責任があることを忘れてはいけない。</p> <p>5. 復興に向けて</p> <p>今年は地域の人々の協力もあり、運動会を開催した。子供たちは現実に向き合いながら、未来に向かって歩き出している。陸前高田では「ふるさとは負けない」を合言葉に頑張っている。朝日小学校の児童には、学校があり、友達や家族がいるという“当たり前”のことを大切にして生きてほしい。自分の命を守るために想像力を働かせてほしい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>地震・津波災害に関しては、まずは安全な高台に避難ことが最重要であるということあらためて認識した。そして、そのためには常日頃から各個々人が強い意識を持つだけでなく、それを家庭、地域、組織へと広げていくことの大切さを感じた。また、現場監理者の判断及びその判断をするための普段の観察力、意識付けの重要性を感じた。本講座を受け、あらためて防災教育の重要性が明らかとなったため、今後も教育委員会と協力しながら防災教育に力を入れていきたい。</p>

開催地名：高知県安田町	
開催日時	平成 28 年 10 月 7 日（金） 19：00～20：30
開催場所	安田町文化センター
語り部	佐藤 政信（宮城県仙台市）
参加者	住民、行政職員、消防団員 計 43 名
開催経緯	防災訓練へは一定の参加はあるが、行政主導の訓練であり、自主防災組織が自ら訓練などを行う地区が少ない。避難所の運営に関する取り決めなどができておらず、発災時の避難所運営がスムーズに行えないことが想定される（順次運営マニュアルを作成する予定であり、現在は 1 箇所のみ作成済み）。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>仙台市宮城野区蒲生にあった港町内会では震災前、防災訓練もしていたしマニュアルも整備されていた。しかし事前の準備が充分だったとは言えない部分もある。私の体験談がみなさんの防災・減災につながれば幸いだ。</p> <p>2. 震災下で</p> <p>仙台港の沿岸は平地な工業地帯である。南には七北田川があり、その間には 4 つの町内会があつて、1,000 世帯・3,000 人が生活していた。地震の発生で津波の来襲は予期していたが、あまりの大津波だった。</p> <p>避難した中野小学校も平地に立地する。避難マニュアルでは、最初に地区の集会所ごとに点呼を取った後、歩いて学校に避難するはずだったが、機能しなかった。被害があまりに大きかったのだ。1 箇所の場所が被災すると二次被害も発生する。「てんでんこ」な避難が望ましい。</p> <p>津波は一時、校舎 2 階まで襲った。学校に避難した 650 人は結果的に助かったが、当初、校舎上階に上がらず、体育館や校庭にとどまっていた人もいた。港は火災、陸は延焼、瓦れきで埋まる事態になった。避難所の運営ができる状況ではなかった。救助を要請した。救援ヘリによって運ばれた場所は人であふれていた。寝る場もない。翌日、話し合つて小学校の体育館で避難所を運営する決断をした。町内会ごとにコミュニティを配慮したスペースの区分けをして、ダンボールを敷き敷居も設けた。毛布が用意されたが、底冷えする体育館の床で 1 カ月間、みんなでしのいだ。</p> <p>最も大切だったのは安否確認だった。町内会では一定の世帯情報は把握していたが、すべてが流されている。個人情報保護上から行政は名簿を提供できない。苦勞した。葬儀の毎日、火葬場は 10～15 日待ちが続いた。</p> <p>学校は卒業式など行事を控えていた。避難所としての学校を転々と移動するのは難儀だ。各小学校にいる避難者を集約することにした。中野小学校区災害対策委員会（のちに中野小学校区復興委員会）も立ち上げた。避難者の総数は 300 人。大人数になると運営にも限界がある。たとえば毎日、朝昼晩、</p>

炊きだしはできない。朝晩は仕出し弁当、昼はカップ麺となる。揚げ物入りの仕出し弁当を残す人が増えたので、おにぎりに切り替えた。自衛隊やボランティアが温かい炊きだしを支援してくれたのはありがたかった。食事にせよプライバシーにせよ、避難所生活には一定の安心感が必要だ。

3. 避難を終えたのち

仮設住宅の生活では挨拶や声かけを大事にした。住民トラブル防止にも役立つ。仮設住宅の生活には難儀が多くストレスも高まる。もしトラブルになったら班長が仲に立つようにした。季節ごとの催し事も開催した。

年金生活者は家屋の再建は容易でない。借地期限を設けた移転地にせよ、借地料などにも年収がからんでくる。災害公営住宅、集団移転などにおいても新たな生活環境を整える苦労は大きい。「津波に流されたほうがよかった」と漏らす人が少なからずいた。しかし全国から支援を受け、前向きに生きることにした人が増え、笑顔で語り合える状態になったと感じる。

4. なぜ犠牲者が多かったのか

津波への認識が薄く、自宅にとどまった人、一度避難したとしても自宅に戻った人、車を捨なかった人が多くいた。避難の仕方によって犠牲者は減っていたらと思う。避難誘導をした人も犠牲になった。三陸沿岸では津波がくる15分前になったら誘導をやめ、避難行動に移るといった取り決めを共有している地域がある。犠牲者を少なくするため、地域のルールがあっていいと思う。また、家族の間では「てんでんこ」な避難を共有してほしい。自分自身で命を守ることが最も大切だ。

震災後、市は備蓄品を備えた避難タワーを建造している。発災前に設置しておけばよかったと思う。

高齢者が多い私たちの地域は、今、中学生や高校生とともに防災活動をしている。若い人のパワーを防災・減災に生かすことを考えたい。



開催地より

・想定している避難場所にこだわらない避難への認識、また仮設住宅や避難所でのルールを事前に決めておくことなど、まだまだすべきことが多いと感じた。今後の計画策定に活かしていきたい。併せて住民への啓発や住民参加型の計画づくりや避難所の開設訓練にも取り組みたい。

災害伝承 10 年プロジェクト

開催地名：千葉県御宿町	
開催日時	平成 28 年 10 月 13 日（木） 13：30～15：00
開催場所	御宿町役場大会議室
語り部	瀬戸 元（岩手県釜石市）
参加者	自主防災会役員 計 57 名
開催経緯	御宿町は太平洋に面し、切り立った海岸線と約 2 キロの湾の形状をなす砂浜を有しており、津波発生に際しては被害を受けやすい地理的環境にあり、房総沖や南海トラフ沿いで発生する地震による津波被害が懸念されている。自主防災会が 10 組織設立されているが、設立から 10 年以上が経過し、各自主防災会の役員交代などによる防災意識の低下を防ぐ必要がある。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は釜石市両石町内会の会長と自主防災会の会長を務めていた。沿岸一帯は津波の常襲地帯である。両石湾は漁業のほか鉄の輸送港としても栄えた歴史を持つが、安政から平成まで 4 度の大津波を受けている。3.11 では先人の教えを生かせなかった。東日本大震災を振り返りたい。</p> <p>2. 慢心が蔓延していた</p> <p>町内会の防災活動のメインは津波対策である。自主防災会の立ち上げは市内では遅いほうだった。町内会の津波対策と言えば、高台避難である。私は過去の例をひいて、近々、大きな地震が発生して 30 分で大津波が来ると確信していた。住民にもその旨を伝えていた。明治の三陸沖津波を上回る大津波で 45 人が亡くなった。地元には「命てんでんこ」という先人の知恵が残されている。しかし 3.11 では避難さえすれば助かるという風潮が蔓延していたと感じる。死者の内、避難を躊躇したと思われる人の割合は 6 割、想定以上の大津波の被害に対処できなかった人が 3 割、残りの 1 割は避難誘導、介助、交通整理などをしていた警官や消防団員たちである。てんでんこに率先避難するという鉄則を忘れ、発せられる気象情報に依存していたと思う。自主判断が甘かったと私は思う。だが、会長の責務を問う声もあった。私は町内会および自主防災会のトップとして、備蓄品の補充やビデオ記録の準備を進めていた。危機イメージを描けていたからだ。危機をイメージできないと効果は上がらない。「あとに残るは涙の種のみ」という先人の教訓も地元には残っている。</p> <p>率先避難の教えを生かしたのは「釜石の奇跡」と伝えられる学校の生徒たちだった。</p> <p>3. 命を守る文化としてのルール</p> <p>奇跡の一方では「釜石の悲劇」もあった。避難所ではない防災センターに避難者が集まって被災した。センターではかつて高齢者が多いことなどを理</p>

由に避難訓練場所として指定された経緯があった。

震災後、住民アンケートを実施し、検証を試みた。避難しても家に戻った例が散見された。避難所運営では食糧の備蓄、防災装備品が備えられていたこと、安否確認がスピーディーになされるなどの評価もあった。津波は生死に直結する災害である。先人の教訓やかつての災害経験をより理解しておくべきだったと思う。

地区には避難に当たって「15分ルール」が存在する。地震後15分は避難誘導、救護などに当たり、その後の15分は自身の避難を優先するという内容だ。「命てんでんこ」を地域で実践・共有する意図だが、「見捨てる」ことのできない心情が被害を招いた一因にもなっている。明治の大津波では約850人が亡くなったが、昭和8年の大津波のときには3人だけだった。昭和初期には教訓が活かされていたのだと思う。

4. 自分で身を守る覚悟

食料の備蓄は、概ね私が補充した。米10キロ袋を10袋備えていた。米10キロでいなり寿司くらいの大きなおにぎりが280個つくれる。皿掃除をしなくても良いようにラップや銀紙も補充し、トイレトペーパーも揃えた。食事をすると排便を要するので、食べないという人もいた。トイレの問題は大きい。男たちは山中で用を足した。

大震災ともなると、幾度も津波が到来し、集落は壊滅する。行政機能も自主防組織も麻痺状態である。結果的には、自分の命は自分で守るしかない、というのが大震災の経験である。



開催地より

自主防災会の平常時の活動として、地域住民と顔を合わせる機会づくりや地域におけるルールづくりが必要だと感じた。また、発災時の避難誘導については、まず、「自分の命は自分で守る」を基本だということを改めて感じた。それを実行するためには、平常時から自分たちの住んでいる地域の災害リスクについてイメージ力を持って考えておくこと、家族等で避難行動を確認しておくことが必要だと感じた。

災害伝承 10 年プロジェクト

開催地名：埼玉県鶴ヶ島市	
開催日時	平成 28 年 10 月 14 日（金） 10：00～12：00
開催場所	鶴ヶ島市役所
語り部	大和田 哲男（宮城県仙台市）
参加者	市職員 計 73 名
開催経緯	大規模災害の経験がなく、業務継続計画どおり対応できるのか課題である。各避難所を担当する職員を決めているが、職員の防災意識が低い。避難所運営マニュアルは策定しているが、各自治会などでも運営マニュアルを作成しており、統一ルールがないことから運営方法がまちまちである。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は長く町内会の活動をしてきた。自治体職員の参考になるよう、町内会の防災活動や震災対応の経験を報告したい。</p> <p>2. 自主防災組織の立ち上げ</p> <p>町内会は宮城野区中野地区にあった。仙台港の工業地帯、渡り鳥がやってくる蒲生干潟で知られ、「蒲生」と言ったほうが仙台市民にはとおりが早い。地区には 4 つの町内会があった。</p> <p>昭和 53 年の宮城県沖地震後、市町村は自主防災組織の発足を促した。町内会も動いたが、要綱策定には約 4 カ月かかった。組織編成には苦労した。町内会ごとに総務班、消防班、避難誘導班、救出班、炊き出し班などをつくり、次いで上部組織として自主防担当の連合町内会リーダーを決める。だが、選任の段になると「私は嫌だ」という返事が大半だった。</p> <p>自主防災組織が立ち上がった翌平成 21 年、簡易トイレの組み立て訓練では、区職員が組み立ててしまい、町内会員は体験できなかった。翌年から住民主体型の訓練に替えた。区職員が 1 時間かかったという作業を 30 分以内で済ましてしまう工務店勤務の人がいた。地域にはさまざまな力がある。</p> <p>世帯情報の把握は難しい面がある。「町内会名簿」というと嫌がられるので「町内会家族構成調査票」という表題にした。備考欄に要援護者、障害者の有無などを素直に記入してくれる人が多かった。</p> <p>3. 大震災下、どう動いたか</p> <p>地震が発生して、ひとり暮らしや高齢者世帯の安否確認に動いた。携帯ラジオと予備電池を持って町内を回った。大船渡への津波到来を聞いたので、避難を呼びかけたのち、小学校に逃れた。道路は不通、校舎は 2 階まで冠水した。自衛隊のへりに救助してもらった。市では前年に無線機を小中学校など 200 箇所に配備していたが、一斉に使うと混線する。</p> <p>町内会には災害対応マニュアルがあったが、想定どおりにはいかなかった。臨時対応として避難者数を確認する総務班、実働の活動班、婦人クラブ</p>

による炊き出し班だけにした。毛布の提供は子供や高齢者を優先した。寒くて眠れない人が多くいた。訓練で備蓄品を把握できていたのは幸いだったと思うが、幼児のミルクが不足した。お母さんと乳児は他の避難者と隔離した。

複数の避難所を移動したが、底冷えするので畳を敷いた。ダンボールの敷居は自由に仕切ってもらった。みんなで清掃、換気し、婦人クラブも対応可能な範囲で食事をつくった。温かい握り飯が出ると子供たちが集まった。

4. 震災後の活動

中野小学校区災害対策委員会を3月20日につくり、区とともに災害対応にあたった。活動班は消防や警察などと犠牲者を捜索した。遺体に満足な肢体はなかった。犠牲者を県の体育館に運んだ。自衛隊と瓦れきの処理も行った。復旧のめどがついた同年夏、中野小学校区復興委員会に改名した。市の復興推進本部（復興局）から支援事業を聞き、住民の意向を踏まえたうえで防災集団移転促進事業の適用を申請した。移転は今年3月にほぼ終えた。

震災後、みんな、てんでばらばらだったので、市の支援も得て情報紙を発行してきた。芋煮会なども開催した。独自に慰霊祭も催してきたが、平成28年3月に復興委員会を解散することにした。

5. 行政とのつながり

「きずな」という言葉は、震災後に育まれたと感じる。コミュニティでも和でもない概念だろう。きずながあると、人はあうんの呼吸で動く。新潟県中越からきた職員は、仙台市の職員がうろうろしていると、ぱっぱっと処理していた。仙台市職員は全国へ恩返ししようと、被災地へかけつける意識を共有している。

訓練のおかげでパニックはなかった。「すぐ行政頼みにならず、わからないときだけ頼ればいい」。私は町内の人にそう言い続けていた。発災後、役所の職員は夜遅くまで住民の声を聞き回った。町内会は行政とのつながりを深めた。結果、地域住民の今日があるのだと思う。



開催地より

・今後、地域対応部職員にあつては、地域の自治会などが行う訓練などに積極的に参加するよう促していきたい。他の職員にあつても、災害時の自らの役割を再確認するとともに、日常からの防災対策や地域コミュニティへの積極的な関与などによって、防災意識を高めていくきっかけとしたい。

開催地名：奈良県桜井市	
開催日時	平成 28 年 10 月 15 日（土） 14：00～15：30
開催場所	桜井市立図書館
語り部	菅井 茂（宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織関係者 約 100 名
開催経緯	桜井市は、南海トラフ巨大地震による被害が想定されているが、これまで大きな災害に見舞われた経験がなく、地域住民の防災への意識は必ずしも高くない。そのため、地域住民に「自助」・「共助」の考え方をいかに普及啓発していくかが重要な課題となっている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は 1 カ月間、仙台市若林区南材地区の避難所で地域の人々と他の地区から逃れてきた避難者の世話にあたった。学んだ点は多かった。</p> <p>2. 指定避難所の運営</p> <p>震災時、私は南材地区町内会連合会の副会長を務めていた。私自身は発災時、被害に遭っておらず、19 時ごろに南材小学校に着いた。避難所には 950 名ほどおり、翌日朝に 1,000 食を用意したが、夜の間に入が増え、1,200 名に膨らんでいたため、足りなかった。孤立していた荒浜地区の荒浜小学校から避難者の一部が空輸移送されて、八軒中学校に入るようになったほか、南材コミュニティ・センターには乳幼児と母親が入所することになり、私どもは 3 カ所の避難所の運営に携わるようになった。八軒中学校の合唱部は全国大会の出場を断念し、避難者に合唱を披露したほか、他の生徒たちも避難者支援で活躍してくれた。</p> <p>避難者には 3 食提供できたが、高層階マンションに暮らす地元住民はライフライン不通で帰ることもできず、難渋していた。薪を使って暮らしていた生活の優位性を感じた。避難所ではルールの徹底を周知し、避難者各人には何らかの役割を担ってもらった。13 日になって、私はルールを守れない避難者には退所してもらおうと伝えた。地区からは、食糧や自転車の提供を受けた。共助が生きている地区だと思った。</p> <p>スムーズな運営ができた要因には、総合防災訓練の経験があったことが大きいと思う。別途、避難所運営の訓練も南材小学校で開催しており、意思疎通もスムーズにいったのだと思う。南材小学校では卒業式が 20 日に予定されており、大掃除をして体育館を引き渡した。</p> <p>3. 震災経験を踏まえて</p> <p>ライフラインが復旧したら、避難所運営は手を引くべきである。施設運営上の困難性や、町内会・自主防災活動に毎日関わる限界もある。もちろん避難所生活を余儀なくされる避難者には一定の方向性を示したうえで閉所を</p>

伝える必要がある。

加えて「ひと」に関しては、地域で防災リーダーを育てる必要があると思う。新たな避難所マニュアルも策定され、指定避難所と指定ではない避難所であるコミュニティ・センターの役割が共有されている。しかし、その運用は「ひと」にかかっている。

共助においては、地域の交流づくりが重要で、顔の見える関係を築いていきたい。その意味でも継続した訓練は大事な機会である。父親、母親、子供たちが参加し、約 900 人規模で実施している。地区には 3 つの小学校区と 1 つの中学校区が存在している。地区 16 団体が集まって、連絡協議会も設立されている。学校には生徒の登校日に訓練日が重なるよう依頼していて、濃煙体験、バケツリレー、避難者の名簿書きなど、生徒の防災活動経験が増えるよう工夫している。防災倉庫で防災装備品が故障していないかのチェックも怠らない。コミュニティ・センターでは民間企業との連携も図って、協力を得ている。

私は、住み続けられるまちにしたいと思って活動を展開してきた。住んでいて不便ならば、改善すればいい。不備があれば、お互い言い合える、安心・安全な楽しいまちにしたいという願いがある。



開催地より

災害が起きた時には、公助ではなく、自助・共助が大切であると再認識した。普段から地域の中で顔の見える関係づくりを進め、連携を深めることで、万が一の災害に備えることができると実感した。今回の講演会を受けて、災害時に住民に中心的役割を担ってもらえるよう、訓練などに取り組んでいきたいと思う。

開催地名：高知県四万十市	
開催日時	平成 28 年 10 月 17 日（月） 11：00～12：30
開催場所	高知県立中村中学校・高等学校
語り部	武蔵野 美和（岩手県陸前高田市）
参加者	中高生、一般市民 約 713 名
開催経緯	南海トラフ大地震により、発災 1 日後には市内全域で約 9,000 人の避難者が発生することが見込まれている。学校施設などを指定避難所とし、地元自治会へ自主運営を依頼しているが、まだまだ行政依存の考え方が根強い。市民、とりわけ未来を担う若い世代に対する意識付けが必要である。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>今日、中高生 700 人に集まっていたき体育館はぎっしり。「これから寝る場所を確保してください」という難問に応えられるだろうか。普通、ひとり二畳分を確保する必要があるが、震災時、陸前高田市立第一中学校（高田一中）の体育館は、最多で 1,800 人超の避難者でひしめきあった。被災の現実と、PTA 活動が続けてきた私の思いも織り込み、話を進めたい。</p> <p>2. まちがのみ込まれる</p> <p>震災で多くの人々が亡くなった。他者の避難を優先して犠牲になった人も多くいる。高田一中には 300 人弱の生徒が在籍していたが、震災孤児が 9 人、片親を失った人は 128 人。被害を大きくした一要因は地形にある。三陸沿岸はリアス式海岸が続くが、陸前高田には平地があり広い砂浜もある。海沿いの高田松原には 7 万本もの松が茂っていた。唯一残った「希望の一本松」があったが、根腐れしたためレプリカとなり、今は松の妖精という、ゆるキャラ「たかたのゆめちゃん」が亡き松林の象徴となって活動している。</p> <p>考えていただきたいことがある。生徒たちが声を出し合うなど率先避難者として最善を尽くした「釜石の奇跡」と、防災センターという施設から動かず、結果、大人たちが犠牲者となった「鶴住居の悲劇」のこと。生徒たちは前例にとらわれず、防災教育によって、その場ですべきことを身につけていた。避難所運営でも大きな力になった。若いみなさんの一声と行動が重要だ。</p> <p>3. 声に出し行動に移す</p> <p>死者・行方不明者の人口比統計があるが、数値の高低ではなく、ひとりを亡くした家族や友人の心情に心を傾けてほしい。被災地では家屋を失った知り合いに、家を流されなかった世帯の人が「ごめんなさい」と言うことがある。声を発した当人は知人・友人らを亡くしている。地域の人々が心に傷を負った。惨事に遭った人々に寄り添える心を持ってほしい。</p> <p>命こそ最優先だが、自分が大事にしているものは当人の価値観で決めればよい。家族かもしれないし、ペットや思い出の品かもしれない。避難時の「最</p>

善」は刻々変化する。若いみなさんが避難・被災下で何をできるだろう。できることは人それぞれ違っている。陸前高田では、生徒から提供された交換日記風の壁新聞が避難所に張り出され、高齢者は若い声に勇気づけられた。避難者には種々の不都合や困難を抱えている人がいる。簡易ベッドをつくった生徒、卓球台を仕切りにしてプライバシーを確保してくれた生徒もいた。できる範囲で行動に移すことが、他者の力添えになると思う。

恒例歳事「うごく七夕まつり」が復活している。「やりたい」という言葉に全国から支援が集まった。「いっしょにやらない」と声かけすることが有効だ。親を亡くし進学をあきらめた生徒がいる。当人にとって地元やネットなどで声かけすることは、居場所づくりにもなっていると感じる。

県立高田高校では、震災年、5月が入学式だった。「これだけの被害を受けた私たちだが、ここから立ち直って自分たちがこのまちを立て直していく、その自覚を持った」と語った生徒がいた。私は、復旧・復興を目指すまちの現実というものを直視した言葉だと感じた。復旧に臨んだ人は多数いる。瓦れき撤去では自衛隊員の働きが大きかった。また、隊員は避難者に温かい食べ物を食べてもらおうと、何もない当地の状況下で1,200食超のおにぎりや豚汁をつくってくれた。隊員はといえば固定食である。

4. 「最善を尽くす」という意味

「まず逃げて」と話をできる地域づくりをしてほしい。災害対応カードゲーム教材・クロスロードには2者選択を求める設問が用意されているが、イエスでもノーであっても人それぞれ回答の背景は異なる。正解はないからこそ、自分の言葉で「あなたが大切だから」と添えてほしい。三陸に言い継がれてきた「津波てんでんこ」のバックボーン精神でもある。

5. 震災を振り返って

全国に「ありがとう」。戻ることができない「有り難う」ではない。今、発災当夜の夜空を思い浮かべ、明けない夜はないと思えるようになった。みなさんには誘導できる人になってもらいたいというのが、私の願いだ。



開催地より

・被災者が当時何を考え、どういった行動したかを聞くだけでも意義深いことであると感じた。(市の職員として) 今後の市民への意識啓発の場などで、被災者から聞いた言葉として、語り伝えていきたいと考える。

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：和歌山県御坊市	
開催日時	平成 28 年 10 月 18 日（火） 10：00～11：30
開催場所	御坊市役所
語り部	山崎 義勝（岩手県釜石市）
参加者	市職員 計 60 名
開催経緯	南海トラフ巨大地震では、市民の半数程度が被災するとともに庁舎も浸水するなど、甚大な被害が予想されている。東日本大震災から 5 年、防災意識が低下してきている職員も増えてきた。災害の知識を得るとともに、災害最前線で活動する職員の意識づけが課題となっている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>震災から 5 年、釜石市の人口は震災前に比べ 1 割ぐらい減った。私は震災当時、消防長を務めていた。これまで「たわまず屈せず」という思いを全職員が共有し復興に取り組んできた。震災の体験、危機管理の検証、提言などを話したい。防災はみんなで築くものである。市職員という立場だけでなく、市民としても聞いていただきたい。</p> <p>2. 震災、そして復興の 5 年間</p> <p>立ってられないほどの揺れだった。引き波があり、複数の大津波が「世界一」の防潮堤を乗り越えて来襲した。タンカーが陸に乗り上げ、まちは瓦れきの山で、正直、なすすべがないという思いが強かった。</p> <p>大阪、愛媛、大分の消防員による緊急消防援助隊とともに遺体捜索にあたった。海上保安部は海を捜索した。殉死した部下と向き合った。半年後に発見された遺体もある。早期発見できず、遺族に謝罪した。</p> <p>職員には時局の「出番」というものがある。寝ずに事にあたった。私が家に帰ったのは発災後の 9 日目である。当面の大きな課題は避難所運営と避難者対応だった。ボランティアが来訪してくれたが、当初は混乱が続いた。物資配給作業を自衛隊と行ったが限界があった。配送のプロである宅配業者の対処力は高い。現在、宅配業者とは災害支援協定を結んでいる。</p> <p>復興は簡単ではない。支援制度を整理しておく必要がある。住民の声は多様だ。「平等」「公平」は不可能だ。職員は説明能力を培っておく必要がある。消防本部の指示が届く事態は「災害事態」ではないと思う。災害事態では現場の判断力が重要になる。トラブルは必ず起こるし、情報は錯綜する。</p> <p>家族の安否がわからず、心配事を抱えた部下に「頑張れ」と業務を続けさせた反省が私にはある。当人の奥さんは亡くなっていた。</p> <p>3. 知っておくべきこと、検討すべきこと</p> <p>①地形によって被害は異なる。南海地震で浸水域になることが想定されている市庁舎では初動は遅れるだろう。②孤立地域の災害活動は地元住民が主</p>

体となって動かざるを得ない。③年齢が高まるほど正常性のバイアスが働く。④防災計画が不明瞭、あるいは周知されていないと被害は大きくなる。住民には避難訓練への参加を促したい。⑥津波の到来は予知できない。⑦地震後、業務整理していた事業所では業務指示が災いして犠牲者を出した。一方、避難を優先し自由行動を指示した事業所の社員は命を守ることができた。各事業所も防災対応の検証が必要だ。⑧避難行動の実践と動機づけは重要だ。防災教育が実を結んだ「釜石の奇跡」と、1箇所にとどまり続けたことなどで起こった「釜石（鵜住居地区）の悲劇」を記憶にとどめたい。⑨避難所の開設・運営は住民の力を借りなければならない。

4. 三陸に残る伝承の碑

三陸地方では、明治、昭和、平成と3度の大津波を経験した。明治以前の津波もあった。大津波の来襲は概ね50年周期である。ときどきに建てられた碑に刻まれている主題は、地震が起こったら高台に逃げろ、である。

5. みんなで築く防災対策

防災は行政だけで完結できない活動だ。地域の総力が防災力を高める。釜石では食堂の店員が避難を誘導する。地元住民の防災意識が防災を下支えする。釜石では「15分ルール」を共有している。地震発生から15分間は避難誘導などの活動にあて、その後15分間は自身の避難行動に移る。住民が避難を優先する「防災の文化」というものを御坊市で根づかせていただきたい。



開催地より

・行政の観点からの講演だけでなく、非常に有意義な研修だったと感じた。今後、全職員が防災を意識し、防災対策に取り組めるような仕組みづくりを考えたい。

開催地名：山梨県都留市	
開催日時	平成 28 年 10 月 19 日（水） 19：30～21：00
開催場所	都の杜うぐいすホール
語り部	草貴子（宮城県仙台市）
参加者	自主防災会員 計 145 名
開催経緯	「避難所運営」イコール「市の業務」というイメージが先行し、住民と共に行う避難所運営体制の構築への理解が進んでいない。避難所生活に対する知識が不足している。女性に配慮した防災対策も進んでいない。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>女性たちが立ち上げた市名坂東町内会（泉区）は、女性目線で東日本震災の対処・対応にあたった。主婦だからこそ、気付くこと、できることがある。</p> <p>2. 町内会の設立と集会所の開設</p> <p>会の設立は平成 20 年。その 2 年後に避難場所にも使用できる集会所を開設することができた。主婦の使い勝手に配慮したほか、電気復旧の早さを考慮してオール電化にした。</p> <p>役員各人には家庭事情があるので、運営は家庭第一で臨んでいる。</p> <p>3. 東日本大震災の対応をめぐって</p> <p>地震発生後、すべての人を受け入れた。避難者のなかからリーダーを決め、その指示に従うよう周知したうえで交流を図ることにした。</p> <p>震災を経て明らかになった問題と反省点がある。町内会未加入のマンション世帯への対応だ。入居者は通勤族の若い家族が多く、集会所で子育て支援を始めることにしたが、受入れや支援体制に充分考えが及んでいなかったと反省した。若い母も災害弱者である。私たちは、声を出せずにいる人の声を拾おうと行動した。茶話会の口コミ案内、全国おもちゃ図書館「ずんだっこ」の開設、お祭り時には未就学児のよちよちバンビ競争、お引越し会、入園おめでとう会、ちびっこたちの豆まき、郷土料理づくりなど。声を出せずにいた若い母親が徐々に入会するようになった。</p> <p>震災後、新たに取り組んだ活動は多様だ。</p> <p>防災・減災面からは、防災便利マップの作成、消防署による母子への講話など。乳飲み子を抱え集会所に避難していたお母さんの講話も催した。</p> <p>地域連携としては、小学校を拠点とした町内会、市民センター、児童館、などの地域団体と、市名坂小学校避難所運営委員会を平成 25 年に結成した。市民センターとの情報の共有化、救護班、総務班、情報班など各班の活動を充実させ、スムーズな地域運用ができるようになった。女性コーディネーター部門も新設し、母親の経験と知識を活用していく体制にした。</p> <p>地域内の活動では、七北田方言防災かるたの作成、泉区女性町内会との交</p>

流、コーディネーターの役割を重視した泉区独自の地域防災リーダー（SBL）の講習会などがある。

4. 被災下での言動

人々の言動はさまざま。庭でバーベキューをしていた家族、その道を隔てた家の奥さんから肉親が流されたと泣かれる、私の実家がある女川町が壊滅したと何度も大声で言いにくる人、支援物資を家に届けることを要求する人、トイレ掃除の当番表をつくった途端に自宅に帰った人、真っ暗ななかで歯磨きを使う水を求める人、一時ごみ集積所に粗大ごみを持ち込む人など。

沿岸の被災地では、支援物資とは名ばかりの汚れた衣類が送られる、家に入り込まれ写真をブログに載せられる、高カロリー食の連日で体調が悪化する、疲れて話もしたくないのに優しく話しかけてくる宗教家など。

支援される側もする側も、今一度、言動を振り返る必要があると思う。

5. 一人ひとりの役目

夫が赴任勤務先から一時帰宅という措置がとられ、地震発生から6日目に帰宅したとき、私は感謝の気持ちでいっぱいだった。災害時に非常態勢がしかれる職業従事者を持つ家族は、覚悟ができています。お父さんの、家族の誇りであるとみずから言い聞かせ、子供たちにも教えてきた。

消防署も一時帰宅は6日目だったようで、不眠不休で対処・対応してくれた。感謝の気持ちでいっぱいだ。

ふるさと女川のまちは流された。私は会長としての立ち位置と責務があり、自分を保てた。女川町では、みんなが一所懸命、町のため、人のため、自分のために生きている。一人ひとりの役目はそれぞれ違っている。

6. 地域防災にとって大事なこと

地域防災の大事なことは、自分たちの特性を考えて、オリジナリティーのある身の丈に合ったもので実践していくことだと思う。



開催地より

・聴講者からは、「改めて災害発生時の悲惨な状況や災害の恐ろしさを知ることができた」という声があった。講演会を聞いたあとが住民の意識啓発を図るチャンスでありと感じており、今後「市内の防災リーダー育成」「住民による避難所運営組織の強化」にも力を入れていく予定だ。

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：奈良県大和高田市	
開催日時	平成 28 年 10 月 20 日（木） 15：00～16：30
開催場所	大和高田市総合福祉会館
語り部	高橋 進一（千葉県旭市）
参加者	市職員、消防職員 計 54 名
開催経緯	本職員の防災意識の向上（特に避難所開設担当職員の意識向上）
内容	<p>1. 私の震災体験</p> <p>震度 5 強の揺れが起き、私は自宅の部屋で動けずにいた。自宅は堤防から 50 メートルに位置する。揺れが収まり、足腰が弱い母親を促し外に出た。デイサービスから帰ってきた父、母、逃げようとしないうちのおばあさん 2 人を車に乗せて、内陸側にある飯岡保健福祉センターで降ろした。「逃げたら戻るな」の鉄則を破って、私は海を見に行っただ。町内会長という立場も影響したと思う。だが、車で 4 人を送った以外、特段のことはしていなかったと思う。ラジオも携行せず、津波が気になって堤防と砂浜を歩くだけ。防災無線が何回も鳴っていたが、海を見続けている人が結構いた。私は大声で何度も逃げろと叫んだが、それでも動こうとしない人がいた。</p> <p>1 キロ西の防風林を越える大津波が見えた。津波は音も揺れなく押し寄せていた。全速力で逃げた。17 時 20 分から 26 分にかけて襲来した最大波 7.6 メートルの大津波だとあとで知った。自宅から内陸よりにある車庫は無事だった。車で保険福祉センターにたどり着いたが、大半が内陸部の中学校に移動していた。体育館は混雑していた。駐車場で家内と息子が乗っていた車を見つけた。息子は障害があり、体育館で過ごせないと思い、車中で一晩過ごした。知り合いからもらったおにぎりでも空腹をしのいだ。旭市内では、多いときで 1 日約 3,000 人の避難者を記録している。</p> <p>自宅 1 階は浸水し物が散乱していた。私は泥かきと瓦れきの撤去をしたが、誰とも話したくないほど疲れる毎日だった。やがてボランティアが来てくれて、作業は軽減された。家族は茨城県に住む親戚のお世話になり、私は親戚の家と飯岡の自宅を往復した。自宅建屋を応急修繕し、住めるようになったのは 5 月半ばである。復旧を待たなくても使えるプロパンガス、車庫に備えていた寝袋と水は役に立った。</p> <p>飯岡地区は全国からいろんな支援をいただいたが、なかでもみんなにうれしがられたのは、約 200 台もの自転車だった。子供用自転車もあった。車を運転できない人の足になってくれた。支援をいただくなかで、多くの交流が生まれ、災害を語り継ぐ NPO を発足させたりもした。夏休み親子防災教室の開催や飯岡を観光バスで回ってもらおう試みは、今も続いている。</p> <p>以下はみなさんの質問に応える形で話を進めたい。</p>

2. 避難所の備えと開設、誘導

各避難所では、飲食料品をはじめ毛布などの備蓄品を用意していたが、食料が不足し、市はコメ7俵を追加で拠出し、おにぎりにして各避難所に配った。だが、用意された炊きだしは、全員に行き渡らなかったと思う。

避難所開設にあたっては、自治体職員を主に、社協などが活動した。赤十字奉仕団の始動も早かった。緊急時の連絡網を持っている強みだろう。旭市には153地区に町内会があるが、残念ながら機能しなかった。会員と連絡がとれないのだ。民生委員のなかには避難所に駆けつけた人もいただろうが、私には連絡が入らなかった。開設は行政、公的機関頼りになった。

避難所の誘導については、まずは事前に集合場所を決めておき、警報サイレン、あるいは全戸に配られている防災無線受信機が鳴ったら、集合場所に集まっていただくということを第一歩として、誘導活動を行なうのがいいと思う。

3. 防災工事

現在、堤防の高さを6メートルにする、かさ上げ工事がほぼ終わりつつある。内陸部でも盛り土ができる場所は6メートル高の盛り土をして、黒松を7,000本ほど植栽している。

岩手県陸前高田市の高田松原には7万本もの松があったが、まちは壊滅した。植栽でまちを守られればいいが、かなりの量を植えなければならないという課題もある。100メートル幅の大きなグリーンベルトが必要かもしれないが、そこまではスペースを取ることはできない。可能な範囲で、できるだけ木を植えるという考えで、旭市の植栽事業は進められている。



開催地より

- ・有事の際、行政だけではなく市民の方たちとの連携を取る必要を感じた。
- ・11月には市の防災訓練があるので、行政側だけではなく市民側の視点として本講座を活用できると思う。

開催地名：愛媛県宇和島市	
開催日時	平成 28 年 10 月 21 日（金） 19：00～20：30
開催場所	宇和島市役所 2 階大会議室
語り部	大内 幸子（宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織関係者 約 170 名
開催経緯	平成 27 年度に自主防災組織連絡協議会を設立し、南海トラフ巨大地震などに備えて、自助の取組みを推進しているが、自助の重要性を認識している自主防災組織は少数で、各組織の防災に対する取組みに大きな差がある。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>南海トラフ巨大地震がどのような被害をもたらすのか心配している。東日本大震災の教訓は「逃げる」だ。自然災害の発生はどうすることもできない。ただ、減災はできる。私たちが取り組んできた自主防災活動を紹介したい。</p> <p>2. 「自分たちの町は自分たちで守る」</p> <p>宮城野区福住町の町内会が、日本一災害に強い町内会を目指すきっかけは昭和 61 年の「8.5 水害」だった。本格的な防災・減災活動は平成 15 年から「自分たちの町は自分たちで守る」を合い言葉にした。できるだけ行政に頼らず、自分たちで何とかしようという趣意である。</p> <p>危険箇所のマップ作成、重要支援者の名簿作成など、さまざまな活動に取り組んできた。訓練を重ねてきた私たちは、大震災時、住民の安否確認を済ませて、集会所に素早く避難所を立ち上げた。指定避難所である小学校ほか、市民センターも避難者があふれ、集会所に助けを求めにきた。ふだんから備蓄倉庫の管理をしていたので、暗くなる前にすぐ炊き出しの準備を始めた。中学生と婦人部はおにぎりをつくり、指定避難所と市民センターに届けた。</p> <p>3. 震災対策で大事なこと</p> <p>日常の取組みと訓練が大事だ。3 日間は行政に頼らず自分たちだけで頑張ることにしていた。備蓄食糧は 3 日目に底をつきかけたが、4 日目に災害時相互協力協定を結んでいた山形県、長野県、茨城県内の 3 町内会と、交流のあった新潟県小千谷市の町内会が、食糧や毛布、ストーブなどをトラックに載せ、運び入れてくれた。現在、11 団体と協定を締結している。協定はいざとなったら助け合いましょうという簡単なものである。今年 9 月 1 日には山形県天童市田鶴町内会と締結した。締結先とは日ごろから交流している。</p> <p>ふだんから準備や訓練をしていないと命は守れない。当地に津波到達点を示す碑が残されている。過去を忘れないことも大事だ。ペットの扱いが課題になっているが、避難所にはペットと同行避難できる部屋を設けている。</p> <p>女性の視点が必要だ。避難所を頼るのは災害弱者が圧倒的に多い。避難所生活で気配りできる女性の目線を生かしたい。これまで防災会議のメンバー</p>

に女性はいなかった。市では女性防災リーダーの養成講座を新設した。

4. 防災・防火訓練の特徴

防災・防火訓練に消防の指導はない。役員がすべてを進行する。訓練に臨み3回の委員会会議が開催される。参集されるのは1回目が班長、2回目は中学校の役員、婦人防火クラブ。3回目は行政、事業者・団体、中学生のリーダー、副リーダーなどが加わった全体会議である。1人でも多く参加してもらいたいので工夫してきた。事業者・団体は自前のブースを設け、防災企画展を催している。手づくりトイレは中学3年生の担当だ。訓練ではみんなが簡易トイレを組み立てる。

災害時相互協力協定を締結している町内会・団体は、各所在地で支援物資を詰め込み、朝早く出発して、福住町まで輸送する。青森県の救助犬チームは探索犬とともに当日早朝に現地を出発、訓練場で探索訓練をする。探索者を発見できたら、中学生と救護班、地元の医師が駆け寄りトリアージを実施、車いすで搬送する。JAFによるレッカー移動のデモンストレーションや、子供たちが飽きないよう、東北福祉大学の学生は防災レンジャーというキャラにふんして子供たちと防災ゲームをする。

住民は居住区によって1年ごとに救急救護班から消防協力班へとといったように担当班が変わる。雨天決行だ。訓練が終わるのは午後2時、中学生が豚汁の炊きだしをふるまう。

5. 備えについて

震災の前年、町内会の役員は高齢者など支援を必要とする世帯を回って、家具転倒防止の金具を取り付け、ガラスにフィルム張りをした。

災害用備品を備える以上に、避難経路を確認しておく備えが重要だ。

小学校の運動会など地域のコミュニケーションを深める場は多い。防災・防火というのは、火を消すことではなくて、みんなで助け合って命をつなぐことだと私は思っている。



開催地より

・災害時相互協力協定を設けるなど、独自の取組みに感心した。
・体験に基づく講演内容は説得力があり、受講者にとっても大変参考になったと思う。今後も継続的な防災研修会を実施していく。

開催地名：京都府精華町	
開催日時	平成 28 年 10 月 22 日（土） 10：00～12：00
開催場所	精華町交流ホール
語り部	鈴木 忠支（宮城県仙台市）
参加者	自治会、自主防災会役員等 計 50 名
開催経緯	本町では、年々、各自治会で自主防災組織が設立され、現在では 42 自治会のうち 33 で組織化されている。一方で、活動に対する意識は各組織で差があり、備蓄資器材の使用方法の習熟が進んでいないなどの課題がある。自助・共助・公助の役割把握と自主防災意識の高揚を必要としている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私が住んでいた宮城野区蒲生地区は災害危険区域に指定され、現在、人は住んでいない。震災時、私は蒲生町町内会で会長を務めていた。地区崩壊の体験と、今、思うことを話したい。</p> <p>2. 津波の来襲</p> <p>押し寄せた波は 4 メートルの防潮堤をはい上がって膨張し、12 メートルの壁となって砂浜の松林をなぎ倒して陸上した。沿岸一帯は海原になった。</p> <p>地震発生から津波来襲まで時間はあった。その間、私は緊急時連絡用名簿を携え避難所に向かっていた。道すがら、逃げようとしなかったお年寄りを同行させたが、避難所到着直後にお年寄りは自宅に戻ってしまった。田舎の町内会をめぐる諸問題の根底には高齢者問題が関係している。</p> <p>私は津波メカニズムに明るいほうではないが、巨大津波がもうすぐ来ると思っていた。釣り好きの先輩から、予報で波 1 メートルなら、倍の高さの波が 4～5 回は来る。ときに 3 倍に達することもあるから、その腹づもりをしておくと教え込まれていた。「予想される津波の高さは 3 メートル」なら、9～12 メートルの波が来ると瞬時に思った。だが、家に戻ったり、海を見に行く人はおり、十中八九、亡くなってしまう。</p> <p>私は小学校の 3 階屋上に上がって津波を逃れた。2 階まで浸水し、校庭や体育館にいた人は津波にさらわれた。備蓄品は水をかぶり避難所は機能を停止、私たちは孤立した。救援のヘリコプターが来たが、収容人数は限られる。私は学校の無線を使ってバス輸送を依頼した。「ムダだ」という周囲の声もあったが、バス会社の対応は早かった。とにかく状況を知らせることが大事だ。</p> <p>3. 住み慣れた地を離れて</p> <p>地区の生存者は、ばらばらになって避難所を転々と移動した。一部を除き避難所の職員は名簿を見せてくれず、町内会員の安否確認は進まなかった。あちこちの避難所を訪ね、体育館の片隅で孤立している地区住民の存在を知</p>

った。顔見知りと生活できるよう、複数の避難所を1カ所に集約させるべきだと、私は市に要請した。集約するのに2カ月間ほどの時間を要した。

やがて仮設や見なし仮設住宅への入居が始まったが、2年間で条件とする暮らしを嫌い、民間物件と契約する動きもでた。仮設は応急対策とはいえ、そもそも着の身着のまま逃げた高齢者が、2年で新たに住環境を整えられるのか。経済的にも心理的にも無理があると思う。

4. いくつかの教訓

車を海に向かわせるなど異常行動が散見された。地元民なら知っている危険区を、赴任してきた人は知らない。有効な避難路と行動を見いだせなかった「大川小学校の悲劇」と共通するリスク要因だと思う。

避難所は「何をしてもムダ」という沈滞感に覆われていた。だが、計画策定や事前訓練を「ムダ」と捉えることはできまい。訓練なしでは身体も頭脳も動かない。ただ、反省点はある。訓練の主会場は体育館だった。多くの住民にとって、体育館へ行くことが避難だった。適切な安全場所を選ぶという視点が養われていなかったのだ。備蓄品の保管管理も同様である。

津波に限らず、自然災害には状況に応じた対応が求められる。

5. 住民のための防災活動

私は17年間、町内会の仕事に携わった。人がいなくなった蒲生にもう町内会はない。役に立つことができたのかと自問している。会長という職は、前任者の仕事を引き継ぎ、あとに続く人を育てバトンタッチする中継ぎ役だと思う。会長はすべてをやろうとせず、分業化するのが望ましい。

自主防災会にせよ消防協力会にせよ、住民に対し有効な活動ができているか見直す必要があると私は思っている。蒲生地区では震災直後、行政や関係機関、地域諸団体とともに中野小学校区災害対策委員会を立ち上げた。復興が焦点になると名称を中野小学校区復興委員会に変え、必要な対応を検討した。時間の経過とともに地域が必要とするニーズは変化する。



開催地より

災害時、避難時、避難所生活など自治会（会長）としてどう動いたのか、どのように大変だったのか知ることができた。自治会などでの集会や防災訓練で講話内容を知らせ、有効な訓練をしてもらいたいと思っている。

災害伝承 10 年プロジェクト

開催地名：北海道恵庭市	
開催日時	平成 28 年 10 月 27 日（木） 18：30～20：00
開催場所	恵庭市民会館
語り部	島田 福男（宮城県仙台市）
参加者	公務員、会社員、町内会・自治会など 約 120 名
開催経緯	過去に大地震を経験したことがなく平坦な内陸部であることから、市民の防災意識が低く、自主防災組織率も全国平均を下回っている。地域で防災活動を行なう人材育成し地域防災力の向上を図るため、防災研修会を定期的に開催しているが、参加者の間で防災（自助・共助）に対する意識に差がある。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>今年度、仙台市内の仮設住宅はゼロになった。復興が進むと同時に、震災経験を生かして、より有効な自主防災の態勢を築こうと地域も動いている。</p> <p>2. 本格的な自主防災活動の始動と震災対応</p> <p>青葉区川平地区は仙台市の北西部に位置する。昭和 40 年代に山を削り高台に造成された大規模団地帯である。人口は 1 万人弱で、5 つの町内会がある。昭和 56 年、私は川平団地町内会で防災部長を務めており、自主防災組織をつくったが、役員の任期切れで活動から遠ざかっていた。平成 12 年に会長になり、停滞していた自主防災組織を見直そうと、川平学区連合町内会に自主防災組織をつくることにした。19 年 2 月には連合町内会の「自主防災合同計画」を策定した。</p> <p>町内会の模範となるよう、私の川平団地町内会では、毎月 1 日を町内会防災の日と定め、「育てよう防災意識 川平団地・防災の日」というのぼり旗を 150 本つくって、班長らの家に掲げてもらった。共通のビブス（半袖ユニフォーム）をつくって巡回時などに着用した。トランシーバーのほか、1 セット 1,500 万円の防災資機材 2 セットも購入した。震災後、1 セット追加して 3 カ所の倉庫に備蓄している。青葉区の災害対応計画策定モデル事業に選定され、22 年 4 月には地域 50 団体と連携した川平地区防災対策連絡協議会が結成された。「応急対策部」「避難所要援護者対策部」「地域対策部」の 3 つの専門部会を設け、防災教室・研修会、HUG（避難所運営ゲーム）、DIG（災害図上訓練）、クロスロードの 3 つの災害ゲームを実施したほか、ワークショップを催して住民の意見を活動に反映させた。災害対応計画も固まり、23 年 4 月総会承認を待っていたところに、3 月の大震災である。</p> <p>3. 避難所の開設・運営</p> <p>地震発生で、コミュニティ・センターに地区災害対策本部を設置して、安否確認、水の確保などに動いたが、当初、小学校は「指定避難所」から除外された。被害の大きい沿岸部に注力したいという行政の判断だそう。しか</p>

し、マスコミによって小学校が指定避難所であると報じられ、避難者が集まってきた。学校と協議して自主判断で避難所を開設・運営することにした。町内会で発電機、投光器、燃料を持ち寄り照明を確保し、「避難者カード」もつくった。ガソリンスタンドやスーパーなど複数の商業店舗に優先的な協力を仰ぎ理解を得た。14日に電気が復旧すると、多くの避難者は自宅に帰った。小学校は18日の卒業式を控えていたので16日に閉所した。

4. 震災対応を経て

給水車が来ないなど、行政とのやりとりは最後まで混乱したが、協議会で「自分たちの地域は自分たちで守る」という意識を共有できていたことが何よりよかったと思う。連合町内会は小学校区単位だが、震災後、中学校とも協議して若い力が新たな戦力に加わることになった。諸問題が見つかったが、なかでもトイレをめぐる問題は難儀した。学校のトイレは和式、用意していた簡易トイレは和式4基と洋式1基で、衛生上からも使用面からも大変な思いをした。市に学校トイレの洋式化を要請している。

検討すべき項目は多くある。市は防災計画を見直し、地域もまた地域事情を反映させた主体的な「地域版避難所運営マニュアル」を策定した。自助、共助に力点を置き、市民力、地域力を生かそうという地域防災の運営マニュアルである。27年10月時点で、193の指定避難所のうち策定を終えたのが184で達成率95.3パーセント。まだ策定できていない避難所にはバックアップしていきたい。マニュアルは適宜更新される。去年9月の東北豪雨を踏まえ、地域団体、学校、行政の三者が大雨・暴風対策を検討している。地域を知っているのは地元住民だ。自分たちの地域は自分たちで守りたい。



開催地より

現在、避難所運営マニュアルの策定に向けて検討中である。策定にあたり、避難所は地域の方々が運営主体であること、事前に避難所ごとに運営方法など検討する場を設けるなど、講演の内容を参考に検討していきたい。また、あらためて感じた自助・共助の大切さをしっかり市民へ伝えていきたい。

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：東京都昭島市	
開催日時	平成 28 年 10 月 28 日（金） 10：00～11：30
開催場所	昭島市役所 1 階市民ホール
語り部	佐々木 守（岩手県釜石市）
参加者	市職員 計 55 名
開催経緯	本市は、大規模災害の経験がなく、防災課職員以外の危機管理意識が低く、災害発生時に市の責務が十分に果たせるのか不安である。また、防災意識高揚のため実働訓練である総合防災訓練や災害時図上訓練も行なっているが、効果として十分であると言い切れない。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>大震災の当時、私は釜石市の防災担当だった。多くの死者が出た。行政マン失格である。自分のような失格者を出したくない。恥を忍んで、報告する。</p> <p>2. 変わらない住民意識と防災教育の狙い</p> <p>釜石市は津波の常襲地帯である。警報や注意報を、住民はオオカミ少年の声のように聞いていた。いつかは津波が来ると思っている、今回も大丈夫という意識が醸成されていた。意識を変えられなかった行政の責任は大きい。「世界一の湾口防波堤も防潮堤もある」ことが、大人たちの意識変化を阻害していた。ならば子供たちを教育していこう、子を持つ大人になったときには、防災文化が根付いている、それが「釜石の防災教育」の眼目である。</p> <p>3. 初動で伝えるべきは何か</p> <p>当日、地震が発生し、3メートルの津波警報と高台への避難を防災行政無線でアナウンスした。1年前のチリ地震と同じ予想高である。住民は事態を軽視したと思う。防潮堤は4メートル以上ある。気象庁は津波の予想高を複数回上方修正した。当初のアナウンスは批判されることになった。早々に高さ予想を伝えたことが避難を遅らせたという指摘である。すぐマニュアルを変えた。気象庁でも数値を除外し、避難誘導を重視する表現に変えた。</p> <p>4. 教訓</p> <p>教訓は、命を守る対策を最優先するということに尽きる。生存者対策は命を守ったうえでのことである。まずやるべきは、耐震建造物をつくる、防火・消火体制の整備など、人が死なない対策の充実だ。</p> <p>5. 私が伝えておきたいこと</p> <p>市の検証委員会は、行政対応を「事前の準備不足」と総括した。本庁舎には自家発電すらなかった。地域防災計画は役に立たなかった。フェイズごとに次々と新たな業務が発生、職員は担当部署に関係なく不眠不休で動いた。想定数を超える遺体の搬送や安置に追われた職員はメンタルを病んだ。</p> <p>「正常化の偏見」が働いていたと思う。ハザードマップは目安にすぎない。</p>

だが、居住地をセーフティゾーンだと思い込んでいた住民がいる。想定を信じない、信じ込ませないことも大事だ。堤防はすべてを守ってくれない。

市町村が単独で生き延びることはできない。ふだんから顔の見えるつき合いが大切になる。なかでも交流のある市町村の存在は心強い。姉妹都市の愛知県東海市は、ニュース映像を見るや、すぐさま職員派遣と毛布の供与に動いた。東京都荒川区は給水車を配車してくれた。内陸隣の遠野市などは後方支援訓練を積み重ねていた。大槌町は町長以下 40 人、陸前高田市も職員が約 50 人死んでいる。県は被災自治体に、死者数などの集計を早々にあげさせようとした。この状況で出せるか、ふざけるかと怒鳴った。

避難所に入らない避難者がいる。高台の家に集落の人が避難していた。支援物資が届かないと申し出があって判明した。発災から 1 カ月後だった。

避難誘導者の死者は被災 3 県で約 250 人。避難誘導に見切りをつけるルールが必要だ。福祉部門の災害時要援護者計画の実効性は乏しいだろう。

自然災害が多い日本は、災害をすぐ忘れ、同じ失敗を繰り返している。「愚者は経験に学び、賢者は歴史を学ぶ」という。経験を歴史にするのは、検証と改善を重ねて、文化にしていこうと思う。検証には正確な記録がある。記録専任担当を置く必要がある。

住民の価値観はそれぞれ違う。公平や平等は非現実だ。しだいに支援慣れした住民のエゴが露骨になった。復興とは自立することだと思う。支援物資や交付金に依存しない地域になることだ。

私は気の利く職員を身近に置いていた。体力と判断力のある者には、病院から避難所へ薬を運ばせた。気の利く者というのは、指示業務だけで手仕舞いせず、現場を観察し、情報を取捨選択して、何が必要なかを判断し、報告できる職員だ。危機管理能力と判断力を養っておきたい。筋書きのないような訓練が実施できればベストだ。



開催地より

職員の意識啓発につながったと思う。高揚した意識が薄れぬうちに、職員向け図上演習を開催し、継続的な意識を持ってもらう。参加した人が講演内容を各課職員へ周知することで、市職員の意識高揚につなげていきたい。

開催地名：群馬県千代田町	
開催日時	平成 28 年 11 月 4 日（金） 13：30～15：00
開催場所	千代田町民プラザ
語り部	菅野 和夫（岩手県宮古市）
参加者	自主防災組織関係者、区長 約 120 名
開催経緯	千代田町は、首都直下地震緊急対策区域指定市区町村に該当しており、町の南側を利根川が流れている。現在、各地区に自主防災組織が立ち上げられてきた。しかし、これまで大きな災害には見舞われていないため、防災訓練は行っているものの、実際に災害が起こった場合に何をすればよいか、具体的な活動が思い描きづらい状態である。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>自然災害はいつどこで発生するかわからない。千代田町ではかつて利根川の氾濫で堤防が決壊した。災害からどのようにして命を守るかという点に重きを置いて話を進めたい。</p> <p>2. 多様な発災現象</p> <p>岩手県宮古市は、擁壁で囲まれた海のまちである。海辺には砂浜もあったが、地盤沈下してしまった。だが、観光客を受け入れる体制も整いつつあり、観光産業に期待がかかっている。</p> <p>発災当日、私は隣町の山田町で仕事をしていた。海岸沿いの国道 45 号は寸断され移動に難渋した。祖父は明治と昭和の三陸沖地震を経験しており、私の母は小さいころから、当時の被災状況を聞かされていた。津波は怖いもの、という認識が私にも刻まれた。</p> <p>東日本大震災は「1000 年に 1 度の大地震」だという。過去の事例は平安期の貞観地震が相当する。今回の大震災の被害の大半は津波によるものだが、生き残っても、仮設生活に耐えられず、命を絶った女性もいた。津波にせよ氾濫にせよ、現場の様子を見に行こうとする人がいる。結果的に津波に巻き込まれてしまう。</p> <p>最初の揺れを上回る地震が発生することがある。熊本地震では本震が修正されたが、3.11 も同様だった。2 日前、震度 5 の揺れがあった。本震はその後にやって来た。当初、マグニチュードは 8.8 と発表されたが 9 に修正されている。また、津波は、波の跳ね上がりが増え、波高や動きが変化する。安全な場所だと思った所で津波にさらわれるという事態も起きた。</p> <p>岩手県雫石町を襲った台風 10 号の土砂災害は「山津波」と呼ばれる現象である。津波は海だけのものではない。小川であっても、雨量が増せば、堤防や橋脚を壊す。</p> <p>3. 命を守る</p>

一律的なハード整備が進めば、三陸沿岸は刑務所のような塀がそびえ立つことになる。それで命が守れるのだろうか。命を守るにはどのような道があるのか。「釜石の奇跡」と「釜石の悲劇」を取り上げたい。「奇跡」は、鵜住居地区の学校の生徒たちが率先避難した行動である。状況に応じて最善を尽くし、山奥へと避難路を求めた。一方で、同地区では防災センターに逃げ込み、施設にとどまった住民が被災した悲劇も生じている。センターは本来、避難する場所として指定されてはいない。防災マップはあくまでシミュレーションである。想定どおり事が進むとは限らない。

4. 災害対応

上村町内会自主防災会を設立し、私が会長に就いた平成 19 年、政府の予測では宮城県沖地震の発生確率は 30 年以内 99%、10 年以内 60%程度だった。平成 23 年 1 月になると、10 年以内 70%程度に高まった。危機感を覚えて、同年 2 月 23 日に続き、3 月 11 日の夜 7 時にも防災会議を予定していた。その当日、地震が発生した。

町内会の役員らは 3 日間、必要な物資を持ち出しながら急場をしのいだ。最も欲しかったのはペーパー類である。避難所に支援が届いたのは 3 日目である。防災倉庫の管理も含め、避難所の役割というものを事前に定めておく必要がある。災害下では動ける人数も限られる。物資の仕分けには苦勞した。

防災とは、過去の出来事を積み上げて、実践に繋げていくものだと思う。先人の教えを踏まえ、次に備えたい。内陸部だろうが沿岸域だろうが、自然災害の備えという点では共通である。



開催地より

メディアで東日本大震災の話を知ったり、見たりしていたはずだが、記憶が薄れてきていることを感じた。基準となる想定はされているが、それはあくまで想定なのでとらわれてはいけないと思った。町民が防災に関して何を考えているのかを考察し、防災対策に役立てていきたい。

開催地名：香川県さぬき市	
開催日時	平成 28 年 11 月 5 日（土） 14：00～15：30
開催場所	さぬき市志度音楽ホール
語り部	星 初枝（宮城県七ヶ浜町）
参加者	自主防災組織関係者、自治会関係者、民生委員、婦人会関係者、消防団員、その他 約 300 名
開催経緯	さぬき市は南海トラフ巨大地震による被害想定において、地震の揺れや津波により大きな被害が発生することが予想されている。特に、津波災害については、香川県内で最も高い津波水位が予想されており、その人的被害も大きいものとなっている。「自助」及び「公助」による防災・減災意識の高揚に努めているが、自主防災組織の未結成地域や、結成済であるが人口の減少や高齢化により活動が実施できていない組織も多くあることから、自主防災活動の活性化をどう促すかが課題となっている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>塩竈市、多賀城市、仙台市に隣接する七ヶ浜町は、松島湾の南、太平洋に突き出た半島状の地にあり、三方を海に囲まれた小さな町である。かつての街並みは失われた。これだけは心しておくべきという点をお伝えしたい。</p> <p>2. 被災当日</p> <p>地震が発生し、私はイベント会場から車に乗り自宅に戻った。信号は停電していた。自宅は耐震診断をして、リフォームを終えたばかりだった。その後、高台にある避難所に行ったが、炊き出しや運営に必要な食料・物資を別の場所から持ってこようと下に降りた。津波に飲まれ、立ち泳ぎをしたが、沈んでしまった。洗濯機の中で回されたように感じ、死を意識した。記憶がなくなった。気がつくとき頭だけ瓦れきの上に出していた。その場から離れようと踏ん張って、柱の釘を踏んだ。流れ着いたのは、先の高台の学校下にある公園である。土手の上から数人が声をかけてくれた。九死に一生を得た。所持品は水中で捨ててしまった。下に戻って生きたのは私だけだった。私は、どんな状態に遭っても諦めないことの重要性を体験した。</p> <p>町中が波に飲まれ、アパートの屋上で凍え死んだ人もいる。仙台港のコンビナート火災のあおりで被災した人もいた。避難所は満杯になり、足の悪い高齢者は狭い場所に難渋していた。高齢者や障害者には、通路側にスペースを用意すべきだろう。私が入院した病院も混乱しており、当初は釘を踏んだことが伝わっていなかった。最初の入院から1か月半ほど経過して足を手術したが、いまだに痛みがある。</p> <p>後日、町内会の役員から避難所運営や生活の様子を聞いた。高齢者には座布団が重宝がられたという。ゴミ袋や紙袋は防寒着にも使える。飴を常備し</p>

ておけば空腹は一時でも軽減される。肉や魚などから栄養を取って健康寿命を管理していきたい。外に出ることも大事だ。

自衛隊、海外の救援隊、医療チーム、ボランティアの方々など、私たちは多くの人に恵まれた。

3. 心身の変調

大きな環境変化はストレスをきたす。知り合いも精神的にまいっていたし、私も変調をきたした。当初、プレハブを借りて住んだが、トイレが外にあり、転んでしまうこともあった。仮設に入居したが、水に対する怖さはトラウマのように刻まれてしまった。入浴できず、ひとりでプールに行って水に慣れる訓練を続けた。もともと身体に病気などの困難を抱えている人は、仮設生活で、症状を悪化させてしまう傾向が強い。

4. 生きる思い

普通の生活がこれほど大事だったのかと思う。ケンカできる相手がいればいい。言い合える相手がいるのだ。私は海が恨めしいが、磯のにおいが身についている人間である。だから海が恋しくなって、深夜に海辺にたたずむことがある。

今は外国だろうが国内のどこだろうが、災害に遭うリスクはある。先般、宮城県と岩手県では台風被害が発生した。全国の皆さんの支援には感謝している。人間というのは、嫌なことから目を背けたがる。他所のことはどこか他人事である。次は自分が被災するという覚悟で危機感を高めないと、防災は実を結ばない。生き残った私は、命を全うしたいと思っている。

「逃げろ、戻るな、諦めるな」である。心の準備と物の準備を怠りなくお願いしたい。



開催地より

講演会に参加した人には、自分たちの自主防災組織や自治会などそれぞれの組織に持ち帰ってもらい、緊急時にも自らの身を守る行動をとることができるよう、防災・減災意識の高揚に努めてもらいたいと思う。また、参加できなかった人についても、講話いただいた内容に触れながら、自助及び共助の重要性について啓発に努めていきたいと思う。

開催地名：愛知県蟹江町	
開催日時	平成 28 年 11 月 12 日（土） 10：00～11：30
開催場所	蟹江中央公民館分館
語り部	島田 福男（宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織関係者、防災リーダー、町民 約 125 名
開催経緯	蟹江町では、南海トラフ巨大地震による被害が想定されており、浸水・津波避難ハザードマップ、津波等避難計画を平成 28 年度に策定した。伊勢湾台風以降、堤防の決壊による浸水被害もなく、経験者の減少や高齢化から自主防災会の活動も停滞している。特に、低年齢層や転入者等への浸水被害に対する防災意識や避難行動の必要性の認識が課題となっている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>青葉区川平地区は内陸部に位置する。もともと山地であり、標高は約 100 メートルである。川平学区連合町内会は 5 つの町内会で組織されており、人口は 10,000 人いる。住民は昭和 40～50 年代に引っ越ししてきた人たちで、今日、高齢化が顕著になっている。坂道が多いので車は必須だ。同地区の自主防災をお伝えする。</p> <p>2. 地震による地割れと地滑り</p> <p>住宅団地地区では、地区の災害対策本部をつくることになっている川平コミュニティ・センターの地盤が地割れし、建物の外壁にはひびが入った。室内の蛍光灯のカバーが全て下に落ちたり、ステージのスピーカーのボルトがゆるみ落下した。</p> <p>団地の地盤は固いという評価があつて、青葉区の診断でも被害はほとんどないだろうと言われていたが、山中に沢が幾つか通っており、沢に沿って 75 センチぐらい沈没した。全壊した住宅も出た。私の住む地も地割れを起こし、十何件の住宅が全壊している。</p> <p>特にひどかったのは瓦屋根の被害である。瓦屋根の住宅のうち、80～90% が被害を受け、散らばった。こうなると、歩くことも不便な状態になってしまう。ビルの窓ガラス、サッシ窓も道路に落ちてきた。ただ、人的被害はなかった。</p> <p>3. 自主防組織の設立</p> <p>地区には 5 つの町内会がある。昭和 56 年、私は川平団地町内会で防災部長を務めており、自主防災組織をつくったが、平成 12 年に会長になり、停滞していた自主防災組織を見直そうと、川平学区連合町内会に自主防災組織をつくることにした。平成 19 年 2 月には連合町内会の「自主防災合同計画」を策定した。自主防災組織の設立の背景には、昭和 53 年の宮城県沖地震を見据えた、市の「防災都市宣言」の存在がある。ブロック塀被害を減らすた</p>

め、地区に生け垣を増やそうという試みも含まれており、町内会に自主防災活動を促した経緯がある。平成 22 年 4 月現在、仙台市の自主防災組織の結成率は 95.3%である。

ただ、すべてが活発な訳ではない。立て直しに動いた私は、川平団地町内会として、毎月 1 日を町内会防災の日と定め、「育てよう防災意識 川平団地・防災の日」というのぼり旗を 150 本つくって、班長らの家に掲げてもらった。共通のビブスもつくって巡回時などに着用した。トランシーバー 22 機のほか、防災資機材 2 セットも購入した。震災後、1 セット追加し 3 カ所の倉庫に備蓄している。青葉区の災害対応計画策定モデル事業に選定され、平成 22 年 4 月には地域 50 団体と連携した川平地区防災対策連絡協議会が結成された。住民の意見を活動に反映させ、災害対応計画も固まり、平成 23 年 4 月の総会承認を待っていたが、大震災に見舞われた。

4. 避難所の開設・運営

地震発生で、災害対策本部を設置した。コミュニティ・センターは先述したとおり、室内がひび割れを起こし、物が散乱している状態である。小学校の指定避難所の立ち上げにも加わった。

5. 震災対応を経て

行政との連絡は混乱したが、協議会で「自分たちの地域は自分たちで守る」ことを話し合っていたのは良かったと思う。ただトイレには難儀した。

検討すべきことが多岐に及ぶ。市は防災計画を見直し、地域もまた地域事情を反映させた主体的な「地域版避難所運営マニュアル」を策定した。大雨、台風、土砂など地域の危険を知っているのは地元民である。



開催地より

自主防災会の防災訓練等がより実践的なものになるよう支援・参画していきたい。また、行政としても住民への働きかけとして、地域への出前講座を通して防災・減災の普及啓発を行いたい。さらには、講演内容にもあったソフト面・ハード面の強化・充実を図る必要があると切に感じた。

開催地名：新潟県十日町市	
開催日時	平成 28 年 11 月 12 日（土） 10：00～11：30
開催場所	十日町情報館
語り部	菅野 澄枝（宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織関係者、消防署職員、警察署職員、女性防災クラブ関係者、NPOぼうさい関係者、青年会議所関係者、その他 約 74 名
開催経緯	十日町市は平成 16 年の新潟県中越地震に見舞われ甚大な被害を受け、その後、自主防災組織が設立された。組織率は 98.8%だが、発災から約 10 年が経過し、自主防災訓練のマンネリ化に伴う活動の停滞や各組織における防災に対する意識の格差が生じ、震災の風化が懸念されている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>大震災時、私は仙台市宮城野区岩切に住んでいた。震災の前年、PTA会長だった私は、市と区から依頼を受け、仙台市宮城野区総合防災訓練に向け、「女性たちの防災宣言」を策定することになった。震災を経験したあと、防災知識や実践力を高めようと、町内会連合会の推薦を受け、仙台市地域防災リーダー（SBL）になった。「女性たちの防災宣言」も新たな文章にした。地域防災の活動を紹介したい。</p> <p>2. 女性たちの防災宣言と仙台市地域防災リーダー</p> <p>岩切地区は小さなまちだ。太平洋から 10 キロほど内陸にあり、震災では大きな揺れで瓦屋根が壊れた。ブルーシートで屋根に応急処置をかぶせたことから、ネットではブルーシート・タウンなどと表現された。</p> <p>地区には七北田川が流れ、太平洋に注ぐ。9.11 の台風被害では、未明に避難所が設けられ、私は避難解除が出されるまで、避難所で住民と運営状況を見守った。</p> <p>地区に津波は来なかったが、避難者は多かった。震災の 9 カ月前、防災訓練をするうえで女性の視点を反映させた「女性たちの防災宣言」づくりを行政から求められ、女性たちと話し合っ て策定したが、救助活動や避難所運営には、一定の実践力があることを痛感した。気分だけでは防災は築けない。SBL の認定のほか、関連する講習会や大学や歴史家などとも交流を深め、勉強する機会を増やした。そのうえで、力強くなった「女性たちの防災宣言」をつくった。仙台で開催された国連防災世界会議でも紹介された。</p> <p>現在、地区には 40 代の女性 4 人と 60 代の男性 1 人の SBL がいる。SBL は、自主防災組織と協力し、地域の自主防災活動を推進する自主防災組織の裏方的役割を担っている。地区に計 5 名の SBL がいるのが理想だと思う。私は勉強したことを地区に還元しようと、防災講座を開催するなどして、住民に耳を傾けてもらっている。自主防災組織の主体は住民である。活動を</p>

フォローするのが私たちSBLである。消防のような実働部隊ではない。避難所ではトラブルもある。そういった場合は割って入ることもある。

3. 顔の見える関係づくり

自主防災組織を築くうえで、平時、顔の見える関係づくりが大切だ。ふつうの母親たち、消防、警察など、多くの住民が集える場所が必要だと思う。

4. 未来を築く子供たち

市は1週間の備蓄を推奨している。とりあえず水分だけは用意しておくべきだろう。市には防災マニュアルが用意されているので、基本にのっとり、避難や運営をフォローしている。

町内会では防災知識と活動を理解してもらうため、防災かるたや、じゃんけん大会などを催している。子供たちが防災を学べば、避難所生活で疲れている高齢者への声かけが容易になると思う。身体に障害があったり、高齢者など弱者と呼ばれている人々が、不安に思わないで生きていける社会、生きていけるまちというのを一緒につくっていきたい。大震災を乗り越えて、子供たちは、自分たちのことを自分で守る、大切な人を守るための声かけをする、といったことを習得した。子供たちは立派に育っているとよく評価される。

無理なく長く続けられるよう楽しく活動している。なくしたものにいつまでもすがるのはなく、よりよいまちにしたいと願っている。



開催地より

本講演会の目的は、市民の防災意識の啓発と女性の視点での防災活動の推進であった。今回の講演会を契機に女性の地域の防災活動への積極的な参加を期待したい。防災教育の観点からも、消防署や越後妻有防災ネットワーク協議会、教育委員会等の防災関係組織との連携を深めていきたい。

開催地名：神奈川県松田町	
開催日時	平成 28 年 11 月 12 日（土） 14：00～15：30
開催場所	松田町町民文化センター 展示ホール
語り部	影山 洋二（福島県郡山市）
参加者	町民 55 名
開催経緯	松田町では、平成 27 年度に 6 回の自主防災会長・自主防災リーダー研修会を開催し、今後の研修内容についてアンケート調査したところ、実際に被災された方の切実な話を聞きたいとの要望が多くあった。関東大震災以降大きな地震を経験していない松田町の今後の防災意識向上と減災対策を町民目線で対応していくことが必要である。
内容	<p>1. 町内会、自主防災会はどう動いたか</p> <p>私が郡山市小山田地区のむつみ町内会の会長に就いたのは平成 15 年である。防災に力を入れ、地区自主防災会も立ち上げた。経過と現状などを伝えたい。</p> <p>2. 安全なまちづくりへ</p> <p>自主防災会の設立については、小山田地区に自主防災組織がなく、郡山市から設立を打診された経緯がある。市の講習を利用して、応急手当普及員、心肺蘇生講習、普通救命講習会などに参加させてもらっている。防災士もあり、他の自主防災会との連携も築いている。</p> <p>郡山市は今、セーフコミュニティの認証取得に動いている。私も市の防災・環境安全対策委員会委員長となって、安全な都市づくりに参画している。</p> <p>3. 震災対応</p> <p>3.11 では、大きな揺れが 2 分ぐらい続いた。免震構造の公共庁舎にいたのだが、大きな悲鳴が上がった。冷静に対処しようと、ガソリンを給油して町内を走った。ライフラインは停止し、道路の陥没もあった。地震への知識や情報は、災害時の自分の行動を決めるため事前に得ておくことが重要だ。</p> <p>町内会総務部は 1 年前、安否確認の段取りを定めていた。他の役員 2 名とともに約 2 時間を費やし安否確認を終えた。</p> <p>市内には耐震性貯水槽があり、複数の町内会で合同給水活動をした。給水訓練はしていたが、給水に熱中してしまい、周囲に気が回らなかった反省はある。水を求める列が長蛇になってしまい、交通渋滞の状態になっていたのだ。発災時の対応は多忙を極めた。安否確認、給水、炊き出しが続く。指定避難所では沿岸で被災して孤立した避難者の受入準備が始まった。ヘリコプターで搬送してくるといふ。行政間、行政と地区との情報連携をしっかりと確立しておくべきだと感じた。</p> <p>避難所運営を巡っては職員の不慣れな対応が目についた。避難所生活はス</p>

トレスがたまる。トラブルに発展しかねない。町内会は協力に乗り出した。避難所生活においては、人それぞれの能力をよく把握し、活用することが望ましい。

4. 自助・共助の重要性

町内会は、高齢者らを支援した。恐怖感、身体上の問題などへのフォローが必要だと思った。大きな避難所ではなく、小さな避難所なら、町内会でも対応できそうだと市職員に伝えた。公助では手が届かないのが実態だろう。地区には、食材を提供してくれたり、日用品を提供してくれる協力者もいる。発災下にあっては、自助・共助が問われると考えた。だからこそ、住民の多くが参加する訓練の場が必要である。そして関係性の強い地域にしていきたい。

実は町内会では過去7年間、約230世帯の情報を把握してきた経緯がある。把握率は95%である。個人情報を探ってはこれまでも扱いの問題が指摘されてきた。おそらく平行線であろう。私は震災前から自主防災組織には情報が必要不可欠であるというスタンスである。情報なしにどう安否確認できるのだろう。

もっとも、地域事情によって自主防災会、町内会が行うことは異なるだろう。各人の思いを少しでも地域づくりに反映していく姿勢が大事だと思う。

5. 除染

ようやく最近できるようになったものに、川の除染活動がある。町内会の役員同士で、実際に河川の清掃まで少しずつあゆみを進めるようになったが、放射線量、放射能という問題は、まだまだ福島県の多くの人たちが背負っている。



開催地より

日頃の備えと訓練の積み重ねが重要であると感じた。語り部の話をもとに、災害現場での出来事を想定し、行政対応につなげていきたい。

開催地名：高知県香美市	
開催日時	平成 28 年 11 月 13 日（日） 9：30～11：30
開催場所	保健福祉センター香北
語り部	佐藤 敬一（岩手県山田町）
参加者	自主防災組織 計 113 名
開催経緯	熊本地震を受けて防災に関する意識が高まりつつあるが、当市は内陸部に位置するため、津波による甚大な被害が予想される沿岸部に比べて、住民の災害に対する危機意識が低い状況にある。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>岩手県山田町は宮古市の南に隣接する港町である。リアス式海岸にあって小さな湖のような山田湾には大島と小島が浮かぶ。口湾には高さ 8.35 メートルの防潮堤が整備されていた。私は宮古市で消防担当職を務めていた。退職 2 年目に経験した山田町の震災を伝える。</p> <p>2. 孤島になった船越半島</p> <p>私の住まいは、昭和 8 年の三陸津波を機に山を削ってつくった高台にあり、海岸までは 700 メートルである。当日の地震発生で、船を沖に出ようと港に向かったが、知り合いの漁師と話し、間に合わないと判断した。すでに沖に出ていた船は、湾の底が見えそうなほどの引き潮に乗って沖に出た。地震直後の引き潮は津波の到来を意味する。第 1 波の上げ潮では船が何度も陸側に押し戻されながらも沖へ逃れた。やがて防潮堤を越える巨大津波が来た。私は坂地の墓地を駆け上がり、女子中学生と共に山に逃れた。山頂には寺の住職が管理する元旅館がある。多くの子供とお年寄りで館内は満杯になり、2カ所のトイレでは足りなくなった。地区には 540 軒ぐらいの住宅があったが、家屋やハイブリッドカーから発火した火が広がっていた。</p> <p>2 日目、井戸水を確保し、石油ストーブや薪ストーブと燃料を持ち寄った。スコップで穴を掘り、ビニールシートを張った簡易トイレをつくって、水の入ったポリタンクを置いた。山田湾と船越湾を隔てていた半島の付け根は、津波で冠水し半島は孤島になっていた。私は長期戦を覚悟した。</p> <p>3 日目、避難者は百十数人にのぼっていた。火が山林に延焼した。私は、若い消防団員のアマチュア無線を借りて町役場に状況を伝えた。山の中腹にある国民宿舎跡地はアスファルト敷きになっている。その場に救援ヘリを要請した。自衛隊のヘリが子供とお年寄りを優先して搬送し始めた。地区を巡回し、亡骸に手を合わせ、生き残った親族には避難を促した。遺体の多くは損傷が激しく、見知っている知人すら判別できなかった。やがて消防団、自主防災会などが生存者の搜索を始め、私も加わった。消防の実務に通じている私は、亡くなった分団長の任務を担うことになった。避難所にはドラム缶</p>

2つを置いて男女の風呂釜を設置した。食や暖を取る工夫など、生きるという点で主婦の力は強いと感じた。自主防災には女性のリーダーが欠かせないと思う。

3. 自主防災組織の役割

自然災害はいつどこで起こるかわからない。被災地でなくとも、後方支援という自主防災のあり様を模索している地域もある。実際問題として、災害時、行政はお手上げ状態に陥ってしまう。国も県も動けない。被災自治体は機能停止である。避難所の開設・運営に担当職員を何人か振り当てても有効に機能するとは限らない。消防本部も屯所も被災して動ける要員も限られる。出動したのは、自衛隊や全国から支援に来た消防や警察の救援隊、災害医療チーム、電力会社、ボランティア、市町村区の自治体などである。

もちろん、自主防災組織の主体は地元住民である。見知った顔が多く、地形をよく知った田舎町の優位性というものがあると思う。船越小学校では地元の用務員が機転を利かせ、生徒を裏山に先導した。生徒は死ななかつたが、避難所となった体育館に避難した住民は被災した。老人ホームでは避難誘導にあっていた職員が入居者ともども犠牲になった。学校の先生などのように赴任者の多くは、地震と津波を知らない。ましてどこが安全でどこが危険か、地元の地理に通じてもない。だからこそ、地元住民の目線で自主防災を築く必要がある。もともと、地元住民にも、行動の限界はある。

高齢者の祖父母らは、明治 29 年、昭和 8 年の三陸津波を知っていた。昭和 30 年のチリ津波を体験している人もいる。経験談や体験をどう生かすかが自主防災の要だと思う。山田町は復興予算の執行率が県内で最も低い。最大の理由は作業できる人員が地元にはいないことである。



開催地より

講演の受講者から、「初期行動の大切さや火災などの二次災害を意識した防災対策に取り組みたい」という声や、「防災組織に女性の登用を」といった声が寄せられた。今後は各組織で、今回の講演で学んだことを活かし、地域住民が一丸となって、目的意識をしっかりと持った活動や訓練を展開していくことが期待できる。

開催地名：東京都国立市	
開催日時	平成 28 年 11 月 14 日（月） 10：00～12：00
開催場所	国立市役所
語り部	佐藤 政信（宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織防災部長、自主防災組織役員等 約 30 名
開催経緯	<p>当市では、主に自治会が母体となって自主防災組織が 26 組織ある。各自主防は、主に地震災害に備え、発災後の対応のための訓練や住民の防災意識啓発を行っている。また、指定避難所には避難所運営マニュアルが作成され、避難所運営の中心的メンバーとして自主防の防災部長が選任されている。</p> <p>当市は、自然災害の少ない地域であり、大地震の経験がないため、災害時がイメージしにくく、自然災害の経験者から話を聞く機会もほとんどない。</p> <p>首都直下地震が発生する危険が高まっているなか、住民の防災意識の高揚を図り、防災力をより向上させることが課題となっている。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>仙台市宮城野区蒲生にあった港町内会では、宮城県沖地震を踏まえ、連合町内会ほか関係団体とともに災害対応体制を築き上げてきた。しかし大震災の被害は大きかった。現実をお伝えしたい。</p> <p>2. 備えてはいたが</p> <p>私が住んでいた地区は、太平洋に面した工場地帯を抱える平地帯である。1,000 世帯・3,000 人が生活していた。宮城県は地震が多く、津波被害も経験している。宮城県沖地震の発生確率が高まっていることも承知しており、もし沖合いで地震が発生すれば、津波がやって来るという認識はあった。しかし大津波だった。仙台平野だから高台はない。指定避難所になった中野小学校も平地に立地する。沖から 7.2 メートルもの津波が押し寄せたら、地区は波に飲まれてしまう。</p> <p>地区では震災前から防災訓練を実施してきたし、防災マニュアルも整備してきた。しかし現実、マニュアルは機能しなかった。津波が内陸へ走るたびに被害が大きくなった。中野小学校の校舎 2 階まで冠水させた。仙台港は火の海となり、陸に延焼し、被害を広げた。一帯の建造物は壊され、備えていた避難所を運営できる事態ではなくなった。中野小の避難者 650 人は校舎屋上で震えた。まだ寒期であった。深夜に自衛隊のヘリ、翌朝には札幌市消防局のヘリが飛来し、ピストン輸送が始まった。新たな避難所は寝るスペースすら確保できないほど混雑していた。生活できないと判断し、小学校の避難所を運営することにした。かつてのコミュニティを配慮し 15 世帯ごとに区切った。床にはダンボールを敷き、支援物資の提供を受けた毛布も配ったが、体育館の床は底冷えした。そんな生活は 1 カ月ほど続いた。火葬する燃料が</p>

なく、土葬したあとに掘り起こし、火葬するという選択する世帯もいた。
安否確認では、個人情報がかからんでくるので、行政は避難者情報を出してくれない。時間を要した。

町内会と連合町内会では、地域の関係団体と連携して、中野小学校区災害対策委員会、のちに中野小学校区復興委員会に改称する組織を結成するなどして、地域ニーズの変化に応じた体制を築いた。避難者の総数は300人。避難所生活も運営も限界が見えていた。3カ月後には仮設住宅が出来はじめる。

3. 環境変化のストレス

仮設生活では挨拶や声かけを大事にした。地域コミュニティが保たれるよう配慮することは、防犯対策にも役だったと思う。住民同士のトラブルが生じたら、町内会の班長がいれば班長が、それ以外でも第三者が間に立つようにした。仮設住宅は夏暑く、冬寒い。身心のストレスは大きいと思う。まして、住居期間の制限など、今後の生活にめどを付けておかなければならないなどのプレッシャーもある。リタイアした人や、収入の少ない人にとって、厳しい選択を迫るものになるだろう。もっとも町会の役員にせよ、事情はそう大差ないかもしれない。

おそらく、厳しい環境下でもやってこられたのは、全国からの支援ではなかったか、と私は感じる。次第に笑顔が増え、精神の安定感を取り戻す人が増えた。こうなると近隣ともいい循環が生まれてくる。

一連の過程では、生活するうえでの苦痛から、避難所や仮設を離れる人もいた。避難生活は確かに苦しい。まずは命を守る「津波てんでんこ」を意識すべきだと私は考えている。



開催地より

実際の経験によるものが多く、こちらで想定しているもののほか必要な配慮や物品などがより明瞭になった。語り部の方の地域は自治会加入率が高く、それぞれの組織でも参考にしようという動きが見られた。自主防災組織の協議会内だけでなく、地域での訓練や打ち合わせなどでフィードバックし、活用できればと考える。当市では、津波による被害想定はないが、市内河川による水害も想定されており、想定区域内の住民への情報伝達や迅速な避難においては訓練等でさらなる習熟が必要であると感じた。

開催地名：東京都国分寺市	
開催日時	平成 28 年 11 月 14 日（月） 10：00～12：00
開催場所	国分寺市立いずみホール
語り部	大和田 哲男（宮城県仙台市）
参加者	市民、消防署員 約 150 名
開催経緯	<p>国分寺市では、平成 25 年度に改定された災害対策基本法で位置付けられた地区防災計画について、全国に先駆けて昭和 58 年から現在まで 11 地区で策定済みである。また策定より年月が経過し、現在の地域防災計画に沿っていない計画においては各地区見直しを図っている。</p> <p>しかし、過去に大きな災害に見舞われたことがなく、実体験に基づいた計画ではないことから、災害時に計画通りに対応できるかどうかが課題である。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>地区の紹介、震災前の取組、震災時の状況、避難生活、震災後の活動の順で話を進める。</p> <p>2. 地区の紹介</p> <p>宮城野区は仙台市の北東に位置し、中野地区には 4 町内会と 1 連合町内会があり、約 1,000 世帯が暮らしていた。連合町内会は震災前、自主防災組織を立ち上げ、避難所運営や救急、通報訓練などを実施し、災害への備えをしていた。</p> <p>3. 自主防災組織の立ち上げ</p> <p>平成 20 年、町内会単独の防災活動には限界があるだろうという判断から、連合町内会に自主防災組織ができた。市では昭和 53 年の宮城沖地震の経験から、地区に自主防災組織を設けることを推し進めていた。消防で勤務していたこともあり、行政からの声かけもあった。私は地区一体となった自主防災体制を構築することにした。当初、訓練は行政主導型だったが、すぐに住民主体型に切り替えた。住民が動けなければ、自主防災はできないという考えがあったからだ。震災前に、各種訓練を実施していたことは大きかった。特に避難所運営では、備蓄倉庫の管理など、運営の備えができていた。さらに有用だったのは、「家族構成調査」の実施である。介助が必要な人、乳幼児を抱える世帯など、どう誘導すればいいのか、要援護者対策に対する一定の心づもりができていた。トイレにも苦慮したが、比較的スムーズに設置できた。とはいえ、避難所での対応では、難しい現実も出てくる。乳幼児に与えるミルクがなかったのだ。小麦粉水を母親たちが考案してくれた。その場に応じた対応力が必要だと思った。</p> <p>4. 大震災で陸の孤島化</p>

大震災はあまりにも大きな災害だった。避難した体育館は、陸の孤島になり、情報が寸断された私たちは孤立してしまった。無線機は混線していた。救援ヘリコプターが飛来し、校舎屋上にいる私たちの存在を認識してくれた。順次、空輸で避難者が搬送され、割り振られた指定避難所に入った。多くは宮城野区の体育館に入った。避難所は4月まで開設され、婦人防火クラブが中心になって、訓練どおりに効率よく食事をつくった。ビニール袋を利用した簡易服をつくるなど、女性たちは置かれた状況下で知恵を絞った。

5. 震災後の活動

震災後、私たち町内会の役員は、中野小学校区災害対策委員会を立ち上げることにした。自衛隊や警察、仙台市らに協力を求め、瓦れき撤去や犠牲者捜索などを実施した。復旧のめどがついた7月には復興委員会と改名して、慰霊祭も実施した。

私たちが防災集団移転促進事業への認可申請したのは、住民の意向があったからだ。「移転する」を希望する人が、その中でも「集団の移転」を希望する声が最も多かったのである。

「きずな」という言葉をよく考える。震災から今日まで、みんなが関係性を維持しながら、助け合ってきた。カラオケ会や芋煮会では常に70名から80名くらいが集まる。コミュニティ誌の発行もしてきた。

集団移転が今年終わり、町内会も解散である。全国に感謝申しあげる。



開催地より

平常時の訓練の重要性を啓発していきたい。アルファー米を水で戻し食べることについて、今後、市の防災学習の中で行っていきたい。体育館以外を避難場所として利用することも想定されるため、体育館と防災倉庫以外の場所についても避難所運営協力者に理解してもらう必要があると思った。

開催地名：富山県射水市	
開催日時	平成 28 年 11 月 15 日（火） 19：00～20：30
開催場所	射水市役所大島分庁舎大会議室
語り部	菅井 茂（宮城県仙台市）
参加者	市職員、防災士 計 30 名
開催経緯	<p>射水市は、日本海の沿岸部に位置し、地震及び津波による被害が想定されている。想定では、地震発生後、数分で津波が到達することから、自主防災組織や住民一人ひとりの活動が重要となり、平時から、各組織において防災訓練等を行っているところである。</p> <p>しかし、災害経験が殆ど無いことから、枠にはまったものとなっているのが現状である。さらに、避難所生活や避難所運営など、災害後に目を向けた活動も少なく、災害後の経過に合わせた活動が求められている。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>東日本大震災において避難所となった南材小学校及び八軒中学校での避難所運営や、その後の防災訓練などについて話をする。南材小学校や八軒中学校は内陸のため津波の被害はなかったが、被害を受けた小学校からの避難者もいた。避難所は地元の人ばかりとは限らない。中には旅行中の人もいる。すべての避難者が「客人」ではなく、避難所にいる「共同体」としての意識を持つことが求められる。</p> <p>2. 避難所の運営</p> <p>東日本大震災発災後、南材小学校には 1,200 名、八軒中学校には 300 名が避難した。それぞれの学校の体育館と教室を利用し避難所として開設した。各町内会の会長や小学校の教員、日本赤十字社の職員、区役所の職員等が委員となり運営委員会を設け、避難所ルールを策定した。</p> <p>予想以上に多くの避難者がおり、12 日には備蓄庫の食糧が底をついた。商店街のスーパーや豆腐屋は食糧を、各家庭からは調味料をそれぞれ持ち寄った。食器が足りなくなったときには、各家庭から持ってくるよう指示した。しかし、マンションの住人は、エレベーターが停電で動かず、移動できない状況が続いた。震災時、マンションの住民は予想外の苦難を強いられる。</p> <p>避難者の中には体調を崩している者もいたが、教室を別にするなどの対策をとり、感染を防いだ。避難所運営については、①食糧は全員分そろわなくても順次配り各々が好きなものを食べたほうが良い、②避難者は客ではなくそれぞれが役割を持つ共同体である、という教訓を伝えたい。</p> <p>3. 防災訓練など地域活動の大切さ</p> <p>南材地区では防災訓練を震災前から実施していた。平成 17 年に仙台市から総合防災訓練の地域として指定されており、1,000 名の参加があった。ま</p>

た中学校での防災訓練を通して教員・生徒との連携が取れていた。平成 22 年には防災訓練に避難所開設訓練を加え活動を行っていた。これらの防災訓練に加えて、昔からの住民と新しい住民が夏祭りなどのイベントを通して顔見知りとなっていたため、発災時、避難所で協力することができた。

災害時には、自分のことは自分で守る自助と、お互いを守る共助が求められる。東日本大震災以降、仙台市では地区ごとに市役所の担当課を決め、普段の訓練から顔見知りとなっているため災害時に助け合うことができるが、公助を当たり前のものと考えてはいけない。

震災前から、仙台市では地域と防災士の結びつきの弱さを危惧して、仙台市地域防災リーダー（SBL）の育成を掲げていた。SBLは町内会からの推薦を受けたあと講習を受け、地域防災での活躍が求められている。今、地域住民による防災活動が求められている。

4. まとめ

防災訓練は毎年実施すべきである。災害時には、近隣の地域住民が避難所の鍵を預かるなど、すぐに避難所開設ができるよう準備しておくことが重要である。避難所運営においては運営委員会で定めたルールの徹底を避難者に求める。また、防災訓練マニュアルでは全員に役割を与え、役割の担当が毎年交代しないよう、役割の専門化を図る。

行政に頼るのではなく、「地域の人地域の人を守る」という意識が大切である。



開催地より

実体験に基づいた話を聞くことで、現在射水市で取り組んでいる防災対策をより実効性のあるものにしたと感じた。今後、避難所開設・運営マニュアルの見直しや防災訓練の内容を検討する際の参考にしたいと思う。

開催地名：京都長岡京市	
開催日時	平成 28 年 11 月 15 日（火） 14：20～15：50
開催場所	長岡第二中学校
語り部	菅野 和夫（岩手県宮古市）
参加者	中学生、地域住民、教員、市職員 約 180 名
開催経緯	<p>長岡京市は南海トラフ地震防災対策推進地域に指定されており、近隣市では、大きな水害も発生しているため、市では世代を問わず住民の方の「自助」「共助」の意識が高まるよう日々啓発活動をしている。しかし、阪神淡路大震災以降大きな災害はなく、特にその時の経験がない子供たちに、災害を経験された語り部の方の体験を伝えてもらい、災害の恐ろしさや災害に対する備えの大切さを感じることで「自助」「共助」の意識を高めたい。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は教員をやっていた。中学生のみなさんと会える今日を楽しみにしていた。京都に住むみなさんにとって、津波はイメージできないかもしれないし、宮古という地もなじみがないかもしれないが、東日本大震災の時、みなさんは小学生である。知ってほしいことは多い。</p> <p>2. 大津波が来襲する本州最東端</p> <p>岩手県宮古市は本州最東端に位置する三陸の地で、沿岸はリアス式海岸である。宮古は風光明媚な地だ。私は海で育ち、海の幸に育てられた。だから海の変化には敏感だ。大震災の前年から私は異常を感覚的にかぎ取っていた。大震災の 2 日前、三陸沖で大きな地震が発生し関西も揺れた。そして東日本沖で巨大地震が起こった。長く伸びる東日本沖の海溝が移動し、その反動で日本列島が揺れた。地震は津波を起し、津波は何度も沿岸に押し寄せた。巨大地震の発生は政府でも予測していた。平成 19 年の 1 月には、30 年以内 99 パーセント、10 年以内 60 パーセント程度。平成 23 年の 1 月には、30 年以内 99 パーセント、10 年以内 70 パーセント程度という予測値が公表されていた。南海トラフ地震の発生確率もこのところ上昇傾向を示している。</p> <p>東日本大震災は「1,000 年に 1 度の大地震」だとされる。平安期の貞観地震が相当する。私たちは過去を知る必要がある。規模こそ異なるが、明治にも昭和初期にも三陸大津波はあった。先人たちは津波が到来した場所、命を守る知恵を後世に残そうと、碑を建てるなど風化しないよう工夫していた。</p> <p>3. 過去に学ぶ大切さ</p> <p>釜石市の中学生が率先避難をして命を守った「釜石の奇跡」は、群馬大学院の片田教授による防災教育の効果である。先生は先人の教えを生かし、防災文化を地域に根付かせようとした。「想定を信じるな」「率先避難者になれ」</p>

	<p>「最善を尽くせ」などの要点は、生徒たちに届いていた。</p> <p>ハザードマップはシミュレーションにすぎない。想定浸水域はあくまで想定である。だから生徒たちは内陸へ内陸へと避難路を求めることができた。ひとりが動けば、周囲もつられるように避難行動に移った。</p> <p>その一方で、「釜石の悲劇」と表現される被災もあった。防災センターに入ったことで安心し、そこから動かず津波被害に遭った住民がいる。身を守るには、時々刻々、変化対応力が必要だ。</p> <p>大きな地震の後には大きな地震が何度もやってくる。津波の速度は速い。地震が発生したら即、避難することが必要だ。</p> <p>宮古には「津波（命） てんでんこ」という先人が残した教訓がある。命を守るために、各人がそれぞればらばらになって即避難しなさい、という教えである。避難誘導に時間を費やしたり、避難したあとに再び家族のことが心配になって下に降りたりしていると、共倒れになるという戒めである。もちろん、肉親や知人を守りたいと思う。それでみんなが亡くなっていいのかと問いかけたい。各人がいち早く避難できれば、家族全員が助かる。</p> <p>大津波の被害を経験した地域だから語れる言葉かもしれない。過去を学んでほしい。地震、津波、台風、火山、自然災害に備えるために、勉強が必要だ。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>本市は津波の被害を受ける想定ではなく、防災担当である私も含め、どうしても津波について考える機会が少ない。しかし、本市で暮らす子供たちも他人事ではなく、将来どこで暮らし、どこで働くかわからないので、津波のリスクがある地域と同様の力を身に着ける必要があると感じた。</p> <p>命を守るための防災教育や震災の体験談を聞く場づくりの重要性を感じたため、今後も積極的に取り組んでいきたい。</p>

開催地名：埼玉県寄居町	
開催日時	平成 28 年 11 月 19 日（土） 13：30～15：00
開催場所	寄居町役場 6 階会議室
語り部	吉田 忠雄（岩手県大船渡市）
参加者	自主防災組織関係者 約 58 名
開催経緯	寄居町は、山林の占める割合が最も多く、土砂災害防止法による土砂災害警戒区域指定地が 115 箇所あり、大雨においては、土砂災害発生が懸念されている。また、関東平野北西縁断層帯内に位置しており、地震の発生時には、震度 7 の揺れが発生し、避難者が多数出ることが想定されている。これまでそのような災害が稀であったことから、災害に対する意識が低く、町民及び自主防災組織の防災・減災意識を高めていくことが課題となっている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>大船渡市赤崎町に生形という地区がある。震災前から防災活動に熱心だった。一生懸命にならざるを得ない下地があった。</p> <p>2. 大船渡市赤崎町の経験</p> <p>昭和 35 年のチリ地震津波では大船渡市で約 60 名が亡くなった。さかのぼれば、明治にも昭和初期にも三陸沖地震津波を経験している。チリ津波を機に、大船渡の湾口には約 7 メートルの防潮堤が二重に建設された。防潮堤があることが「安全」ではない。実際、3.11 の津波は 10 メートル超で、防潮堤は破壊された。</p> <p>大船渡市赤崎町の世帯数は約 1,400、うち被災世帯は 581、犠牲者が 47 名だった。県内で最初に自主防組織がつくられた赤崎町生形だけを見ると犠牲者は 9 名である。大船渡市全域では約 90 名、南に隣接する陸前高田市は 1,500 名超である。生形地区公民館、いわゆる自治会は、人口比で見ても極端に死者数が少なかった。生形では、チリ地震津波があった翌年の昭和 36 年から防災訓練を催してきた。もともと当初の参加率は高くなかった。しかし阪神・淡路大震災を機に本格的な訓練に着手、大震災直前の参加率は 90 パーセント超である。県は平成 16 年に自主防災組織の設立を促した。手を挙げたのが生形で補助金を生かして県内第一号の自主防災組織を結成した。</p> <p>3. 訓練の特徴</p> <p>生形の防災活動は、住民に災害に関心を持ってもらうことを重視した。自主防災組織が立ち上がると、訓練は様変わりした。13 班の各班長は自分のところの班員が何名参加したかを隊長の前に行って宣誓する。参加者は後ろに控えているから嘘の報告はできない。班長間でライバル心が生まれるようになった。真剣度も高まった。参加者がかぶるヘルメットや黄色のリックサックは支給品である。物欲を刺激して参加率向上を図った。</p>

訓練には子供も参加している。通学路での危険箇所を知っている子供の目線は重要だ。また、高齢者や車いすに乗った人も参加している。家族だけの力では高台にある訓練場まで連れてくることは難しい。避難行動をサポートする世帯が定まっている。発災時となれば高台避難が鉄則である。

避難所前の広場が訓練場所だが、ヘリコプターが着陸できる仕様になっている。3.11では、米軍のヘリコプターが支援隊第一号だった。訓練どおり、避難者はバケツリレーで物資をヘリコプターから倉庫に運んだ。道路は寸断されていた。

4. 避難所の対応

私は、マスコミを通じて必要な物資と支援を訴えた。4カ月間、避難所を運営できる物資と支援を受けることができた。

避難所ではルール of 徹底を図った。私が7名のリーダーを選任し、選任されたリーダーは補佐役を選び、役割を持った実働隊が結成された。食糧担当、衛生担当、野外の設備担当、食事担当、トイレ担当などである。リーダー会議を毎日夜に開催し、情報を共有した。避難者を前にした朝礼では、昨晚の情報を伝えた。不安を和らげるよう、私はおもしろおかしく語った。

他の避難所では行政職員が運営したが、当地だけは住民主体である。職員にはサポート役に回ってもらった。「市役所の背広を着た人たちが来ても、よく地域の人にはわからない。館長であれば、何を言っても通じるから館長がまず説明してくれ」という要望もあった。仮設住宅を建設するにしても、行政だけでは限界がある。地域をよく知り、信頼できる人が動くのが望ましい。

5. 教訓

地域のリーダーを育てていかなければならないと思う。記録を残す、訓練を継続する。「意知努一体」、意欲を持って、知識を高め、努力することを心がけたい。



開催地より

避難所運営に関して特に避難所のトイレの問題、避難所内の区割は大変重要であると実感した。今後避難所の整備を検討するにあたり、そのことを重点的に取り組みたい。避難所運営の初動がスムーズに行くように、事前の準備をしっかりしたい。

災害伝承 10 年プロジェクト

開催地名：広島県尾道市	
開催日時	平成 28 年 11 月 19 日（土） 19：00～20：30
開催場所	尾道市市民会館
語り部	山崎 義勝（岩手県釜石市）
参加者	町内会関係者、自主防災組織関係者、防災士、消防団員、消防署員、行政職員 約 100 名
開催経緯	<p>尾道市は、広島県東部に位置し、南海トラフ巨大地震発生時には津波被害が想定されている。しかしながら、津波による被害を受けた歴史はなく、大地震も経験していない。</p> <p>気候も温暖で降水量も年間約 1,100 ミリメートルという地域であり、近年は、風水害においても大きな被害が発生していないため、大災害の対応を経験した職員がいない。防災に対する意識啓発を図りたい。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>今日は、「みんなで築く防災対策」という視点で話を進めたい。東日本大震災発災から本日までの経過、検証などを踏まえて、これからの防災対策について考えていきたい。</p> <p>2. 震災から本日までの経過</p> <p>釜石はリアス式海岸で、東日本大震災の被害のほとんどは津波によるものだった。防潮堤を越えた津波によって、建物の屋上に避難していた人も流された。消防長を務めていた私は、大阪、愛媛、大分の消防員による緊急消防援助隊とともに遺体捜索にあたった。</p> <p>災害対策本部は浸水区域外の行政施設に移した。大きな課題は避難所運営と避難者対応だったが、混乱が続いた。物資配給作業を自衛隊と行ったが限界があったため、今後災害が起きたときのために、宅配業者とは災害支援協定を結んでいる。</p> <p>震災から 5 年半が経過した。復興に向けて、県の公営住宅や市営住宅などが建設されているが、自立再建に向けた動きは見られない。復興には長い時間を要する。</p> <p>3. 東日本大震災の検証</p> <p>東日本大震災を 10 の視点から検証する。①【地形による被害の違い】海が遠いからといって油断はできない。②【孤立地域の災害活動】地元住民が主体となって動く必要がある。③【年齢による被害の違い】家庭や学校にいることの多い乳児～中学生の年齢層は被害が少ない一方で、働く世代の 15 歳～64 歳は避難支援や仕事で避難が遅くなる。65 歳以上では体力的な衰えも見られ本人の避難意識も弱く、被害が大きい。④【命を落とした要因】津波による被害以外にも人為的な要因として、警報・避難訓練の軽視や、海辺</p>

における安否確認、自動車での移動などが挙げられる。⑤【過去の災害との被害状況の違い】阪神淡路大震災などと比べて、行方不明者の数が多い。災害によって被害の違いを認識しておくことが求められる。⑥【事業所ごとの対応の違い】即避難・行動拘束をした事業所は無事に生き延びることができた。⑦【避難所の開設・運営】自分を守って初めて避難所のことを考えることができる。被災時は公共の施設だけでなく、民間施設なども使用した。⑧【釜石の奇跡】防災教育により子供たちの命が守られた。⑨【釜石（鶴住居地区）の悲劇】普段の避難訓練や周知の方法などが曖昧だとかえって被害が拡大する。⑩【過去の教訓】三陸沖では過去に何回か地震津波災害ある。しかしそのときの経験が活かされていない。

4. みんなで築く防災対策

釜石では、東日本大震災を経て、防災対策を行っている。集客施設では避難場所の掲示をしたり、沿岸の事業所は独自の避難場所を確保したり、災害時はタクシーの浸水地域への運転を取りやめたり、自主防災組織にはルールを定めたりと、いかに被害を少なくできるかについて考えている。特に「15分ルール」は、発災から15分以内には他人の避難誘導にあて、その後は自分の命を守るために行動すべしという指針である。

“命があれば明日がある”を合い言葉に、命を守るための活動を続けていきたい。



開催地より

メディアでは知ることができなかった被災地の状況を知ることができた。学校、行政、消防等の責任を問うような報道が多くなされているが、津波の被害を想定しなかったわけではなく、想像を絶する規模の津波が襲ってきたことが原因であり、災害対策の難しさを痛感した。

大規模災害時に命を守る方法は避難することしかないと聞き、自分の命を守るための避難を啓発していくことと、地域で避難し、助け合うための自主防災組織の育成を推進していきたいと思う。

開催地名：滋賀県甲賀市	
開催日時	平成 28 年 11 月 20 日（日） 8：45～9：45
開催場所	甲南 B & G 体育館
語り部	吉田 一弥（福島県いわき市）
参加者	地域住民、消防団員、市職員、その他 約 280 名
開催経緯	自主防災組織設立のため、出前講座や金銭的補助事業等とともに、防災リーダーの養成も進めているものの、設置率は伸び悩んでいる。また、組織はあるものの、共助や自助の必要性が十分認識されていないことから、活動がマンネリ化しているところも多い。平成 25 年台風第 18 号で風水害への危機意識は高まったが、他人事という市民が多く、災害への備えが進んでいない。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は、いわき市消防団第一支団第一分団副分団長を務めている。消防団員の視点から津波災害を報告する。</p> <p>2. 市内は津波で冠水</p> <p>3.11 の大震災では、市内全域が遭遇した地震、沿岸域では津波、そして原発事故に大別される。1 カ月後の 4 月 11 日にはいわき市直下で震度 6 の揺れに見舞われた。</p> <p>地震が発生すれば津波到来である。我々は海沿いで避難を呼びかけ、海沿いには誰もいないという状況をまずつくり上げた。避難の広報には、自宅周辺で避難の呼びかけを済ませた消防団 O B も加わった。揺れは数度、発生した。詰め所で対応を話し合い、海岸線沿いの監視、道路沿いで車両に対する高台避難の呼びかけと誘導を実施することにした。</p> <p>海を監視していると三度目が 6 メートルほどで最も大きかったように見えた。ただ、海面が持ち上がるような波状なので恐怖感はなかったが、引き波の強さには驚いた。街区に海水が流れてくると、川のようになる。引き波で海に引きずれてしまう。引き波による被害が大きかったと見ている。</p> <p>当日は、めったに集まらない団員の姿もあったが、全員が日中の仕事を持っていた。夜間になってまた参集し始めた。情報を集めると、橋が壊れて道が完全に寸断されている、あるいは道路に瓦れきが散乱して車が動けないことがわかった。断水も起こった。当夜、隣の区民館に泊まることにした。床上した世帯では一時避難所として利用している人もいた。看護師、工場作業員も泊まる場となった。それぞれ持ち込める食糧を持ち寄り、急きょ、炊き出しも行なわれた。</p> <p>消防団は、給水のため水の出る場所を探し求めた。消防団員全員で消防車に分乗し、隣の病院で透析用に使っていた 2 リットルサイズのポリタンクをもらい、車両 1 台にタンク 20 個ぐらい積んで、水の出るところに行って水</p>

を確保した。ピストン輸送の給水活動が始まった。区民館は臨時の避難場所に指定された。3日目になると救援物資が到着した。しかし水不足だった。そこで浄水場まで出向き、ピストン輸送することにした。団員の仕事は完全に給水活動である。あらゆる施設がダメージを受けていた。冷凍設備が壊れた工場からは食糧を提供してもらい、他の避難所にも配った。かまぼこの食材はありがたかった。

3. 原発事故と再びの地震

原発事故の情報は、水素爆発が起きたこと以外、情報は入ってこなかった。

1カ月後、電柱が倒れたり、道路が陥没するなど、復旧を要する事象が増えるようになった。4月11日、内陸を震源とする地震が発生し、前日から少しずつ流れ始めた水道が再び断水した。復旧したのは4月25日ぐらいだと記憶している。風呂を求めて遠隔地まで移動した人もいた。

水、食糧、毛布などの物資は、自分たちで確保しておくことが大事だ。

地元には、自主防災組織こそあるが、機能しなくては話にならない。地域団体との連携を模索する必要がある。

4. 備える意味

燃料不足は深刻だった。燃料輸送車のドライバーが福島に入ることを嫌がったり、関東の精油所にタンクローリーを入れようとしても拒否される。近隣のガソリンスタンドは本部からの指令もあって閉鎖された。運送業組合のターミナルのスタンドから分けてもらうこともあった。

いわき市には、物資が届かない。燃料だけの問題ではない。当時は、見放されたという思いが強かった。

自衛隊、消防、医療レスキュー、たくさんの人がいわきに入ってくれた。共助の精神の大切さを痛感している。「備え」で大事になるのは、身の安全確保という自助、どう支え合って行動するかという共助だと思う。



開催地より

市で地域に対して実施している防災出前講座等において、今回のような実体験を交えることで、危機感を伝達できるように工夫をしていきたい。あわせて「自助」「共助」が大切であることがわかった。

--	--

開催地名：福井県高浜町	
開催日時	平成 28 年 11 月 20 日（日） 14：00～15：30
開催場所	高浜町文化会館
語り部	影山 洋二（福島県郡山市）
参加者	自主防災組織役員、消防団員、地域住民など 約 54 名
開催経緯	高浜町には、これまで震災等による大きな被害はなく、概ね 10 年に 1 度の割合で台風による風水害の被害が発生している程度で、町民の防災意識は極めて低い。また、本町の地形から大震災が発生した際は、津波及び地すべり等による被害が必然的であるため、リアル感を伴った危機意識教育が望まれているところであるが、町内には震災等の経験者がいないため、今回の講演会を活用したい。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>内陸部の郡山で町内会、自主防災会活動をしてきた。3.11 を経験して自助、共助の大切さを再認識することができたと思っている。</p> <p>2. 災害後の活動</p> <p>大切だと考えているのは 1 人より 3 人、3 人より 10 人でどうするか、どんなことができるかを考えることだと思う。建物が崩れ、その人を救うには、その場にいる人たちの一刻も早い行動が必要だ。公助を待っている時間はない。</p> <p>私は地震が発生してから、すぐ給油所に向かった。自主防災活動に欠かせないと考えたからだ。運が良かったと思う一方で、お前はそれだけ地域の人のために働けと言われていたようにも感じた</p> <p>当日、隣町の町内会長がやって来て、今後を話し合った。まずは安否確認である。調査票を事前に用意してあったので、あとは動ける実働隊がいればいい。私どもの町内会では、震災の 2 年ぐらい前から福祉部、防災部、総務部で動くことを決めていた。さっそく行動に移し、私たちはハンドマイクを手に、230 軒、一軒一軒に声をかけた。ガスの栓を再起動させる手順や電気ブレーカーの確認もアナウンスした。各家庭で復旧の対処ができるなら、それはひとつの自助につながると思う。</p> <p>2 日目は、給水活動に当たった。耐震性貯水槽のある場所に移動し、住民に支給した。貯水槽は市が備えたもので事前に給水活動を行える取り決めがあった。合同防災訓練でも給水活動はメニューになっている。1 カ所だけで 100 トン分の水が入っている。朝 5 時から役員に来てもらい、6 時にスタートした。寒い日だった。初日の給水活動では、1,000 人以上が並んだと思う。1 人 3 リットルまでを厳守したが、文句を言われることもある。他にも貯水槽はあるが、活動を目にしたたり、伝わると長蛇の列になってしまう。大変な</p>

	<p>思いだった。</p> <p>夜間は大きな容器を用意し、水を貯めた。断水への用心でトイレ用としての使い道もある。生活用水、飲料用、それぞれの使用目的に応じた水の確保を用意にしたいと感じた。ご近所の知恵がもっと必要かもしれない。</p> <p>記録を残そうと巡回時、写真撮影もしたが、若い人を充てるのがよいと思う。子供たちや小学生、中学生も可能だ。</p> <p>3. 自助、共助をいかに高めるか</p> <p>日々の訓練やいろんな付き合いのなかで、情報を集めていくことが、自助、共助の条件づくりになると思う。</p> <p>私たちは世帯の情報を、防災調査票という形で集めた。個人情報がからむので取り扱いは慎重を期している。しかし実際、安全・安心な町内会にするには欠かせない要素であると思う。平成 22 年から実施して、現在、把握率は 95%である。</p> <p>4. 原発事故をめぐって</p> <p>原発がらみの対応では、放射線量を町内で計測したところ、電力会社が発表した数値を上回る結果となった。それも 10 倍もの開きがあるのだ。原発をめぐっては不信感が拭えない。</p> <p>5. 次の備えへ</p> <p>災害下の対応というのは点から面へとシフトしていく傾向になる。地域内での連携が強まるのだ。この経験を伝えていくことが大事だと思っている。震災時の経験が風化しないよう留意したい。</p> <p>運営所の開設・運営の検証も学校と進めていきたい。住民はどう感じていたのか。記録を精査する必要はある。記録する重要性を認識していただきたい。</p> <p>私たちは税金のむだ遣いを望んでいない。地域の被害はかすり傷だったのからこそ、いろいろと活動でき、次への備えを考えられていけるのかもしれない。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>今回の講演会で多くの方々に地域で何を考え、備えるべきものは何かを考えさせることができたものと考慮することから、今後は各地域で得られた知識を実践して頂くように支援して行きたいと考える。</p>

開催地名：岡山県里庄町	
開催日時	平成 28 年 11 月 20 日（日） 10：00～11：30
開催場所	里庄町総合文化ホール
語り部	菅野 祥一郎（岩手県陸前高田市）
参加者	町民 約 125 名
開催経緯	<p>里庄町では、南海トラフ巨大地震による被害が想定されており、県から示された津波浸水想定を基に、町の防災マップを改訂したところである。</p> <p>しかし、県内でも災害が少ない地域であることから、町としても防災意識の向上のため出前講座や訓練の実施などに努めているが、まだ不十分であり防災への取組が活発とは言えず、また、災害に対する町民の意識も非常に低い。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>陸前高田市は三陸を代表する海岸に恵まれている。その海岸線が被害を大きくした。波は海岸に入ると高さを増す。命を守るため考えたいことがある。</p> <p>2. 津波災害の特徴</p> <p>津波災害には3つの特徴がある。①地震と津波を合わせて「震災」というそうだが、亡くなった人は全て津波だった、②遺体は海の遠くに流される、③地球の裏側からやって来る地震津波もある。</p> <p>津波は台風のように毎年来ないので、いつの間にか忘れられてしまう傾向がある。「沼」などが付いた地名は要注意であろう。</p> <p>わかってほしいことも3点ある。①学校が海、川の近くに立地していた、②学校の避難路に橋を渡るコース設定がされていた、③学校が避難所だった。</p> <p>こ3つのキーワードはマニュアルに盛られていた。なぜ橋を塞いで、通行止めに至るのか。通る車が水をかぶって危ないからと私は思っていたが、ある説明者の言葉ではそうではなかった。ちょっと難しい事情があるので省略するが、私は通行止めに納得がいけないのは、橋を通していただければ、助かった命もたくさんあったらと思う。私は、震えながら陸前高田市立気仙小学校に戻った。橋を渡れば5分で安全帯に着く道のりだ。しかし、遠回りを余儀なくされたので、住民のみなさんも被災した。なぜ誰も避難しようとしなかったのか。ひとまずは第1次避難所である学校に集まったということであろう。安心していただけではないと思う。</p> <p>人間は不思議なもので、大勢の中にいれば、妙な安心感に包まれる。ましてやマニュアルどおりの避難場所だったことで、被害が拡大したと私は思う。とはいえ、結果的には市内の第1次避難所の半数以上は浸水した。避難した多くの人は、避難した場所で亡くなっていた。</p>

大震災を思うとき、多くの人が津波に注目するだろう。街区は波の存在を見えなくしてしまう。見えないから学校にとどまり続けたのである。波にのまれたら、とても逃げるところではない。

3. 命を守るには

大きな被害を出した宮城県の学校との違いを問われたことがある。返答の1つは山に避難しろというマニュアルの存在の有無、2つは決断と指示をする者が現場にいたかどうかである。私は、間一髪だったが、現場で指示を出すことができた。決定権のない者が指示をすると、現場は混乱する。私は校長という立場で判断、指示を出すことができた。人の上に立つ者は、まず命を守ることを大事に考えなければならない。

「自分が助からなければ人助けだってできません」という言葉を聞く。この言葉の受けとめ方は、おそらく人それぞれ、微妙に異なってくる。お互いの命を守るという解釈、見捨てていいのか、という解釈もあろう。

私たち教師は命がけで子どもを守らなければならないと思っている。

4. 行動する勇気

子どもたちの生死を分けたのは一体何だったのか。集団には規制がかかる。誰よりも早く逃げる「率先避難」の実践の難しさがある。「釜石の奇跡」は、決して運とか偶然で片づけられるような話ではないと思う。

私は元教師として子供たちをお願いしているのは、命を大事にしてくださいということだ。津波の怖さをわかってもらうことも大事だが、立ち上がるようとする子どもたち、人々の強さもすばらしいと思っている。



開催地より

今回の講演で町内の多くの方に災害への備えや防災対策の必要性や重要性を伝えることができた。今後、自主防災組織の活動を進めるうえで大いに参考になる内容であった。ついては、今回の講演内容を念頭に置き、地域の自主防災活動につなげていきたい。行政としては、避難訓練等のシナリオ作成や災害時の避難行動の参考に生かしていきたいと考えている。

開催地名：和歌山県和歌山市	
開催日時	平成 28 年 11 月 22 日（火） 15：00～16：30
開催場所	和歌山市消防局 多目的ホール
語り部	横山 幸雄（岩手県釜石市）
参加者	和歌山市防火委員会連合会会員 約 73 名
開催経緯	和歌山市では、南海トラフ巨大地震による被害が想定されており、過去には南海地震による津波襲来の経験もあるものの、かなりの年月が経過し津波経験者が減少していることから、低年齢層への災害伝承が停滞している。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は津波という自然災害の語り部、みなさんは防火の専門家である。私の経験談をみなさんの仕事に生かしていただければ幸いです</p> <p>2. 津波の来襲</p> <p>世界一の湾口防波堤が完成してほぼ 1 年、大津波によって防潮堤は破壊された。私は海に近いビルにいたが、水が入り、ガラスが破損、私はそのビルを降りた。身体は動いた。避難所に向かう途中、助けを求める人、じっと動かない人を見た。避難の声掛けをしたように思うが不明瞭である。バイパス道路で私は津波にのまれた、何かに掴まろうとしたが、電柱にぶつかり身体は持っていかれなかった。家屋や車が引き波で持っていかれていた。その光景を眺めていた。手の甲に複数のクギが刺っていた。どうやら私が遭遇したのは第 2 波だったようだ。自宅では妻が生きていた。2 階のテーブル下に身を潜めていたという。私は避難所を目指した。救助ヘリコプターで治療所に運ばれた。私を治療してくれた人は、どうやら見知っていたようだ。ちゃんと勘でわかるのだそうだ。治療所は知人もいた。</p> <p>3. 大震災を経て</p> <p>親類は防災センターで亡くなったことを知った。センターは避難行動の練習会場である。暖もあるので行政は施設を使わせていた。勤務先の事務所ビル内には、何も残っていなかった。緊急に N T T が設置した電話の受話器を握ったが、なかなか声を出せなかった。</p> <p>震災を経験した神戸など遠方の人から多くの援助をいただいた。</p> <p>4. 体験を伝える</p> <p>依頼もあって講演や執筆など体験談を全国に伝える活動をするようになった。被災映像を集め、DVD も制作した。先々では寄付金を募り、社会福祉協議会、赤い羽根や、さらには土石流に襲われた広島にも寄付した。</p> <p>内陸地の中学生や老人クラブなど全国の人々に感心を持っていただいた。全国各地から心の温まるご支援をいただいた。感謝を申しあげたい。</p> <p>5. 「心は流されない」という思い</p>

釜石の防災教育を担った群馬大学院の片田敏孝先生は、高齢者からオオカミ少年のように見られていた。防災教育のなかには、「津波てんでんこ」「想定にとらわれるな」「最善を尽くせ」「率先避難者たれ」「高い所に逃げろ」などのキーワードがある。「釜石の奇跡」は、その実践がもたらしたと思う。

多くの消防職員、団員を失った。その遺族も負傷していた。

私は、友人も失ったが、誰も恨むすべがない。いかなる苦難にあっても、乗り越えられない試練はない。多くを失った人と声をかけあった。

全国から寄せられる応援の声を胸に、「心は流されない」をモットーに、今、観光ボランティアガイドなどの活動をしている。どなたも災害には負けてはならないということを申し上げたいと思う。



開催地より

現地の方・被災した方しか分からない震災直後の状況や、非常にリアルな体験談を聞くことができた。どんな状況になってもあきらめない気持ちと、演題どおり、災害には決して負けない「心は流されない」が伝わってきた。

今回の聴講者は、地域の防火・防災の中心的存在であるので、それぞれが各地域において、まず自分の家から、隣近所へ、そして地域へと広めていただくことにより、今回の講座を活かしていきたい。

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：静岡県裾野市	
開催日時	平成 28 年 11 月 24 日（木） 19：00～21：00
開催場所	裾野市市民文化センター 多目的ホール
語り部	佐藤 敬一（岩手県山田町）
参加者	各区区長・自主防災会、市議会議員、行政職員など 約 200 名
開催経緯	裾野市では、これまで大規模な損害を被ったような災害が非常に少なく、市民の防災に対する危機意識があまり強くないと感じられる。大災害を実際に経験した方からの話を聞くことによって、市民の防災に対する意識を大きいものにできると考えている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は消防職員を退職した後、岩手県消防協会の専任講師を 5 年間務めた。また、岩手県で立ち上げた地域防災サポーターである</p> <p>岩手県山田町、山田湾には高さ 8.35 メートルの防潮堤が整備されていた。山田町の震災をお伝えする。</p> <p>2. 集団で孤立化</p> <p>私の住まいは山田湾の南岸にある船越半島にあった。家は昭和 8 年の三陸津波を機に山を削った高台にあり、海岸までは 700 メートルで、私は船を所有している。代々漁師の家のうまれである。</p> <p>3.11 の地震で、船を沖出しようと港に向かったが、間に合わないと判断した。引き潮は津波の到来を意味する。防潮堤を越える巨大津波が来て、私は坂地の墓地を駆け上がった。山頂の元旅館は、多くの避難者で館内は満杯になった。集落は火災が発生していた。家屋のブレーカーや車が発火元である。</p> <p>2 日目になって、井戸水を確保し、石油ストーブや薪ストーブと燃料を持ち寄った。ビニールシートを張った簡易トイレをつくって、水の入ったポリタンクを置いた。山田湾と船越湾を隔っていた半島の付け根は、津波で冠水し半島は孤島になっていた。</p> <p>3 日目、避難者は百十数人にのぼっていた。火が山林に延焼した。アマチュア無線を借りて町役場に状況を伝えた。山の中腹にある国民宿舎跡地はアスファルト敷きになっている。副町長に救援ヘリを要請した。自衛隊のヘリが数回、子供とお年寄りを優先して輸送し始めた。地区を巡回し、亡骸に手を合わせ、生き残った親族に避難を促した。消防団、自主防災会、自治会が生存者の捜索を始め、私も加わった。遺体の多くは損傷が激しく、見知っている知人すら判別できなかった。消防の実務に通じている私は、亡くなった分団長の任務を担うことになった。避難所にはドラム缶 2 つを置いて男女の風呂釜を設置した。</p>

3. 地域の防災力を高める工夫

食や暖の工夫など、生きるという点で主婦の力は強いと感じた。自主防災には女性のリーダーが欠かせないと思う。自然災害はいつどこで起こるかわからない。被災地でなくとも、後方支援という自主防災のあり様を模索している地域もある。実際問題として、災害時、行政はお手上げ状態に陥ってしまう。国も都道府県も動けない。被災自治体は機能停止である。避難所の開設・運営に担当職員を何人か振り当てていても有効に機能するとは限らない。消防本部も屯所も被災して動ける要員も限られる。出動できたのは、自衛隊や全国から支援に来た消防や警察の救援隊、災害医療チーム、電力会社、ボランティア、市町村区の自治体などである。

もちろん、自主防災の主体は地区の自治会や自主防災会、地元住民であった。見知った顔が多く、地形をよく知った田舎町の優位性というものがあると思う。船越小学校では地元の用務員が機転を利かせ、生徒を裏山に先導した。生徒は死ななかつたが、避難所となった体育館に避難した住民は被災した。老人ホームでは避難誘導にあっていた職員も入居者ともども犠牲になった。学校の先生などのように赴任者の多くは、地震と津波を知らない。ましてどこが安全でどこが危険か、地元の地理に通じてもない。だからこそ、地元住民の目線で自主防災を築く必要があるのだと思う。もっとも、地元住民として、行動の限界はある。

現存する世代の祖先は、明治 29 年、昭和 8 年の三陸津波を知っていた。昭和 30 年のチリ津波を体験している人も生存していよう。経験談や体験をどう生かすかが防災の要だと思う。自分の命が一番大事である。そういうことを考えてほしい。



開催地より

危機迫る状況下での行動は危険が伴うこと、避難行動訓練や避難場所の確認がいかに大事か、改めて災害の脅威と日頃からの備えが必要であることを感じた。実際に被災された方の言葉には重みがあり、その言葉、残していたものを無駄にはしてはいけないと思った。地震発災直後の避難行動や火災、避難生活など大規模災害対策を強化していきたい。

災害伝承 10 年プロジェクト

開催地名：山梨県甲府市	
開催日時	平成 28 年 11 月 27 日（日） 13：45～15：15
開催場所	甲府市総合市民会館
語り部	大内 幸子（宮城県仙台市）
参加者	甲府市防災リーダー 約 271 名
開催経緯	<p>平成 23 年 3 月に発生した東日本大震災や平成 26 年 2 月に発生した記録的な豪雪災害など従前の想定を超える災害が発生している中で、災害時に人的被害の拡大を未然に防ぐためには、より一層の自主防災組織の充実・強化が必要である。</p> <p>甲府市では今後 30 年以内に東海地震が発生する確立が 88 パーセントであり、昭和 54 年には東海地震防災対策強化地域に指定されていることから、地域の防災リーダーを育成するための防災リーダー研修会や自治会等への防災講話、指導等を行うことで災害対応力の強化や防災意識の向上に努めているが、大規模災害等の経験もないことから一般的な防災知識等の習得だけでは、災害発生時には迅速かつ的確に行動することは難しいと思われる。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私の住む仙台市宮城野区福住町では、豪雨災害に備えて、平成 15 年から地域防災活動の取組を行っている。東日本大震災時、その活動がどのように役に立ったかを伝えたい。</p> <p>2. 東日本大震災の状況</p> <p>発災時は、名簿をもとに重要支援者、住民の安否確認を行った。避難所を立ち上げるのも早かった。地域の中学生は、避難先の集会所で子供の面倒を見たり、水汲みに行ったりしてくれた。500 人収容の指定避難所には、1,500～1,600 人が殺到する状態だった。事前に災害時に水道が出る場所を把握していたので、それで炊き出しを行った。</p> <p>避難所は災害時、避難者の生活の場となる。きめ細やかな気遣いが必要な環境では自主防災組織の役員を務めている男性だけでなく、女性のリーダーも必要となる。</p> <p>3. 防災訓練の取組</p> <p>みんなが来てよかったと思える防災訓練にするために、工夫をしている。炊き出し訓練、消化活動、安否確認などの内容で、東北電力やガス局、消防署、警察署、N T T、環境事務所などに、災害時の対応方法などについて話をしてもらっている。大災害が起きたとき、ライフラインが停止するほか、消防や救急、行政、自衛隊の支援もすぐには来ない。地域住民がどうにかするしかない。</p> <p>防災訓練には、災害時に協力協定を結んでいる愛知県西尾市などからも参</p>

加してもらっている。訓練では学校の防災教育と地域防災を合わせて、地域防災力の向上を図っている。中学生にも役割を担ってもらい、トリアージの方法などを医者に習ったり、AEDの操作もしたりする。また、どのような環境で災害が起きるかどうかわからないため、防災訓練は天候にかかわらず必ず行うことにしている。

4. 子供たちへの防災教育

将来、また同じように災害が起きることを考えると、小学生や中学生への防災教育は欠かすことが出来ない。私の住む地域では、小学校と地域が一緒に運動会を行うことで、普段から連携を図っている。

5. 減災につなげるために

夏祭りや雪かきを通して、顔が見える関係になっておくことは、災害時の連携につながる。顔が見える関係を築くことは、防災・減災にもつながっていく。

災害時は、命が一番大切で、命が助かれば他の人も助けることができる。今日の話が少しでも皆さんの防災・減災に役立てばと思う。



開催地より

今回講演していただいた貴重なお話をもとに、自助・共助・公助が一体となり災害に強いまちづくりの推進に努めたい。また、甲府市防災リーダーと自主防災組織の更なる強化に繋がるよう、各自治会での防災研修会や出前講座などにおいて、今回伝承いただいた災害現場等での話しを伝えていきたい。

開催地名：新潟県村上市	
開催日時	平成 28 年 12 月 3 日（土） 10：00～11：30
開催場所	村上市民ふれあいセンター
語り部	齊藤 賢治（岩手県大船渡市）
参加者	自治会役員、防災士 約 170 名
開催経緯	<p>村上市では、昭和 39 年の新潟地震、昭和 42 年の羽越水害以降、約 50 年間大規模な災害が発生していない。東日本大震災から 5 年が経過し、市民の防災に関する関心も薄れつつあるため防災意識の向上を図る必要があると考えている。また、自主防災組織の結成率は上昇しているが、精力的に活動できている組織は少なく、自主防災組織の活性化も課題となっている。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>日本海側で津波・地震が発生すると最大 23 メートル、しかも 1 分以内で陸地に到達するという発表があった。私は恐ろしさを感じた。日本海沿岸の市町村は留意が必要だ。</p> <p>2. 津波から逃れた私の行動</p> <p>大船渡湾の 700 メートルの湾口防潮堤は破壊された。門之浜湾の堤防も壊された。現在、鉄筋入りの堤防が再建されている。</p> <p>人口減という「第二のツナミ」への対応も急がれている。</p> <p>震災では、人間は異常な行動をする。津波の方向に向かった車が犠牲になった。道沿いなど無視して、高台に突き抜ける、あるいは車を乗り捨てて高台に上がれば、助かったかもしれない。まずは逃げて、落ち合う場所を決めておきたい。</p> <p>私が津波から避難できたのは、地震発生から津波到来までわずか 3 分間という北海道奥尻島の事例を記憶していたこと、両親から「大きな地震が来たら、何も持たなくていいから早く逃げろ」と教えられていたことが影響している。</p> <p>私は津波への恐怖心が強い。社屋には避難路を記した案内図を張りだしている。避難案内図への注意をつなぎ止める工夫が必要かもしれない。</p> <p>後日、社員に聞くと私はパニックに陥っていたらしい。私は車で道なき道を 4 時間半かけて、高台にある我が家にたどり着つた。最初にやったことは、蛇口から少量出る貯水槽からの水を風呂桶にためる作業だった。</p> <p>3. 防災対策</p> <p>自宅は家具転倒防止を施しており、食器を壊すこともなかった。津波の前には揺れが起こる。抜かりなく備えてほしい。</p> <p>逃げる際、持ち出すのはお薬手帳と入れ歯だけでいいと思う。プロパンガスだったからすぐ飯を炊けた。アウトドア用に備えた発電機があったので、</p>

洗濯機を回すこともできた。パンを太陽光で発酵させ七輪で焼きあげた。川に行っても水中ポンプで水を汲みあげ、10日ぶりに風呂を沸かし、近所の人にも入浴してもらった。じゃま扱いされていたポリタンクが役だった。装置を動かす知識を学校でも教えたほうがよい。

避難所運営では統括する地域のリーダーがいなくてもめ事が発生する。災害時は、自助、共助が問われる。コミュニケーションの構築こそが、唯一生き長らえられるツールだと思う。

4. 安全と安心

「安全地帯」は安全ではない。沿岸から奥まった立地下にある大船渡の事業所でも作業服を着た遺体が上がった。事業主の安全管理姿勢が問われている。なお、大船渡の学校では「子供たちは守る。迎えに来ないでください」が徹底されている。

なにより、津波警報が発令されても逃げようとしめない意識が大問題である。自宅に戻って犠牲、あるいは危機に瀕した人もいたし、津波が到来してもゆっくりと歩いている人もいた。「正常性バイアス」は怖い。

5. 風化させることなく

遺体安置所は死臭で満ちた。遺体の損傷が激しく、遺族の手術痕を見つけようとしたが確認できなかった。親族とは違う遺体を埋葬したり、遺骨のない墓に葬った世帯もある。

平和な日常が続くと人は過去を忘れる。また、大災害のないような地域では危機意識がない。日本海沿岸域は留意してほしい。



開催地より

日頃の備えの大切さ、地域のつながりの大切さを感じた。また、撮影された動画に津波がそこまできているのに振り返ったり、立ち止まったりして逃げ遅れてしまった人が映っていたが、長い間、津波経験のない当市においても同じ状況が起きる可能性が高いと感じた。今回の講演会は60代の参加者が多かったが、約50年前に起きた地震、豪雨災害についての経験を子供たちや地域の若い人に伝えられるようにしていきたい。

開催地名：愛知県豊橋市	
開催日時	平成 28 年 12 月 3 日（土） 9：00～12：00
開催場所	豊橋市立吉田方中学校
語り部	菅井 茂（宮城県仙台市）
参加者	吉田方校区自治会、吉田方中学校 P T A、吉田方校区住民 約 300 名
開催経緯	<p>豊橋市では、豊橋防災ガイドブックを配布したり、将来の地域防災の主役となる児童、学校及び地域が連携して「災害に強いまちづくり」を考える防災まちづくりモデル校区を選定するなど、継続した防災活動を促している。</p> <p>一方で、大きな災害は近年発生しておらず、また過去の震災が風化されつつあり、自主防災組織の高齢化や、若年層の防災意識低下による活動の停滞が課題となっている。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>東北の語り部として、地震・津波が引き起こした代表例を伝え、その後、子ども町内会の活動をお伝えする。</p> <p>2. 地震・津波がもたらす災害</p> <p>地震が起こると急造された山沿いの住宅地では、土砂崩れが起こる。仙台市の内陸域でも同様の事象が見られた。福島県の須賀川ではダムが決壊した、「山津波」となって下流域を襲った。地盤の弱い沿岸域では液状化が発生し、鉄筋コンクリートの建造物が潰れた。</p> <p>津波被害を防いた「釜石の奇跡」は、防災教育によってもたらされた。率先避難でとにかく逃げた。一端逃げても安心できない。再び逃げた。元の場所に戻るとい判断はなかった。中学生が小学生を励まし生き残った。生徒たちを手本にしたい。</p> <p>3. 町内会の避難所の運営</p> <p>若林地区にある南材地区連合町内会は大震災時、南材小学校と八軒中学校、コミュニティ・センターに避難所を開設・運営した。地元の避難者に加え、沿岸域で孤立していた避難者が加わった。大量の食事をつくり、ルールを明確化し、各人が役割を担った。訓練の成果である。地域の商店は食材を提供してくれた。地域のつながりがあるから、自主防災は成立する。非会員のマンション住民対応も詰めたい。</p> <p>4. 新たな行動計画を策定</p> <p>震災の5カ月後、連合町内会は避難所運営の反省などを踏まえ、新しい南材地区自主防災の行動計画をつくった。各町内会の会長は必ず会員の安否を確認して災害本部に報告する、防犯対策の見直し、学区と避難所の整合性、福祉的避難所としての南材コミュニティ・センターの役割を定めた。</p> <p>自衛隊はお風呂を設営することになった。</p>

5. 防災訓練の進化

一連の経験を経て、地区の総合防災訓練が進化した。広瀬川を横断する長町・利府断層の直下地震も想定に入れた。福祉的避難所のコミュニティ・センターでは、要援護者の避難誘導の訓練が実施されるようになった。一連の訓練には、小中校の生徒たちも加わる。地域あげての自主防災である。

平成 27 年度には、学校と 3 地域の代表、16 団体と関係機関が集まり連絡協議会を結成した。その後、総合防災訓練が実施されている。南材地区会場の訓練参加者は約 900 名だった。給食訓練では、アルファ米と豚汁のセット 1,300 食をつくった。費用は約 9 万円かかった。日赤の婦人科医らが調理にあたったが、仙台市地域防災リーダー（SBL）のトップがまとめ役になった。NTT や市水道局も加わっている。

地域防災の基本的は、自分のことは自分でやれるようになることだ。まずは自助に始まり、共助へとステージが移る。命あつての共助である。共助を高めるには、お互いに顔がわかる関係を築く必要がある。多くの住民がこの関係性が構築できれば、南材地区は住み続けたいまちになる。子供たちは楽しく訓練に参加できるよう、工夫している。賞品付きの催しものなどイベントも盛りだくさんだ。

訓練は午前 12 時半ぐらいに終わる。最後に給食訓練でつくった食事を食べご苦労様、終了となるが、時間のある人が午後の片づけを手伝う。楽しく継続性のある訓練を考え、多くの人にも伝えていきたい。



開催地より

防災訓練を行う必要性と、具体的に実施内容をお話いただいたことから、自分たちが今後どのようなことを行っていくとよいのかを知る機会となり、自分たちのモチベーションにもつながったと考えられる。市としても実際の行動に移せるよう支援していきたい。また、今回は小中学校の校長やPTAも参加していた。語り部の話から得た知識や情報を、今後の学校内の防災訓練に活かしてもらえると考えている。

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：長崎県大村市	
開催日時	平成 28 年 12 月 4 日（日） 9：30～11：30
開催場所	大村市コミュニティセンター
語り部	佐藤 政信（宮城県仙台市）
参加者	地域住民、市職員ほか 約 150 名
開催経緯	大村市では、台風が毎年のように通過し、土砂災害特別警戒区域等は市内全域調査、縦覧が完了し指定される予定である。また、大村一諫早断層帯があり震度 6 強が想定されている。大村湾があり二重性閉鎖性海域であるが、津波浸水想定もされ警戒区域等も今後、指定される予定である。一方で市民の防災意識が低く、過去の大水害について伝承の必要があると考えている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>仙台市宮城野区蒲生には 4 つの町内会があった。防災活動にも熱心だったが、大震災の被害は大きかった。準備不足があったと思う。</p> <p>2. 津波が被害を拡大させた</p> <p>仙台港一帯は平地である。町内会には 1,000 世帯・3,000 人が生活していた。平成 23 年 3 月 11 日、午後 2 時 46 分、震度 6 強、マグニチュード 9.0 の地震が発生した。宮城県は地震が多い。30 年周期の地震を思い描いた。だから、それほどの驚きではなかったという印象がある。もっとも、揺れは約 6 分間も続いた。私の住宅は耐震補強され、家具転倒防止も施されていた。当初の被害は少なく、道路もほとんど被害はなかった。1 時間後に来た津波が大変な犠牲者を出した。津波がなければ数十人の犠牲者で済んだと思う。</p> <p>避難所の中野小学校は平地に立地している。避難マニュアルでは、最初に地区集会所ごとに点呼をとった後、歩いて学校に避難するはずだったが、当初から使いものにならなかった。集合できる状況ではなかった。避難は「てんでんこ」が望ましいと思う。</p> <p>津波は校舎 2 階にも及んだ。当初、上階に上がらず、体育館や校庭にとどまっていた人もいた。仙台港は火災を起こし、陸は延焼、瓦れきだらけで、生きるかどうかという状況に追い込まれた。救助輸送ヘリで運ばれた場所は人であふれていた。翌日、小学校の体育館で避難所を運営する決断をした。町内会ごとにコミュニティを配慮した区分けをした。底冷えする体育館の床で 1 カ月間、ダンボールと毛布でしのいだ。だが最も大切だったのは安否確認だった。町内会では一定の世帯情報は把握していたがすべて流された。個人情報保護から行政は名簿を提供できない。葬儀の毎日となって、火葬場は 10～15 日待ちが続いた。</p> <p>学校は卒業式など行事を控えていた。各小学校にいる避難者を集約して、1 カ所で運営する体制にした。避難者の総数は 300 名。仕出し弁当を残す人</p>

が増えていったので、おにぎりなどに切り替えた。温かい炊きだしはありがたかった。

3. 避難を終えたのち

仮設住宅の生活では挨拶や声かけを大事にした。住民トラブル防止にも役立つ。仮設住宅の生活には難儀が多くストレスも高まる。もしトラブルになったら班長が仲に立つ。季節ごとの催し事も開催した。年金生活者は家屋の再建は容易でない。借地期限を設けた移転地にせよ、借地料など個人の年収がからんでくる。

「津波に流されたほうがよかった」と漏らす人が少なからずいた。しかし全国から支援を受け、前向きに生きることにした人が増え、笑顔で語り合える状態になったと感じる。

4. 自分を守れ

津波への認識が薄く、自宅にとどまった人、一度避難したとしても自宅に戻った人、車を乗り捨てなかった人が多くいた。避難の仕方によっては犠牲者が減っていただろう。避難誘導をした人も犠牲になった。津波が来る 15 分前になったら誘導をやめるなど地域のルールがあっていいと思う。また、家族の間では「てんでんこ」な避難を共有したいと私は思う。自分自身で命を守ることが最も大切だ。

震災後、市は備蓄品を備えた避難タワーを建造した。高齢化が進んでいる。若者のパワーを防災にいかしたい。



開催地より

市内の町内会長にも多数出席いただき、大変参考になったと思う。今後、町内の方々の防災意識が増々向上し、さらに充実した自主防災訓練になることが期待される。

開催地名：大阪府泉大津市	
開催日時	平成 28 年 12 月 8 日（木） 14：00～15：30
開催場所	泉大津市民会館
語り部	佐藤 敬一（岩手県山田町）
参加者	市民、自主防災組織、自治会 約 180 名
開催経緯	<p>泉大津市は、南海トラフ地震防災対策推進地域に指定されている。東日本大震災以降、特に住民の津波災害への関心は高く、市職員による防災出前講座等により、今後起こり得る津波災害などについて、「避難行動」を中心に住民とともに話し合いを行っている。しかし、地域住民の高齢化や防災リーダー不足などから、自主防災組織活動の停滞も目立ち、災害時の避難行動要支援者対策等が喫緊の課題とされる。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は消防職員を退職した後、岩手県消防協会の専任講師を5年間務めた。また、岩手県で立ち上げた地域防災サポーターである。山田町では小規模保育所の社会福祉法人光明福祉会の理事長を務めている。漁船を2隻所有する漁師でもある。岩手県山田町、山田湾には高さ 8.35 メートルの防潮堤が整備されていた。ふるさと山田町の震災をお伝えする。</p> <p>2. 集団で孤立化</p> <p>私の住まいは山田湾の南岸にある船越半島にあった。家は昭和8年の三陸津波を機に山を削った高台にあり、海岸までは 700 メートルほど。実家は代々漁師である。3.11 の地震で、船を沖出しようと港に向かったが、引き波が起こっていた。引き潮は津波の到来を意味する。防潮堤を越える巨大津波が来て、私は坂地を駆け上がった。山頂には元旅館があったが、高齢者や子供たちでいっぱいになった。集落は火災が発生していた。家屋の充電口、ブレーカーや車が発火元である。とにかく寒かった。</p> <p>2日目、井戸水を確保し、石油ストーブや薪ストーブと燃料を持ち寄ったほか、男女別々の簡易トイレをつくった。トイレ用の水が入ったポリタンクを側に置いた。山田湾と船越湾を隔てていた半島の付け根は、津波で冠水し半島は孤島になっていた。</p> <p>3日目、避難者は膨らんでいた。下の集落の火が山林に延焼し、山頂まで煙ようになった。アマチュア無線を借りて町役場に状況を伝えた。山の中腹にある国民宿舎跡地はアスファルト敷きになっている。副町長に救援へりを要請した。自衛隊のへりが数回、子供とお年寄りを優先して輸送し始めた。地区を巡回し、亡骸に手を合わせ、生き残った親族に避難を促した。消防団、自主防災会、自治会が生存者の搜索を始め、私も加わった。遺体の多くは損傷が激しく、見知っている知人すら判別できなかった。消防の実務に通じて</p>

いる私は、亡くなった分団長の任務を担うことになった。避難所にはドラム缶2つを置いて男女の風呂釜を設置した

3. 地域の防災力を高める工夫

食や暖の工夫など、生きるという点で主婦の力は強いと感じた。自主防災には女性のリーダーが欠かせないと思う。自然災害はいつどこで起こるかわからない。被災地でなくとも、後方支援という自主防災のあり様を模索している地域もある。内陸域の自治体は検討いただきたい。

災害時、行政はお手上げ状態になる。国も都道府県も動けないのか、動かないのか、現地対策はできない。被災市町村は被災している。避難所の開設・運営に担当職員を何人か振り当てていても、死亡者が出ていることがあり有効に参集できるとは限らない。消防本部も消防団の詰め所も被災して動ける要員も能力も限られる。力強かったのは、自衛隊や全国から支援に来た消防や警察の救援隊、災害医療チーム、電力会社、ボランティア、市町村区の自治体などである。

自主防災の主体は地区の自治会や自主防災会、地元住民である。見知った顔が多く、地形をよく知った地域の優位性というものがある。小学校では地元の用務員が機転を利かせ、生徒を裏山に先導した。おそらく先生では判断できなかったと思う。老人ホームでは避難誘導にあっていた職員も入居者ともども犠牲になった。学校の先生などのように赴任者の多くは、地震と津波を知らない。だからこそ、地元住民の目線で自主防災を築く必要があるのだと思う。祖先は、明治29年、昭和8年の三陸津波を知っていた。昭和30年のチリ津波なら体験している人もいる。過去をどう生かすかが防災の要だと思う。自分の命を守ることを考えてほしい。



開催地より

本市においても、南海トラフ巨大地震が発生すると津波被害の発生が想定されるが、東日本大震災から月日が経つにつれ、市民の防災意識も少しずつ薄れてきている。継続して津波等の災害に対する防災意識を持ち続けるには、次世代への継承が重要であると感じた。

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：静岡県掛川市大須賀中学校	
開催日時	平成 28 年 12 月 9 日（金） 10：30～12：00
開催場所	大須賀中学校 体育館
語り部	小松 三生（岩手県陸前高田市）
参加者	生徒、教職員、保護者、自治区長など 約 400 名
開催経緯	大須賀中学校では、南海トラフ巨大地震による被害が想定されており、地震防災マニュアル、津波対応マニュアル、広域避難所運営マニュアルを作成し、避難訓練を含む防災学習を計画的に進めている。そのため、災害時には地域の一員として何がやれるのか理解できるようになってきた。しかし、いざというときの行動力や実践力を考えると、災害対応力の強化や防災意識の向上を一層図る必要がある。
内容	<p>1. 陸前高田市における災害の概要</p> <p>地震発生時間は午後 2 時 46 分。震源は牡鹿半島の 130 キロ沖合で、24 キロの深さで、マグニチュード 9.0 という、未経験の世界である。</p> <p>陸前高田の震度は 6 弱、津波到達時間が 3 時 24 分。地域の住民の話では、第 1 波が防潮堤を上がり切らないで、第 2 波がその上に乗っかって防潮堤を越して、まさに津波が押し寄せたという。</p> <p>地震による地盤沈下は、市内で最大で 84 センチである。14 時 50 分に 3 メートルの大津波警報が発表された。宮城県では、同じ時間 14 時 50 分に 6 メートルと発表されている。陸前高田市の広田湾は、実は岩手県と宮城県の県境にある。ところが津波の予想高が岩手と宮城で違うのだ。陸前高田の市民は 3 メートルだと思っていた。結果論としては 15 時 30 分、10 メートルという発表があった。</p> <p>震災前の人口は 2 万 4,246 人。死亡者は 1,757 人が公的な発表である。うち行方不明者が 207 人。現在の人口は、去年 10 月 31 日現在で 1 万 9,916 人である。世帯数は現在、7,600 世帯である。</p> <p>陸前高田市の中心地、高田町の全ての市役所、消防施設が被災し、情報不通に陥った。街区の建造物すべてが被災し、高田松原の松も倒壊、一本だけが生き残っていたが、今はモニュメントになっている。木造建築物は壊滅である。</p> <p>建物がないと、どこを歩いているかわかなくなる。市内は一気に明治、江戸時代に返ってしまった。陸地の一関市から、一関市消防本部が来て無線機等の支援をしてくれた。陸前高田市の職員のうち、3 分の 1 に相当する 111 名が死亡、消防職員は 1 名だけ亡くなった。</p> <p>公助という点では、全国から救援部隊が入った。米軍も来ていたようで、復興の第一歩につながった。</p>

2. 避難所の開設

私は陸前高田市の南側、広田半島で生まれ育った。海によさというものを毎日見ながら生活していた。15年ほど前に仙台沖での地震発生率が出され、30年以内99パーセントだという。私はその数年前、高田町に家を建てていた。その後、防災設備なども整え、一段落した後に大震災が発生した。避難所を開設する。水道は断水していたはずだが、水道管に水が溜まっていて、3日間、水を飲むことができた。

防災会では、名簿情報の提供、炊き出し、遺体回収、危険物回収などに動いた。ガソリンやプロパンガスの回収も予定されていたが、災害下では必要になる。有効利用することにした。

避難所活動の結果、反省という点では、ライフライン復旧地帯のばらつき、ガソリン不足の深刻化などがあった。車から車へとガソリンを入れ替えることもした。マスコミとの取材対応トラブルもあった。精神的に異常をきたす人もいた。

3. 自主防災を高めるために

避難の基本は「津波てんでんこ」。川は津波で逆流する。自主防災、地域を重視した人物が、まちづくりのリーダーとなって引き上げてほしい。



開催地より

災害時の被害を未然に防止することが重要であり、皆で動きを繰り返し確認しておきたいと思った。また、減災のための備えが必要だと改めて感じた。今回の講演を、学校の防災マニュアルの見直しと、防災教育カリキュラムの再編成に活かしていきたい。

開催地名：岐阜県高山市	
開催日時	平成 28 年 12 月 10 日（土） 10：00～11：00
開催場所	高山市役所 大会議室
語り部	今野 均（宮城県仙台市）
参加者	町内会、自主防災組織、消防団員、市職員 約 150 名
開催経緯	高山市では南海トラフ地震の他、高山・大原断層帯等による内陸型地震の発生が懸念されている中、率先して防災活動を実践し地域における防災活動の中心的な役割を担う人材が必要である考え研修会などを行っている。しかし、市の自主防災組織は町内会組織で構成されているため、役員交代により経験が失われやすいなどの課題がある。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>今日の主題は「地域に求められる自主防災活動」である。仙台市青葉区片平地区の概要、まちづくり活動、震災対応、震災後の活動について述べたい。</p> <p>2. 都市部に位置する片平地区</p> <p>片平地区は沿岸から直線距離で8キロ。約5,400世帯、人口は約1万人、6つの地区、8町内会で構成され、仙台駅から最も近い場所なら約1キロ、遠い所でも2キロ未満である。市内中心部でマンションが多く、高齢者やひとり暮らしの人、また東北大学の片平キャンパスがあり、外国人留学生も多く住んでいる。多様性のある地域である。</p> <p>町内会の活動は、基本活動、問題解決活動、提案型活動を軸に展開されている。問題解決活動は地区の困り事、もめ事を抽出し、解決していくもので、例えば自動車学校に通う生徒の問題行動を改善するよう促す、といった活動などである。つまり、自分たちのまちを自分たちで守るという活動である。行政支援を要するものは提案型である。片平地区では平成19年ころから、安心・安全の確保、コミュニティの活性化、歴史・環境の保全・活用を軸としたまちづくりに取り組み始め、平成22年に計画策定委員会が設立された。地域としてまとまった連携体制が検討され、ほぼ内容も固まったものの、東日本大震災が起き、「片平地区災害に強いまちづくり委員会」の発足は平成24年度に延期されてしまった。</p> <p>3. 震災対応</p> <p>震災対応では、各町内会に自主防災マニュアルはあったが、役員の参集が悪いなど、うまく運用できなかった。だが、震災翌日には片平地区災害対策委員会を立ち上げ、すべき対応の整理と記録化を進めていた。指定避難所には定員を超える避難者が集まり、観光客、病人、妊婦、マンション住民など避難者対応に苦慮した。ただ、炊き出しなどでは地域の協力を得ることができた。学生・学生たちも活動に加わってくれた。ボランティアや災害時相互</p>

協力協定を結んでいた自治体の存在は大きかったと思う。

震災下から半年、地域からのヒアリングなどを踏まえ、震災対応を検証し、冊子としてまとめた。主要は7項目あり、自助・共助・公助に言及している。震災年の9月、市に提出している。

4. 災害に強いまちづくりへの挑戦

震災翌年から地域防災対策の強化活動を継続している。具体的には、一時避難場所の設定の見直し、留学生に参加を促す合同防災訓練のあり方の検討などで、企画段階から地域の代表者に参画してもらっている。マンション問題も検討を重ねている。避難者にはマンション住民が多く、また復興公営住宅の建設などに伴う住民対応が課題になっている。住民が孤立しないよう、「ウエルカム片平」のもと対応している。先に述べた、まちづくり委員会は、地区団体 28 で構成されている。協調体制構築プロジェクトとして、有効な情報の共有化と活用が検討され続けられている。要援護者および見守りサポーターの登録も促進中である。委員会では総合防災訓練の実施、防災行動マップの改訂、シンポジウムの開催なども実施してきたが、外国文化の違いにどう対処するかが課題になっている。食事、外国語表記の案内、宗教上の違いなど配慮すべき点は多い。最も困っているのはごみ出し問題で、何カ国もの外国語でルールを周知しなければならない。

今後も住民を巻き込んだ防災・防犯のまちづくり活動を推進していく。防災活動というのは防災活動だけ一生懸命やってもうまくいかないと思う。みんなでまちづくりする姿勢で進めたい。



開催地より

現在、高山市で地区防災計画を策定している地区はないが、平成 28 年熊本地震などを受け、防災活動が活発になってきている。また、一部の地域では避難行動計画の作成に向けて動き始めている。この防災講演会を契機に、防災活動がさらに活性化し、地区の計画が策定され、ブラッシュアップを重ねることで、地区防災計画に繋がっていくように活かしていきたい。

災害伝承 10 年プロジェクト

開催地名：三重県四日市市	
開催日時	平成 28 年 12 月 10 日（土） 10：30～12：00
開催場所	四日市市総合会館 7 階 第 1 研修室会館
語り部	武蔵野 美和（岩手県陸前高田市）
参加者	四日市市防災大学、四日市市防災・減災女性セミナー受講者 約 50 名
開催経緯	四日市市では、南海トラフが想定されており、市内で最大震度 7 が想定される。過去の被災体験者も年々減少しており、津波避難マップを作成し、地震・津南等に対する周知を行っているが、実際の地震・津波の体験談を聞く機会が少ないのが現状である。また、近年大規模災害を経験しておらず、避難所運営の経験も浅く、実際の問題を把握できていないことが課題である。
内容	<p>1. 避難所運営を機に防災を勉強</p> <p>娘が陸前高田で水産加工の仕事をしたという希望があって、私は千葉県から陸前高田に引っ越し、PTA活動を 17 年間続けた。3.11 当日、中学校体育館は落成式を迎えていた。午後に地震が発生、散会となったが、帰途中で多くの人が命を失った。その体育館は避難所となり、私は運営に携わった。一部からは、「千葉に帰ったのではないのか」というよそ者扱いする声もあったが、多くの遺族の声も聞いた。いたまれなかったが、逃れるように運営の激務をこなした。</p> <p>避難者はピーク時、1,200 人超。朝から晩まで、芋を洗う、ネギを切る、紙皿を何回も洗う毎日が 8 月まで続いた。その後、私は防災を学ぶことにした。私は「頑張りましょう」ではなく、「防災の大学で勉強しましょう」「地域でこんな人を養成しよう」と言えるようになった。</p> <p>2. 陸前高田の被害</p> <p>陸前高田の人口は 2 万 4,000 名である。海沿いには半島があって、津波の跳ね返りで波が増幅される。高田町には高田松原の平地がある。気仙川が海に流れ込み、砂地を形成した。松原の隣は中心街区である。南の気仙町地区に広田湾、その南は宮城県である。地形は複雑だ。宮城県では津波警報、陸前高田では注意報と、情報も錯綜している。</p> <p>大震災で公共施設はすべて壊れた。正確には、波がザブンと襲うのではなく、平地を伝って浸水してくると表現したほうが伝わりやすい。国道沿いの波高は約 14 メートル。波と波が重なり合い、侵入してくるのだ。北隣の大船渡市、その北の釜石市の津波は、長い板の塊が襲ってくる。湾が狭いと津波のエネルギーが集中される一角となる。陸をさかのぼった値は 38 メートル超の場所もあったそうだ。</p> <p>陸前高田のまちは壊滅、引き波にさらわれてしまった。橋げたごと持っていかれた。逃れようとするとき、人は道路を頼る。橋をわたれないと右往左</p>

往してしまい全員が亡くなる。生き残ったのは、けものみちを知っていて、たまたまその先の場所が命を守れる場所だったということである。避難誘導が災いし亡くなった人もいる。死者数 1,757 名、うち行方不明者が 205 名で、202 名までは死亡登録を済ませている。市職員も大勢亡くなった。

3. 女性の目線と訓練の有効性

避難所運営では、女性目線が貢献する。子育て、両親の病院への送り迎えなど、生活するうえでの工夫もできる。どの地域でも女性を活かすことを考えてほしい。四日市のように女性の目線で避難マニュアルをつくったという取組はすばらしいと思う。もちろん男性が要らないということではない。

女性の目線は、生活者の目線であると思う。実際、避難所の中で、備蓄品はあるが、どうやって配るかわからなかった例があった。わからないのは男性だった。生理用品のことなど、無関心だろう。女性が「その役目は私にやらせてください」と言えたら、実際スムーズに行くこともある。後片づけの段取りだって女性が優位だ。時間配分に注意しながら、食事を整える、病気ぎみの人を見付ける、病院はここで、こんな薬が必要といった点も気づくのである。

避難所は非日常である。妥協案を模索するとき、その工夫をするには生活者目線が大事になる。女性ネットラインも活用したい。もっとも、活動に男女の線引きを定めてしまうとデメリットもあるので留意したい。女性PTA会長は私が初めてだった。男女の差なく、みんなが情報を共有していける体制づくりを心がけたい。



開催地より

実体験に基づいた避難時の話や避難所運営の話は、緊張感と説得力があった。防災・減災に女性の視点は必要であるので、避難所運営等、防災で女性の視点が反映されるよう、各地域に働きかけていく必要がある。避難所運営における女性の視点において、女性だからこそ出来ることがあるために避難所運営には女性の活躍が必要だと伝えるのではなく、女性だからといって押し付けてはいけないという視点も市民の方に伝えていきたい。

災害伝承 10 年プロジェクト

開催地名：愛知県瀬戸市	
開催日時	平成 28 年 12 月 10 日（土） 10：00～11：30
開催場所	瀬戸蔵 つばきホール
語り部	佐々木 美代子（岩手県陸前高田市）
参加者	自治会、地区防災リーダー、市議会議員、市職員、消防職員 計 260 名
開催経緯	瀬戸市は南海トラフ地震による被害が想定されているが、過去に被害があった地震は東南海地震（昭和 19 年）および三河地震（昭和 20 年）である。かなりの時間が経過し、また風水害も含め近年大規模な自然災害を経験していないため、災害への危機意識の低下が課題となっている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>今日、話す主な内容は、3.11 災害の実態、災害対応の動き、今後の取組みを考える、の 3 点である。</p> <p>2. 災害の実態</p> <p>津波の当初予測は 3 メートル。市はチリ地震津波を参考に市民体育館を指定避難場所にしたが、避難者の 99% が犠牲になった。陸前高田では津波が到来してから、上方修正された「津波の高さ」が発表され続けた。</p> <p>身の安全を数カ月間確保するところが「避難所」、「避難場所」は一次避難として短期間身の安全を確保するところである。行政職員も住民もその違いを明確に認識しておかないと混乱が生じる。第一次避難として山の寺に逃がれた人が大勢いて、混乱したが、行政は機能不全で対応できない。となれば、共助で乗りきるほかない。陸前高田の住民が置かれた状況である。</p> <p>津波の最大波は記録上、17.6 メートル。高田松原で知られる砂浜からの津波と半島からぶつかり流れを変えた津波が、平地帯の市街地をのみ込みながら進んだ。川は津波で逆流し、海が見えない上流域も冠水した。濃尾平野が広がる愛知県内でも川を逆流する津波を念頭に置いておくべきだろう。</p> <p>3. 災害対応の動き</p> <p>当人が置かれた状況を冷静に判断して、適切な避難行動に移れるかどうかのカギになる。地震発生から津波到来まで時間はあるにせよ、経験したことのない長時間の大揺れだった。一刻も早く高台に逃げることを優先すべきだった。やむを得ず、頑丈な高いビルの上階に上るという手もあろう。危険なのは、頃合いを見て下へ降りることだ。外には予想できないリスクが多い。</p> <p>車で逃げるにせよ徒歩にせよ、判断はとどきに依じてと言うほかない。ただ災害に対する意識の違いが、判断力に大きくかかわってくるのは間違いない。その意味でも定期的に訓練を重ねることが重要だ。反省も改善点も認識できる。訓練には柔軟に臨み、即時対応力が身につくよう心がけてほしい。</p> <p>4. 今後の取組みを考える—教訓</p>

「不発」を恐れず早目に避難行動すべきだ。避けるべきは、危険な場に留まることだ。避難に時間がかかる障害者、高齢者、女性の犠牲者が多かった。避難弱者は早目の行動が何より大事になる。

教訓は、想定にとられるな、地震があったら津波と思え、「津波てんでんこ」に倣え、遠くより高台へ逃げろ、要援護者は早期に避難する、である。

5. 今後の取組みを考える——自主防災の主眼

自主防災の主眼は、災害前、発災直後、災害後の各局面で変化する。自主防組織の活動と組み立てる焦点もまた変化する。

災害前の主眼は災害への「備え」だ。自然災害を知ってもらう勉強会や情報発信、備蓄資材や食糧の確保、要救援者の把握、関係機関との連携・協力強化、防災訓練などだ。「備え」が発災以降のすべてに影響を及ぼす。

突発災害では、自主防組織が避難誘導をしている余裕はない。住民個々が自分の身を守る行動、つまり自助を徹底させるということに尽きる。

災害後での主眼は避難生活所の開所・運営に移る。共助の態勢を築く上でリーダーの果たす役割は大きい。混乱を回避するため各班の役割分担を明確にしておくべきだ。運営で最も苦勞したのが衛生環境、なかでもトイレである。仮設トイレと衛生用品は備蓄倉庫に備えておくべきだと痛感した。

弱者対策は真先に着手したい。乳幼児と身体に不具合を抱える人を把握しておく必要がある。食物アレルギーに関しては、避難者自身が注意しておくべきことだろう。女性の更衣室、授乳室は必須だ。共助には、生活上の知恵や手立てを知っている女性の視点が欠かせない。自主防の組織運営役員に女性を参画させて、その意見を自主防活動に生かす配慮が必要だ。



開催地より

災害は、いつでも誰にでも降りかかってくる実感を感じ止められたと思う。今後、地域防災力の向上、女性が力を引き出せる組織づくりをしていきたい。

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：岡山県瀬戸内市	
開催日時	平成 28 年 12 月 10 日（土） 10：00～11：30
開催場所	瀬戸内市消防本部
語り部	影山 洋二（福島県郡山市）
参加者	自主防災組織関係者 約 90 名
開催経緯	瀬戸内市では、防災研修会及び講演会により自助共助による地域防災力の向上に取り組んでいる。しかし、過去に大きな災害の被害を受けたことがないことから、地域防災力の向上がなかなか前進しない現状である。したがって地域の防災力を向上させるため、自主防災組織の活動の活性化が課題である。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>郡山市で町内会、自主防災会の活動を続けてきた。郡山市は内陸部で、津波被害はなかったが、それでも地震や原発事故などを受けた。自主防災力を高めるにはどうするか、経験を交えてお伝えしたい。</p> <p>2. 自助、共助こそ自主防の要</p> <p>自助、共助の重要性をあらためて認識している。大切だと思ったのは1人より3人、3人より10人が集い、みんなで何をどうするか、どんなことができるかを考えることだ。発災下、目の前にいる負傷者を救えるのは、その場に立っているあなたである。公的救護がすぐ出動できるとは限らない。周囲にいる人たちに声がけしてもいい。一刻も早い行動が必要だ。公助が災害で機能不全をおこしているとなれば、なおさらだ。</p> <p>私は地震が発生してから、給油所に向かい満タンにした。自主防災活動に欠かせないと考えたからだ。給油してくれるか不安もあった。運が良かったと思う。</p> <p>当日、隣町の町内会長を交え、これからの対応を話し合った。まずは安否確認である。調査票を事前に用意してあったので、あとは動くだけの体制はできていた。町内会では、さっそく行動に移った。備蓄倉庫からハンドマイクを出し、町内を歩き回った。午後4時から午後6時を過ぎた。230軒、一軒一軒にもなると時間を要する。ハンドマイクを使って、ガスの栓を再起動させる手順や電気ブレーカーの使い方もアナウンスした。各家庭で復旧の対処ができるなら、それはひとつの自助であろう。</p> <p>2日目は給水活動である。市内には複数の耐震性貯水槽が設置されている。誰が使ってもいい設備だが、存在を知らない住民もいる。給水活動している姿を見れば、活用してくれるだろう。合同防災訓練でも給水活動は訓練済みである。給水槽1カ所に100トン分の水が入っている。朝5時から役員に来てもらい6時にスタートした。寒かった。初日の給水活動では、1,000</p>

人以上が並んだと思う。ひとり3リットルまでを厳守したが、文句を言われることもある。他にも貯水槽はあるのだが、長蛇の列になってしまった。大変な思いだった。

夜間は大きな入水容器を用意し、水を貯めることにした。断水への用心、トイレ用としても使える。他者の給水行為を妨げることもない。生活用水、飲料用、それぞれの使用目的に応じた水の確保を容易にしたいと感じた。ご近所の知恵がもっと必要だ。

3. 自助、共助をいかに高めるか

日々の訓練やいろんな付き合いのなかで、情報を集めていくことが、自助、共助の条件づくりになると思う。

私たちは世帯の情報を、防災調査票として集めた。個人情報がかからむので取り扱いには慎重を期している。しかし実際、安全・安心な町内会にするには欠かせない要素である。平成22年から実施、現在、把握率は95%である。

4. 原発事故をめぐる

放射線量を町内で計測したところ、電力会社が発表した数値を上回る結果となった。それも10倍もの開きがあるのだ。原発をめぐるではどうも不信任感が拭えない。

5. 次の備えへ

災害下の対応というのは点から面へとシフトしていく。地域内の連携が強まるのだ。この経験を生かし、より強固にしたい。たとえば運営所の開設・運営の検証も学校と進めていけるだろう。また住民はどう感じていたのか。記録を検証する必要はある。記録は大事だ。

私たちは税金のむだ遣いしたくない。自助、共助を強め、次への備えとしたい。震災から時間が経った。震災時の経験が風化しないよう留意したい。



開催地より

実際に災害時に活動された方の話しであり、参加者も真剣に聞いていた。アンケートも好評であった。行政主体ではなく、地域主体の防災活動が災害時に役立つまで、地域防災を一層進めていきたい。

開催地名：鹿児島県垂水市	
開催日時	平成 28 年 12 月 11 日（日） 10：00～12：00
開催場所	垂水市文化会館
語り部	島田 福男（宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織、市民等 約 500 名
開催経緯	垂水市では、桜島の大規模噴火、海底噴火による被害が想定されており、市地域防災計画に県から示された津波浸水想定を記載している。また、過去には土砂災害により尊い命が奪われており、出前講座を開催しながら地域の自主防災意識の向上による減災に取り組んでいる。しかし、過去の災害発生からかなりの年月が経過していること、経験者の減少や高齢化などから活動が停滞しており、自主防災組織への自主防災普及活動が課題となっている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>震災被害の最新情報、自身がかかわってきた町内会での活動を報告する。</p> <p>2. 東日本大震災被害</p> <p>平成 28 年の 8 月 9 日現在における被災 3 県の被害者数をお伝えしておきたい。岩手県の死者数 4,673 人、行方不明者 1,123 人。宮城県の死者数 9,541 人、行方不明者 1,233 人。福島県の死者数 1,613 人、行方不明者 197 人。全国統計では死者数 1 万 5,894 人、行方不明者 2,557 人。津波での死者数 80 パーセント、うち 90 パーセントが車内死である。</p> <p>3. 川平地区町内会の避難所</p> <p>青葉区川平地区の避難所は住宅団地にある。避難者の 8 割は地元住民で、運営は比較的スムーズだった。現在、連合町内会は 5 つの町内会で構成されている。</p> <p>4. 自主防災組織の結成</p> <p>自主防災組織が誕生したのは、昭和 53 年の宮城県沖地震により、仙台市が「防災都市宣言」をしたのが契機だった。昭和 56 年当時、町内会の防災部長を務めていた私は、責任者として自主防災組織を結成した。市から、ハンドマイク・名前入りヘルメット・消火用バケツ・救急箱セット・担架などを支給いただいた。</p> <p>町内会の役員は 1～2 年で交代する。交代を機に私は自主防災組織の運営から離れた。平成 14 年に町内会長になったとき、自主防災組織の活動は事実上、機能していなかった。見直しを検討し、連合町内会にも自主防災組織を結成した。平成 19 年 2 月、連合町内会自主防災行動計画を策定。各町内会の自主防災組織に見直しを迫った。川平団地町内会では、毎月 1 日を「防災の日」と定め、「川平団地・防災の日」と記したのぼり旗 150 本をつくった。ビブス（ユニフォームベスト）も 150 人の役員に配った。22 人の役員</p>

	<p>には購入した防災無線を貸与している。このほか町内会単独で 300 万円を支出し、防災の資材・機材（発電機・リヤカー・毛布等）を 2 セット分購入した。</p> <p>市から「地域における災害対応計画策定事業」のモデル認定も受け、新たに結成された「川平地区災害防災対策連絡協議会」（50 団体）の創設団体の 1 つにもなっている。協議会の定例会は、「応急対策部」「避難所要援護者対策部」「地域対策部」の 3 専門部に分かれて協議、最後は全体会で閉められる。県外の町内会を招いた講演会の開催、学区の総合防災訓練、防災教室、防災研修会、避難所運営訓練、災害図上訓練、ワークショップなど多彩な活動を展開するようになった。</p> <p>5. 大震災当時</p> <p>コミュニティ・センターに地区防災対策本部を設置した。小学校の校庭が人であふれ返っているという一報が入る。学校と協議し、区長の指示を待たず、自主的に避難所を開設した。対策本部も学校に移した。発災直後の数時間には大事な対応ポイントがある。1 つは町内会が照明を持ち込みだ。“明るさ”を確保できたことで、みんなの不安の解消にもなった。2 つは避難者カードの発行。人数を区切って配給するなど運営がスムーズになった。</p> <p>自分たちの地域は自分たちで守るという意識が強くなったと思う。事前の備えが大事だ。発災時、停電で防災無線が使えなかった。震災後、全指定避難所にカセットボンベ式の発電機を 2 機ずつ、ソーラーパネルも設置した。ライフラインがストップした際の備えは極めて重要だ。</p> <p>6. これからの自主防災</p> <p>仙台市は地域防災計画を見直し、地域が中心になって動く方向性を示した。自助・共助のもと、地域住民の手による地域ごとの避難所の運営マニュアルの策定、指定避難所ごとの避難所運営マニュアルの策定などだ。自助、共助、公助の協働も検討している。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>災害から生命や財産を守ることは行政としての責務であるが、これから起こりうる災害の減災については、地域のコミュニティの活動が重要になると改めて認識した。高齢化が進み自主防災組織の活動が停滞している。自助・共助の活動の活発化、安心安全なまちづくりに取り組みたい。</p>

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：徳島県徳島市	
開催日時	平成 28 年 12 月 16 日（金） 13：00～14：30
開催場所	ホテル千秋閣 鳳の間
語り部	草 貴子（宮城県仙台市）
参加者	各婦人防火クラブ、消防職員 約 77 名
開催経緯	徳島市では、近い将来に発生が予想される南海トラフ地震に備えるため、自主防災組織、婦人防火クラブ等は訓練や研修会等に取り組んでいる。しかし、大規模災害の経験者の減少や、東日本大震災から年月が経過していることにより、防災意識の低下、後世への伝承不足が懸念される。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>主婦だからこそ、気付くこと、できることがある。各人それぞれの役目があると思う。</p> <p>2. 町内会の設立と集会所の開設</p> <p>女性たちが立ち上げた市名坂東町内会の設立は平成 20 年である。2年後に避難場所にも使用できる集会所を開設した。使い勝手に配慮したほか、電気復旧の早さを考慮してオール電化にした。</p> <p>3. 東日本大震災の対応</p> <p>地震の発生後、すべての避難者を受け入れた。避難者のなかからリーダーを選び、その指示に従うよう周知したうえで生活することにした。</p> <p>大震災を経て明らかになった問題と反省点がある。町内会未加入のマンション世帯への対応だ。入居者は転勤族の若い家族が多く、集会所で子育て支援を始めることにしたが、受入れや支援体制に充分考えが及んでいなかったと反省した。若い母も災害弱者である。私たちは、声を出せずにいる人の声を拾おうと行動した。茶話会の口コミ案内、全国おもちゃ図書館「ずんだっこ」の開設、お祭り時には未就学児のよちよちバンビ競争、お引越し会、入園おめでとう会、ちびっこたちの豆まき、郷土料理づくりなど、声を出せずにいた若い母親が徐々に入会するようになった。</p> <p>震災後、新たに取り組んだ活動は多様だ。</p> <p>防災・減災面からは、防災便利マップの作成、消防署による母子への講話など。乳飲み子を抱え集会所に避難していた母親の講話も催した。</p> <p>地域連携としては、小学校を拠点とした町内会、市民センター、児童館などの地域団体と、市名坂小学校避難所運営委員会を平成 25 年に結成した。市民センターとの情報の共有化、救護班、総務班、情報班など各班の活動を充実させ、スムーズな地域運用ができるようになった。女性コーディネーター部門も新設し、母親の経験と知識を活用していく体制にした。</p> <p>地域内の活動では、七北田方言防災かるたの作成、泉区女性町内会との交</p>

流、コーディネーターの役割を重視した泉区独自の地域防災リーダー（SBL）の講習会などがある。

4. 被災下での言動

人々の言動はさまざまだ。庭でバーベキューをしていた家族、その道を隔てた家の奥さんから肉親が流されると泣かれる、私の実家がある女川町が壊滅したと何度も大声で言いにくる人、支援物資を家に届けることを要求する人、トイレ掃除の当番表をつくった途端に自宅に帰った人、真っ暗なかで歯磨きを使う水を求める人、一時ごみ集積所に粗大ごみを持ち込む人など。

沿岸の被災地には、名ばかりの支援物資が届く、家に上がり込まれ写真をブログに載せられる、高カロリー食が続くなど、支援側もする側も言動を振り返る必要があると思う。

5. 一人ひとりの役目

夫が赴任勤務先から一時帰宅という措置がとられ、地震発生から6日目に帰宅したとき、私は感謝の気持ちでいっぱいだった。災害時に非常態勢がしかれる職業従事者を持つ家族は、覚悟ができています。

消防署も一時帰宅は6日目だったようで、不眠不休で対処・対応してくれた。感謝の気持ちでいっぱいだ。ふるさと女川のまちは流された。私は会長としての役目があったから、自分を保てた。女川町では、みんなが一所懸命、町のため、人のため、自分のために生きている。一人ひとりの役目はそれぞれ違っていい。

6. 地域防災にとって大事なこと

地域防災の大事なことは、自分たちの特性を考えて、オリジナリティーのある、身の丈に合った実践だと思う。



開催地より

東日本大震災の被災地で実際に体験された方でなければ聞くことができない内容であり、非常に有意義な講演だった。特に、さまざまな人が集まる避難所運営の難しさを知ることができ、非常に参考となった。今後も、風化させることなく、婦人防火クラブの活動に役立てていきたい。

開催地名：神奈川県伊勢原市	
開催日時	平成 28 年 12 月 18 日（日） 13：30～15：30
開催場所	伊勢原市民文化会館
語り部	武蔵野 美和（岩手県陸前高田市）
参加者	自治会長、自主防災リーダー、消防団員、災害ボランティアほか 約 290 名
開催経緯	東日本大震災の発生により防災活動の重要性が認識されたことから、震災直後には、危機意識から多様な年齢層の地域住民が防災訓練や防災研修会に多く参加していた。しかし、震災から5年が経過し、自主防災会が高齢化する一方で、若年層の地域住民の防災訓練や防災研修会への不参加が目立つようになった。震災の辛く厳しい経験を今後の自主防災会を担う次世代の人たちに引き継ぐためには、震災の記憶を風化させない取組を図る必要がある。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>「地域防災について」話すことを依頼された。しかし復興は道半ば。私は自分たちの防災力が足りなかったと思っている。今後に生かすという視点で聞いていただきたい。</p> <p>2. 避難所運営の激務</p> <p>娘が陸前高田で水産加工の仕事をしたという希望があって、私は千葉県習志野市から陸前高田市に引っ越した。PTA活動を続けて17年間になる3.11当日、中学校体育館は落成式を迎えていた。午後に地震が発生、散会となったが、帰途で多くの人が命を失った。その体育館は避難所となり、私は運営に携わった。よそ者扱いする声、多くの遺族の声、いたまれず、運営の激務をこなした。</p> <p>避難者はピーク時、1,200人超。朝から晩まで、芋を洗う、ネギを切る、紙皿を何回も洗う毎日が続いた。避難所運営は夏の8月まで続いた。</p> <p>運営の実務を生かそうと、私は大学で防災を学ぶことにした。体系だった防災を学んだことで、実務との兼ね合い、ともども有意義なものになった。</p> <p>3. 陸前高田の被害</p> <p>陸前高田の人口は2万4,000名。海沿いには半島があって、津波は変動を起こす。中心街区の側に「奇跡の一本松」で知られる高田松原がある。気仙川が海に流れ込み三角州を形成した。南の気仙町地区に広田湾、その南は宮城県である。宮城県では津波警報、陸前高田では注意報と、情報も錯綜している。</p> <p>大震災で市役所、消防、警察など公共施設はすべて壊れた。波がザブンと来るのではなく、平地を伝って浸水させたのだ。その浸水高、津波の高さは約14メートルである。波と波が重なり合い、侵入して来た。まちは、引き波にさらわれてしまった。橋がなくなって通行できず、避難路を奪われた人</p>

がほぼ全員死亡した。避難誘導が災いし、亡くなった人もいる。死者数 1,757 名、うち行方不明者が 205 名で、202 名までは死亡登録を済ませている。市職員も大勢亡くなった。人口比に占める割合が最も高かったのが陸前高田市である。すぐ裏山へという地形ではないところが多い。

4. 女性の目線は生活者の目線

避難所運営では、女性目線が大事になる。子育て、両親の病院への送り迎えなど、生活するうえでの工夫をしてきた経験がものを言う。どの地域でも女性を生かすことを考えていくべきだと思う。男性が要らないということではない。みんなが協力し合えばいい。

女性の目線は、生活者の目線である。実際、避難所の中で、備蓄品はあるが、どうやって配るかわからないのは男性である。女性が「その役目は私にやらせてください」と言えたら望ましい。後片づけの段取りだって女性が優位だ。いつも時間配分に注意しながら、食事を整えるからだ。病気ぎみの人を見付ける、こんな薬が必要といった点も気づくのである。

避難所生活は非日常である。いろんなトラブルが明らかになっている。会場を荒れた状態にしてはいけない。地域リーダーの大事な役割である。実務として、生活の工夫をするのは生活者目線が大事になる。ママ友を味方に付けよう。ただし男女の明確な区分けには留意したい。当地で女性 P T A 会長は私が初めてだった。男女の差なく、みんなが情報を共有していける体制づくりを心がけたい。避難訓練の実施が有効だと思う。



開催地より

実体験を踏まえた防災講話は、市民にとって災害イメージを養う良い機会となった。今後は、防災講演で得た知識等を基に、自主防災会、消防団員など地域防災を担う方々の協力を得て、地域住民に対して自助・共助の取組を推進していきたいと考えている。

災害伝承 10 年プロジェクト

開催地名：愛媛県鬼北町	
開催日時	平成 28 年 12 月 18 日（日） 13：30～15：50
開催場所	近永公民館
語り部	菅野 和夫（岩手県宮古市）
参加者	自主防災組織等連絡協議会、職員、防災士連絡協議会、地域住民 約 150 名
開催経緯	鬼北町では、南海トラフ巨大地震による被害が想定されており、地区自主防災組織・防災士等と協働し、地域防災マップの作成を通じ、住民自らが地域を点検することで、自助・共助の重要性を再確認している。しかし、南海地震発生からかなりの年月が経過し、災害経験者の減少や高齢化から活動が停滞しており、低年層への災害伝承が課題となっている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>宮古市は津波に備えて世界一の口湾防波堤を築くなど、防災に力を注いできた。私は元教師で、町内会と自主防災会の会長を兼務している。地域には自主防災の活動に対し批判もある。そのうえで話を聞いていただきたい。</p> <p>2. 多様な発災現象</p> <p>岩手県宮古市は、擁壁で囲まれた海のまちで、風光明媚な砂浜もあった。だが、砂浜は地盤沈下してしまった。</p> <p>発災当日、私は隣町で仕事をしていた。海岸沿いの国道 45 号は寸断された。祖父は明治と昭和の三陸沖地震を経験しており、私の母は小さいころから、当時の被災状況を聞かされていた。津波は怖いものという認識が私にもすり込まれている。東日本沖大震災は「1,000 年に 1 度の大地震」だという。実際、平安期の貞観地震があった。</p> <p>今回の大震災の被害の大半は津波によるものだが、生き残っても、仮設生活に耐えられず、自殺する人もいた。災害現場の様子を見に行こうとする人はいる。また高台に避難しても下に降りる、あるいは逃げようとしらない人もいる。死の形態は多様だ。</p> <p>当初の揺れを上回る地震が発生することがある。3.11 でも 2 日前、震度 5 という揺れがあった。本震はその後にやって来たのだ。当初、マグニチュードは 8.8 と発表されたが 9 に修正されている。また、津波は、地形によって、波の跳ね上がりが加わって、波高や動きが変化する。安全な場所だと思った所で津波にさらわれるという事態も起きた。</p> <p>内陸部にある岩手県雫石町を襲った台風 10 号の土砂災害は「山津波」と呼ばれる現象だった。</p> <p>3. 命を守るには</p> <p>一律的なハード整備が進めば、三陸沿岸は刑務所のような塀がそびえ立つことになる。果たして命が守れるのだろうか。命を守るにはどのような道が</p>

あるのか。「釜石の奇跡」と「釜石の悲劇」を見てみよう。「奇跡」は、鶴住居地区の学校の生徒たちが率先避難した行動である。状況に応じて最善を尽くし、山奥へと避難路を求めた。だが、同地区では防災センターに逃げ込み、施設にとどまった住民が被災した悲劇も生じている。センターは本来、避難する場所として指定されてはいない。最初の避難態勢というのは、暫定的なものにすぎない。想定は想定である。防災マップはシミュレーションである。想定どおり事が進むとは限らない。

4. 災害への備えと対応

上村町内会自主防災会を設立し、私が会長に就いた平成 19 年、政府の予測では宮城県沖地震の発生確率は 30 年以内 99 パーセント、10 年以内 60 パーセント程度だった。平成 23 年 1 月になると、10 年以内 70 パーセント程度に高まった。危機感を覚えて、同年 2 月 23 日に続き、3 月 11 日の夜 7 時にも防災会議を予定していた。その当日、地震が発生した。

町内会の役員らは 3 日間、必要な物資を持ち出しながら急場をしのいだ。最も欲しかったのはペーパー類である。避難所に支援が届いたのは 3 日目である。防災倉庫の管理も含め、避難所の役割というものを事前に定めておく必要がある。災害下では動ける人数も限られる。物資の仕分けには苦勞した。

防災とは、過去の出来事を積み上げて、実践に繋げていくものだと思う。先人の教えを踏まえ、次に備えたい。内陸部だろうが沿岸域だろうが、自然災害の備えという点では共通である。ただし、被災現場を見た人とそうでない人の危機意識は異なる。現場の映像や画像を目にしていきたい。



開催地より

参加者の防災意識の向上を図れた。また、講師が気さくな方だったので、自主防災組織関係者と交流を深め、情報を得ていきたい。

開催地名：高知県のいの町	
開催日時	平成 28 年 12 月 21 日（水） 10：50～12：40
開催場所	いの町立吾北中学校
語り部	菅原 康雄（宮城県仙台市）
参加者	生徒、教職員、保護者 約 57 名
開催経緯	吾北中学校は、山間部の学校であり、大震災発生時には土砂崩れによる孤立が想定される。目の前の事しか考えられない子供たちが、30 年以内に起こりうる南海トラフ大震災に向けて、実際に南海地震が起こった時に、自分に何ができるか、何をしなくてはならないのか、生き抜く力や社会貢献への意識づけが重要な課題である。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>大震災によって、私たちはいろんな難局に遭遇した。自然災害の「備え」があったが、見直す点、伸ばすべき点が検証されている。私たちはどうやって防災力を高めるのか。仙台市宮城野区福住町の自主防災に携わってきた経験を踏まえ、今日は中学生のみなさんとともに考えたい。</p> <p>2. 生き抜くために</p> <p>どの地、誰でもが、まっ先に高められる防災力は、家具の転倒防止、防災マップの活用である。住まいの耐震性を高め、地震の揺れによって生じる危険性を軽減することと、災害リスクや避難の仕方をあらかじめ知っておくことが第一歩である。自身を守ること、地域を知ることが大事だろう。</p> <p>第一歩を踏み出すと、いろんな問題が見えてくる。また現実として、津波被害が甚大だった東日本大震災では、生き残った後に凍死したり、トイレの不便性から食事を自制するなどして亡くなるという二次的災害があった。ハザードマップへの理解不足や堤防への過信なども要因である。</p> <p>福住町では、防災よりも減災を重視した視点で、自主防災に取り組んでいる。自然災害は住民レベルで対処できるものではない。ならば、一人一人ができることをしようという発想である。家具を固定したり、防災マップに書き込んだりすることは、各世帯で可能なことだ。減災を有効にするのが、訓練、協力体制、人と物の支援である。福住町ではあまり行政に頼らず、住民主体を重視した。「自助」「共助」はあるが、「公助」はない。ただし「他助」はある。だから他の被災地に応援に行くこともある。</p> <p>3. 教訓として伝えたいこと</p> <p>震災を経て教訓としてお伝えできる点がいくつかある。高速有料道ののり面に階段を設置する、ハード整備には塩害劣化を考慮する、防潮堤をつくるより高台造成、動物避難への理解と対応整備、地域ごとの防災・避難マニュアルの整備、その場・時間に即した対応力の養成、地区の住民名簿及び自主</p>

管理マニュアル策定、災害時相互協力協定の促進、ご近所付き合いなどがある。教訓には、中学生の協力も掲げている。

福住町には、中学生・訓練実施要領がある。そのなかには協力が欠かせない支援物資の搬送、安否確認、AEDの実体験、車いす体験や白い杖を持ち目隠しで行動する体験、避難介助、水汲み、バケツリレー、消火、仮設トイレの設営、避難所といった訓練内容が盛り込まれている。

「今回は訓練でしたが、災害が起きたときには、自分たちの役割をしっかりとできるようにしていきたい。今回の訓練を通して災害が起きる前に訓練を行うことの重要さを感じました」（男子3年生）、「水害被害も多いので、小学生のころから訓練に参加していた。防災訓練は恒例行事となりつつあります。本当に災害が起きたときのことを想定しながら、自分のできるスキルと地域のきずなを深める、とてもよい訓練になりました」（女子3年生）という感想が寄せられている。

先生は訓練に立ち会う。避難所訓練で重要なことは、空気の読める地域の人と学校の先生がともども、地域のリーダーとして活動することである。

私は「命の分水嶺」を模索している。多くの犠牲者を出した中野小学校跡は丘になった。当時を知る人の手記には「逃げろ、逃げて生きろ。必死に逃げて生きろ。後ろを振り返らず、必死に逃げ切ったら、ゆっくり振り返れ」とある。命を守る自助があってこそ、他助につながる。



開催地より

自分の命を最優先にして守るということの大切さを感じた。津波の恐ろしさや災害を最小限に抑えるために、防災訓練を頻繁に行い、いざという時に落ち着いて避難できるようにすることが重要だと思った。災害が起きたときに、地域の協力体制をつくっておき、避難した後、スムーズに避難所運営ができるようにすること、そして、他地域との協力体制も事前にされていることが必要である。本校でも、平成28年度に地元高校と地域、中学校で初めて防災訓練を行った。今後は、さらに定期的に行い、内容の充実を図っていきたい。

災害伝承 10 年プロジェクト

開催地名：静岡県掛川市城東中学校	
開催日時	平成 29 年 1 月 12 日（木） 14：20～15：40
開催場所	城東中学校体育館
語り部	佐久間 良（福島県田村市）
参加者	生徒、職員、市民 約 240 名
開催経緯	学区は南海トラフ巨大地震による津波被害が想定されている地域より内陸にあるため津波の心配はないが、急傾斜地が多いため、土砂災害による被害が懸念されている。また、本校は市の広域避難所に指定されている。そのため、避難所になった場合どのように対応すれば良いのかを教職員を含めた地域住民との共通理解が必要である。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>今日は東日本大震災で福島県消防防災航空隊として活動した経験を中心に原子力発電所の話も含めて、皆さんに当時の状況を伝えたい。最後は、防災への取組について感じたことを伝える。</p> <p>福島県の消防防災航空センターは、阪神淡路大震災のときヘリコプターで災害物資や救援物資を輸送し、それを契機にヘリコプターの導入が全国に広がった。その他にも、空からの消火が出来るという特徴もある。県内の消防本部からの要請で、多い時は年間 190 件ほど出動している。</p> <p>2. 東日本大震災における福島県消防防災航空隊の活動</p> <p>福島県消防防災航空隊は、次の 5 つの活動を行った。①福島県の被害状況の確認、②緊急消防援助隊の航空部隊準備態勢、③消防応援活動調整本部の運営、④捜索救助活動・遠距離の救急搬送・物資搬送・空中消火活動、⑤東京電力第一原子力発電所事故に伴う航空部隊の放射線管理及び活動の区域、以上である。東日本大震災で、県内・県外への避難者は現在でも計 8 万人いる。いまだに原発の事故の影響で県外に避難している人がいる。死者は約 4,000 人である。</p> <p>3. 福島第一原子力発電所について</p> <p>原子力発電所について、説明する。3 月 12 日に 1 号機の原子炉建屋が水素爆発を起こした。11 日には半径 3 メートルの範囲にいる住民には避難指示が出ていた。その後も 3 号機が水素爆発を起こし、東京電力の職員がけがをしている。冷却のために陸上自衛隊のヘリコプターで海水をくみ上げ、水を投下したり、自衛隊の消防車で放水を行ったりした。史上最悪の原発事故と言われている事故が発生した。</p> <p>事故のあと、周辺では放射性物質の線量が上昇し、半径 10 キロ～20 キロの住民には避難指示が出て、30 キロの住民には屋外避難の指示が出た。放射性物質は風向きによって福島県だけでなく、遠い所で静岡県や長野県まで</p>

	<p>飛来した。</p> <p>住民の避難所生活は続いたが、徐々にプライバシーを守るための間仕切りなどが用意できるようになった。</p> <p>4. 東日本大震災を経験して</p> <p>今回の大震災を通して、学んだことが3つある。①事前準備の大切さ、②情報の共有、③情報の備え、である。震災の4ヶ月前に、緊急消防援助隊の合同訓練を行っていた。訓練目標達成は絶対であったため、計画に対して、できたこと・できなかったことを検証した。東日本大震災時、同じ場所・同じ内容の災害情報について、少しでも異なる情報があればその都度救助に向かっていた。しかし、救助の空振り・重複がたびたび起き、効率が悪かった。今後情報源を確認し、救助を行っていきたい。また、大震災時、電話やメールに頼らない情報の入手方法を備えておくべきということである。ラジオや災害用伝言ダイヤルの利用や、事前に家族で避難場所の共有をしておくなど、備えが必要となる。</p> <p>自分たちの命は自分たちで守るといったことを意識し、地域や家族それぞれに合った計画・話し合いを行い、災害に備えてほしい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>当時テレビで見たものとは異なる現場の映像・情報を聞くことができ、良い機会だった。静岡県でも地震の被害が予想されており、防災訓練を継続的に行っているが、地震発生時、どのような状況になるのか、何に困るのか、今回の講演会の内容を踏まえて取り組んでいきたい。</p>

開催地名：兵庫県篠山市	
開催日時	平成 29 年 1 月 14 日（土） 13：30～15：30
開催場所	篠山市立四季の森生涯学習センター
語り部	片桐 勝二（宮城県仙台市）
参加者	自治会長、まちづくり協議会、市職員 計 121 名
開催経緯	篠山市は、比較的災害の少ない地域であるといえるが、絶えず災害への意識づけをし、備えることは重要である。本プロジェクトをその契機としたい。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>仙台市宮城野区蒲生地区は、東は太平洋に面し、北は仙台港、南は七北田川に囲まれている。大震災では町そのものが流失するという甚大な被害を受けた。町内会副会長である話者が避難所の生活などについて語る。</p> <p>2. 避難所で運営委員会を立ち上げる</p> <p>大震災後、町内をまわり避難を呼びかけて歩き、小学校へ避難した。避難のとき、町内会長が住民台帳を持って逃げていたのがよかった。津波によって壊れた中野小学校に、約600名が避難した。</p> <p>翌日、八軒中学校の多目的ホールに避難、避難運営委員会を立ち上げた。メンバーは、学校関係者や地域の町内会の方、栄養士さんなどだ。毎日夜7時から9時まで2時間、避難運営委員会を開いて、生活状況の報告や改善案などを検討した。</p> <p>3. 避難所の生活</p> <p>避難所での生活は、朝6時に起床し、6時半にラジオ体操を全員で行い、女性は食事の支度、男性はフロアの掃除やトイレの掃除、ストーブ燃料の補給などをお互いに作業分担して行った。全員で食事をとった後、身内や親戚の安否確認、被災地に出向いての現況確認をした。</p> <p>最も気を遣ったのは、健康管理である。保健師の方々に、健康状態のチェックをしてもらった。1日で50人余りのチェックをするのは難しかったので、名簿と体温のチェックリストを作り、各自記入してもらった。それを保健師さんに渡し、とくに体調の悪い方を見てもらった。またときどき避難所を訪れる日赤医療チームにもチェックしてもらった。その結果、健康管理に問題はなく、全員の健康状態を掌握することができた。</p> <p>警戒したのは、インフルエンザなど感染症の蔓延である。ひどく体調を崩した方には多目的ホールの一室を用意し、放送室など個室にできる部屋を病室にした結果、未然に防ぐことができた。</p> <p>何も持たずに逃げたので、病院の治療や投薬の問題がある。運営委員会に語り、ボランティアにネームプレートをつくってもらい、それを下げて近くの病院に行った。すると避難所にいることがわかるので、他の患者より優先</p>

的に治療・投薬をしてくれた。

心を癒やされたのは、避難所において、0歳児の子どもがよちよち歩きを始めたことである。人間の生命力を感じさせ、みんなのマスコットになっていた。子どもの力は大きいと思った。

4. 役立った住民台帳

そのうち、もとの蒲生町内の方々と、新たに設けられた仙台の宮城野体育館で避難生活が始まった。その避難所では、自分たちの復興に向けて、仮設住宅やみなし住宅に向けての話し合いが始まった。町内会長が持ち出した住民台帳がここで役立った。住民台帳を見て連絡をとり、現在の様子や所在地を確認し、新たに住民台帳を作った。その後の追跡調査にもそれは大いに利用された。災害時には住民台帳が必要になる。災害時以外にも、要支援や介護などにも活かされるので、作っておかれるといいと思う。

5. 地域に起こりうる災害を考える

日頃から、それぞれ自分の地域にはどういう災害が発生する可能性があるか考えておかれるといいと思う。先日、糸魚川で火災があったが、市内は木造家屋が多かった。風水害、津波など、場所によって起こりうる災害が違う。もう一度自分の地域を見直して、皆さんでどう対応するかを話し合っておくことをおすすめする。



開催地より

東日本大震災から6年近い年月が経過したが、「語り部」の話を聞くことにより、震災に対する意識風化の抑止と防災意識の啓発ができたと考えている。震災発災時の体験を被災者の生の声により聴くことができたことは、非常に貴重な体験となったと考えている。

自分たちの地域は自分たちで守るということを実践するため、災害への意識づけとして、地区単位や自治会単位の避難訓練等の実施や防災マップ作りの実施を推進し、災害への備えを万全にしていきたい。

開催地名：長野県須坂市	
開催日時	平成 29 年 1 月 14 日（土） 14：30～16：00
開催場所	須坂市シルキーホール
語り部	高橋 文雄（宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織、市民 約 100 名
開催経緯	須坂市においては、毎年 10 月頃に防災講演会を開催し、市民の自主防災意識の高揚と、防災知識の普及を図っているが、参加者からは「防災の知識を高めることも重要だが、いつ起こるかわからない災害への備えと、地域防災の役割意識の向上のため、近年の大災害実の実経験者の話を聞いてみたい」という希望を受けている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は仙台市の消防局長職を務めていた。そのときの経験を踏まえ「東日本大震災とこれからの災害対策」という主題で話を進めたい。</p> <p>2. 東日本大震災の概要</p> <p>震災被害は、大地震、大津波、原発、風評という 4 つの災害に大別できる。人的被害の要因は津波である。地震と津波は地盤変化を招いた。地盤変化が後々の復旧に影響を与えている。当初は最大で 75 センチぐらいの地盤沈下があったが、現在では地盤隆起が始まっている。災害後に亡くなってしまう関連死は、自治体にとって大きなテーマになっている。</p> <p>3. 仙台市の被害</p> <p>仙台市の震災被害は 3 つに大別できる。1 つは東部沿岸の津波被害、2 つが造成団地での建物被害、3 つが市街全域の建物被害である。火災はまず起きるものと認識しておくべきだ。海水は塩分を含んでいるから、電気回路をショートさせる。建物被害の特徴を整理すると、大天井の崩落、ガラス壁材の破損、搭屋や煙突などの崩壊、構造物の落下に大別される。</p> <p>仙台市沿岸域の津波は、海岸線から内陸約 5 キロまで及んだ。仙台平野の平地帯を走り、浸水域は 52 平方キロである。小学校へ避難した人たちを救助できない現実や、夜間の空中消火があった。</p> <p>震災当日、私は映像などから推測して、県内で死者 1 万人に上るかもしれないと消防庁長官に伝えた。若林区荒浜地区は瓦れきが広がる、無音の世界だった。隊員には破傷風対策としてワクチン接種をしたが、非常に疲労度が高まる捜索活動になった。</p> <p>4. 発災時の市民生活</p> <p>地震後、平穏を破る次の 3 つの出来事が起きていた。1 つがライフラインの停止、2 つが食料、燃料の欠乏、3 つが帰宅困難者の発生である。</p> <p>仙台市の指定避難所 194 カ所のうち学校などが 165 カ所、さらにコミュ</p>

ニティ・センターなど地域避難場所が 123 カ所、合わせて 288 カ所が避難所となった。3月12日、避難者数がピークとなり、その総数は約10万5,000人にのぼった。当然、飲料水、食料、毛布などの物資が不足する。しかし当時、市全体ではかなりの非常食を備蓄していた。アルファ米で約60万食、飲料水が約19万リットル、粉ミルク150キロである。災害の規模があまりにも大きすぎて行き渡らず、渡った避難所でも、あっという間に使い切ったというのが実態である。

帰宅困難者は避難所運営に非協力的である。地震が昼間だったため主に先生が対応できたのが救いだった。

5. 自主防災組織の活動

自主防災組織の活動は役員が担ったが、活動しなかった自主防災組織もある。主に山間部だ。被災の状況によって活動もまた連動する。いずれにしても共通するのは、住民での助け合いや、避難誘導、避難所運営などである。事前訓練は、安否確認、情報収集、避難、避難所運営であった。現場では小中高の生徒たちの力が大きかった。

6. 自助・共助・公助

自助・共助・公助が連携しないと、大規模災害には対応できない。自助には大切な3点は、1つは家庭での備蓄、2つが家具の転倒防止、3つは建物の耐震対策である。

共助では、自主防災組織の果たす役割が大きい。それぞれの地域が実情に応じて活動している。

公助においては複数の課題が検討されている。避難所の混乱、建物の耐震化などだ。有効だったのは、自販機の転倒防止策、防災協定に盛り込まれていた道路啓開だった。公助には行政機能の継続性が欠かせない。職員を非常参集させる際、1カ所に集めてはならない。



開催地より

講演会の内容を受けて、自主防災組織の活動向上や小中学生にも総合防災訓練への参加の呼びかけを行っていききたい。

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：和歌山県和歌山市	
開催日時	平成 29 年 1 月 15 日（日） 13：40～15：10
開催場所	和歌山市消防局庁舎
語り部	菅野 澄枝（宮城県仙台市）
参加者	市民 計 104 名
開催経緯	和歌山市では、南海トラフ巨大地震による被害が想定されており、避難対策に取り組んでいかなければならない。しかし、地域によって、防災に対する意識に温度差があり、意識があってもリーダーの交代等の理由で、何かから手をつけてよいのかわからないなどの問題が生じている。災害に備えるためには、地域住民が主体となって、対策を講じていく必要があり、地域全体で取り組んでいく体制を作り上げることが課題となっている。
内容	<p>1. SBLとは</p> <p>SBLについて説明したいと思う。SBLは、英語ではなく、ローマ字の頭文字である。仙台市のS、防災のB、リーダーのLをあわせた言葉である。意味は読んでの通り仙台市地域防災リーダーで全くの無償のボランティアのことである。現在仙台市内に 600 人いる。活動内容としては、①自主防災組織と協力し、地域の自主防災活動を推進、指示する②平常時、顔の見える関係づくり、災害に対する備えを推進する③発災時は応急活動の指揮、および避難所運営を助けるという 3 点がメインである。自分は岩切地区の SBL をしている。</p> <p>2. 岩切地区被害について</p> <p>自分が住む岩切地区というのは、東日本大震災のとき津波の被害は受けていない。しかし、内陸部で、熊本地震で注目されている活断層が出ている。その活断層が通っている岩切地区の被害は家屋の崩壊が主であった。自宅も全部瓦から何から落ちてしまった。しかし地区に大工をリタイアした高齢の男性が助けてくれた。また避難所で一人留守番している高齢の女性も「戦争の時よりいい」、「こうして座っていると誰かがご飯を持ってきてくれた」という言葉に救われた。高齢者の大切さをあらためて実感した。</p> <p>3. 子供たちへの防災教育の重要性</p> <p>子供たちには、自分たちで判断して逃げられる力をつける防災教育が必要である。そういった子供への教育が続けられればいいと思う。自分の町内会の中でも、中学生と高校生に実際仮設トイレをつくってもらったりして、子供たちに自信をつけることも大事である。防災は自分の取組、学ぶことと伝えることで人材を育てる効果があると思う。</p> <p>4. 女性たちの防災宣言</p> <p>東日本大震災の 9 ヶ月前に「岩切の女性たちの防災宣言」を作成した。な</p>

ぜ作成したかという、災害時は、幅広い世代がお互いを助け合い、子供たちのことをしっかり守り、隣近所の人たちとも助けあいたいと自ら発言し、伝えることで、地域としっかりつながり、実行し続けていきたいという思いからである。

5. 防災に必要な女性目線

SBL600人のうち、女性は少なく、25パーセント程度である。いざ震災が起こった時に避難所に自分の娘が避難した場合、女性の防災リーダーがいたらうれしいと思う。女性特有の心配事のフォローができる。しかし、人を大切にされてあげられる、気遣いができるということでは、男性だから、女性だからというのはない。うちの地区では、定年退職された男性も巻き込んで活動している。

6. 婦人消防クラブの活躍

災害時には、消防士は動きまわっているので、全て避難所に来るのは難しい。地区の避難所が火事になった時、力を発揮してもらったのが、婦人消防クラブである。婦人防火クラブのバケツリレーで火が鎮火した。毎年毎年訓練をしている賜物であると思った、

7. 防災にあたって地域で大切なこと

地域の防災活動は長く続けていくことが大事である。長くつづける秘訣は、無理なく楽しく、大切な人や自分を守り、大切な人を増やし、この思いを広げることである。



開催地より

仙台市の地域防災リーダーは女性が 25%を占めていることと、地域の訓練などにも子供を積極的に参加させ、未来の地域の担い手を育てていくことに力を入れていると聞き、非常に意識が高いと感じた。

「誰かのせいにしない、自分のまちは自分で守る」という自助、またそれに関連して地域で取り組んでいく共助の意識は改めて非常に重要であると感じた。

開催地名：東京都稲城市	
開催日時	平成 29 年 1 月 17 日（火） 14：00～15：30
開催場所	稲城消防署
語り部	山崎 義勝（岩手県釜石市）
参加者	市職員、消防吏員 計 22 名
開催経緯	稲城市では、首都直下地震を想定し、稲城市地域防災計画を策定して、災害に備えているが、初動体制や時間経過による体制をどのように構築していけば良いかが課題となっている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>大震災当時、私は宮城県釜石市役所に勤務していた。津波による被災体験を語り、防災について話したい。</p> <p>2. 通行路をどう確保するか</p> <p>地震直後は、消防本部に被害情報はなかった。屋根の瓦が落ちたとか、そういう程度だった。救急出動もなく静かであった。ところが30分後、津波が来て壊滅状態になった。4万人の人口のうち一瞬にして1,000名の方が亡くなり、約3割の家屋が壊れた。</p> <p>これは釜石市役所の映像だが、津波の第一波で、がれきが来る。それを置いて水が引き、第二波でまたもって来る。こうしてがれきがどんどんかさばっていく。このように、がれきで通行不能になることによって、救助活動に大きな影響が出る。中心市街地の裏通りでは、すべての通路が浸水し川のようにになっていた。そこへ流された車が溜まっていく。私はこの道を通るとき、車の上に乗って移動した。</p> <p>震災直後に自衛隊が入ってきてくれたが、まず道路啓開してくれた。道路をどんどん切り開いていかないと、救助、救出、物資配給ができない。自衛隊は部隊を分け、道路網の確保をいち早くしてくれた。</p> <p>3. 市の初動</p> <p>市役所は孤立したので、浸水区域以外の建物に行って災害対策本部を設置した。停電しているので、ポータブルの自家発電機を使って夜をしのいだ。こうした広域災害の対応は、釜石市だけでは判断できない部分がある。隣町の大槌町、自衛隊、海上保安部、警察署、緊急消防援助隊、消防署や民間の電気、ガス、水道、ライフラインの関係者が一堂に集まって、岩手県が中心になって災害対策調整会議を開催した。これを毎日繰り返した。現場に出て、どういう状況起きているか、その結果を受けて明日どこで何をするか、連日調整会議を行った。最初はスムーズにいかなかったが、時間がたつと運営も改善されてきたと思う。</p> <p>4. 物資の配給について</p>

最初は自衛隊で物資配給していただいた。途中から民間業者に依頼した。民間業者は荷物輸送のプロであり、物資を種類ごと、数量ごと管理するのもうまい。たとえば市で一つの資料を渡すと、数とおろす順番などをきちんと決めて、スムーズにやってくれる。今、釜石市では、宅配業者と支援協定を結んでいる。こういう流れは全国的に広がってくると思う。

5. コミュニティの形成に力を入れる

避難所生活をしてもらいながら、市では仮設住宅をつくっていった。最も大きいところは、第六仮設団地である。41棟、240戸を作った。市全体では66カ所で300戸ぐらい建てている。

大きな仮設団地のいいところは、診療所やバスの発着所を設けられるなど、暮らしの利便性が高いことである。

しかし生活環境を整えて終わりではない。そこに住まうのは、さまざまなところから集まって来た方々である。まだコミュニティができていないのだ。暮らしのモチベーションを上げるためにも、コミュニティ形成は重要だ。

それについて私たちはさまざまに気を配り、一生懸命頑張ったという記憶がある。



開催地より

「最優先は命を守ること」「命を守る術は避難行動」心に響いた。消防本部防災課職員として、市民に対し継承していくことが大切なことだと痛感した。今後の防災訓練又は防災講話等の機会を捉えて、今回聴講した内容を発信していきたい。

災害伝承 10 年プロジェクト

開催地名：広島県福山市	
開催日時	平成 29 年 1 月 17 日（火） 10：30～12：00
開催場所	福山市役所 3 階会議室
語り部	高橋 進一（千葉県旭市）
参加者	防災リーダー、自治会関係者、自主防災組織関係者、一般市民 計 193 名
開催経緯	<p>福山市では、南海トラフ巨大地震による被害が県内最大と想定されており、現在、各地域において学区・地区防災（避難）計画を作成中である。</p> <p>一昨年から防災リーダーを育成し市民に「自助・共助」の重要性の周知に取り組んでいるが、市民の災害への意識は希薄である。過去に大きな災害に遭遇しておらず、災害体験者も少なく低年齢層への災害伝承が課題である。</p>
内容	<p>1. 300 年前の災害</p> <p>今から 300 年前に、元禄大地震があった。その際に、大津波があり、5,000 名以上の方が亡くなった。この出来事を知っているのは、一部の郷土史研究家だけであり、学校でも教えられていない。元禄大地震後、大きな災害はなかったため、この町は安心・安全の町であると考えられてきた。しかし、近頃、自然災害が頻発しているため安心・安全とは言いきれない。</p> <p>2. 地震発生</p> <p>家が壊れるのではないかと思うくらい大きな地震を経験した。身動きが取れず、火を消したり、ガスを止めることが大変難しい状態だった。自宅は、堤防から 50 メートル程しかないため、海岸の様子を見に行った。そこで、ものすごいスピードで堤防に迫る津波を見た。引き波も見たため、津波が来ると直感した。両親と近所の一人暮らしの方の 2 人を車に乗せて保健福祉センターへ向かった。</p> <p>3. 津波から学んだこと</p> <p>保健福祉センター到着後、1 人で地元へ戻った。当時、旭市の行政区長と民生児童委員をしており、住民の安否が気になったからである。海を見に行くと、津波が向かってきていることが分かり、走って逃げた。音もおいも、風もなく、大津波が襲ってきた。後ろを振り返ると、家が次々と流されていく恐ろしい光景を目撃した。</p> <p>東日本大震災では、200 名以上の消防団員の方が亡くなり、民生委員の方も 40 名程亡くなったと聞いている。あの震災を受けて、自分の命が第一であると考えようになった。まず守るのは自分の命であり、次に困っている人を助けるのが順序である。</p> <p>4. 発災後について</p> <p>その後、避難所に行き、家内と息子を見つけることができた。息子は、障がいを持っており、大勢の人がいる避難所にいるのは難しいと考えたため、</p>

	<p>車で一夜を過ごした。</p> <p>翌日、家族を残して地元に行くと、瓦れきの山であった。行方不明者もいたため、潰れた家や、瓦れきの中に声をかけて探したが、全く応答はなかった。自宅に着くと、外観は何もなかったが、1階にあったものは全て壊れており、住める状態ではなかった。そのため、親戚の家で過ごしなが、復旧作業を行った。復旧作業で一番助けになったのは、ボランティアであった。瓦れきや水を吸った畳は、とても重たく運び出すのは大変な作業であったため、ボランティアが5～10名来てくれ、仕事が捗った。5月半ばに家の修理が終わり、元の生活の戻ることができた。本当に長い日数であった。</p> <p>5. 最後に</p> <p>震災の年に、親子防災教室で津波を学ぶことや、津波の語り部の活動を始めた。話を聞いたことで、防災に対する考え方を高めて、自然災害が起きた際に、自分は死なないぞという誓いをもとに行動を起こしてほしい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>講演会の内容を、地域の防災講座などで紹介し、地域住民の更なる防災意識の向上を図りたい。また、語り部の講演は後世に語り継いでほしい。</p>

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：島根県益田市	
開催日時	平成 29 年 1 月 21 日（土） 10：00～12：00
開催場所	益田市立水防センター
語り部	片桐 勝二（宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織関係者、自治会役員、消防職員、市職員 計 71 名
開催経緯	<p>益田市における過去の災害は、特に風水害によるものが多く、地震・津波による大災害の経験がほとんどないことから、地震・津波に対する住民の防災意識は低い。</p> <p>特に内陸部については、地震による被害が少ないと考える住民が多く大規模な地震が来た際の行動ややるべきことについて理解している人は少ない。</p> <p>この度、実際に経験された方の話を聞き内陸部に住む住民の防災意識の向上を図るとともに災害伝承・防災教育の機会としたい。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>住まいのある仙台市宮城野区蒲生は、東を太平洋、北を仙台港、南を七北田川に囲まれ、約 1,000 人の住むのどかな地域だった。ここで東日本大震災のときに何が起きたか。体験を中心に話を進めたい。</p> <p>2. 地震の状況</p> <p>3 月 11 日、自宅から約 200 メートル離れた実家で兄嫁と母親と過ごしていた。その後、帰宅し昼食をとっていたところに地震が発生した。家財は飛び、屋根瓦が落ちた。妻に学校へ避難するよう指示した後、町内を自転車で回り避難を呼びかけに行った。近所に家具に挟まって身動きがとれなくなってしまった高齢の女性がいたため、近くを通った若者と一緒に救助した。町内を一通り回った後、住民の避難する学校に向かうと、学校には多くの人が詰め寄り、混乱していた。</p> <p>職員室では、町内会の役員や教員が防災無線で救助を要請していたが、連絡を取ることができずいらだっていた。そのうち、職員室から「津波が来る」と大声が聞こえ、全員で屋上に避難した。津波は校庭に流れ込み、学校は水没した。屋上に残り残された避難者は完全に孤立してしまった。</p> <p>水位が下がり始めると、避難者で教室を清掃し、休息できる場所をつくった。屋上では自衛隊のヘリコプターが暖房用の毛布を降ろしてくれた。さらに、約 30 名の高齢者や体調不良者を救助してくれた。残った人たちは余震の揺れや工場の火事、ガスボンベの爆発音におびえながら朝を迎えた。</p> <p>学校近くの道路の瓦礫を自衛隊が撤去した後、避難者はバスとヘリコプターで次の避難場所に移動した。避難先の霞目駐屯地は足の踏み場もない状態だったが、なんとか仮眠をとった。13 日には霞目駐屯地からさらに八軒中学校に移動し、1 か月の避難生活が始まった。</p>

3. 避難所生活

八軒中学校では町内会のメンバーや教員、栄養士、県外の自治体職員、保健師で避難所運営委員会を立ち上げた。仕切りのない床で雑魚寝状態ではあったが、起床時間や就寝時間を定め、生活リズムを整えた。健康管理については、保健師だけでは対応が難しかったため、検温に地域の若者が協力した。また、風邪などの感染を防ぐため、体調不良の者には別の部屋を用意するなどして対応した。八軒中学校の合唱部は3月19日に全国大会を控えていたが震災で出場できなかったため、同日、コンサートを開くこととなった。曲の歌詞は今でも忘れることはできないほど胸に響いた。

4月10日に次の移転先である宮城野体育館に移動した。体育館には1,000人あまりが押し掛けた。この避難所では、自主再建についての話し合いや市への要望の取りまとめなど、次の生活に向けた話し合いが行われた。この避難所の最後の一人が退去するまで見守り、結果的に4ヶ月をこの避難所で過ごした。

4. 防災・減災の取組のために

平成28年4月1日に町内会を立ち上げ、これまで町内会の経験のないもの同士で試行錯誤しながら運営をしている。災害時にはなりよりも、自分の身は自分で守ることが大切である。自分の命を守って初めて次の行動を考えられる。また、その地域における災害発生特性要因にあわせた備えをしておく必要がある。家族の連絡場所を決めておくことや、災害発生時の予想被害状況の把握をしておくこと、そのうえで訓練を通して地域の人とのつながりを築き、他人を助けられる人となってほしい。





開催地より

参加者からは、「実際に東日本大震災を経験した方の話を聞くことができ、防災意識を高める必要性を感じた」との声が多くきかれ、好評だった。行政が市民に対して防災の必要性を話すよりも、実体験に基づいた声は市民に届きやすいと感じた。

益田市も市内に川が2本あり、地震の際は液状化などの被害が発生する可能性もある。災害時のための住民の防災意識向上・リーダー育成に早急に取り組みたい。

開催地名：福岡県久留米市	
開催日時	平成 29 年 1 月 21 日（土） 10：00～11：30
開催場所	久留米市役所 2 階くるみホール
語り部	武蔵野 美和（岩手県陸前高田市）
参加者	市職員、防災リーダー 計 75 名
開催経緯	久留米市では、過去の災害による教訓を踏まえ、共助の取組の強化として自主防災組織の結成促進を行ってきた。その結果、現在、全 46 校区中 45 校区において校区自主防災組織が結成されている。しかし、具体的な活動や訓練を実施できている校区は数校区に留まっており、実効性が高い組織にはなっていない。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>防災とはつまり、“自分がどう安全であるか”である。自然災害は止めることができないため、来た時に我が身をどう安全に守るかを考えることが重要である。そのような話をしていく。</p> <p>2. 震災当日の経験</p> <p>3 月 11 日は、中学校の体育館の落成式であった。落成式を終え、一度家に戻った際に、立ってられない揺れを経験した。その時は、防災意識がなく物が落ちてくることに恐怖を覚え、とにかく外へ出ようと思った。外に出ると、家の出窓が落ちてきて、もう少しで脳天に突き刺さりそうな体験をした。</p> <p>怖いというよりは、何が起きているか分からないという思いであった。</p> <p>3. 被害について</p> <p>この震災で、陸前高田市ではおよそ 1,700 名が亡くなった。行方不明者は 245 名である。津波が起こった際に、逃げた人の 9 割は助かっている。一方で、逃げなかった人の 9 割が亡くなっている。</p> <p>隣の市の話でいうと、「釜石の奇跡」と言われているように、釜石東中学校の子供たちが津波の際に率先して高台に避難した。その行動を見て、地域の方、保育所の子供たちも避難したことから、多くの命が助かった。それに対し、「鶴住居の悲劇」では、防災センターに逃げた方の多くは命を落とした。これは、同じ校区での出来事である。想定にとらわれてはいけない。率先避難者になり、最善を尽くすことが大切である。</p> <p>4. 震災から学んだこと</p> <p>自主防災組織の組織図では、救護は男性、まかないは女性のように性別分業で考えられることが多い。しかし、発災時は性別に捉われることなく、私は何ができるかということから話し合いを始めることが大切である。女性だからリーダーになれないと排除するのではなく、一緒に考える舞台をつくっ</p>

	<p>てもらえればと思う。</p> <p>他人を助けたいと思うなら、そのために自分がまず無事でなければならぬ。そういった命の大切さを感じる事があれば、こういった立場の人でもリーダーである。家では母親かもしれない。子供が機転を利かせて「逃げよう」と言えば、子供がリーダーである。そういった主体的な気持ちで行動してほしい。</p> <p>防災の活動をされている、あんどおりすさんが「アウトドア流防災」を提唱している。防災とアウトドアで生き残るすべは似ていて、最低限5つ持っておくものがあると言う。①LEDライト、②ホイッスル、③マルチツールと呼ばれる様々なナイフが入ったもの、④携帯、⑤知識を得た自分、である。参考にしながらも、人それぞれ必要な物を準備してほしい。乳幼児がいる家庭ではおむつが必要であり、常備薬が必要な人は常備薬の携帯が必要である。</p> <p>5. 最後に</p> <p>今まで当たり前であったことが、当たり前ではなくなることもある。自然は偉大である。しかし、それを忘れず、自分たちが行動して被害を減らせば、当たり前の毎日が過ごすことができるようになる。</p> <p>今日、このようにみなさんに出会えたことに感謝している。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>受講者の防災意識向上につながる講演会だった。自主防災訓練の中でも、特に避難訓練や災害時要援護者図上訓練を行うときは、実際の・実践的な訓練が必要だと改めて感じた。</p>

開催地名：宮崎県日南市	
開催日時	平成 29 年 1 月 22 日（日） 13：20～14：35
開催場所	日南市文化センター
語り部	京 英次郎（宮城県仙台市）
参加者	自治会関係者、消防団員、市職員、その他 役 550 名
開催経緯	<p>日南市は、南海トラフ巨大地震による被害が想定されており、国から南海トラフ地震防災対策推進地域及び南海トラフ地震津波避難対策特別強化地域に指定されている。県から示された被害想定を基に、津波ハザードマップ作成や津波避難計画策定を行い、現在、津波緊急避難場所等の整備、防災講話等での自助・共助の必要性等を推進している。</p> <p>しかし、過去に大規模な地震及び津波被害の経験もなく、住民や自治体職員の災害に対する当事者意識が薄くなっている。住民及び行政職員が実際に大規模災害に遭遇した方々の体験談等を知ることによって防災意識の高揚に繋がると考える。</p>
内容	<p>1. 災害はいつかくる</p> <p>災害はいつか自分にもふりかかるという事を考えている人は少ないと思う。ぜひ覚えてほしいのは、自分の中でいつかは地震がくるということをおさえていてほしい。自分たち一人一人が震災時の初動態勢を確立しておき、自分で自分のことを守るという状態になっていれば、被害は少なく済むはずである。ぜひ皆さんも自分が生きている間に震災はくるという自覚を持ってほしい。</p> <p>2. 自助の重要性.</p> <p>自分のことは自分で守るという自助の精神が震災にあたっては一番大事である。自分が助からないと、家族、人の心配は出来ないということを念頭においてほしい。</p> <p>3. 災害はコントロール不能</p> <p>震災は残念ながら人間は予知出来ないし、コントロールが出来ない。そこで大切なことが「減災」である。自然に立ち向かうことは出来ないの、いかに自分を守るかが大事である。次に大切なことは、地域でお互いが協力し守る共助、最後が公助となる。</p> <p>4. リーダーの必要性</p> <p>自助の次に大事なのが、共助、公助と申し上げたが、この二つで大事なことは、リーダーを育てることである。リーダーの資質はいろいろあるが、リーダーはいざという時も落ち着いて大きな声を出さないとだめである。「落ち着け、自分の身を守れ」と大きな声を出して市民に呼びかけることが大切である。リーダーはまた普段から自分を落ち着かせる方法を考えてほしい。</p>

災害時には、人間は「自分は大丈夫」という正常性のバイアスが働くので、リーダーは、みんな逃げろという大きな掛け声でみんなを動かさなければならない。

5. 便利な生活はリスクも抱えている

震災時にあなたがエレベーターにいたとする。エレベーターは、地震が発生すると、大体最寄りの階で止まるようになるが、閉じ込められてしまうリスクもある。エレベーターは一例だが、便利な生活をしていれば、いざという時に裏返しにリスクとなる場合がある。

6. 大震災を体験して

自分が東日本大震災で学んだことは、普段の生活を考えていない人は、いざというときも役に立たないということである。震災を経験すると水の大切が身にしみた。例えば今は、食後に食器をティッシュだけで拭いてみる、いつもより小さなコップで飲んでみるなど普段の生活から実践している。また避難所では、携帯トイレが非常に重要になってくる。一度携帯トイレを体験してみしてほしい。震災に備えて自分の生活を1度見直していただきたい。

7. お互い助け合って

災害時は、お互い様で、若い方から高齢者まで幅広い年齢層の方にそれぞれ活躍の場を与えて、上手く共助を進めてほしい。これからも全国で災害は起こると思う。皆さん、お互いに自分が被災者にならなくても、被災者の隣に寄り添う人になってもらいたい。



開催地より

行政として、公助の限界と自助の意識を住民に対して、継続して呼びかけていくことが必要であること改めて認識することができた。

住民一人一人が防災リーダーになること、地震発生時の行動パターン、日頃から取り入れることができる防災対策、公助の限界と自助の必要性を住民に対して、継続して防災講話等で周知していきたい。

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：宮崎県都城市	
開催日時	平成 29 年 1 月 26 日（木） 10：00～11：30
開催場所	都城市中央公民館
語り部	高橋 進一（千葉県旭市）
参加者	市職員 約 100 名
開催経緯	<p>都城市は、内陸部に位置するものの、南海トラフ巨大地震では相当な被害が想定されており、現在、地域防災計画の改定等にも取り組んでいるところである。一方で、これまで、大きな災害の経験もなく、大規模な災害対応を経験した職員も少ないため、災害の経験を具体的に語り継ぐことが難しく、より現実的な教育等を実施していくことが課題となっている。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>約 300 年前に元禄大震災があり、その時津波が発生した。現在の南房総市である。甚大な被害があり、5,000 人以上が亡くなっている。九十九里浜の沿岸でも 2,000 人以上が亡くなっている。この震災については、古文書に書いてあるだけで、語り継がれることもなく、忘れ去られてしまった。しかし、近年自然災害が多発しているため、安全・安心とは言いきれない。語り継いでいく必要がある。</p> <p>2. 震災発生時の体験について</p> <p>震災の発生時、自分は家にいた。震度 5 強になると、木造の家では、何も出来ない状況である。身動きがとれず、火やガスを止めることも難しい状況であった。自宅は堤防から 50 メートル程度しか離れていないため、海岸の様子を見に行ったら。そこですごいスピードで堤防に津波が襲ってくる様子を見た。引き波もあったため、両親、近所の知り合いの老人を乗せて避難所へ車で逃げた。両親らを避難所に届けた後、自分は、市の行政区の区長していたため、地元住民の安否が気になり一人で地元に戻った。堤防を見ると、津波が迫っていたため、走って逃げた。津波というのは上陸してからのスピードが速い。においも音もなく、大津波が襲ってきた。後方を振り返ると、家が次々に流される恐ろしい光景を目撃した。そしてその日は旭市だけで約 3,000 人の方が、学校、体育館などいろいろなところに避難した。</p> <p>翌日、家に戻ったところ、1 階が全滅であった。当初は途方にくれたが、大勢の方、ボランティアに励まされ、5 月半ばには家の修理が終わった。ボランティアの方々には今でも感謝している。</p> <p>3. 震災から学んだこと</p> <p>今、あらためて震災を振り返ると反省点が多くある。1 点目は、情報を確かめずに行動してしまった点である。防災無線は聞いていたが、それ以外の情報が全くないまま行動してしまった。2 点目は、いざ災害が起きたら、家</p>

族とどこの避難所で落ち合うか、決めていなかったことであった。3点目は、避難する場合に何を持ちだすのか決めていなかったことである。避難時に緊急で持ちだすものは、常に準備しておいたほうがよい。準備するものは、家庭によって違うと思う。薬を服用している方がいれば薬を持ちだすものの中に入れておいたほうがよい。家族で避難場所、避難時に持ち出すものについて、よく話すことが大事である。

また、災害が起きると道路が使えなくなったり、渋滞してしまうことも想定される。避難所に家族が歩いていけるか、自転車か、車の移動になるのか一度確認しておいたほうがよい。また全員が車で逃げると渋滞する恐れがあるので、迂回路を想定し、一度訓練しておいたほうがよい。

4. 自助の重要性

災害時に一番大切なのは、自分の命は自分で守る自助であると思う。誰かが助けてくれるだろうとか、災害が起きたから、行政が何とかしてくれると大勢の方が思っているのではないか。備蓄倉庫が被災したり、職員が被災した場合はどうするのか。自分の命は自分で守らなければならない。そのためには、市民の方、一人一人がそういう意識を持たないといけない。

5. まとめにあたって

災害は、過去に学ぶことが大事である。地域によって様々な特性があるので、ずっとそこに住んでいる方に地域の特性を聞くのも一つの災害対策である。ここは昔、池や沼があった、そこを宅地化した等の情報は避難するうえで大いに役立つ。



開催地より

被災体験の内容を直接聞くことができ、貴重な機会となった。防災担当は被災地に赴き、現地の過去と今を検証し、市の防災計画に反映していきたい。

また、日ごろから地域とのつながりを大切にする防災体制の構築を目指したい。

開催地名：福岡県大牟田市	
開催日時	平成 29 年 1 月 27 日（金） 13：30～15：00
開催場所	大牟田市役所
語り部	山崎 義勝（岩手県釜石市）
参加者	市職員 計 61 名
開催経緯	大牟田市においては、災害による被害が少なく、職員の大規模災害への対応の経験がないこともあり、災害に対する意識に職員間で差が生じている状況である。地震や洪水等による災害が発生した際に迅速かつ的確に対応することができるための意識とスキルの向上を図る必要がある。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>本日は「みんなで築く防災対策」ということでお話ししていきたいと思う。まず東日本大震災で何が起きたか、どういうことがあったかをつぶさに伝えていきたいと思う、そうした中から皆さんに少しでも力になることができればいいと思っている。</p> <p>2. 防災の視点について</p> <p>東日本大震災を通じて、防災対策の原点とは何だろうかと考え、「命を守る」ことではないかと思う。</p> <p>3. 東日本大震災の状況について</p> <p>当日 14 時ごろ、震度 6 弱の地震が発生し、今まで経験したことがない恐怖を感じた。地震がおさまりに、大津波警報が発令され、30 分後に大津波が襲った。一瞬にて 1,000 名の方が亡くなった。全ての電源が消え、通信もとれない状況となった。停電は 1 ヶ月続いた。冷蔵庫が使えないため、冷凍の魚類は相当廃棄をした。ただ、石油基地はオイル漏れがなかったため、火災とか大きな被害、オイルターミナルに石油基地からの被害というのはなかった。</p> <p>4. 阪神・淡路震災との違い</p> <p>阪神・淡路を見ると、死者よりも、傷病者が圧倒的に多かった。東日本大震災を見ると、死者が多くて、傷病者がどちらかというと少ない。これはやはり、地震と津波の違いだと思う。また行方不明者数も阪神・淡路大震災が 3 名で、東日本大震災は 2,500 名にのぼる。これは単なる数字ではなく、意味深い数字で、復興に際して、被災者の家族の遺体が見つかるか、見つからないかで、その後の家族の心のケア、復興というところに相当影響すると思う。</p> <p>5. 事業所での避難行動の違い</p> <p>事例として津波が襲った時のある事業所の避難行動を示したいと思う。A 事業所は、津波警報で全員避難場所に避難し、その代表者が社員を拘束し、</p>

避難場所から動かないよう指示したため、全員無事であった。B事業所は、A事業所と同じく全員避難した。しかし、社員からやはり家族が心配だから自由行動したいという社員からの申し出に、許可してしまった。勝手に動いたことにより、多くの死者が出た。避難所にいたにも関わらず、戻ってしまい、被害にあってしまった。

6. 津波避難計画の重要性

危機管理担当として、やはりこれから必要なことは、事業所ごとが、命を守るために避難計画をしっかりと立てることである。そのためには、自分の事業所の立地条件、業務内容、従業員の数、年齢、男女構成を確認し、具体的な計画を作成することが大変重要である。

7. 自主防災組織の重要性

最近地域のコミュニティーは減少傾向にあるが、災害にあい、孤立地域にいと、動くのは住民である。それを考えると自主防災組織なり、町内活動なりの地域のつながりが今後ますます重要となってくる。

8. 自分の命を守る

防災対策の原点を最初にお話した。もちろん避難所運営も必要だが、やはり最優先されるのは、自分の命を守ることにつきると思う。その命を守るすべは、避難行動である。行政としては、的確な避難情報を発信し、住民はその情報をもとに避難行動が確実に実践できるかかが大きな原点だと思う。



開催地より

大牟田市では、災害対応の経験がほとんどなく、今回の講演を、まずは各部局ごとの対策に生かしたい。

また、平常時からの住民への災害対策に係る研修や訓練もこれまでも多く実施してきたが、より一層、地域の特性に応じて実施することで、避難行動による被害ゼロを目指して取り組んでいきたい。

開催地名：兵庫県尼崎市	
開催日時	平成 29 年 1 月 27 日（金） 14：30～16：15
開催場所	尼崎市立中央公民館
語り部	佐々木 守（岩手県釜石市）
参加者	市職員 約 70 名
開催経緯	<p>発生が危惧されている南海トラフ巨大地震等の対策として、これまで、災害対応図上訓練や学識経験者による講演等、各種の職員防災研修を実施し、職員の災害対応力向上を図ってきた。阪神・淡路大震災から 20 年以上が経過し、災害対応を実際に経験した職員が減少していく中、特に若手・中堅職員に向けて、災害発生時は平常時の業務が完全に停止し、全庁あげて災害対応に尽力しなければならないことなど、災害対応に向けた職員間の意識付けを改めて行う必要がある。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>震災当時、釜石市の防災担当者として活動したが、市内で 1,000 人が命を落とした。自分の無力さと、以前の地域防災計画は役立つものではなかったと感じた。同じ失敗を繰り返さないために、東日本大震災において経験したこと、学んだことを伝えたい。</p> <p>三陸リアス式海岸を持つ釜石市は、津波の常襲地帯であり、市の総合計画においても、防災に関する内容があった。また、子供たちへの防災教育も震災の 8 年ほど前から行っており、防災意識はあった。</p> <p>2. 東日本大震災の状況</p> <p>発災した 3 月 11 日に、私は議会に出席していた。そこに突然大きな揺れがあり、急いで職場に戻り、気象庁の情報をもとに避難放送をした。途中で停電により気象庁の情報を聞き取ることができなくなったが、当初の情報である、高さ 3 メートルの津波が来るという内容で避難放送を続けた。結果的に、津波の高さは 20～30 メートルで、多くの市民が津波にのみ込まれた。</p> <p>その後、3 日 3 晩は役所に閉じ込められ、無力感を感じた。釜石では、死者が 993 人で、今でも 152 人の行方不明者がいる。亡くなった方の 6 割は高齢者だった。地震による倒壊する家より、津波によって流される家が多かった。市役所や学校も壊滅的な被害を受けた。</p> <p>3. 東日本大震災における課題</p> <p>東日本大震災における最大の課題は、事前の取組が不足していたことである。市の取組、住民の避難行動などすべてにおいてこれが言える。</p> <p>避難所の運営においては、想定が不足していた。津波によって指定避難所が流され、食料や水、毛布などの支援物資が届くまで時間がかかった。一方で全国から送られてくる支援物資の振り分けに時間がかかり、避難者の間で</p>

不平・不満がたまった。

4. これからの取組

東日本大震災では、地震で直接被害を受けて命を落とした人と、震災後命を落とした人がいた。自治体は、住民の生命と財産を守る役割がある。防災への取組を考えると、第一に考えるべきなのは、避難所運営でも帰宅困難者対策でもなく、命といかにして守るか、であることだと知ってほしい。命があればその後の大抵のことはどうにかなる。

命を守るために、以下のことを挙げたい。子供たちへの防災教育の充実、住民の防災意識の改革、ボランティアの有効な活用方法、広域連携の充実、災害弱者への対応、それに関連する福祉避難所の設置、女性視点での防災計画の策定、そして震災発生時の記録作成、である。

同じ失敗を繰り返さないよう、防災に取り組んでほしい。



開催地より

被災自治体の防災担当者による実体験に基づいた講演は現実味があり、平時からの防災啓発活動のあり方や、被災後の応急対応の難しさを改めて実感することができた。子供世代への防災教育を充実させることで、大人の防災意識を深めることができるということが、新たな気づきだった。

市職員の防災研修という位置づけだったが、防災担当部局だけでなく、それ以外の部署からも多くの職員が参加したため、平時からの意識啓発に大変有意義な研修となった。

開催地名：静岡県浜松市	
開催日時	平成 29 年 1 月 28 日（土） 13：30～15：00
開催場所	アクトシティ浜松 中ホール
語り部	佐藤 敬一（岩手県山田町）
参加者	自主防災隊防災委員 約 800 名
開催経緯	<p>浜松市では、東日本大震災の教訓を受け、ハード面やソフト面において、様々な防災対策に取り組んでいる。しかし、行政による「公助」には限界があり、今後、地域の防災力をさらにレベルアップするには、「自助」及び「共助」の重要性の認識が必要となる。今年で東日本大震災から 6 年目となり、今後さらに「自助」及び「共助」の取組を進めていくためにも、災害の体験談・教訓などについて講演していただき、防災意識の高揚と地域防災力の向上を図りたい。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は消防署員を退職後、地域防災サポーターとして活動している。今日は大震災当日の体験を語る。</p> <p>2. 大震災後、海岸へ</p> <p>大震災に遭ったのは、退職して 2 年目の 3 月である。妻と自宅の居間にいた。私は定年後に漁業権を獲得し、漁船を 2 隻所有していたので、妻は止めたが地震後海岸に向かった。昔から地域では、大きな地震があれば津波が来るという言い伝えがあり、船を沖に出しに行くことが伝わっている。ところが、海に降りると津波が一旦引き、自分の船は沖へ流された。見ているうちに津波がやって来た。8メートル 35センチの堤防を越えて道路へ落ちた。あわててしぶきを浴びながら山の頂上をめざした。山頂から住宅街を見たが、すでに何も残っていない。がれきの山となり、あちこちから火の手が上がっていた。</p> <p>火災の原因としては、ガソリン引火以外にも、充電器や落とされていないブレーカーに塩水がかかりスパークすることがある。その夜は旅館に 100 名ほどが避難し、一夜を明かした。</p> <p>3. 必要なもの</p> <p>翌日になり、消防員である私は、何が必要になるだろうと考えた。避難生活が長期になるのではないかと考えたからだ。まず段ボール、そして水とトイレの増設が必要であった。水道は出ないので、井戸の場所を聞き、トイレは土を掘ってビニールシートを用い、男性用と女性用を作った。やがて石油ストーブが届いた。ありがたかった。</p> <p>大震災翌日、消防団の車に付いていたアマチュア無線で通信すると、山田町の副町長が傍受してくれた。自衛隊のヘリコプターを要請して、旅館から</p>

皆を降ろしてもらった。ところが、私を含め 10 名ほどが残ったところで、火災が延焼して近づいてきた。山を下りて、親戚宅で 3 日目を過ごした。

4. 遺体捜索

4 日目は遺体捜索をした。がれきの中は遺体でいっぱいである。1,200 名の地域で 800 名が亡くなったのだ。顔を見て遺体を確認し、ビニールシートでお寺へ運んだ。炊き出しがあった防災センターへ行くと、妻と対面した。妻は私が生きているとは思わなかったようだ。

防災センターでは所属していた消防団の分団長の死を聞いた。そして、私が分団長の代わりをすることになった。風呂を作ったりして、2 週間ほどそこにいた。その後、自宅に戻ると、2 階は住める状態で残っていた。大工に修理してもらい、お盆頃まで住んだ。被災体験を通じて、「女性は強い」と実感した。女性は、1 日のことを考え朝から行動することができる。男性は朝からやる気がせず、なかなか行動することができない。

5. 犠牲者を出さないことが地域防災のカナメ

阪神淡路大震災から、さまざまな災害対応のシステムが変わった。ある程度の地震であれば自衛隊の偵察ヘリコプターが飛び、災害時派遣医療チームや消防緊急援助隊が出動する。ボランティアや支援物資も続々と入ってくる。

しかし、地域防災の第一は、まずは犠牲者を出さないことである。自助、共助、公助とある中で、公助が一番最後である。まず自分が助かり、家族を助け、地域の高齢者を助ける、それを第一歩にしたい。



開催地より

今回の話を聞いて、実践に則した自主防災隊等の避難所開設・運営訓練の実施や避難所・緊急避難場所への避難経路の安全確保・再点検とDIG訓練の実施を進めていきたいと思った。またシニア層への防災教育や、防災リーダーの育成に力を入れたい。

浜松市でも現在防潮堤を築造しているが、絶対安全とは言い切れないため、住民にもその旨を伝えていきたい。

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：京都府八幡市	
開催日時	平成 29 年 2 月 1 日（水） 9：30～10：30
開催場所	八幡市文化センター
語り部	佐々木 守（岩手県釜石市）
参加者	市職員 約 59 名
開催経緯	八幡市は、平成 26 年 3 月に「南海トラフ地震防災対策推進地域」に指定され、地域防災計画の改訂やハザードマップの策定などの事業を実施しているが、近年、地震が発生しておらず、震災対応した職員が年々減少している。また、経験者が不足していることに伴い、若い職員への経験伝承についても課題を抱えている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は、大震災当時、宮城県釜石市市役所の防災課長であった。当時の対応や施策について話す。</p> <p>2. 功を奏した防災教育「釜石モデル」</p> <p>釜石市は、津波被害に何度も襲われているので、防災を市の総合計画の柱としていた。特に全国でも有名になったのが子供の防災教育である。それまで大人の防災意識を変えようと講演を行ってきたが、意識は高まらなかった。そのため、大人は諦め、子供への教育をスタートことにした。プロジェクトを推進し、改善を加えている途中で、大震災がきた。その際、学校管理下の子どもは全員助かった。これは「釜石ミラクル」と言って、世界でも有名になった。ただ、当日休んでいた子供は5人亡くなっており、その前に津波で一瞬にして1,000名の命が失われているので、自分たちは悔しい思いをしている。この防災教育については、釜石モデルということで全国でも有名になり、文科省の防災カリキュラムのモデルにもなっている。</p> <p>3. 人的被害を減らすには</p> <p>私が最も伝えたいのは、「災害において人的被害をなくす」ということに尽きる。自然災害には勝てないが、人的被害をなくすことは一生懸命やればできるのではないか。それには、行政と住民が一体となる必要があるが、住民の意識も変えていかなければいけない。避難指示が出たら、すぐ避難するとか、指示が出ていなくても豪雨で川が氾濫しそうだったら逃げるとか、そういった意識である。防災教育を、子供の頃から30年40年と続け、その子供が親になったら、また伝えていく。そのようにして、防災に関する文化をつくっていかねばいけないと思う。</p> <p>4. 広域の連携が大切</p> <p>また防災には、広域での連携も大切である。1つの市町村ですべてを行うのは、無理がある。たとえば川が氾濫した時、山の方の市町村と連携して助</p>

けてもらう、向こうに土砂災害が起きたら助けるといったように、相互に支援し合う関係を築いておくのがよい。

釜石の隣の遠野市は、「津波が来れば沿岸は全部やられるので、遠野が拠点になる」と市長が言い、震災前から訓練をしていた。大震災で遠野は見事に後方支援の基地になった。すべての市町村に、こうした意識や仕組みを作っていかなければならない。

5. 「記録」を残す

私が振り返って反省しているのは、記録を残すべきだったということである。震災時、最初の頃は経過を担当者に書かせたりしていたが、そのうち、そういう状況でなくなった。電気もきていないので、パソコンも開けない。そのような状況だったので、たとえばいつ電気がきたか、また、いつどんな判断をしたかなど、全く記録が残っていない。

災害対応を検証するには、記録が必要である。大混乱していても、映像を映す係を決めておくなどするといいだろう。災害本部は、次から次に仕事が出てくるので、どう判断してどんな結果が出たかということは、後からしか振り返れない。

防災に関する行政には記録が不可欠で、それをもとに検証できなければ、その後のしっかりした準備、対応ができないということにつながる。ぜひ、その点に留意してもらいたいと思う。



開催地より

実際に被災した方の体験談は、非常に説得力があった。避難マニュアルの見直しなどの取組の参考になるのではないかと感じた。

開催地名：和歌山県有田市	
開催日時	平成 29 年 2 月 2 日（木） 13：30～15：00
開催場所	有田市消防本部会議室
語り部	佐々木 守（岩手県釜石市）
参加者	市職員 約 35 名
開催経緯	有田市では、大規模災害が発生していないことから、防災担当以外の職員の防災意識が低く感じられ、実際に災害が発生した場合、応急対策業務に対応出来ない恐れがある。防災意識の向上を図りたい。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>大震災当時、岩手県釜石市役所の防災担当者であった。今後の課題を交えつつ、被災当時を振り返る。</p> <p>2. 波というより“壁”だった津波</p> <p>釜石は、明治以来、津波の被害が多い場所である。震災前は宮城県沖地震が 30 年代に 99 パーセント来るということで、その対応をしていた。市の総合計画の大きい柱の一つに、防災を挙げていた。</p> <p>大震災のときは、議会中であり、すぐに職場に戻り避難指示を部下に命じた。30 分後に津波が来たが、波というより壁であり、家屋をどんどん流していった。車で避難する人などが流されるのが市役所の上階から見えた。それから市役所で三日三晩、閉じ込められて働いた。釜石市の死者は 888 人、152 人がまだ行方不明である。亡くなった方は高齢者が 6 割を超え、住居も 30 パーセントが流失、産業の水産業、カキやホタテの養殖設備も、船も含めて全部流された。</p> <p>ライフラインは全て途絶し、携帯電話が繋がったのが、ちょうど 1 週間後であった。</p> <p>3. 避難所をめぐる課題</p> <p>避難所には、最も多い時で 1 万人が避難していた。私は対策本部を統括していたが、避難所運営にはかなり苦労した。まず、流された避難所がある。指定している避難所がなくなったのだ。次に被害者の把握が全くできない。電話も通じないし情報機器もない。本部と通信できる情報機器は必要である。</p> <p>1 週間くらいしてわかったが、避難所以外の避難所が沢山できていた。ある集落の高台の家などに皆集まっているのだ。また、在宅避難者もいた。津波で家の 1 階が損壊しているが 2 階でどうにか生きられる。電気も何もないけれども、避難所に行って不便な思いをするなら、自分のうちにいた方がいい、そういう家が沢山あった。ペット連れの避難者もあり、問題になった。動物が苦手な人には苦痛になる。これからは、ペットと共に過ごせる避難所</p>

も作らなければならないだろう。また、障がい者の避難も大変であった。自閉症の子供が騒ぐので家に帰る、という人などがあつた。自閉症や体の弱い方のための福祉避難所も必要だろう。その他、市外、県外に避難した人が多くあつたが、こちらは全く把握できなかった。

4. 避難所運営計画の策定

支援物資も全国から来るので、振り分けて1日3回避難所に届けるのが大変だつた。市では、現在の状況がどうなっているかというペーパーを作り、避難所に貼つた。

やはり避難所運営計画というのは事前に策定しておかなければいけないと思う。さらに避難所運営で指摘されたのは、警察署長や消防署長など、地域防災計画の委員がほとんど男性であることだ。それによって避難所計画に女性の視点が欠けていた。たとえば子供に授乳をする、着替えをトイレでするなど、女性には気にするポイントがあるので、そういう点にも配慮しなければいけない。女性の視点からの運営計画を事前に作っておくと思う。



開催地より

実際に被災し、災害対策本部を立ち上げて業務にあつた話を聞くことで、災害発生時の混乱やもどかしさを感じた。教訓をこれからの自治体の災害対応や住民の災害への意識などに、活かしてほしいという思いがとても伝わつた。

市職員の災害への意識付けをはじめ、住民に対しても個人それぞれが日頃から準備する事が重要であると周知していきたい。また、大人はどうしても経験から自分は大丈夫だと正常性のバイアスがかかってしまうので、子供に対して防災教育を行い、そこからその家族や教員に広げていきたい。

開催地名：神奈川県平塚市	
開催日時	平成 29 年 2 月 4 日（土） 14：00～15：30
開催場所	平塚市中央公民館
語り部	片桐 勝二（宮城県仙台市）
参加者	市民 約 394 名
開催経緯	平塚市では、地域における防災力の向上を目指すため、自主防災組織に対する防災訓練等を重点的に行っている。しかし、実効的な組織作りができていない。平成 27 年度は自主防災組織をテーマにパネルディスカッションを行ったが、来場者は少なく年齢層も高かったため、市民に地域における防災の重要性を伝えきれていない。災害の体験や教訓を交えながら話をさせていただき、市民や自主防災組織に対する啓発を一層進めたい。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は、仙台市宮城野区蒲生町で、町内会副会長を勤めていた。その時、体験した大震災と津波、自主防災への心得を語る。</p> <p>2. 住民台帳を持って避難</p> <p>3月11日は、家にいた。ひどい横揺れに、妻と小学校に避難した。その際、2年前に作った全家庭の住民台帳を持ち出し、自転車で町内を回り、避難を呼びかけた。</p> <p>小学校には多くの方が避難してきており、騒然としてパニック状態になっていた。私は大声で冷静になるよう呼びかけた。職員室から防災無線で救助を求めたが、なかなか連絡がとれなくてイライラした。</p> <p>1時間位すると、職員室の方から津波が来ているという叫び声が聞こえた。町内を流れる七北田川を津波が遡ってきた。一気に太平洋側から上流に津波が流れ込み、避難した学校は水没した。私たちは屋上に逃げ、水位が下がるのを待った。2時間位で水が引いてきたので、大人と小学生の子供たちで泥をかいたり、各教室に机と椅子をバラバラにして、皆が休める状態にした。やがて救助の連絡がとれ、自衛隊のヘリが毛布を投下し、体が弱っている者を約 30 名搬送した。私たちは学校に一泊した。婦人防火クラブの方が防災用の備蓄のアルファ米でおにぎりを作り、とても美味しかった。</p> <p>3. 避難所を運営</p> <p>翌日ヘリで救助され、仙台市立八軒中学校で初めての避難所生活が始まった。ここの町内会は防災組織がしっかりしていて、私たちが避難所に行った時には体制が整っていた。私もこの避難所の運営に関わり、いくつかの工夫をした。避難所では健康管理が問題になるので、体調を崩した家族は、部屋を決めて入ってもらった。また、着の身着のまま逃げた人が多いので、ネームプレートを作り、避難所の名前と個人名、血液型、旧住所を書き、首に</p>

ぶら下げてもらった。病院に行っても一般の人より優先して診てもらえ、それをつけることで近隣の方々と知り合いになれ、効用がいくつもあった。

4. 避難所で合唱コンサート

避難所にいるうちに、兄が亡くなったこと、母と姉がまだ見つかってないことを知った。校舎の裏で一人泣きした。翌朝、東から上る太陽を見ながら、避難所の人たちが安心して暮らせるようサポートしようと心に決めた。

八軒中学校は、仙台市でも合唱コンクールのトップレベルである。その合唱部が避難所でコンサートをしてくれた。すばらしい歌声を聞いた。とりわけアンコールは復興に向けて後押ししてくれるような曲であり、先生からもらった CD は私の宝物になっている。

次に移った避難所では、4月、天皇陛下ご夫妻が来られ、被災者一人一人に声をかけていただいた。喜ぶと同時に感動に涙する方もいた。

避難するときに持ってきた住民台帳は、仮設住宅の移動先など、住民の追跡調和ができるように整理した。現在の所在地、連絡先もすべて伝えられるようになっている。

私は平成 27 年 1 月に防災集団移転時に自宅を再建し、新しく来た仲間と町内会を昨年 4 月に立ち上げて、試行錯誤ながら町内会運営をやっている。これからも頑張っていきたい。

5. 災害時になにをすべきか

災害時にまず重要なことは、自分が逃げることである。家族間でどこに逃げるかを話し合っておくとよい。また行政や町内会の防災訓練には、老いも若きもぜひ参加しておきたいものだ。さらに、自分の地域にどのような人が住んでいるのか、災害での死者を軽減すると思う。常に生きることに對して危機管理、危険予知を意識してほしい。



開催地より

避難所の経験談は、通常の講義とは異なり、具体的に起こったこと、備えをよく理解できた。市民の依頼で地震や津波のメカニズムや備えについて話す機会がある。今回の講演で得た情報についても伝えていきたい。

開催地名：長崎県長崎市	
開催日時	平成 29 年 2 月 5 日（日） 13：00～15：30
開催場所	消防局 5 階講堂
語り部	齊藤 賢治（岩手県大船渡市）
参加者	町内会関係者 約 150 名
開催経緯	自主防災組織結成状況が全国平均を下回っている。自主防災組織の活動活性化をするために、具体的な事例紹介を行いたい。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は、大船渡津波伝承館館長をしている。地震・津波の対応について話す。</p> <p>2. 犠牲者の避難動向</p> <p>岩手日報が調査したデータで、東日本大震災の犠牲者の避難動向をグラフ化したものがある。データによると、被害に巻き込まれた場所として、自宅…44.9 パーセント、路上…19.3 パーセント、避難先・避難場所…9.5 パーセント、車の中…9.1 パーセント、職場の中…8.5 パーセントである。</p> <p>自宅が半数近くあるのは、災害に対する思い込み、情報不足が一因である。一般的に、ハザードマップを 100 パーセント信用している人は多い。しかし、ハザードマップは単なる目安である。目安を頼って、何百人、何千人という人が亡くなっているのだが、誰も責任をとってくれない。陸前高田のハザードマップでは、浸水が 30 センチと 50 センチであった。そこへ 15 メートルの津波が来た。いざという時は、とにかく高い場所へ上がってほしい。</p> <p>また行政が指定した避難場所で命を落とすことはあってはならないと思うが、低い土地が避難先に指定されているケースもあり、注意が必要だ。</p> <p>車の中は安心できる空間だが、亡くなった人も多い。車で避難には渋滞がつきものだ。渋滞のとき水に襲われたらひとたまりもない。車内は実はかなり危険である。</p> <p>職場も多い。今まで津波が来たことないという理由で、作業をしていた事業所が幾つもあった。学校の生徒や事業所の従業員は勝手な行動がとれない。リーダーがしっかりした避難行動をとらせてほしい。</p> <p>3. 巻き込まれた状況</p> <p>以下が被害者の巻き込まれた状況である。逃げなかった…40 パーセント、避難の途中…19.4 パーセント、自宅などに残った…5.9 パーセント、帰宅途中…3.5 パーセント、家族や知人を助けに行った…3.5 パーセントである。すべてではないが、これらの数字を足すと約 70 パーセントになる。70 パーセントは、避難していれば助かったかもしれない。私が当時よく耳にしたのは、逃げなかった理由では「今までに津波が来たことがない」。これは、「まさか」という言葉に象徴される。「まさか」と思わずに、「やっば</p>

り来てしまったか」というくらいの心構えを日頃からしてほしい。

また、避難したが、自宅に戻った人も意外と多い。ものを取りに戻る人が多い。年配者では位牌や写真、中高年は、現金、通帳、ハンコ、権利書、若い人は家族を心配してという人が多い。ペットのえさを取りに行き、命を落とした方もいるので、気をつけてほしい。

4. 「正常性バイアス」という落とし穴

「正常性バイアス」という言葉がある。そんな目に遭ったら大変だから、そういうことは自分には及ばない、自分だけは大丈夫、そう思い込むことであり、災害時に逃げない心理もこれに関連している。また、「認知的不協和」という言葉もある。人間の性だそうだが、自分がその場所にいていい理由を探してしまう。例えば、隣の人がいるから大丈夫じゃないか、などと正当化してしまう。このような心理に陥ることがないように、お願いしたい。

5. 役立ったもの

災害時に役立つものとしては、まずアウトドア用品である。ポリタンクや発電機は、ライフラインが途絶した中で、すぐ活用できる。また、大人が通常摂取する水分は一日2リットル以上である。一人1日3リットル分を備蓄しておけば安心である。

また、周囲のコミュニティと日頃から交流しておくことも災害時には重要になる。物は売ってないので、当初は、お金は役に立たない。人との交流で助けられることが多い。

ともあれ、たった一つ覚えてもらいたいのは、「地震が来たら津波が来る。すぐ高台へ避難。そして決して戻らない」。これを伝えるのが、私たちの使命と考えている。



開催地より

非常に大変な状況であった事が伝わってきた。今後、町内の方々の防災意識が増々向上し、さらに充実した自主防災訓練になることが期待される。

開催地名：栃木県壬生町	
開催日時	平成 29 年 2 月 10 日（日） 14：00～16：00
開催場所	壬生中央公民館 会議室
語り部	吉田 亮一（宮城県仙台市）
参加者	自治会長、自主防災組織、女性防火クラブ 約 120 名
開催経緯	<p>壬生町では東日本大震災以降、自主防災組織の設立・活動がより活性化されるよう勧めている。その甲斐もあり、町内にいくつかの活発に活動する組織が増えてきた。しかし、いずれの組織も東日本大震災以降に設立されたもので、組織としては災害を経験していないこともあり、常時、非常時の活動が定まっていないという課題がある。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>もともと私は仙台で保育園を経営していた。保育園では月に 1 回必ず訓練を行う必要があり、そのための防災マニュアルの作成を行っていた。しかし、平成 17 年に町内会の班長となった際に、地域の防災に関する取組がほとんどされていないことを知り、1 年間勉強し、平成 18 年から町内会の総括防災部長として地域防災の活動を開始した。地域防災とは、町内会が行う防災活動を指すのではなく、地域にある保育園から高校・大学や商業施設・企業などすべてを含めた地域全体で取り組む防災活動を指す。</p> <p>2. 地域防災とは</p> <p>自然災害は必ず起こる。自然災害と向き合うには、まさかの事態が起こるといいう危機感を持つこと、想定以上の備えを持つことが必要である。そのためには、考え行動することが求められる。過去の災害を知ること、これから起こりうる自然災害について想定することができるようになる。</p> <p>地域防災部長となった平成 18 年から、防災マニュアルの作成や自主防災組織づくり、防災の勉強会を行い、防災訓練を行った。自主防災組織をつくる際は、町内会の班長を経験した人が持ち回りで自主防災役員になってもらい、年 2 回の防災勉強会と災害時の出動を求めた。この方法により、地域のほとんどの人間が防災役員の経験を持つことができた。</p> <p>地域防災の課題は、①マンション対策 ②高齢化対策 ③防災組織のなり手の育成 ④要援護者の支援 ⑤避難所の運営である。たとえばマンション対策では、防災活動に関する情報の発信などは回覧板ではなくポスティングをするなど一人ひとりが意識を持つよう対策を講じる必要がある。</p> <p>3. 訓練すべきこと</p> <p>防災訓練は災害時を想定したものでなければ意味がない。災害はいつ起こるかわからない。昼は会社勤めの人が地域にいない。そういった場合でも、地域にいる人で災害対応ができるように備えておくことが求められる。防災</p>

訓練を行う際は、消防や市役所に頼るのではなく、全て自分たちで行うことにしている。災害時は、ガスや水道などのライフラインは使えない。まきを燃料として使う訓練を行っていたことで、東日本大震災初日から、温かいご飯を炊くことができた。

また、防災用品について何点か述べる。避難所では段ボールを使用することが多いが衛生面での課題があるため、ブルーシートを使用したほうがよい。排泄に関しては、使い捨ての介護用トイレが非常に便利である。備品としては町内会の防災会費で無線を購入した。普段のイベントから使用して操作に慣れておき、災害時誰でも操作できるように対策している。また、個人の持ち物としては、ヘッドライト・靴下・スニーカー・防犯ブザー・携帯ラジオ・フード付きカップを非常持出袋に入れて、枕元に準備してほしい。それ以外にも、季節によって必要なものは異なるため、自身での対策も必要である。

避難所は自宅が全壊したり、要援護者のためのものであり、地域の人全員に開放しているわけではない。避難所を頼りにせず、それぞれが防災対策を講じる必要がある。

4. 防災教育の重要性

防災教育には、「命を守る防災教育」と「命が守られた後の防災教育」がある。「命が守られた後の防災教育」は非常に大切で、東日本大震災の時も地域の中学生が様々な役割を担った。総務のような仕事をしたり、呼びかけを行ったりと、避難所のお客様ではなく、地域の一員として活躍した。

今回の講演会がこれからの災害対策に役立てばと思う。



開催地より

継続して自助・共助について広めるとともに、学校や関係者を更に防災体制に組み込んでいきたい。自主防災組織や防災士の方を更に養成し、行政主導の防災ではなく、地域住民が積極的に防災に関われるような体制作りをしたい。

開催地名：青森県三沢市	
開催日時	平成 29 年 2 月 12 日（日） 13：30～15：00
開催場所	きざん三沢
語り部	大内 幸子（宮城県仙台市）
参加者	幼少年消防クラブ、婦人防火クラブ、自主防災会、来賓 計 143 名
開催経緯	自主防災組織としての役割はわかりつつも、実際に避難所運営に携わった経験がほとんどない。また、自主防災組織のメンバーは男性が占める割合が多いため、女性の意見が避難所運営に反映されにくいことも考えられる。今回の講演会で女性視点の防災対策について学びを深めたい。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>仙台市宮城野区福住町では、豪雨災害に備えて、平成 15 年から地域防災活動の取組を行ってきた。それが東日本大震災でいかに役立ったかを語る。</p> <p>2. 自主防災の取組</p> <p>宮城野区福住町は、七北田川と梅田川に挟まれ、1980 年代から集中豪雨による川の氾濫で被害を受けており、平成 15 年から本格的な自主防災活動が始まった。「自分たちの町は自分たちで守る」を合い言葉に、危険箇所のマップ作りや、重要支援者・住民の名簿作成、備蓄倉庫の管理などを行ってきた。災害時相互協力協定も震災前から 4 団体と結んでいた。できるだけ行政に頼らない地域力、町内を挙げての災害対策がコンセプトであった。</p> <p>3. 大震災をうけて</p> <p>まず名簿をもとに、重要支援者、住民の安否確認を行った。避難所を立ち上げるのも早かった。当日は 500 人収容の指定避難所に、1,500～1,600 人が殺到する状態であった。災害時に水道が出る場所を把握していたので、それで炊き出しを行った。避難所を開設したとき、いち早く来るのは若者である。彼らは SNS などでも情報を入手するのが早い。避難所に来た若者には、高齢者の介添えなど、手助けを頼むのも有効だった。災害時、指定避難所になる学校の職員と日頃からコミュニケーションをとっておくのも大切である。避難所になった小学校の備蓄倉庫は、以前は 1 階にあったが、30 年前の水害のとき 2 階以上に移動するようアドバイスしたことを実施してくれ、震災時にも無事であった。日常の取組と訓練が災害時に力を発揮すると実感している。</p> <p>4. 震災後の取組</p> <p>災害に関しては、女性の視点に立った防災・減災が必要である。避難所にやって来るのは、高齢者や女性、子供、体の不自由な方たちなど 9 割近くが災害弱者と言われる人たちである。男性ばかりの防災組織では、細かいところまで目が行き届かない。女性のリーダー育成が急務である。震災後、イコ</p>

	<p>ールネット仙台で女性防災リーダーの養成講座があった。また、仙台市では仙台市地域防災リーダーの養成講座が行われた。地域防災リーダーは、防災訓練の企画に関わり、避難所運営に携わり、地域住民の避難誘導をする。養成講座は平成 24 年にスタートし、平成 28 年度は 638 名が修了したが、そのうち女性は 150 名で、まだまだ少ないのが現状である。</p> <p>また、福住町の防災訓練は、独自の防災マニュアル整備や炊き出しの訓練はもとより、消火活動、安否確認、減災に力を入れ、町をあげて行われる一大イベントである。新聞にも「福住町方式」と呼ばれ、自主防災に取り組む姿勢が注目されている。</p> <p>5. 日頃の心がけ</p> <p>豪雨災害・大震災を体験して、住民一人ひとりの日頃の心がけも大切であると感じている。たとえば家族で話し合いをしておくことや、親と離れているとき子供たちはどこへ逃げるか、ペットはどうするかなど、常に話し合っておくとよい。加えて、子供たちの防災教育が重要である。今すぐ災害が来ないとしても、何十年後かにはまたやって来るかもしれない。子供の頃から教え、伝承していかなければ、人の命は守れないと考えている。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>町内会が独自で災害時支援協定を締結していることに驚くとともに、防災意識の高さを感じた。</p> <p>大内講師が町内会で取り組んでいる防災活動の内容を、三沢市内の自主防災組織の活動の参考とし、地域の防災意識向上に活かしていけると感じている。</p>

開催地名：大分県別府市	
開催日時	平成 29 年 2 月 12 日（日） 10：00～11：30
開催場所	別府市公会堂（市民会館）
語り部	草 貴子（宮城県仙台市）
参加者	自主防災会長、防災士、自主防災会員 約 100 名
開催経緯	<p>別府市では、本年 4 月に経験したことのない地震の災害に遭い、避難所で様々な問題が起こった。避難所に行けば安全で、行政がすべて支援してくれることが当たり前と考えている人が多く、避難所の運営が困難であった。</p> <p>市民自ら日常からの避難準備や、避難所とはどういう所なのかを正しく認識してもらいたい。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>所属する市名坂東町内会は、仙台市泉区東部に平成20年に設立した加入数167世帯の町内会である。震災時の活動とその後の取組を振り返る。</p> <p>2. 避難所を想定し集会所を建設</p> <p>市名坂東町内会は、働き盛りの世帯が多いことから役員 8 名全員が女性である。平成 22 年に集会所を建設したが、緊急時の避難場所として設計には防災を強く意識した。地区の指定避難場所が、町内から 2 キロ離れた小学校と遠方だったためである。ライフライン復旧は電気が早いと想定し、オール電化に、勝手口から出入りのできる広々としたロフトつきの備蓄倉庫を持つ 71 平米のフローリングのワンルームとして新設された。</p> <p>また、市名坂小学校区避難所運営委員会も平成 25 年に発足した。委員会では、備蓄倉庫に入れるものについても吟味している。仙台市からは、備蓄米や飲料水、毛布などが支給されているが、避難所で何が欲しかったかを考え、5つの町内会が毎年負担金を出し、多くのものを備蓄している。委員会では、市民センターや児童館など施設との情報の共有化、救護班、情報班、食料班、衛生班など各班の具体的な活動内容の充実化を図っている。また女性ならではの視点を大いに生かす、女性コーディネーター部門も設置した。</p> <p>3. 震災時のこと</p> <p>集会所は、女性と子供が 100 名ほど避難してきた。外は吹雪になり、本当に寒い日であった。石油ストーブをつけるかと問いかけたが、余震を恐れて誰も同意しなかった。暖をとるために家から毛布などを持ち込んだ。避難者の大半は、町内会に非加入のマンションの住民だったが、受け入れた。避難者の中からリーダーを決め、町内会がサポートする形を取った。避難者が顔見知りではないので、毎日午前と午後にお茶会を開いた。大学生と高校生が手伝いを申し出てくれたときには、「寺子屋という形で勉強会を開いてくれないか」と頼み、プリントを手作りして活動してくれた。女の子は子供の子</p>

守りをし、男の子は公園で鬼ごっこをしたり、それぞれ一生懸命に活動してくれた。

4. 震災後の取組

毎年3月には、東日本大震災時、乳飲み子を抱え集会所に避難していた母親に防災講話を依頼して、何が必要だったか、どう感じたかを話してもらっている。また、平成25年12月には、高齢者の方々と一緒に、七北田地区方言防災かるたを作った。防災かるたは、その土地の人ならではの言葉文化と知恵がつまっている。これまで小学校の授業、児童館、寺などで20回以上800人以上の方々が取り組んだ。現在では、小学校、児童館などに常備し、自由に使ってもらっている。

泉区女性町内会長の集いも立ち上げ、女性ならではの視点を生かしコミュニケーションをしている。さらに私は仙台市が養成する地域防災リーダーの第1期生のため、避難所運営の中でいかに人の結びつきを深め、スムーズに運営を担うことができるか、ある意味ではコーディネーターの役割を意識し、今後の役割を考えている。

5. 役立つ支援物資

支援物資への質問があったのでお答えする。ライフラインに関するものは行政から来るので、女性の場合はハンドクリームや爪切り、化粧落としなど、身の回りを整えるものが喜ばれていた。また、インスタントコーヒーも嬉しかった。

支援に関しても、地域防災にしても、自分たちの特性を考えてオリジナルティーのある、身の丈に合ったものを実践していくことが大事だと思う。千年に一度のとてつもない震災を受けて、人間の無力さを感じると同時に、生かされている私たちはしっかりと生きなければならない、それが私たちの役目だと感じている。



開催地より

市内の自主防災会の会長をはじめ、防災士や、自治会役員などが一堂に集まる機会が今までなかったので、今回講演会を開催して、防災について考えるきっかけが持てたことは良かった。市民全体に防災について考える機会を作って、防災意識を向上させる機運を高めていきたい。

開催地名：沖縄県中城村	
開催日時	平成 29 年 3 月 11 日（土） 18：00～19：30
開催場所	吉の浦会館
語り部	齊藤 賢治（岩手県大船渡市）
参加者	村民 約 38 名
開催経緯	<p>中城村は、海拔 10 メートル以下の低地が海岸線から国道近くまで広がっており、沖縄県の調査結果において大半が津波の浸水予想域となっている。村民の防災意識の風化を防ぎ、防災知識を獲得することを目的に、毎年東日本大震災が発生した 3 月 11 日に合わせて防災講演会を実施しているが、年々講演会への参加者が減ってきており、村民の防災意識の風化が見られることが課題である。</p>
内容	<p>1. 津波の恐ろしさ</p> <p>今回の東日本大震災による大津波は非常に高かった。岩手県の大船渡にあった海面から 6～7 メートルの堤防でさえ、ことごとく破壊されてしまった。津波の力がいかに恐ろしいかがわかる。これまでは、津波が堤防を超えるという想定がされていなかったが、現在はより高くて頑丈な堤防を造っている。しかし、新たな堤防はコンクリート製であり、耐用年数が 50 年ほどしかない。過去に繰り返し三陸沿岸に来ている大きな津波のことを考えると、堤防をあてにしてはならない。水の深さや速さは、一見大したことがないように見えても、見くびってはいけない。地震や津波の場合には、まず、高いところにのぼることが最低条件であり、最重要となってくる。</p> <p>2. それぞれが自分の身を守るために、事前に話し合っておく</p> <p>普段から家族の間で話し合いをして、訓練をしておく必要がある。岩手県には、「津波てんでんこ」という言葉がある。これは、一人でも多くの人が助かるようにそれぞれが津波からばらばらに逃げることである。しかし、事前の話し合いがないと、それぞれがしっかりと逃げているか信じることができない。そのため、家庭・職場・自治会・町内会など、皆で話し合いをしておくことが前提条件となる。</p> <p>また、正しい知識を持って適切な判断をすることが、自分の身を守ってくれる。自助こそが、防災の第一歩といえる。</p> <p>3. 避難時の教訓</p> <p>避難時に車を使用する人も多いと思うが、なるべく車は使わないでほしい。車の中からであると水が迫っている様子がわからない。来たのがわかってから逃げても、もう遅い。いち早く車が降りて、安全なところへ逃げるのが重要である。</p> <p>また、一旦高いところに避難したにもかかわらず、自宅に戻って犠牲とな</p>

ってしまった人も少なくない。「今まで我が家に津波が来たことがない」「警報注意報は過去にも何度も出たけれど津波が来たためしがない」と、多くの人々が津波が来ることを想定していなかった。しかし、実際は犠牲となった人がある。警報が解除になるまでは絶対に戻ってはいけない。

4. 普段から防災意識を強く持つこと

世界で発生している震度6以上の地震のうち、日本で発生しているものは10パーセントも占めている。自分の身にも必ず地震がふりかかるのだと認識し、防災意識を強く持つてほしい。

震災後は、電気・水道・通信などのライフラインが立ち切られてしまう。ただ、知識や技能、そして工具があれば解決できることもある。普段の生活の中から意識しておくのが良い。自分の地域ではどのようにライフラインが回復していくのかなども、確認しておいた方が良い。

5. コミュニケーション・共助の重要性、公助への感謝

震災においては、コミュニケーション・共助こそが命を長らえるツールである。東日本大震災直後の3月15日には、混乱した状況ではあったが、近所の人たち同士で声を掛け合ったり、食料を分け合ったりすることができた。大震災時には、一瞬で小売店から食料がなくなった。お金というものが全く通用しなくなってしまった。そういった時に、近所の人たちと物々交換を行っていた。

全世界からのボランティア・支援・声援などの公助によって、だんだんと大船渡も復興しつつある。心から感謝している。大船渡には縁もゆかりもない人たちが、懸命に頑張ってくれている。そういう姿を見て、「自分は一人ではない」「自分も頑張らなくてはいけない」と、勇気と元気をもらっている。



開催地より

今後、本村の防災意識の向上に向けて、住民に周知できればと考えている。実際に震災を経験されただけあって、とても現実的な話で、講演を聞きに来た方からの質疑応答の内容なども含め、行政としても大変勉強になった。

災害伝承 10 年プロジェクト

開催地名：愛知県東浦町	
開催日時	平成 29 年 3 月 11 日（土） 13：15～14：45
開催場所	東浦町文化センター
語り部	平山 和哉（福島県いわき市）
参加者	自主防災会役員、東浦防災ネット会員、消防職員、行政職員等 約 140 名
開催経緯	東浦町は、昭和 34 年の伊勢湾台風や平成 12 年の東海豪雨で、大きな被害を受けたが、月日の経過とともに被害の記憶が風化している。また、発生が危惧されている南海トラフ地震の際の津波の来襲による甚大な被害が想定されている。自主防災会やボランティア団体の協力を得て、防災訓練の実施と、防災知識の普及に取り組んでいるが、多くの住民は災害に対する危機感が低いので、東日本大震災の体験や教訓を広く住民に伝えるなど、防災意識を向上させなければならない。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>自分が所属していた消防本部でのこと、消防庁の対応などについての話と、教訓、体験、その後の課題、対策について話をしたいと思う。</p> <p>2. 津波の恐ろしさについて</p> <p>東日本大震災で、津波の恐ろしさを初めて知った方もいると思う。3月11日、14時49分に福島県に大津波警報が発令された。この予測は当初3メートルであったが、10分、15分、と経つたびに6メートルに修正され、その後10メートルに修正された。いわき市の最大の津波は6メートルを記録した。津波というのは一番最初が高いというイメージを持っているかも知れないが、津波はその後の第2波、3波と後のほうが大きく高くなる。そのため、津波注意報、津波警報が出ているうちは海に絶対近づかないでほしい。東日本大震災時の津波は、広範囲で沿岸部を襲い、生存者の救出活動、行方不明者の捜索は非常に困難を極めた。いわき市の死者は約460名であったが、その9割が津波によるものであった。</p> <p>3. 救急活動について</p> <p>当時私は、消防本部の司令室で119番の受信の仕事をしていた。強い揺れが発生し、激しくなり、直感でこれはまずいと思い、機械にしがみついた。揺れが治まった直後から一斉に指令システムの許容範囲を超える119番が朝までずっと鳴り響いていた。建物が倒れた、水道管が破裂した、地面が裂けたとか傾いたとかそういった通報が、どんどんかかってきた。そして救急車の数が足りなくなっていく。いわき市では15台の救急車があるが、全て出勤することとなった。それでもどんどん足りなくなった。1時間かけて市内全域を調査した結果、被害は沿岸部に集中していることが分かった。救急車の需要と供給のバランスが崩れたため、救急救命センター、消防本部な</p>

ど各関係機関と協議し、軽傷の方はとりあえず自分で何としてもらい、重症の方で助けられる方に注力するようにした。

4. 火災について

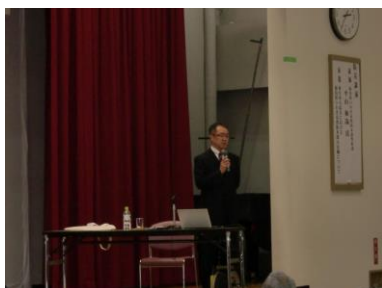
いわき市では、大震災により3月11日には7件、1週間で合計16件の火災が発生した。一番大きな火災について、なぜ火災が拡大したか要因はいくつか考えられる。一つ目の要因として、津波が繰り返し襲ってきたため、消防隊が現場に近づけなかった。二つ目の要因として、震災の影響で家と家の間に瓦れきが大量に入り、瓦れきに火が移り、家から家に燃え移ってしまったことが考えられる。津波で濡れているから燃えにくいだろう、燃えないだろうという考えは通用しない。濡れていても、火はどんどん燃える。

5. 課題と教訓

災害の教訓を活かし、職員の災害対応の改正を行った。当時マニュアルはあったが、誰が何をすべきか具体的なことまで書かれていなかったため、組織体制を明確化した。また、避難所における対応は、職員が1人、2人では対応出来ないため、大幅に職員を増員した。情報伝達についても強化をはかった。物資、燃料についても、備蓄はしてあったが、道路がふさがり運べないという問題があり、あらかじめ各避難所に分配し備蓄して、量も大幅に増やすことにした。原子力発電で火災が発生した場合、とにかく遠くに逃げる必要がある。車での避難は渋滞を引き起こし、逃げ遅れる可能性がある。自動車での住民避難計画は、有識者、警察期間と協力して検討中である。まだまだ課題は多い。

6. 命を守る大切さ

震災が発生し、目の前に水平線の活断層があり、すぐにも津波が来る場合、経験上とにかく逃げてほしい。1メートルでも10センチでも高い場所に避難するしか命を守る方法はない。とにかく自分の命を守る行動をとることだけを考えていただければと思う。



開催地より

行政職員として、住民の命を守るため発災直後の取るべき行動について、職員ひとりひとりが行動できるよう認識する必要があると強く感じた。

開催地名：愛知県半田市	
開催日時	平成 29 年 3 月 21 日（火） 15：00～16：00
開催場所	半田市役所
語り部	佐藤 敬一（岩手県山田町）
参加者	市職員、消防署職員、ボランティア団体関係者、市民 約 110 名
開催経緯	半田市では、南海トラフ巨大地震等大規模災害の発生が懸念されており、地域における自主防災組織や小中学校等の子供達が災害に備えて、さまざまな防災活動に取り組んでいる。しかし、この地方は昭和 19 年の「昭和東南海地震」以降、幸いにして強い揺れを経験しておらず、大きな災害を直接体験した方が少なく、災害の体験談や教訓を伝えていくことが困難であるため、「担い手」・「つなぎ手」となるべき人材の育成が課題となっている。
内容	<p>1. 津波と火災につつまれた山田町</p> <p>消防署員を退職後、岩手県で地域防災サポーターとして活動している。東日本大震災時は、妻と自宅の居間にいた。海岸に自分の船を所有していたため、妻の制止を振り切って、船を確認しに行った。昔から山田町では、大きな地震があれば津波が来るという言い伝えがあった。実際、8メートル 30センチの堤防を越える津波がやって来た。山頂から住宅街を見たが、すでに何も残っておらず、町はがれきの山となり、あちこちから火の手が上がっていた。その夜は旅館に 100 名ほどが避難し、一夜を明かした。</p> <p>2. 避難時の状況</p> <p>大震災の翌日、何が必要になるだろうと考えた。避難生活が長期になるのではないかと考えたからだ。ライフラインは絶たれており、水の確保とトイレの増設が必要であった。水道は出ないので、井戸の場所を聞き、トイレは土を掘ってそこにビニールシートを敷いた。凍えるような寒さだったが、石油ストーブが届いた。ありがたかった。</p> <p>また、消防団の車に付いていたアマチュア無線で通信すると、山田町の副町長が傍受してくれた。ヘリコプターの応援要請をした。ヘリコプターによる避難活動は順調に行われていたが、途中で火災が延焼して近づいてきてしまい、中断を余儀なくされた。</p> <p>3. 生き残った者としての活動</p> <p>震災後 4 日目には遺体捜索をした。がれきの中は遺体でいっぱいだった。顔を見て遺体を確認し、ビニールシートで寺まで運んだ。炊き出しがあった防災センターへ行くと、妻と対面した。妻は私が生きているとは思わなかったようだ。</p> <p>防災センターでは所属していた消防団の分団長が被災したということを知った。そして、私が分団長の代わりをすることになった。炊き出しを行っ</p>

	<p>たり風呂を作ったりして、2週間ほどそこにいた。その後、自宅に戻ると、2階は住める状態で残っていた。大工に修理してもらい、お盆頃まで住んだ。</p> <p>4. 生きる希望と力を持って</p> <p>山田町は過疎が進んでいる。若い人もいない訳ではないが、大半が高齢者となっている。そんな町に津波が来た。津波だけでなく火災も起こった。ライフラインも悲惨な状態で、手の施しようがない。</p> <p>またどんな大地震がいつ来るかわからないが、いつか必ず来る。今、また堤防を造っている。鉄道も整備し直しそうとしている。元気な子供ともたくさん話をした。生きる希望を感じることができる。生き延びることが何よりも大切である。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>実際の避難時の行動や、避難所立ち上げ直後の状況などを事細かに説明してもらい、その状況を思い浮かべることができた。</p> <p>避難時を想定し、日ごろの防災訓練や市が主催の防災訓練等で行う避難訓練で活用したい。また、避難所運営訓練を行う中で、今回の講座で聞いた内容を使ってみるなど活用していきたい。</p>

開催地名：熊本県天草市	
開催日時	平成 29 年 2 月 16 日（木） 14：00～15：30
開催場所	天草市民センター
語り部	京 英次郎（宮城県仙台市）
参加者	各自主防災組織関係者、行政区長 約 250 名
開催経緯	<p>天草市は、自助、共助、公助によるバランスのとれた総合的な防災体制の構築を推進しており、自主防災組織等が主体となって実施している地域の避難路整備や、防災訓練への支援に取り組んでいる。しかし、自主防災組織が結成されていない地域や、活動体制が確立できていない組織もあり、結成促進と活動活性化が課題となっている。また、南海トラフ地震防災対策推進地域に指定され、防災対策等の周知を行っているが、近年、地震・津波による災害は発生していないこともあり、現実味が薄いことが課題となっている。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は震災当時、消防職員をしていた。その経験を踏まえて松竹梅という 3 つのコースを切り口に、防災への取り組み方を伝えたい。</p> <p>2. 防災に取り組む「松竹梅」コース</p> <p>東日本大震災のとき、仙台市民の 6 割が「やっぱり地震は来た」と思ったという。いつかは来ると想定しながら、日頃は意識に上らせていないのが、地震災害である。地震対策の梅コースは、ただ、「災害はやって来るもの」と意識を変えるだけで対策になるのである。予期していないと人は無防備になるが、気持ちの底に「また来る」と思っていると、初動態勢が変わってくる。</p> <p>竹コースとは、家具の転倒防止や割れたガラスの落下防止など、具体的な家の中の対策を講じることである。</p> <p>そして松コースは、さらに抜本的な対策である。今日は熊本県の天草市での講演だが、平成 28 年 4 月の熊本地震で震度 5 などひどく揺れた土地の人の中でも、地盤についてのデータを持ったり、その地区を諦めて引越しをするなど、根本的に手間と金をかけるのが松コースである。</p> <p>3. まず、「自分の身を守る」</p> <p>地震が起きたとき、とっさにやるべきことは、家族の安否確認や避難所に行く心配ではない。それは二の次であり、まずは命を守ることである。転倒の恐れのある家具から離れ、机の下に身を隠す。それを揺れがおさまるまで続ける。</p> <p>「自助・共助・公助」があるが、まず心がけるべきは自助である。自助・共助はあてになるが、市役所など公助は 1 日か 2 日後でないにあてにならないと肝に銘じる。</p> <p>4. リーダーは声を出す</p>

非常時、防災リーダーは、声を出して皆に呼びかけることを心がけたいものである。人間には「正常性のバイアス」があり、非常時には声が出にくくなる。「落ちつけ」と呼びかけるだけでもいいので、いつでも声を出せるようにしておきたい。

5. 手を出せるかどうか判断する

火災現場でも、事態が進んでから手を出すと、自らの命を落としてしまう。また、救助のプロの活動を妨げることにもなる。リーダーに望まれるのは、手を出していいかどうか、瞬時に判断してそれを伝えることである。

昔は地震のとき、火を使っていたら、「まず火を消せ」と言われたが、今は言わない。調理の火の前にいたとき、手を出すとやけどをするからである。

これは津波にもいえることであり、津波の場合は、とにかく逃げるのが鉄則である。東日本大震災で津波注意報が出たとき、沿岸の人で軽視している人もいた。それで逃げ遅れて亡くなった人が大半である。2万人近く亡くなったが、99%は津波による被害である。

津波の力を知ってほしい。津波注意報で30センチの津波は、人が立っているとき時速10kmの車がパンとぶつかったくらいのエネルギーである。横倒しになってしまうが、津波には力があるので起きられない。30センチの津波でも、ばかにならないことを覚えてほしい。

「つなみてんでんこ」といわれる。親子であつてもばらばらに逃げろという意味である。これは薄情なようだが、「親子で死ぬよりは、一人でも助かれよ」という意味もある。



開催地より

防災部局としては、住民の命を守ることをまず考えるが、自分の命を第一に考えろとの言葉が印象に残っている。天草市は周囲を海に囲まれているため津波に関する関心が高い。今回の講演の内容を地域の訓練などで伝えていき、住民の防災意識の向上につなげていきたい。

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：栃木県足利市	
開催日時	平成 29 年 2 月 17 日（金） 13：30～15：00
開催場所	足利市民プラザ
語り部	山崎 義勝（岩手県釜石市）
参加者	市職員 約 80 名
開催経緯	<p>本市では、昭和 22 年のカスリーン台風以来、大きな災害がなく、市職員の防災意識は必ずしも高くない。関東東北豪雨のような災害が再度発生し、本市が直接影響を受けた場合には、大きな水害が発生することが想定され、首都直下地震が発生した場合にも被害が予想されるため、より一層の職員の防災意識の向上が望まれる。職員研修において災害時の参集意識向上などに取り組んでいるが、災害対応の実際を伝えることが困難であることが課題である。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>行政職員として宮城県釜石市で東日本大震災に罹災、当初からどのような活動を行ったか、あきらかになった課題などを伝え、生きた教訓としていただきたい。</p> <p>2. 1,000 人が一瞬で津波の犠牲に</p> <p>東日本大震災で、釜石市の私がいた場所は震度 5 弱であった。その直後に大津波警報が出され、30 分後に 10 メートルの津波が来た。4 万人の市民のうちほぼ 1,000 人が一瞬にして流された。東北区域全体では、約 2 万人の方が一瞬のうちに亡くなったのである。</p> <p>3. 情報発信やボランティア対応</p> <p>市役所では当初から情報発信を請け負った。市長が情報発信をするが、市長だけでは足りない。部長、課長が手分けして今の状況はどうか、情報提供をして歩いた。災害ボランティア受付も開設した。これは大変だった。健康管理、作業分担、あるいは宿泊対応などを、担当した社会福祉教育課が行った。</p> <p>4. 行政職への問題提起</p> <p>行政職員が直面した課題ということで、一つの問題提起として聞いてほしい。防災計画は本来、部課、係ごとで役割分担を決めているものである。しかし釜石市の場合、認識不足の部分があった。自分たちがどう動くか指令がないと動けない。日頃から自分たちの部署の防災業務を把握しておく必要があると感じた。</p> <p>また、今回のような大規模災害時は、職員が自分の判断で行動しなければいけない。だから防災訓練などで事前にシミュレーションしておくことも重要だ。</p>

たとえば、被災者が物資を欲しがっているが、お金もない、しかし手に入れなければならないという時はどうするか、また、救急車も来ないところで死に直面しているけが人の搬送をどうするか、そうした複数の大きな問題と直面する。

また、人手不足は必ず起こる。やはり日頃から課、係が危機管理を中心として協力体制を築いていないといけない。

さらに、情報の錯綜も起こる。流れている情報をうのみにせず、しっかり管理することが大切である。

また職員にとっては業務継続も課題である。自分の家族が行方不明である時、どう業務にあたるか。自身も被災者であるが、市民のために業務を遂行しなければいけない。心の葛藤はあると思うが、そうしたことも頭に入れておいてほしい。

5. 地域のつながりが重要

津波で甚大な被害を受けた箱崎地区という区域があるが、そこで起こったこととお話する。震災後、役所も自衛隊も行けなくなり、孤立地域となった。そこで、瓦れきの撤去は地元の建設業者を呼び、人命の救助救出、炊き出しも地元の住民がやった。寺に遺体を安置するのも住民であり、皆、顔見知りであることから、住民の生態表を作った。それが自衛隊や消防の遺体捜索にも役立った。

このように、行政がやるべきことを住民がやっている。というより、やらざるを得ない状況になるということだ。私は、自主防災組織の充実強化というのは、そこにあるのではないかと思う。地域の顔が見えているかどうかで、全く成果が違ってくる。万が一、自主防災組織がなくても地域のつながりがあれば、やっていけるのではないかと思う。



開催地より

実際に大災害を経験し、行政職員という立場で災害対応された講師の話は説得力があった。市職員としての役割と責任を一人一人が自覚し、全庁的に防災について考え、取り組んで行きたい。

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：埼玉県蕨市	
開催日時	平成 29 年 2 月 17 日（金） 14：00～15：30
開催場所	蕨市立旭町公民館
語り部	佐々木 守（岩手県釜石市）
参加者	埼玉県南 4 市まちづくり協議会防災・防犯対策専門部会員 約 15 名
開催経緯	<p>国の地震調査研究本部・地震調査委員会が発表した長期評価では、M7クラスの地震が今後 30 年以内に発生する確率は約 70 パーセントであるとされており、災害対応のため、地域防災計画の改定や業務継続計画の策定に取り組んでいるところである。</p> <p>しかし、東日本大震災から 5 年が経過し、経験者の減少や首都直下地震による被害予想の大きさなどからより実効性のある計画策定が課題となっている。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は、岩手県釜石市役所の防災課長として、大震災では災害対策本部を統括した。津波の実態と今後の課題を語る。</p> <p>2. 警察、消防署も機能不全に</p> <p>釜石市は津波にたびたび襲われ、明治 29 年、昭和 8 年、昭和 35 年と大きい被害を受けている。市の総合計画では防災を柱に掲げ、震災前から取組を進めていた。とてつもない大きい揺れに襲われたのは、市議会の途中である。すぐ防災行政無線で、津波の避難指示を出した。屋上に出たら、釜石中が湖のようであった。それから市役所に三日三晩閉じ込められ、情報収集などさまざまな緊急業務に追われた。市の施設の主なものはほとんど流され、警察署、消防署も海に近く、機能不全になった。市役所の災害対策本部の自家発電も失われ、他の市の施設に移り、対策会議をした。</p> <p>3. 対策本部の前線</p> <p>対策本部の前線となると、想定していない仕事が沢山出てくる。遺体安置所を作り、遺体を運ぶ人を探した。遺体搬送をする部署はないので、教育委員会の職員に遺体搬送させた。少し落ち着くと、被災者を入浴させないといけない。また、津波であるため、流出物がある。アルバムやお金など、自衛隊や警察が拾ってきたものを返す作業にも追われた。</p> <p>困ったのは、トイレである。市の下水処理センターが流されて、散々な状態になった。町の至るところに仮設のトイレを設置した。</p> <p>膨大な仕事を、限られた職員数でやらないといけない。全国から職員が来てくれたので、最初は避難所の運営をしてもらった。</p> <p>一方、県や国に助けてもらったという感覚が全くない。一番助けてもらったのは、従来から仲のいい姉妹都市や災害応援協定を結んでいた都市であ</p>

る。それよりは、交流する都市を多く作った方がいいと思う。

今の災害基本法とか救助法では、自分の市町村が被害になっても、その市町村で対応しないとイケない。それは無理だと、今回の津波ではっきりとわかった。隣の大槌町では所長以下職員も約 40 名亡くなっているし、陸前高田市でも職員が 50 名亡くなっている。職員自体も被災するのだ。だから県のすべきことは、迷わず人を 100 名くらい送り、協力してくれることではないだろうか。

4. ハザードマップ作りの注意

ハザードマップを作っている自治体も多いと思うが、今回の地震では、市のハザードマップで津波が来ない、とされた地区の人が亡くなった。ハザードマップを見て、うちは安全だからと家に残っていたところ、全員亡くなった。ハザードマップはあくまでも目安だということを教えていかないと、信じる人が沢山いて、むしろ危険である。

5. 目的は「人を死なせないこと」

私たちのやることは、とにかく人を死なせない対策をとることだ。避難所の運営や仮設住宅など、なんとでもできる。とにかく災害で、人を死なせてはいけない。行政は、人を死なせたら負けだ。これだけ沢山の方が亡くなったことに、防災担当者として、大きな責任と無力感を感じる。

皆さんの使命は、市民の生命と財産を守ることだ。その一言を伝えたいと思う。



開催地より

講演では、平時の取組がいかに重要であるか、命を守り切れなかった講師の後悔を強く感じた。日頃の災害対策が、災害時の人命を左右するという意識を持ち、より多くの方が、より真剣に、防災対策に取り組まなければならないことがよくわかった。

今後も県南 4 市防災防犯対策専門部会の連携強化に努め、講演内容や、各市の共通課題などを協議し、防災対策の推進に活かしていきたい。

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：岐阜県岐阜市	
開催日時	平成 29 年 2 月 18 日（土） 14：00～16：00
開催場所	岐阜市文化センター
語り部	舞木 健二（福島県田村市）
参加者	自主防災組織役員 計 22 名
開催経緯	南海トラフ巨大地震の発生が危惧される中、実際に地震を含めた大規模災害を経験した者は少なく、防災訓練・研修における体験・教訓の伝承は重要な課題である。地域住民の防災意識の向上により、家庭や地域での備えを充実させたい。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は震災当時、消防署員だった。体験した東日本大震災と福島第一原発事故、その後の現状を伝えたい。</p> <p>2. 福島第一原発で震災に遭遇</p> <p>私は勤続 19 年の消防署員である。東日本大震災のときは、福島第一原発で仕事をしていた。体験したことがない大きい揺れに、作業を中止して帰宅することになった。管轄区域の安否確認をした後、自宅に戻ったが、電気が止まっている。家庭用プロパンガスと石油ストーブが役立った。その時点で、大熊町、富岡町、原発から 10 キロ圏内の人間には避難命令が出ていたが、電気が来ていないのでわからなかった。</p> <p>3. 避難してから</p> <p>原発が水素爆発を起こしたので都路町には大熊町と富岡町から 888 名が避難してきた。しかし都路町からも移動することになり、船引町の小中学校の体育館、デンソーという企業の建物などに避難した。持っているのはサイフくらいだった。食事は避難が長引いてからは、各自治体から支援されるもの、パンと水、お茶を一日 3 回いただいた。そのうち航空自衛隊の野外炊飯部が到着して、カップラーメンを出してくれ、4 日ぶりに温かいものを食べた。</p> <p>支援物資で食べ物を配るときには、避難している人をグループ分けし、順番を変えて取りに来てもらっていた。そうでなければ不公平になる。</p> <p>学校の体育館には自衛隊の慰問楽団が来て、子供たちやお年寄りが好きな曲を演奏していた。私たちが避難所で活動するには、消防自動車で、緊急のワッペンをもらい、ワッペンを見せれば田村市の中のガソリンスタンドでは軽油を入れてくれた。物をとりに行ったりするのに消防自動車を使用した。このガソリンも入ってきたのは 4 日後くらいである。なぜ来ないかと聞くと、地震があつて、原発は水素爆発起こして、運転手が来たくないとのことだった。ようやくローリーが来て、お昼ぐらいには給油できるのではないかと</p>

という情報が流れた。するとスタンドに行列ができた。行列は2キロあり、給油までに4時間かかった。

4. 現状

その後、4年前に、私たちの地域は避難解除になり、自宅に戻った。私は農業をやっているが、最初の2年間は米づくりもできなかった。米をつくっても、放射能があつて売れないからつくらないでください、といわれた。2年目の秋口、来年、米を作るのであれば代かきして田んぼを維持してくださいと伝えられた。冬になる前に代かきをして、3年目からつくり始めて、ことしで4年である。4回米を売って、全袋を検査しているが、放射能は出ていない。等級も1等で、放射能の検出もなしということで農業を継続している。



開催地より

避難所を運営するにあたって、掃除当番制導入、物資配布の順番組み換えなどの避難者に不公平感を与えない工夫や、体を動かすことを目的とした朝のラジオ体操の実施などは避難所運営の主体となる地域住民にぜひ参考にさせていただきたい事例であったので、紹介していきたい。

開催地名：富山県小矢部市	
開催日時	平成 29 年 2 月 18 日（土） 14：00～15：30
開催場所	小矢部市総合保健福祉センター
語り部	吉田 亮一（宮城県仙台市）
参加者	自治会関係者、自主防災組織関係者 計62名
開催経緯	<p>小矢部市では、市の総合防災訓練においても、「共助」の重要性から地区住民が主体となった避難訓練、避難所運営訓練を取り入れ、行っている。</p> <p>しかし、人口減少や高齢化が進行しており、高齢者、障害者等避難行動要支援者に対する地区住民による避難誘導や避難所での支援が課題となっている。</p>
内容	<p>1. 地域防災を取り組むきっかけ</p> <p>私は、保育園を経営している。保育園では、月 1 回必ず訓練を行う必要がある。そのため、保育園の防災マニュアルを作成していた。平成 17 年より、町内会の班長をした際に、地域の防災について、何もできていないことを知った。保育園で防災について取り組んでいることもあり、平成 18 年から防災の総括防災部長として地域防災の活動を始めた。</p> <p>2. 地域防災とは</p> <p>自然災害はなぜ起きるのか。それは、地球が活着ているからだ。自然災害も私たちと同等の立場であり、共存しなければならない。そのため、私たちは、自然災害について、まさかが現実にかかる時代だと危機感を持つこと、想定以上の備えを持つことが重要である。</p> <p>地域防災とは、町内会の行う防災を指すものではない。町内会があり、地区があり、幼稚園・保育所・小中学校があり、商店、企業の全てをひっくるめた地域全体の防災が地域防災である。</p> <p>地域防災の活動として、平成 18 年から 5 年間かけて計画を遂行した。はじめに、防災マップを作成した。ハザードマップの形ではなく、訓練の時も本当に災害が発生した時にも使えるマップである。さらに、防災マニュアルの作成と自主防災組織づくり、防災の勉強会を自分達で行った。また、指定避難所の打ち合わせや要援護者対策を防災訓練の実施と共に行った。</p> <p>3. 防災訓練</p> <p>防災組織をつくる上で、問題となるのが、高齢化である。担い手が少なくなり、自然消滅してしまうことがある。対策として、町内会の班長をした人に自主防災委員になってもらった。負担は少なく、年 2 回の防災勉強会と災害時の時に出てもらおう形であったため、年々参加者は増えていった。</p> <p>防災訓練は、昼と夜の場合を分けて行っている。仕事をしている人は、昼はいない。そういった場合にも地域にいる人だけで対応をしていく必要がある</p>

	<p>るため、想定を分けて行っている。防災訓練を行う際は消防や市の危機管理課には頼らず、自分たちで全て行うようにしている。実際の想定をした訓練は大切である。炊き出しは、まきを燃料として訓練をしている。実際、東日本大震災時に、プロパンガスが届けられたのは、発災5日後であったが、発災初日から、まきで温かいご飯を200名全員に配ることができた。</p> <p>非常持出袋に、6点の防災用品を入れてほしい。ヘッドライト、靴下、スニーカー、防犯ブザー、携帯ラジオ、フード付きカップである。ヘッドライトは、両手をあけておくことができる。ホイッスルでなく、防犯ブザーである理由としては、けがをした時、防犯ブザーであると、電池が切れるまで鳴り続けるため、生き埋めや下敷きになっても、鳴らし続けることができる。それぞれ6点は重要な役割がある。</p> <p>4. 防災教育</p> <p>東日本大震災の避難所運営の中で、学生が大きな役割を果たした。中学生は、避難所に畳を敷き詰め、炊き出しの際は器を持って並ぶのではなく、みんなに配給を行った。また、小学生や大学生もプールの水をポリタンクに入れて、地域の人之家に運んだ。防災教育は、命を守る防災教育だけでなく、命が守られた後の防災教育も重要である。</p> <div data-bbox="467 1079 849 1361"> </div> <div data-bbox="906 1079 1287 1361"> </div>
開催地より	<p>具体的な内容で、自治会・自主防災会にそのまま持ち込める要素が多かった。住民だけでなく、行政職員にとっても防災計画等を改良するヒントが多かった。避難所運営訓練等で、住民により実感してもらえそうな企画をしていきたい。</p>

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：神奈川県大磯町	
開催日時	平成 29 年 2 月 18 日（土） 10：00～11：30
開催場所	大磯町役場保健センター 2階研修室
語り部	横山 幸雄（岩手県釜石市）
参加者	自主防災組織関係者、地区役員、町民、その他 約 80 名
開催経緯	東日本大震災から 5 年が経過し、大磯町においては最近では大きな災害に見舞われておらず、震災の風化が懸念される。については、災害対応力の強化や防災意識の高揚と災害伝承が課題となっている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>宮城県釜石市の民生委員である私は、住民救助の際、津波に流され負傷した。現在も仮設住宅に住みながら、復興に向けて活動している。活動内容と震災時の状況を伝えたい。</p> <p>2. 津波に流される</p> <p>大震災当日は、海沿いの老人クラブのビルの 2 階にいた。津波から逃げるため車で帰宅途中、病気の男性を搬送しようとするうちに津波が迫り、流された。水中を泳いでいるうち、電柱につかまり命をつないだ。水が引いたあと自宅に戻ると、妻も無事だったが、津波の第三波に襲われた。電柱につかまりしのいだが、手に釘が 6 本刺さり負傷した。</p> <p>夫婦で避難所に行ったが、破傷風のおそれがあるため、ヘリコプターで県立病院に搬送、診察されて事なきを得た。しかしその後も新日鐵の体育館などの避難所で暮らし、現在は仮設住宅に住んでいる。</p> <p>3. 運命を分けた人々</p> <p>そのとき私は交通指導員もやっていた。津波から逃げるとき、道路で交通整理をしていた委員の知り合いがいる。しかし津波に背を向けてやっていたので流されて亡くなった。私に逃げろと言った知り合い 2 人も亡くなった。私は民生委員として 170 世帯ぐらい担当していたが、その中で 29 名が命を落とした。</p> <p>このたびの災害で、釜石地域で亡くなった方は 50 歳以上の人が多い。今まで来たことのないものが来るわけではないという思い込みがあったからである。釜石には、群馬大学の片田敏孝先生がたびたび来訪し、奥尻やフィリピンばかりでなくここにも津波は来るのだ、と説かれた。誰も本気にしなかったが、あまり熱心におっしゃるので、教育委員会にかけ小学校、中学校で先生の話聞いてもらった。今回は、そのことが生きた形になった。</p> <p>4. 必要なのは道路</p> <p>こういう災害時に最も必要なのは道路であると思う。道路ができないことには救助もできず、後の整備もできない。道路も復旧しつつあるが、多くの</p>

人が使う国道などは整備を急いでほしい。

5. 津波からの避難

津波からの避難は、岩手県では「津波てんでんこ」が基本だといわれる。ただ、私が重視しているのは、震源地がどの方向か、ということだ。半島があつて湾があり、震源地が真正面だったら奥までやられる。チリ地震のときは、大船渡が被害を受けた。当時、陸前高田の被害は少なかったが、今回の被害はひどかった。それは震源地の場所が関係しているのだろう。

私は去年、奥尻まで行って、10年たってどれくらい復興したかと勉強した。津波はぶつかってから27メートルも立ち上がっている。だから、「津波はここまで高くないだろう」と考えずに、防災の構えを築いてほしい。

災害は人命を奪うだけでなく、産業も根こそぎ奪う。私は代々続く農家の生まれだが、もう田んぼもつくれない。そうした苦しみというのもまた、子孫に味合わせてはならないものだと思う。



開催地より

行政や自主防災組織、民生委員等の「共助」、「公助」の立場を担う者は、まずは自分の身を守ることが大切だと分かった。今後も講演会や防災訓練等を通じて、町民の方々の防災意識の向上を更に推し進めたい。

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：鳥取県米子市	
開催日時	平成 29 年 2 月 19 日（日） 10：30～12：00
開催場所	米子市福祉保健総合センターふれあいの里 大会議室
語り部	佐藤 政信（宮城県仙台市）
参加者	市民 約 200 名
開催経緯	米子市では、住民の防災意識や地域防災力向上を目指し、各地区に出向き積極的に防災講話や訓練支援を行っている。住民の防災に対する関心は高いものの、幸いにも甚大な被災の経験が少なく、なかなか防災意識の向上や活動の活発化及び自主防災組織の結成率向上に結びついていない状況である。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は震災当時、宮城県宮城野区湊町内会役員を務めていた。津波で町内は全壊、流出し、多数の犠牲者が出た。避難所を転々とし、5年間の仮設住宅生活の後、防災集団移転地に住宅を再建した。自らの体験と教訓を伝える。</p> <p>2. 津波で町が流される</p> <p>私たちの住んでいた町は、4町内会あり、約1,000世帯、3,000人が生活していた。大震災では、津波が内陸の4キロ地点まで到達し、町が根こそぎ流された。現在、同地は、危険地帯に指定され、工業団地として生まれ変わろうとしている。</p> <p>宮城県は30年周期で地震が来るというサイクルになっていたため、大半の住宅は補強していたが、犠牲者はほとんど津波によるものだった。津波が来ても1メートルぐらいだと認識していたために多くの犠牲者が出た。私は小学校の2階に避難したが、6メートルぐらいの津波が来た。校舎の1階には、車や家屋がどんどんぶつかり、いつ学校が壊れるかと恐ろしい思いであった。津波被害と同時に、多くの火災が発生した。</p> <p>3. 避難所生活</p> <p>その後、別の小学校の体育館を借りて約1カ月間、生活した。どこの体育館もそうだが、すき間風があつて寒く冷たい。風邪を引く人も多く、当時は布団もなかったため、段ボールと、災害毛布だけで過ごした。</p> <p>その後、宮城野体育館に地区の皆で揃って入った。そこで1人1畳与えてもらい、初めて畳と布団で暖かく寝ることができた。食事は、朝は仕出し弁当、昼はカップヌードル、夜は仕出し弁当だったが、仕出し弁当は揚げ物が中心で、食欲をなくす人も多く、おにぎりに切り替えた。自衛隊が味噌汁を作ってくれたのはありがたかった。</p> <p>4. 仮設住宅</p> <p>約3カ月後、仮設住宅ができ、町内会ごとにコミュニティ重視で入居した。顔見知りと一緒に入ることができ、そのことはよかった。中のつくりは、大</p>

人2人～3人は四畳半二つ、1人の場合は四畳半一つというもので、スペースに余裕はなかった。構造は鉄板で覆っているだけなので、夏は暑くて冬は寒い。昼の余熱が夜になっても抜けず、眠れなかった。また結露もひどく、断熱効果を上げるために、窓も二重窓にしてもらった。

5. 震災後の取組

平成27年には避難タワーができた。高さは屋上が9.9メートル、液状化現象や漂着物を考慮して、杭の深さを26.4メートルと深くしたので、何がぶつかっても壊れないような強固なつくりになっている。備蓄品を一番上に置いてあり、車椅子でも上れるようになっている。このような避難所が仙台市では11カ所、今作られている。

6. 常に“想定内”で考える

震災前は、町内会でも地震の訓練はしていた。安否確認や炊き出し訓練、防災・消火訓練、さらに津波のハザードマップも作った。しかし高さを1メートルと想定していたため、2階に逃げれば大丈夫だと考えた人やペットがいるから避難できないという人が多く、犠牲になった。

また震災の1年前に4メートルの防潮堤が完成したことも、安心感を抱かせ、逃げ遅れた原因になった。ほとんどの人が、地震発生後、自宅に戻ったことも被害を増やした原因である。

よく未曾有の大地震とか、想定外という言葉が使われる。しかし想定外では、対応できなくなる。これからは常に想定内に考える防災をしないとけない。



開催地より

講演会を通じ、災害の悲惨さや、被災者の苦労を深く認識することができた。また災害に対する実践的な準備の必要性や重要性について認識を改めた。講演会の内容を市民に普及し、防災意識の高揚を図るとともに、実践的な訓練の推進により、地域防災力の向上に活かしていきたい。

開催地名：高知県須崎市	
開催日時	平成 29 年 2 月 20 日（月） 19：00～20：30
開催場所	須崎市立市民文化会館
語り部	佐久間 良（福島県田村市）
参加者	消防職員、消防団員、自主防災組織関係者、その他 計 98 名
開催経緯	<p>南海トラフ巨大地震に備え、地区の自主防災組織等での訓練を継続して実施しているが、東日本大震災から 5 年が経過し、住民の恐怖の記憶は薄れつつある。また、昭和南海地震の経験者も少なくなってきた。当時の話を聞く機会もなくなってきた。過去の記憶を風化させず、常に危機意識を持って震災対策を推進していくために、「震災に備える意識」の伝承が課題となっている。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は阪神淡路大震災、新潟の中越地震に緊急消防援助隊として出動した。その後、福島県で東日本大震災を体験した。原発事故を中心に震災当時の状況と緊急消防援助隊の任務について語る。</p> <p>2. 福島第一原発の消防活動</p> <p>私は福島県の緊急消防防災援助隊・航空部隊に所属して勤務している。緊急消防援助隊という制度は、1995 年 1 月 17 日に阪神淡路大震災を契機に発足した。2016 年には 6,000 隊に及ぼうとしている。消火隊、救助隊、救急隊、航空部隊、水上部隊などが各隊に分かれて、南海トラフ地震や首都直下地震に備えている。</p> <p>東日本大震災で事故を起こした福島第 1 原発の説明だが、1 号基から 6 号基まであり、水素爆発があったのは 1～4 号基の原子力発電所である。大震災翌日の 3 月 12 日午後 3 時 36 分、第 1 原発の 1 号基の原子炉建屋が水素爆発を起こした。それに引き続き、他の原発も爆発し、冷却作業をする前から、地元の双葉消防本部の職員が命からがら放射線を浴びながら活動していた。自衛隊とともに東京消防庁も放水を行った。海水から水を取水し、大量送水して、直接放水塔車から水をかけて冷却した。しかし爆発により放射性物質がまき散らされ、避難する住民により道路には大渋滞が起こった。</p> <p>3. 大震災の救助活動</p> <p>緊急消防援助隊の航空部隊の受援体制について話す。仙台空港は滑走路も津波でやられ、閉鎖になってしまった。それを福島空港と山形空港で代用し、多くの民間機が着陸をした。</p> <p>実際に福島県で活動したのは 13 航空隊である。その他、福島県で活動したのは、遠くは千葉市、京都市、大阪市、群馬県、滋賀県、福井県、奈良県、香川県、愛媛県、福岡市消防局、大分県、鹿児島県の航空隊であった。</p>

受援体制で大事なのが航空機の燃料である。平常時は仙台港から配送されるが、ルートがなくなったため、総務省消防庁に連絡をして、燃料の確保をお願いした。翌日、新潟の消防職員の先導で、福島にローリーが来て、順次燃料の供給が行われた。あわせて民間の航空機や旅客機、自衛隊機も用意してもらい、非常に助かった。

地方からの応援部隊は、航空センターの中で寝泊まりした。また応援部隊の資機材で格納庫がいっぱいになった。

自衛隊のヘリコプターとは、空港のターミナルビルを境にして、自衛隊機は北側、防災機にあつては南側とすみ分けをした。これは、受援計画の中で意見交換しながら、作業分けも行った。

4. 事前準備の大切さ

東日本大震災を経験して考えたことは、事前準備の大事さである。私は東日本大震災の4カ月前に、緊急消防の北海道・東北ブロックでの合同訓練の開催に携わった。その際、各県の担当者との意見調整などの役割を任せられた。

訓練日が近くなって、訓練の成功は当然のことだったが、自分たちでつくり上げた計画がどのぐらい実際にできるのかという懸念もあった。それを計画通り実行して、その後検証し、さらにまた課題が浮かび上がり、計画を改善した。今回は、訓練が有事にいかされた例だと思う。震災において、私たちの初動の対応が計画どおりに進んだことは、評価できると思う。



開催地より

受講者には改めて災害対応の厳しさ、大変さを再認識してもらうことができた。特に消防関係者にとっては現場で使える内容も多かったので、日常の業務にも取り入れつつ、南海トラフ地震に向け体制の強化につなげていけるのではないかと思う。自主防災組織関係者も地域に帰って、次世代を担う若年層等へ伝承していただけるものと期待する。

災害伝承 10 年プロジェクト

開催地名：長野県上田市	
開催日時	平成 29 年 1 月 21 日（土） 13：30～15：00
開催場所	真田中央公民館
語り部	瀬戸 元（岩手県陸前高田市）
参加者	自主防災組織関係者、市民 計 72 名
開催経緯	<p>上田市では、これまで大規模な地震災害に遭遇する機会がなかったものの、平成 27 年に長野県が公表した地震被害想定では、糸魚川―静岡構造線断層帯全体が震源となる場合、最大震度 7、死者 2,000 人余とされている。東日本大震災をはじめ過去に発生した大規模災害から得られた教訓を、いかに市民が自らの身に置き換え、防災・減災に対する意識を高めるとともに、地域の実情に踏まえた自助・共助による取組を推進していくかが課題である。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私の家は海拔 30 メートルの高台にあり、流されずに済んだ。住まいは釜石市両石という地域で、私は町内会の会長と自主防災会の会長を兼務していた。両石湾は漁業のほか輸送港としても栄えた。安政から平成まで 4 度の大津波を受けている。3.11 では先人の教えを生かせなかったと思う</p> <p>2. 慢心が招く災害の拡大</p> <p>津波常襲地帯の防災活動は津波対策が主である。活動のメインは、高台避難を優先するという 1 点に収斂される。私は過去の例をひいて、近々、大きな地震が発生して、30 分で大津波が来ると確信していた。住民にもその旨を伝えていたが、明治の三陸沖津波を上回る大津波で 45 人が亡くなった。地元には「命てんでんこ」の言葉や、津波到達地を知らせる碑など、先人が残してくれた経験があった。しかし 3.11 では避難さえすれば助かるという風潮が蔓延していて、過去を顧みる風潮はなかった。また過度な行政依存体質、情報依存体質があったと思う。死者の内、避難を躊躇したと思われる人の割合は 6 割、想定以上の大津波の被害に対処できなかった人が 3 割、残る 1 割は避難誘導、介助、交通整理などをしていた警官や消防団員たちである。「てんでんこ」に率先避難するという鉄則を忘れていたと思う。個人の判断力が低下していた。私は町内会および自主防災会のトップとして、ひとりだけで備蓄品の補充やビデオ記録の準備を進めていた。危機イメージを描けていたからだ。危機をイメージできないと、「あとに残るは涙の種のみ」である。</p> <p>率先避難の教えを生かしたのは、「釜石の奇跡」と報じられた生徒たちだった。大人たちは津波の対処を怠った。</p> <p>3. 命を守る文化</p>

一方では「釜石の悲劇」もあった。避難所ではない防災センターに避難者が集まって被災した。センターではかつて高齢者が多いことなどを利用して避難訓練場所として指定された。センターが安全という思い込みが招いた悲劇だと私は思う。

震災後、住民アンケートを実施した。避難しても家に戻る例が見られた。避難所運営では食糧の備蓄、防災装備品が備えられていたこと、安否確認がスピーディーになされるなどの評価もあった。津波は生死に直結する。先人の教訓やかつての災害経験をより理解しておくべきだったのだ。

地区には避難に当たって「15分ルール」が存在する。地震後15分は避難誘導、救護などに当たり、その後の15分は自身の避難を優先するという内容だ。「命てんでんこ」を地域で実践・共有する意図だ。よくよく理解していないと、「見捨てる」ことのできない心情が働き、共倒れになる。

4. 身を守る覚悟

食糧の備蓄は、私が前年から補充に動いた。米10キロ袋を10袋備えていた。米10キロでいなり寿司くらいの大きなおにぎりが280個ほどつくれる。ラップ、銀紙も補充し、トイレトーパーも揃えた。もともと、食事をするとトイレに行かなければならず、食べないという人もいる。出す難と入れる難が食にはついて回る。

大震災ともなると、何波も津波が到来し、集落は壊滅する。行政も自主防災組織も麻痺である。要は、自分の命は自分で守るしかない。





開催地より

災害時における「自助・共助」の重要性について、さまざまな機会を捉えてさらなる周知・啓発を図るとともに、自主防災組織の活性化や各家庭、各人の防災意識の向上に向けて、関係部局と連携しながら地域における防災訓練の実施や地区防災計画の作成等に対する支援と働き掛けを行っていきたい。

開催地名：群馬県前橋市	
開催日時	平成 29 年 2 月 23 日（木） 13：00～14：30
開催場所	前橋総合福祉会館 多目的ホール
語り部	今野 均（宮城県仙台市）
参加者	自治会関係者、市民 約 250 名
開催経緯	前橋市では、県南部の断層から発生する地震により最大震度 6 強を想定し、出前講座や各種訓練、広報誌などを活用し、市民に向け情報発信をしている。しかし、過去 100 年間で震度 5 以上の地震が 3 回と少ないこと、風水害の発生も少ないことなどから前橋市は安全という安全神話が根強いいため、危機意識の高揚に苦慮している。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>仙台市青葉区片平地区は、市の中心部にあり、連合町内会が自主防災組織を運営している。大震災を経て、その活動を語る。</p> <p>2. 大震災当日</p> <p>当地区では、片平地区まちづくり策定委員会を発足、防災マニュアル作りに取り組みようとしていた。しかし完成しないうちに大震災が起きた。単位町内会で作成した自主防災マニュアルは機能しなかった。大地震では皆不安を感じるから、一挙に指定避難所に集まる。当日は、帰宅困難者が 3,000 人も来たというのが実態である。</p> <p>炊き出しも実施したが、町内会の食料備蓄はすぐになくなった。カツ丼店が、電気がストップした冷凍庫の肉を寄付してくれるなど、協力してくれた。炊き出しは駐車場にテントを張り、ボランティア学生が多数参加してくれた。行政で全国から集まってくるボランティア組織を立ち上げるのは、最低でも 5 日～7 日間ぐらいかかる。地域の学生が、当日すでに午後 4 時頃、ボランティアの申し出をしてくれた。こちらも準備していなかったため、登録だけしてもらい、家屋の片付けなど翌日から活動してもらった。また災害協定を締結している都市からも、交通が寸断されているなか、3 日目くらいに来てくれた。</p> <p>3. 次の避難所を指示</p> <p>片平地区の指定避難所、片平小学校には、350 人しか宿泊できない。そこへ帰宅困難者が 3,000 人も来た。入れない人を、次の指定避難所に案内した。急ぎで市民センターを開けたが、収容しきれず、地域にあるマンションや集会所を利用し、最終的には 1,500 人を 1 日目に収容した。しかし皆、横になるスペースがない状態で、学校では体育館だけでなく教室も開放した。</p> <p>4. 災害対策委員会を立ち上げる</p> <p>翌日、片平地区災害対策委員会を立ち上げた。電話網も使えなかったため、</p>

	<p>自転車で回って、何時に対策本部の校長室に集まれ、というように連絡した。</p> <p>また、対策本部では記録を残すことを行った。人的被害、また物的被害ということで、道路や建物の状況、ライフラインの電気、ガス、水道の状況を記録して、共有した。</p> <p>5. 防災訓練の課題</p> <p>3.11 の前も防災訓練していたが、担当しているのは、50代～70代の中高齢者である。初めはいいが、高齢者には体力の限界もあるため、防災訓練をするときには、若者に参加してもらうことが今後の課題である。</p> <p>また、外国人への防災対策も留意すべきことの一つである。知り合いが少なく、日本語もあまり話せない状況で大災害にあうと、心細さがつのるだろう。防災訓練には、なるべく外国人にも参加してもらうようにしている。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>経験から得られる情報は貴重であることが再認識できた。日々の業務は災害被害を防ぐまたは軽減することを目標として掲げ、さまざまな取組や計画を策定しているが、経験談をきくことで、各計画の実効性について検証することができる。</p> <p>自主防災会への訓練に参加する機会が多いことから、今回の講座から得られた準備の必要性について、訓練参加者に理解をしていただき実効性や有効性を高めていきたい。</p>

開催地名：北海道厚岸町	
開催日時	平成 29 年 2 月 25 日（土） 10：00～11：30
開催場所	厚岸情報館
語り部	菅原 康雄（宮城県仙台市）
参加者	町民 約 90 名
開催経緯	<p>厚岸町では、東日本大震災の際に人的被害はなかったものの、一部家屋の床上・床下浸水や漁業に大きな被害があった。平成 24 年に 30 メートルを超える津波が押し寄せる想定が明らかにされ、それを基にハザードマップの作成や避難場所の整備を行っている。</p> <p>しかし、東日本大震災から 5 年が経ち、町民の災害に対しての危機感が薄れてきていることが課題となっている。</p>
内容	<p>1. 福住町における防災の取り組み</p> <p>福住町では、平成 15 年から「隗より始めよ」という取組を始めた。町内会・自治会には予算はないが、力がある。行政に頼らず、思い立ったことを工夫して、防災・防犯・交通安全の活動を行ってきた。</p> <p>具体的な、防災活動の内容としては、</p> <ol style="list-style-type: none"> ①出来るだけ災害が少なく済むように…「命も含めた減災」 ②要支援者や高齢者の把握…「名簿作成 高齢者・障害者への処遇」 ③災害時や直後の大怪我や病気…「災害時の地域救急医療」 ④災害が発生した際のトイレ…「簡易トイレ等の衛生対策」 ⑤災害が落ち着いても、その後の復旧は…「地域の復旧復興」 <p>が挙げられる。</p> <p>そこで、町内会では名簿作りやマニュアル作り、防災訓練を実施するための組織協力体制を構築することに力を入れている。町内会の防災計画では、</p> <ol style="list-style-type: none"> ①災害予防の計画（減災） ②災害応急対策の計画と実践（訓練） ③住民全員参加型の構築（協力体制） ④災害時復旧復興の実践（支援～支縁） <p>の 4 点を定めて活動している。特に、全国町内会のネットワークづくりこそ重要と考え、3.11 の発災前から災害時相互協力協定の締結を行っていた。震災後も締結を進め、現在は全国 12 ヲ所の町内会と協定を結んでいる。</p> <p>2. 東日本大震災発災直後各地の被災状況</p> <p>訓練でできなかったことは 実際の場で出来るはずがない。常の訓練が実を結んだ。名簿は全て流されてしまったものの、8 回ほど訓練の経験があったため、頭に入っており、発災から 30 分～1 時間ほどで要支援者宅を 2 回まわり、名簿を作成した。安否確認や要援護の情報を区に提出することがで</p>

	<p>きた。</p> <p>また、できるだけ指定避難所には行かず、集会所に100名くらい避難し、自前の備蓄品で生活した。毛布などの備蓄品は、指定避難所にも提供することができた。トイレや瓦礫置き場も自分たちで協力して作成した。</p> <p>3. 震災後、福住町の支援活動（直後活動～救援活動）</p> <p>災害時相互協力協定団体との交流を重視している。夏祭りや防火防災訓練などに参加して日頃からの交流を大切にすれば、有事の際には互いに手弁当で駆けつけることができる。</p> <p>また、協定を通して届けられた支援物資を他の被災地109ヵ所へ陸送し、他助につなげることができた。</p> <p>メンタルヘルスケアにも力を入れた。PTSDや心的障害ストレスに対する手助けのため、動物とのふれあいや綿菓子・ポップコーンの提供、アイドルグループ「ORI姫」の訪問などにより、心のケアを行った。</p> <p>4. 教訓</p> <p>様々な教訓を得たが、特に女性防災リーダーの活躍、中学生の協力は重要であると実感した。また、防災は歴史に学べということ。必ず繰り返す地震に備えておけば減災になる。</p> <p>避難所の教訓としては、喧嘩などのトラブル回避のためには、顔の見えるリーダーが避難所運営を仕切るとのこと。また、最低限のライフラインと1日分の食糧を各行政機関で確保しておくこと。</p> <p>自助、共助に加え、「自制」、報いを求めないことも必要である。しかし他人の世話にならないよう自分を助けることが一番大切だと思う。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>受講された方々は訓練の必要性や、備蓄の重要性を改めて認識したようだった。行政を介さなくても、地域の力で防災対策ができると感じた。ただ訓練を行うのではなく、祭りや地域のイベントと組み合わせることで参加者を増やすこともでき、自治会と行政の防災活動の連携をより密に行っていきたいと感じた。</p>

開催地名：秋田県秋田市	
開催日時	平成 29 年 2 月 25 日（土） 14：20～15：50
開催場所	秋田市西部市民サービスセンター
語り部	鈴木 忠支（宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織関係者、聴覚障害者支援センター職員 計 70 名
開催経緯	<p>東日本大震災や秋田県の新しい地震や土砂災害などの被害想定 of 発表に伴い、防災に対する関心が高まっているが、具体的にどのような活動をするべきか、悩みを抱える自主防災組織が多い。</p> <p>また、高齢化などの理由で、自主防災組織の結成や、防災訓練等の参加に消極的な地域がある。</p>
内容	<p>1. 目撃した大津波</p> <p>津波は、例えると、ナイアガラの滝の様であった。幅が広く、上からしぶきとなって降りてくる様子を避難した小学校から見た。</p> <p>震災の 1 年前に、大学教授の指導を受け 4 メートルの防潮堤を造った。宮城県沖地震の時の津波が 3.8 メートルだったからであるが、今回の津波は、その規模をはるかに越えるものとなった。私が避難所の小学校に着いたのと入れ替わりに、避難所から帰宅する人がいた。震災の 1 年前にチリで地震があった際に大津波警報が出たが、実際は津波が 80 センチの高さにしかなかったことから、今回も同様だと考えたためである。私は、帰ろうとする人を必死で止め、屋上に上がるよう説得した。津波を見るために昇降口で立ち止まっていた人もいた。しかし、後から逃げて来る人もいるため、屋上に上がるように誘導をし、私が最後に上がって 5 分程であの大津波を目撃した。</p> <p>2. 二次避難所への移動</p> <p>夜中になって、霞目基地のヘリコプターが救助に来たが、1 回で 3 人程しか救助してもらえなかった。夜が明けると、札幌の消防署の 12 人乗りのヘリコプターが救助に来たが、600 人程が避難しているため、時間がかかった。校長先生や役員と話をしている中で、小学校から 700 メートル離れた内陸部にバスが通っている道があることが分かった。バスで救助を頼んでも来るはずがないという反対意見もあったが、やってみないと分からないと説得し、無線で連絡を取ったところ、仙台市営バスが対応してくれた。バスを活用することで、3 時間半で二次避難所に搬送することができた。この時、現場では余計な心配をしないで、まずは救助をしてくれる相手にこちらの状況を話すことが大切だと感じた。</p> <p>3. 津波の教訓</p> <p>この津波を経験して、危険と想定されている場所から早く離れることが一</p>

番大事だと学んだ。危険な現場に行ってみたいという考えと、まだ大丈夫だろう、避難しても無駄だとその場に留まる行為が非常に危ない。また、地域住民全体で災害が起きやすい場所を把握することが大切である。その町をよく知ったものが危険だと指摘した箇所は、整備することが必要である。

4. 自主防災組織の組織づくり

私の地域にも自主防災組織があった。消防団員の呼びかけによって、早く避難し、助かった人が多くいる。しかし、消防団員が巻き込まれて亡くなる場合もあるため、自主防災組織の活動の範囲についても常に検討が必要である。また、会社員が多い為、日中に災害が起きた際に、駆け付けられる人は少ない。防災に限らず、活動を行う際に、多くの人が集まることができない。少人数で話し合いをしても、決して欠席裁判をしないようにした。その結果、これまで来なかった人が参加するようになった。組織を作る際は、欠席裁判をせず、仲間を増やしていくことが大切である。

5. 終わりに

秋田市は、海が近く、蒲生と同じような地域のため、条件は似ている。山寺に行くと、津波は関係ないといわれるが、想定されない災害がたくさん起きている。以前は、日本海側ではあまり地震は起きないと言われていたが、新潟でも地震が起きている。想定は何の助けにもならない。そのため、大雨や地震、津波が発生した際にどこが危険区域か正確に把握しておくことが必要である。



開催地より

東日本大震災や秋田県の新しい地震や土砂災害などの被害想定を発表に伴い、防災に対する関心が高まっているが、具体的に、どのような活動をするべきか、悩みを抱える自主防災組織が多い。

また、高齢化などの理由で、自主防災組織の結成や、防災訓練等の参加に消極的な地域がある。

開催地名：愛知県尾張旭市	
開催日時	平成 29 年 2 月 25 日（土） 10：00～11：30
開催場所	中央公民館
語り部	平澤 つぎ子（千葉県旭市）
参加者	市民 計 94 名
開催経緯	<p>尾張旭市では、市内全 9 小学校区に自主防災組織がある。しかし、組織には男性の役員が多く、「女性視点の防災・減災対策」が進んでいない。避難所運営においても、同様に女性視点の対策が進んでおらず、実際に災害が発生した際においても男性が中心に運営することになることが想定される。</p> <p>自主防災組織に対し、女性視点の防災・減災対策を推進するため、女性役員の登用を呼び掛けているが思うように進んでいないのが本市における課題である。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>減災について一番大切なことは何かを終着点に、旭市の被害状況と現在の状況、避難所運営、減災を意識した平時の生活の順で話を進めたい。</p> <p>2. 旭市の被害状況と現在の状況</p> <p>東日本大震災の発生した 2 時 46 分、旭市では震度 5 強の地震が起きた。その 1 時間後に津波が押し寄せ、2 回目の震度 5 強の地震があった。津波の高さは約 7.6 メートルで、16 名の命が失われた。津波で橋が壊れ、地震で液状化した。津波の到達する速さは想像よりも早い。橋も壊れ、船も流される。とにかく早く逃げる事が肝心である。崖崩れも起きた。液状化した道路では車が走ることが出来ず、瓦屋根が落ち道路がふさがれた。</p> <p>3. 避難所の状況</p> <p>市内に避難所は 10 か所あり、一時は 3,000 人近くが避難した。その避難者のために、赤十字奉仕団として 2 日間おにぎりを作り続けた。避難者は出入りが頻繁でプライバシーの保持が難しく休息もできない。一方で衣食住すべてを同じ空間で行い、断水もあったため衛生面に特に気を遣った。</p> <p>ボランティア活動では、食事の世話や掃除、心身のケアにあたった。3 月 15 日には避難所の敷地内で防災ボランティアを立ち上げ、各家庭からのニーズを調査した。</p> <p>外部から来たボランティアには、がれきの撤去をお願いした。すぐに動ける服装で参加してもらい、車を持っている人にはボランティアの移動の際に助けてもらった。ボランティアセンターの受付業務には外部のボランティアも入ってもらったが、地元をよく知る地域の人々の情報も役に立った。</p> <p>震災から 6 年が経過し、現在旭市では防災林をつくったり、避難タワーが建設されたりと、減災に向けた取組を行っている。仮設住宅は撤去され、現</p>

在では復興住宅に 33 世帯 54 人が入居している。復興にあたっては国や県の支援も大きかったが、地元住民として、語り部活動や復興瓦版、冊子「語り継ぐ飯岡津波」の発行を通して、震災を伝えていこうと活動している。その他にも様々な取組を通して、復興に向けて活動している。

4. 避難所に求められること

避難所は災害が起きた直後、住民の生命を守る場所であるとともに、その後の生活としての役割がある。具体的には安全、水・食料の確保、生活場所、健康、トイレ、情報のコミュニティーである。避難所運営については、子供の鳴き声や食べ物の偏り、プライバシーの管理などの課題がある。精神疾患や障がいを持った人もいる。避難所運営ゲームのHUGを通して、避難所運営の模擬体験や要援護者の支援などについて、想定し、実際の運営に役立ててほしい。

5. 減災を意識した平時の生活

内閣府の調査では、災害に備えている人は全体の 50.9%で、自分だけ大丈夫だと思っている人が多い。人が生活するのに 1 日水が 3 リットル必要だと言われている。このように避難するときに必要となるもののチェックシートの活用を勧める。地震が起きたとき、自分を守ってくれるのは自分自身である。消防や警察に助けられるのはまれで、自分を守って初めて他人を守ることが出来ると考えてほしい。防災・減災のためにできることは、備えである。「備えあれば憂いなし」「鬼に金棒」といった言葉があるが、その言葉通り、日々の生活の中で備えていくことが大切である。



開催地より

千葉県旭市における人的・物的被害の状況のほか、避難所運営に関する当時の状況、避難所運営の課題等について、「避難所で炊き出ししている際に、まるで戦場のような雰囲気だった」など、避難所運営に携わった方だからこそその話が特に印象に残っている。市民にとっては、なかなか普段の中で「災害時の避難所」について考える機会はないが、今回の講演で市民ひとり一人が「災害時の避難所」について考えるきっかけになったと思う。

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：和歌山県美浜町	
開催日時	平成 29 年 2 月 25 日（土） 13：30～15：00
開催場所	美浜町地域福祉センター
語り部	吉田 一弥（福島県いわき市）
参加者	自主防災団関係者、自主防災会関係者 約 90 名
開催経緯	美浜町では、南海トラフ巨大地震に伴う津波により、住宅地の 8 割～9 割が浸水する想定となっている。毎年避難訓練等も行っているが、東日本大震災から 5 年が経過し、意識の低下も見られることから、津波経験者の講演を聞き、再度津波への危機意識の向上を図りたい。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は、当時いわき市消防団第二支団第一分団副分団長だった。第二支団は小名浜地区が担当で、第一分団は同地区の江名地区が管轄地である。消防団員の視点から津波災害を報告する。</p> <p>2. 津波で冠水</p> <p>大震災では、市内全域が大きく揺れた。地震に加え、七つの浜がある沿岸域では津波、そして原発事故がいわき市の災害である。さらに 1 カ月後の 4 月 11 日には直下型の地震で震度 6 の揺れがあった。</p> <p>海溝型の地震が発生すれば津波が到来する。消防団は海沿いで避難を呼びかけ、海沿いには誰もいないという状況をまずつくり上げた。避難の呼びかけには、消防団OBも加わった。揺れは長く、数度もあった。詰め所で対応を話し合い、海の監視と、道路沿いでは車両への高台避難の呼びかけと誘導を実施することにした。</p> <p>海を監視していると 3 波が波高 6 メートルほどで最も大きかったように見えた。海面が持ち上がるような波状だった。引き波の力が強く、沿岸域は波に引き込まれた。市内一帯は冠水した。街区の水の流れは、道路上を川にした。始めて経験する津波だった。見たところ、引き波による被害が大きかった。</p> <p>消防団員は日中、各人が仕事を持っている。天候が下り坂になり、一時解散し、当夜、各人が徒歩で参集した。市内では、橋が壊れて道が寸断されていた、道路に瓦れきが散乱して車は通行できない。断水も起きていた。隣にある区民館に泊まることにした。床上した世帯、工場勤務者らが区民館に避難していた。急きょ、協力し合って食事をつくった。</p> <p>深刻だったのは水の確保だ。消防団は、給水のため水の出る場所を探し求めた。病院で透析用に使っていた 2 リットルサイズのポリタンクをもらい、車両 1 台にタンクに約 20 個積んで、水の出るところに行って水を確保し、区民館に届けた。区民館は市から臨時の避難場所に指定された。3 日目にな</p>

ると救援物資が到着した。しかし水不足は常態化したままだった。離れた浄水場まで出向き、ピストン輸送することにした。団員の仕事は3～4日間で完全に給水活動である。あらゆる施設が壊れていたが、浄水場からは水の供給が可能だった。冷凍設備が壊れた工場などからは食糧を提供してもらい、他の避難所にも分けた。いわき市は水産加工の盛んな地である。

3. 原発事故の発生とまたも地震

原発関連の情報は、水素爆発が起きたこと以外、詳しくはわからなかった。入ってこなかった。遠隔地への避難を勧めるなどしかできていない。

1カ月後、津波の塩の影響で電柱が倒れたり、道路が陥没するなど、復旧を要する事象が増えた。そんななかの4月11日、再び地震が発生した。前日からちょろちょろと流れ始めていた水道が再び断水した。復旧したのは4月の25日ぐらいだと記憶している。風呂を求めて遠隔地まで移動した人もいた。

水、食糧、あるいは毛布といった物資に関しては、自分たちで確保しておくことが大事だ。

地元には、自主防災組織こそあるが、機能しなくては話にならない。地域団体との連携を模索する必要がある。

4. 「備え」について

燃料不足は深刻さを増した。輸送車が福島に入らず、千葉の精油所からは出入りを禁止される事態になった。物資の輸送が滞り、私は見捨てられたような気持ちをいだいた。ただ、自衛隊、消防、医療レスキュー、たくさんの人がいわきに入ってくれた。共助の精神の大切さを痛感している。「備え」で大事になるのは、身の安全確保という自助、どう支え合って行動するかという共助だと思う。



開催地より

津波災害は、津波だけでなく様々な二次災害を招く恐れがあることを再認識することができた。消防団幹部会や、自主防災連絡会の中で再度津波災害の危険性の確認や二次災害の防止に対する対策の協議をすすめていきたい。

開催地名：福井県小浜市	
開催日時	平成 29 年 2 月 26 日（日） 14：00～15：30
開催場所	はたらく婦人の家
語り部	吉田 亮一（宮城県仙台市）
参加者	自治会関係者、自主防災組織関係者、教育関係者、その他 計 106 名
開催経緯	小浜市では、指定避難所の開設および運営について、自助・共助・公助の連携による円滑な避難所の運営が可能となるように、避難所運営マニュアルの策定を進めているところである。しかし、これまで避難所の運営は市の職員が主体となって実施してきたことから、自助・共助による運営の経験に乏しく、また大規模災害による避難所の長期運営のノウハウも不足していることが課題となっている。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>もともと私は、仙台で保育園を経営していた。保育園というのは、防災マニュアル、備蓄関係等さまざまな書類を提出しなければいけないため、防災に対する意識が高い。しかし地域の防災が出来ていなければ保育園の防災マニュアルも意味がないため、町内会会長に確認したところ、「うちの地域は何も出来ていない」という話があった。自ら町内会長に「防災をやらせてくれ」と申し出た。1年かけて災害について勉強し、平成 18 年から町内会の総括防災部長となった。</p> <p>2. 防災の基本</p> <p>防災の基本は、想定以上の備えをすることである。鳥取、熊本の地震など、予想外のことが現実に起こる時代であることを知ってもらいたい。想定以上の備えをするためには、まず知ることが大切である。自分が住んでいる地域でどのような災害が過去にあったかを知ることから始めてほしい。次の段階で、国や自分が住んでいる都道府県、市町村の災害、風水害、地震等の想定についても知ってもらいたい。</p> <p>3. 共助の重要性</p> <p>自助と公助で出来ないことは共助でやってほしい。町内会では、繰越金を使用して優先順位をつけて備品を購入した。まず無線機を購入した。備品を購入しても普段使用しないといざという時に使用出来ない恐れがある。そのため、夜のパトロールや防犯委員会にも貸し出し、地域で普段から共有して頻繁に使用している。また非常に役に立ったのが、介護用のトイレである。1回使用したら水が不要で、そのまま捨てることが出来るため、避難所で非常に高い効果が期待出来る。</p> <p>さらに地域の人材活用が重要である。町内会では、地域の高齢化をポジティブに捉え、ポスティングで災害時に支援をしてくれる人を募集した。その</p>

結果東北大学病院外科部長だった方をはじめ、介護士、薬剤師など様々な分野の方が手を挙げてくれた。手を挙げてくれた方には、災害時に近所の方々を応援してもらう形をとっている。

4. 防災教育の重要性

小・中・高校生は地域防災の原動力である。防災対策を大人目線ではなく、子供達の視点で行うことも重要であり、その意味で地域の防災教育は大変重要である。

防災教育には2つある。「命を守る教育」と「命が守られた後の防災教育」である。「命を守る教育」は、学校でも一生懸命取り組んでいるが、「命が守られた後の防災教育」はあまり行われていない。「命が守られた後の防災教育」は非常に大切で、学校と地域が連携しなければ出来ない。小・中・高校生は、地域の一員として災害時に何が出来るか、何をしなければならないかという教育をぜひ実施していただきたい。

5. 防災用品6点セット

家庭での防災で絶対必要なものは、靴下・スニーカー・ヘッドライト・防犯ブザー・携帯ラジオ・カッパの6点セットである。これを一つの袋に入れて、枕元に置いてほしい。夜大きな地震があった場合、枕元の袋から靴下、スニーカーをすぐ履き、ヘッドライトをつけて歩くことで怪我が防げる。また閉じ込められた時には、より大きな音量の防犯ブザーが役に立つ。食料・飲料水は後でもいい、まず怪我をしない、命を守ることが大切である。



開催地より

防災教育において、命を守る教育は積極的に行われているが、「命を守った後の教育」が行われていないとの言葉にはっとさせられた。また、「自助・公助で出来ない部分を共助で」「行政、学校（避難施設）職員、地域住民がそれぞれ何をすべきか」など、見落とししたりあいまいになったりしやすい部分を、非常に明確にわかりやすく話していただき、大変勉強になった。

災害伝承 10年プロジェクト

開催地名：大阪府忠岡町	
開催日時	平成 29 年 2 月 26 日（日） 13：30～15：00
開催場所	忠岡町ふれあいホール
語り部	山崎 義勝（岩手県釜石市）
参加者	自主防災組織関係者、消防関係者、一般参加者、町職員 計 136 名
開催経緯	<p>忠岡町では南海トラフ地震をはじめとした様々な災害に備え地域防災計画や津波・洪水ハザードマップの作成、各自主防災組織と共同で防災訓練を実施している。</p> <p>しかし、実際に災害に遭遇した者は町内においてほとんどいない。災害体験者に、災害時の体験からどのように動くべきか、自主防災組織は災害時にどのような活動をしたかを語っていただき、実際の行動に活かしていく事が課題となっている。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>震災当時、消防長として活動していた。東日本大震災のときの経験を中心に、「みんなで築く防災対策」と題して、①震災から今日に至るまでの経過、②東日本大震災の検証、③防災対策の順で話を進める。「命を守ること」以上に大切なものはない。「撓まず・屈せず」という思いで復興に取り組んできた。</p> <p>2. 今日までの経過</p> <p>震度 6 弱の地震は動くことのできる状態ではなかった。しかし、地震の被害よりも津波の被害は大きく、被害を受けたまちを見て、なすすべがないと感じた。緊急消防援助隊と海上保安部は遺体捜索にあたり、殉職した部下と向き合った。今でもその時の感情を忘れることはできない。</p> <p>避難所では自衛隊と物資配給作業を行ったが限界があり、対処力の高い宅配業者に委託することにした。避難所が初日から機能することはない。最初の 3 日間は、物心両面の我慢が求められる。それを乗り切り、復興に向けて歩いていかなければならない。東日本大震災から 6 か月後、慰霊祭を行ったが、依然として行方不明者は多く、心的ストレスを感じている者も多いた。</p> <p>現在は避難所ではなく、仮設住宅に住まいを移し、学校や道路も整備されている。しかし、引き続き課題となるのは、地域にどれだけの人が戻ってくるか、地域を生かせるか、である。</p> <p>3. 東日本大震災の検証</p> <p>東日本大震災について次の視点で検証する。①地形によって被害は異なる。海から遠いから安全というわけではない。②孤立地域の災害活動は住民主体でなければならない。③年齢で異なる被害状況がある。④住民への防災対策の周知が被害の大小を分ける。⑤過去の災害の発生状況。⑥事業所にお</p>

ける避難行動の違い。⑦避難所の開設運営。⑧子供たちの避難行動について、「釜石の奇跡」。⑨過去の教訓。

とくに地形や年齢によって被害が異なる要因としては、個々の意識の問題もある。地震の発生した時間や時期などによって、それぞれに適した対応が必要となる。三陸地方にある釜石は50年周期で大津波が発生している。命を守るための避難行動を率先してもらいたい。

4. 防災対策

釜石では、発災時は「子供は家に帰さない」ことが教訓となった。学校から親元に帰したことで自宅ごと流され、命を落とした子供がいたからである。

行政だけでは防災対策はできず、かといって消防団や自主防災会の人だけを頼りにすることもできない。それぞれに命があり、家族がいる。釜石では「15分ルール」を共有し、地震発生から15分は避難誘導の活動、そのあとは自分自身の避難行動を優先することになっている。ルールが正しいとは言いつつ、こういったルールについて考えること自体に意義があると感じる。住民は「命を守ること」を第一に掲げ、「避難行動を確実に実践する」、「みんなで乗り切る」、「生きてさえいれば明日がある」といった意識を持ってほしい。



開催地より

参加者からは講演の内容を地域に持ち帰りたい、避難について根本的に見直したいとの声が多くきかれた。防災意識の啓発につながる貴重な機会になったと感じている。行政としては、防災訓練の参加の呼びかけを強化し、いざというときに役立つ訓練を実施したい。

開催地名：大阪府四條畷市	
開催日時	平成 29 年 3 月 5 日（日） 10：00～11：30
開催場所	市民総合体育館
語り部	菅原 康雄（宮城県仙台市）
参加者	市民、議員、市職員など 約 200 名
開催経緯	四條畷市では、市民に対する防災啓発活動として防災マップの配布や出前講座等を行っているが、災害の少ない当市においては災害伝承が難しいため、いかに市民の防災意識を高めるかが課題である。
内容	<p>1. 人力、地域力による減災</p> <p>平成 15 年度の段階で、仙台市内で自主防災マニュアルを作成していた地域はほとんどなかったが、自力で自主防災マニュアルらしきものを作った。すると、町内会でも「防災をみんなでやっっていこう」という話となり、地域の名簿作成や防災訓練など、さまざまなことに取り組んでいった。町内会は、財産はないけれど人力はある。地域や人材の力でできることは、無尽蔵にある。そこで、地域力を確立して、災害時には、瞬発力のある対応ができるようにしていく必要があると感じた。</p> <p>2. 防災ではなく減災</p> <p>福住町は防災ではなく減災を重要視している。</p> <p>まずは、自助・共助・互助によって、命を守るという減災が第一。地域の医療関係者を巻き込みながら、地域の医療状況をいち早く整えてあげることも、避難している人々にとっては、とても重要となってくる。</p> <p>ほかにも、子供たち主体で避難経路マップを作ったり、行政によるものでなく、地域の人たちが自分たちで地域の名簿を作ることが、減災となる。そのマップや名簿をいかに活用していくかが、人命を救出できるかどうかにつながる。</p> <p>3. 日頃から地域力を高めておく</p> <p>訓練をしていなければ、実際災害が起こった時に行動できるはずがない。そのため、地域の人々が訓練に参加することが重要である。ただ、防災訓練は、どれだけPRしても人が集まらない。しかし、町内の夏祭りとなると、PRしなくても人が集まる。それならば、お祭り騒ぎで防災訓練をやってしまおうと考えた。防災訓練はあくまで訓練であり、本番に活かされれば良い。</p> <p>名簿作成にしても、防災訓練・夏祭りにしても、地域の協力体制が必須となってくる。日頃から顔が見える近所付き合いをしておくことで、協力体制も取りやすくなる。防犯・防災・交通については誰もがリーダーになり得るべく協力していく。できるだけ行政や業者に頼らず、自分たちの町は自分たちで守る、という気持ちを持って活動している。</p>

4. 地域で行う支援活動

災害が起こった際には、ボランティアでできる範囲の支援・協力を行っている。公助が届かない地域、自宅待機している方に対して、何がどのくらい必要なのか情報収集を行い、計 109 ヶ所への支援活動を行った。

ほかにも、ジャイアントパンダやアイドルグループ「みちのく仙台ORI 姫隊」が一丸となって被災地を訪れ、避難者や子どもたちのメンタルヘルスケアを行った。

5. 自分の命を守ること

教訓として挙げるべきことは多くあるが、中学生の協力は必要不可欠だった。今回の地震だけでなく、阪神・淡路大震災、中越地震でもそのように言われている。また、過去に繰り返し起こっている地震から、防災について学ばなければならないということも強く感じた。

避難所については、地域のリーダーが取りまとめていくことで上手く運営することができる。そして避難所だけでなく、実質的に避難所となり得る全ての公共施設がライフラインと1日分の食糧を確保しておくべきである。

そして、繰り返される災害に対して、強い危機管理意識を持ち、自分が助かる術を真摯に検証していくことが重要である。たった一つの大切な命を守り抜くという強固な意思を持ち、何よりもまずは自分が助かるということを大事してほしい。



開催地より

地域に対する愛情と、自分達の地域は自分達で守るという強い意志を感じた。地区の自主防災組織の活動活性化と、災害時に住民と行政がやるべき事項について考えていく。

開催地名：沖縄県石垣市	
開催日時	平成 29 年 3 月 5 日（日） 17：00～19：30
開催場所	石垣市市民会館
語り部	高橋 文雄（宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織関係者など 約 270 名
開催経緯	<p>石垣市は、過去に巨大津波(明和の大津波)が襲来し、人口の約 3 分の 1 にあたる 9,000 人以上の死者を出す大災害に見舞われた地域である。そのため、沖縄県内でも特に津波災害に対する意識が高い地域で、年に一度は全市民を対象に津波避難訓練等を実施し、地域防災力の強化に取り組んでいる。しかし、一般市民の中には現実味を持っておらず、危機感の欠如が問題視されている。地域では消防団、自主防災会の組織力の強化や、低年齢層への災害伝承が課題となっている。</p>
内容	<p>1. 東日本大震災の特徴</p> <p>東日本大震災は、震源の深さ 24 キロ、マグニチュード 9.0 の国内最大規模の地震であった。特徴は、大地震だけでなく、大津波、原発災害、原発災害に伴う風評被害という 4 つの災いがあったことだ。これまでの災害では、負傷者数より、死者数が多い。しかし、今回は、全国の死者数が約 1 万 9,000 人で、行方不明者が約 2,600 人、負傷者数が約 6,000 人である。このように、死者数が負傷者数を圧倒的に上回る多さであった。死者数が多いのは、津波被害が大きな原因である。また、行方不明者も津波が原因でまだ見つかっておらず、その数が減少していない。さらに、原発の災害が原因で、居住が未だに認められない地域もあり、6 年経った今でも震災は収束していない。</p> <p>2. 仙台市の被害</p> <p>仙台市内の人的被害として、震災関連死を除くと、643 人の方が亡くなった。そのうち 98% の人は、津波によって亡くなっており、地震によって亡くなった方は、5 人だった。</p> <p>建物の被害としては、自宅がある宮城野区は地盤が弱いため、仙台市内では最も被害が大きかった。建物の傾き、ひび割れ、瓦の破損落下など、多くの被害が出ている。</p> <p>3. 過去の災害</p> <p>1611 年に慶長三陸津波が起きた。その際に津波が到達した神社は、浪分神社と呼ばれている。その話を聞いた当時はこの距離まで津波は来ないと思っていたが、仙台東北道がなければ、浪分神社まで津波は到達しただろう。このような、昔からの言い伝えや土地の名前が災害の影響を表すこともある。</p> <p>4. 災害への備え</p>

まず、家庭の備蓄が必要である。非常食セットでも良いが、家庭内循環備蓄も良い方法である。家庭内循環備蓄の方法として、まず、日頃から一定量の缶詰、乾物、レトルト食品、インスタント食品を備蓄しておく。期限が来ると、順々に食べ、食べる前にもう一度買うということを繰り返して行うことである。

次に行うこととして、家具の転倒防止対策、建物の耐震対策を行うことが必要である。さらに、避難所に避難しないために食料品以外にも備蓄品を準備することも大切である。避難所での生活は、プライバシーが守られないなど、非常に厳しい環境であるため、避難しない方がストレスなく生活できる。

5. 自主防災組織

災害対策には、自助、共助、公助の3つが機能することが必要である。しかし現実には、行政は普段の業務と並行させて災害対応を行うため、行政に依存しないで、自ら大規模災害に備える自助、隣近所で共助できるような取組を地域ぐるみで行うことが非常に重要となる。

自主防災活動計画をつくる際は、役員も被災するのだという前提で計画をつくるのが大切である。そうでないと、いざという時に機能しない。また、日頃から繰り返し訓練することも重要である。訓練が役立ったこととして、安否訓練・情報収集訓練・避難訓練が挙げられる。

述べたことは、全ての災害に共通するものではなく、東日本大震災で役立ったものである。その地域で起こる災害を想定しての備蓄や訓練など、地域に合った取組が必要である。



開催地より

実際に現地で指揮した経験に基づいた講演を聴くことができ、大変有意義だった。毎年実施する市民防災訓練において、自主防災組織への啓発を込めて、活用していきたい。

開催地名：東京都羽村市	
開催日時	平成 29 年 3 月 10 日（金） 19：00～21：00
開催場所	羽村市生涯学習センター ゆとろぎ
語り部	佐々木 美代子（岩手県陸前高田市）
参加者	市民、市職員 計 123 名
開催経緯	<p>羽村市では、東日本大震災の記録を風化させないよう、また、未曾有の災害状況やそこから学ぶべき防災への取組や被災地の方々を支援していく意識の維持高揚を図ってもらうため、平成 26 年度から震災発生日の 3 月 11 日に合わせた前後の 1 週間を防災週間として設定し、様々な事業を実施している。近年の防災対策でも課題となっている要配慮者への避難行動等に役立てるため、女性の視点から見た災害の姿、備え、避難所運営等に関して講演してもらいたい。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>震災から 6 年経過して、高台の造成が進んでおり、住宅が再建されてきているが、公的施設はほとんど整っていない状況である。また、個々の家庭事情等もあり、仮設から公営の災害住宅にも移れていない実情がある。</p> <p>2. 災害時の避難方法</p> <p>災害が起きるまで自身も災害に対してどう対応するのかというのは全く考えていなかった。災害をまず自分のこととして受けとめることが非常に大事である。早く避難するためにどこへ避難し、どのように避難するか、どう対処するかを日頃から考えておく。防災グッズやお薬手帳など、もちろん大事だが、忘れてならないのは防災グッズよりも何よりも命を守る行動を一番先に考えることである。</p> <p>3. 津波と避難の実情</p> <p>陸前高田市の津波被害は、人口約 2 万 5,000 人の市民、犠牲者が 1,757 名で人口比にして 7.2 パーセントが犠牲になり、地震の被害はほとんどなく、津波による被害であった。避難した人員は、10,143 人で、避難所は 84 カ所設けられた。</p> <p>陸前高田市の場合、避難するときの警報が間に合わなかった。地震発生後 14 時 49 分の警報は大津波予想が 3 メートルだったが、山手のほうの人たちは自分の住んでいるところまでは来ないだろうと思ってしまった。一方、海辺の人たちは地震が大きかったので、大体即避難行動を起こした。その後、15 時 12 分に津波が観測され、避難せよという報道があり、そのあたりに避難行動をとっていた人たちは大体助かった。ところが、15 時 22 分あたりには市街地に津波が襲来し、15 時 30 分には全域に津波が到達した。実際 15 メートル以上の津波だったが、15 時 30 分の気象庁の警報では、大津波が 10</p>

	<p>メートル以上という予想が初めて出され、気象庁の警報が後回りになった。津波の予知は非常に難しいため、予報を当てにしていると逃げおくれるという場合があることもわかっておいていただきたい。</p> <p>具体的な避難行動について、助かった事例では、津波が押し寄せてくるのが見えたので、もっと高いところを目指して逃げた、ふだんは通らない山道を自分の勘で山のほうへ山のほうへと車を走らせた、津波が迫ってきたので、車を乗り捨てて高台に逃げた。助からないという事例では、ここまでは来ないと自宅にいた、逃げなくていいから頑固、一度避難したけれど戻った。また、助からない人たちは、障がい者、高齢者、女性の犠牲が多かった。</p> <p>4. 避難後の考慮すべきこと</p> <p>真っ先に困るのは、食料と排せつ問題である。備えとしては、非常食、水、簡易トイレ、ティッシュ、タオルがあると良い。また、災害時、ミルクがなくなるので乳児は大変である。災害直後は、自分の大切な人を探しに、安否確認に歩いている人たちが大勢いる。災害時は停電等によって、人によって動転したり、平常心が乱れたりする。障がい者の方はパニックに陥りやすいので、一人一人に対応することが大事である。外国人の方々も言葉の障害があるので、標識や避難の掲示を整えておくことも重要である。</p> <p>5. 女性視点から見た課題</p> <p>避難所での妊産婦や女性には不安なことが多いため、必ず女性も入れて運営を考えていかないと女性が避難しやすい状態にはならない。また、備蓄庫の維持管理について、女性の組織と連携しながら管理していかないと難しい。緊急時には、男女平等のいろいろな動きがあったにしても、やはり女性のほうが衣食住にかかわる技術について気がきくので、負担があったにしても、女性の団体がそういうときは機転をきかせて命を救うという行動をとるべきではないかと思う。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	東日本大震災の記憶を風化させないとともに、市民の防災意識の高揚を図り、地域防災力の向上につなげていきたい。

災害伝承 10 年プロジェクト

開催地名：神奈川県横須賀市	
開催日時	平成 29 年 3 月 10 日（金） 10：00～12：00
開催場所	横須賀市立総合福祉会館
語り部	佐々木 守（岩手県釜石市）
参加者	自治会関係者、市民 約 250 名
開催経緯	東日本大震災では、行政が全ての被災者を迅速に支援することが難しいこと、行政自身が被災して機能が麻痺するような場合（公助の限界）があることが明確になり、首都直下地震、南海トラフ地震等の大規模広域災害時の被害を少なくするためには、地域コミュニティにおける自助・共助を効果的に活用することが不可欠であるため、防災意識の向上を図りたい。
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私は東日本大震災があった当時、釜石市の防災担当をしていたが、釜石市では、1,000 人以上の死者を出してしまった。1,000 人以上の尊い命を奪われた現実に、自分は一体何をしてきたのだろうかという無力感にさいなまれた。みなさんに同じ思いをしてほしくないという気持ちで、釜石の失敗、自分の失敗について全国で講演をしている。</p> <p>2. 釜石市の被害状況について</p> <p>2011 年 3 月 11 日、大震災が発生した。当時私は議場の中にいたが、天井が高い議場が地震の揺れによって潰れるのではないかと思った。すぐに役所の 2 階に行き、担当者に津波が来るからすぐに防災無線を流すよう指示した。気象庁の最初の津波警報は高さが 3 メートルだった。その後、停電のため、情報が入らず、3 メートルの津波のため高台に逃げるようずっと放送していた。しかし最終的には 10 メートルを越えていた。住民は津波の高さを 3 メートルでイメージしており、避難しなかった人が大勢出てしまった。その後市役所の周りが瓦礫の山になり、どこにも行けない状況で背広のまま 3 日 3 晩おり、暖房も情報も入ってこない状況であった。888 人が亡くなり、まだ 152 人が見つかっていない。避難者数はピーク時で 88 ケ所に約 1 万人、人口の 4 分の 1 の規模であった。死亡者の 6 割は 65 歳以上、建物被害は全世帯の約 3 割にも及んだ。産業の被害も甚大であり、特に水産関係施設は全滅状態であった。ライフラインも全滅した。困ったのはトイレであり、仮設トイレをつくり、飲料水確保のため井戸も堀った。</p> <p>3. 実効性のある地域防災計画の策定</p> <p>地域防災計画をどこの市町村でも作成しているが、東日本大震災発生時の地域防災計画は全く役に立たなかったと思う。例えば、遺体が何百体上がるという想定はしていなかったため、遺体安置所をつくっていなかった。そのため廃校した体育館、倉庫などを借り、一番多い時で 6 ケ所を遺体安置所と</p>

して利用した。また救援物資についても、全国から膨大な数がかかるため、この整理にもマンパワーが必要となった。そうした救援物資についても、計画には何も反映されていなかった。また災害弱者への対応、ペットの問題など、様々な角度から避難所についてルールづくりをしておかないと、その場の対応に追われてしまう。東日本大震災の教訓をいかし、想定以上のことがあった場合にも対応出来るような、地域にあった実効性のある計画を策定すべきである。ハザードマップについても“安心マップ”になってはいけない。災害時に、「ハザードマップでうちは被害が来ないはずだから大丈夫。」と言って、亡くなった方が大勢いる。行政から言えば、ハザードマップはあくまで目安であるということを確認してほしい。

4. 被災した体験を伝承していくために

人間の記憶は、風化してしまう。そのために東日本大震災の状況をしっかり検証し、次世代へつなげていくことが大切である。検証しなければ、また同じ悲劇が繰り返される。

特に子供たちへの防災教育は非常に重要である。子供は、防災教育をしっかり行くと、本当に変わる。子供が変われば、大人も変わっていく。そのための防災教育が今後非常に大切になる。



開催地より

災害被害を防ぐ、または軽減することを目標として掲げ、様々な取組や計画を策定しているが、今回の講演会を受けて、各計画の実行性について検証したいと思った。今回の講座から得られた準備の必要性について理解をしてもらい、実効性や有効性を高めていきたい。

開催地名：埼玉県さいたま市（大宮区）	
開催日時	平成 29 年 3 月 11 日（土） 9：30～11：30
開催場所	浦和コミュニティセンター
語り部	菅野 和夫（岩手県宮古市）
参加者	自治会及び自主防災会の役員など 約130名
開催経緯	<p>大宮区は首都直下型地震等による被害が想定されており、地域防災力の向上を図るため、自助や共助活動の中心となりうる自主防災組織結成促進を図っているところである。</p> <p>地域の方の防災意識は、東日本大震災や関東・東北豪雨などの災害発生に伴い、高くなってはいるものの、関東平野内陸の大宮台地に位置する災害の少ない土地であることや、地域活動参加者の高齢化など自主防災組織結成に消極的な地域もあるという課題がある。</p>
内容	<p>1. はじめに</p> <p>私が住んでいる上村町は、森と海と川に恵まれた自然豊かな町である。海水浴場がある。その砂浜の約 3 分の 1 は、地殻変動で地盤沈下している。</p> <p>2. 海の津波、山津波の経験</p> <p>東日本大震災の津波は、1,000 年に一度の大津波と言われている。なぜ、2 万人相当の人命が失われたのか。3.11 の 2 日前にも地震があり、津波が宮古市に 80 センチ押し寄せた。防潮堤が 3 メートルあったため安心した。そして、3.11 に人生で一番の大きな揺れを経験した。揺れから 3 分後には、気象庁が津波警報を発表した。その時は 3 メートルの予想だったため、大したことはないと推測をした人が多かった。実際、津波は 26 メートルの高さであった。</p> <p>津波から 5 年、昨年 8 月 31 日に今度は台風 10 号によって私たちは被災した。山から土石流などの山津波が来た。過去の台風は、発生したら南下していた。しかし、今回は、エネルギーを蓄えて再び北上したのだった。市の 9 割が山林のため、林業が廃れ、あちこちに木々が散々した。そこに 400 ミリの雨が降ることで、溢れた水は橋を壊し、車を流した。</p> <p>3. 防災会の必要性</p> <p>防災組織の必要性は、震災を受け、あの時こうすれば良かったという後悔から感じる。あの時、誰か仲間がいて、機材があって、被災現場に行ければという思いがある。人命救助に当たっては多くの人手が必要である。山では、火事があったため、小さいうちに消すことができなければと思った。</p> <p>これからの防災会は、マニュアルを作って闘うという姿勢でいてほしい。私は、平成 19 年より町内会長を引き受け、同時に防災組織を立ち上げた。住民にアンケートを取ることや、防災教室、炊き出し訓練、AED の使い方</p>

	<p>について勉強した。実際、3.11の際は、炊き出しができたのが精いっぱいであった。避難所に行って、町内の人の安否確認を行ったが、会長の顔を知っている人がいないのが現状であり、腕章を作ったり、ハンドマイク、夜の誘導灯を準備した。</p> <p>避難所で、一番苦勞したことは、現場で誰がリーダーになるかである。今回は、学校の校長先生にしてもらったが、地域の班や活動部署にリーダーがいることが一番良いと感じた。</p> <p>4. 「つなみてんでんこ」</p> <p>津波の予防として、「つなみてんでんこ」を守ることが良い。一旦、各自で高台に避難し、命を守ってから落ち合おうという取り決めである。実際、家族が心配で自宅で待っていた高齢者と、その元に駆け付けようとした若夫婦は亡くなってしまった。反対に、別々に逃げることを約束していた家族は、助かった。取決めをしておくことで、安心してお互い逃げることができる。</p> <p>5. 終わりに</p> <p>防災を考えるために、自分の行動・決断に責任を持ち、普段からの人間関係を大切にしてほしい。訓練等を含めて、失敗を繰り返しながら、積み重ねて学んでいただけたらと考える。また、万が一支援物資が来ない時の場合も想定してほしい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>被災地で震災を体験された方から直接話を聞いたことは、非常に貴重な機会であり、この未曾有の災害の恐ろしさを、多くの参加者が痛感していた。また、首都直下型地震の発生リスクが高まっていると言われている状況下で、自分達が今後どのように防災活動を行っていくべきかを考える貴重な機会になったとの意見が聞かれた。</p>